柳田國男先生監修

秋田叢書
別集

菅江真澄集

第五

菅江眞澄翁遺墨（其九）

仙北郡金澤町　加藤淸文氏藏

（谷文晁の神農の繪像に眞澄翁の賛歌）

もゝくさや千草の露を命にて
生る藥や採始にけむ

眞　澄

菅江眞澄翁遺墨（其十）

平鹿郡沼館町
深谷武治郎氏藏

平鹿の郡今宿といへるうまやなる五の名ところといへるは、肆中の柳、龍升ッ樹、身隠しの松、横越の寒泉、神戸甕にこそあなれ。其あたり春は花にましり、秋は紅葉のいろ〱うつり行空もみな人のこゝろをたねとして、から歌、やまとうた、連哥、はいかいのさま〱其えたるところ、秀出たる人にまれ、うとき人にまれ、此册子にこひもてしるしもてゆかば、家にひめもて後の世にも傳へむとおもふよしを、こゝにすめる小西氏のいへれは、そのぬしのこゝろのまゝ、筆のまに〱しるしつ。

文政七年といふとしの、かみな月のはしめ鐘禮零る日

菅江眞澄

あり明の月をかさしにおきいてて
花の影ふむ春のたひ人

菅江眞澄翁書翰

平鹿郡八澤木村大友武三郎氏藏

高階小吉様　　菅江眞澄

春來幸甚之至奉存候。然は大友先生此程御來臨之由、小生も何卒〳〵御出會申上度去冬より相待候處不幸ヽ之至火傷、何ごも不自由にて爐邊に而已安座いたし候。いまた折ふし惡寒の仕合御察し可被下候。何卒大友氏御滯留之内以參ゆる〳〵得尊慮積意御物語可申述候春の野ならぬ燒手、亂行御用捨可被下候。

早々頓首敬白

金花香油　　二貝

さし上候。一度之制は色あしく候得共利目はよろしく御座候。進上仕候。一貝は大友氏へ御贈り可被下候。

一、もみちのり　時ならぬものから遠來にまかせ少し斗御四ト分仕り呈尊覽候。

卯　日

秋田叢書別集 菅江眞澄集第五 目次

解題

楚堵賀濱風……一―三一
雪乃膽澤邊……三三―四七
かすむこまがた……四九―九二
はしわのわかば……九三―一四六
委波氏迺夜麼……一四七―一九六
率土が濱つたひ……一九七―二五四
ひろめかり……二五九―三〇五
（婢呂綿乃具）
蝦夷喧辭辯……三〇七―三七六
ゑみしのさへき……三七七―四二四

智誌磨濃膽岨……………………四三五―五一一
ちしまのいそ……………………五一三―五三七
牧の冬かれ……………………五三九―五八五
於久能宇良〳〵……………………五八七―六四四

口繪

菅江眞澄翁遺墨(其九)
菅江眞澄翁遺墨(其十)
菅江眞澄翁書翰

解題

本集に收載した菅江眞澄翁の著錄は左の十四種の紀行文と寫生圖である。其の本文は總て翁の自筆原本により採錄し、又寫生圖も同原本より直接寫眞版に製したるものなること、既刊のものと同樣である。特に原本を公開せられたる佐竹侯爵家及び栗盛敎育團に對し、會員各位と共に深厚の謝意を表する。

各篇の遊歷年代は、天明五年八月より寛政五年六月に至る前後九ケ年に亙る遊覽旅行記であるが、是を翁の年齡から見ると、鄕里三河を出てから三年目に相當する三十二歲から、四十歲に至るまでのものである。其の記事や和歌乃至寫生圖、又は各地に於ける土俗風習等の觀察並びに採集に際しても、老年時代のものと對比して、其の觀點の動きが窺はれるのは面白い變化だと思ふ。

因に、本集は地理的には松前、津輕、南部、仙臺領の各地に亙る一部であるが、これは翁の巡訪記錄の年代を根據として、其の順を追ふてまとめたからである。御諒承ありたい。

楚堵賀濱風　東京市　佐竹侯爵家

雪乃膽澤邊　北秋田郡大館町　栗盛敎育團

かすむこまがた　栗盛敎育團
はしわのわか葉　同
委波氏迺夜麼　佐竹侯爵家
率土が濱つたひ　同
ひろめかり　同
婀呂綿乃具　栗盛敎育團
蝦夷喧辭辯（西）　佐竹侯爵家
ゑみしのさへき（島）　同
智誌磨濃膽岨（春）　栗盛敎育團
ちしまのいそ（夏）　同
牧の冬かれ　佐竹侯爵家
於久能宇良〳〵　同

今各篇の解説を試みるに當つて、柳田先生の曾て發表せられた「白井秀雄と其著述」に負ふ處多いことを附記して置く。

楚堵賀濱風　一巻

天明五年八月三日、秋田領の、今の山本郡岩館を出て大間越街道を北に進み津輕郡に入り、十二日には弘前に著し同地に於て中秋の明月を賞して居るが、十八日には青森の善知鳥神社に參詣し、それより引返して二十二日碇ヶ關より再び秋田領に入り、而して十二所の關を過ぎて南部領の澤尻村に至り、同月二十五日までの日記である。率土ヶ濱とは津輕海岸の總稱であるが故に此の一篇の名が附けられたものであらうが、前年の天明四年十一月に雄勝郡柳田村の草彅家に著いてからの次の大旅行の記錄で、年代的には本集第四に收めた「小野のふるさと」と、第二に收めた「けふのせばのゝ」との中間の時期に當るものである。

雪乃膽澤邊　一巻

本篇著錄の年代に就いては翁の自記はないが、藤原秀衡の六百年忌や十月の閏月があることなどから考へて、天明六年の巡歷記錄であるに相違ないであらう。十月から十二月までの日記で、陸中山ノ目に滯留して附近の文人墨客の家を往來し、中尊寺に行はれた秀衡の六百年忌に詣で、又具さに土俗風習を觀察して雪中農村の生活を描いたものである。

かすむこまがた　一巻

天明八年正月からの日記で、膽澤郡德岡村の村上良知氏宅に新年を迎へたとある。素樸なる此の地方の正月行事が、翁にはよほど珍奇に思はれたであらう、非常な熱意を以て丹念にこれを記錄して居る。又今でも有名であるが、中尊寺の摩多羅神の祭禮に參詣して、其の記事が最も詳密を極めたものである。

本篇の遊覽年代を、翁の自記通り天明八年と見るについては異說がある、それは年曆月の大小などから考へて、「はしわのわか葉」と共に天明七年の誤記ではないかといふ說である。又、此の原本は果して翁が遊覽時代に書いたものか、それとも後年に至つて備忘錄等から記憶を辿つて書いたものか、或は幾つも書いて殘した其の一つであるか今斷定を下し兼ねるが、よし紀年が一二年違つたとしても、奥州の俗習や行事等に格段の差はある筈もないから、內容には支障はないと信ずる。讀者の硏覈を俟つ。

はしわのわか葉　一巻

天明八年の夏の四月に陸中大原村の芳賀氏の家を出て、又膽澤郡の歌の友垣を往訪して其の感懷を詠じた歌の多い紀行である。北上川中流沿岸の農村生活がよく描かれて居る。正月廿七日三河の殖田

氏宛に手紙を依賴したのが、四月廿七日に返事があつた事も書いて居る。此の書名「はしわのわか葉」は、翁が久しく滯在して居た山ノ目村の式內社配志和神社に據つたものであらう。

次の「委波氏遒夜麼」を翁の自記通り天明八年の記事とするならば、本書と、六月に於て重複することになる。それ故に「委波氏遒夜麼」と「率土が濱つたひ」は寬政元年の誤記か、又は「かすむこまがた」と「はしわのわか葉」とが天明七年の誤記か、そのどちらかでなければならなくなる。

委波氏遒夜麼　一卷

天明八年の夏六月十五日、翁はいよ〳〵前澤を出足して蝦夷旅行の途に上つた。二三年來睦み馴れた舊知と詩歌の贈答をなして、切なる旅人の哀情を攄べて居る。北に向つて間もなく南部領に入り、盛岡を過ぎて八戶、野邊地より、津輕領との境馬門の關で擱筆してゐるが、例によりて眞面目な傳說、土俗の探訪旅行記である。

因に本書原本の序文には寬政八年とあるが、本文にも天明八年とあり、寬政は誤記たる事明かであるから訂正した。

率土が濱つたひ　一卷

本篇は序文にもある如く、前の「委波氏迺夜麼」に續いた日記で、七月六日より青森灣の南西海岸傳ひに旅行をつゞけ、七月十三日の晩に宇鐵の濱から船の客となり、翌十四日曉天に松前に渡つた紀行である。淺蟲の由來、善知鳥考、今別石、三厩の觀音緣起等興趣多く、其他風景圖が多い。

ひろめかり　一卷
婢呂綿乃具　一卷

「婢呂綿乃具」は「稿本」と標註して寫生圖三十六頁を集めた書である。今「ひろめかり」と相對照するに二頁の外は全部同圖である。それ故に其二頁（本集二六〇、二六一頁）を「婢呂綿乃具」より補足して、其の他は總て「ひろめかり」に據り「ひろめかり」と題したことを斷つて置く。

本篇は寛政元年函館の東方から函館に入り、次で十一月中旬函館から福山まで海岸を歩いた紀行で、當時此の邊に尙ほ居住して居たアイヌ族の生活を注意深く描いた貴重の記錄に充ち、特に昆布の寫生、昆布刈りの器具等の詳細な圖が豐富である。

按ずるに、本篇は今此の一冊しか殘つて居らないが、或は二冊ものゝ下篇ではないかと思はるゝ點がある。表紙の題簽に「布止」と註記してあるが、或は「廣」を上卷とし「布」を下卷としたものではないだらうか。尙ほ此の外にも、他の「ひろめかり」の存在を物語る根據があるが、然し今はこれ以上探索を續

ける方法もないので、たゞ同好者の參考に止めて置く。

蝦夷喧辭辯　一巻

ゑみしのさへき　一巻

此の二篇は、標題の文字を異にして居るけれども同種のつゞきもので、「西」「島」の二字を標記して聯絡を示して居る。

寛政二年四月十九日から六月三十日までの日記で、福山から西海岸傳ひ江差、乙部、熊石等を經て蝦夷地後志に入り、久遠を過ぎて太田權現に參詣した往復の紀行である。當時のアキヌの生活を、非常な感激を以て精細に記述して居る點は、本集第四に收載した「蝦夷迺手布利」と共に、最も貴重な記錄と云ふ事が出來る。尙ほ、今日既に忘れられてしまつた此の方面の移民の狀況、又之に賴つて內地から渡つて來た旅僧や藝人たちの佗しい生活等も多く描かれて居る。(「蝦夷迺手布利」は本篇の次に入るべきものである。)(本集第四「蝦夷迺手布利」解說中「寛政五年」とあるは「寛政三年」の誤植につき訂正します。)

智誌磨濃膽岨　一巻

ちしまのいそ　一巻

此の二卷も標題の文字を異にして居るが、內容は上下連續のものである。

寬政四年の正月松前城下にありて雪中の新年を迎へ、雪の尙ほ多きに驚き、而も自然に春も深くなつて野山に出て遊ぶまでの季節の推移を、縷出する和歌によりて其の感懷を述べて居る。歌の門人が多くなると共に文筆の來往がしげくなつて來た。本篇は五月十九日に終つて居るが完稿でないらしい。

牧の冬かれ　一卷

寬政四年十月七日、舊知の人々に送られて松前を出帆し下北半島の奧戶港に上陸し、斯くて次々に趣味の友を求めて村より村に移り蠶舍蝸屋に旅の夢を結び、其の二十一日には故鄕の夢をみたとある。而して其の年の末には田名部の町に入りて、正月を迎へることになるまでの日記。

於久能宇良〳〵　一卷

寬政五年の四月から三ヶ月間の日記である。田名部の町に滯在して近傍の村々に花を賞し時鳥を聽き、心ゆくばかり下北半島の風光に浸り、又恐山にも登つて其の風景を品題として和歌を詠んで居る。斯くして風雅の遊覽を續けて居る翁が、又一方其の土地々々に殘る口碑傳說を聞き逋さず、山に働く女達の有樣や木の皮沓を賣る等の事までも見逋さず書き殘して置いて吳れた。此の年四十歲。

以上各篇の解說を畢つたが、世に知られて居る松前の紀行としては、第四に收めた「蝦夷迺手布利」と本集に收めたもので全部である。松前の紀行文は此の外にも尙ほ二三種あるらしいが、未だ原本も寫本も發見されて居ない。切に同好者の探索を希望する次第である。

昭和七年十一月

編輯同人

楚堵賀濱風

天明五年乙巳秋八月三日、みちのおくつかろ路にいたりて、ふたゝひ、いてはの國齶田のさかひをわけて十二所の關を越て、澤尻といふ邑に來て、おなし葉月廿五日まてかいて、名を「そとか濱風」とせり。おなしき廿六日より又みちのおくの南陪可都埜にいたるを、へちに記して「けふのせは布」といふ。

八月三日海岸傳ひ秋田より青森縣地に入る

大間越過ぐ

四十四町を一里

貝釜に鹽燒く

此山中の二あるかんやしろは、いては、みちのおくの國さかひにして、こゝよりみちのおくの國耶麻郡東日流花輪庄赤石の組といひ、なへて合浦といふ。あら磯つたひわけ來て木蓮子阪をくたる。（天註―木蓮子崎、木欒樹多し。）鴛鴦石と名によふ岩のあれは、（天註―秋來れは鳴や雄鹿のまたら雪やまのこほりは音もせぬかな。）

さゝれ石の幾世契てをし鳥のなれる巖のすかたなるらん。

佛碕といふは、おのつからなりませる、石のほさちおましませはなり。關屋を越て大間越といふ處にて津梅川を渡る。これより道ののり一里の遠さを、よそちよまちにふみわきたり。いまた日たかけれと、黑崎といふ磯やかたに宿つく。このはまの海士、あなゝゐのたかきにのほりて、はねつるへして寄來る浪をくみて筧にながし、貝釜におとしいれて鹽やきたり。たれ潮てふものは、磯におましまます神の好給はねは、みな、かゝる貝をねりてかまとなし、あら汐を其まゝ煎てけると。見ならはぬ、しほやのさまなり。こゝをしそきて見やりて、

しほかまにむすふけふりの行衞なみ空に吹とく外かはま風。

的神の的岩

冬心に炙す

路芝の草鞋

森山の岩々

濱香

四日。朝たち來る野良山路の、薄、たかかやに生ましりて、あかゝちの實紅に、いと多く見へたるはめつらし。神明のみやしろのあるこなたに立るを的岩といへり。いにしへ出羽の國雄鹿の島より神の箭射おこし給ふか、この石に中しとて村を的神と名附と、みち行人のかたる。沓かはんとて軒近う寄れは、やの翁、やせはき、さしのはして炙しけるか、樏にしりうたけして、うちゑみて云、此ふり、さこそあやしとや見給ふならめ。處のならひにて、稲穗出そろはぬ間に炙すれは、雪くつ、かちきのたくひ、ふみものしきては冬のこゝちになしけるためし也。この翁かうる沓は、みな靑きはいかにとゝふ。こたへて、これは路芝といふ草にてつくりたれは、いくはくの遠路ゆく、はきつよの人さしても、いとやすくやふり侍らし。またもかひたまひねといふとき、おもひつゝきたり。くつといふ事を、

くさの葉にあさおくつゆのみち芝をふみて千里のはまや行まし。

森山とて、海の中にいろ〳〵の石立ならひたる處のおもしろさに、籍(マヽ)もて艘つきめくる小舟にこひのりて、こきめくらせは、大なる岩はみな蜂のすみかのことに穴あるに、あら潮のうち入て、こほ〳〵となることと神にひとしう、浪もとゝろけはおそろしく、舟よりあかり岸つたひ來て、ひねもす濱香（珠流河の國三穗うとはまにて、波末波非なは（天註——禮記注云、芸音雲、和名久 まぼうといふたくひにてこれも蕓薹ならん（佐乃香、香草也。右見于和名鈔。））といふ花のみふみしたき來れは、沓もかくはしき匂せり。房田、濱中、岩崎、中山といふ處を來つ

深浦の港

ゝ峠よりはる〴〵と見渡せば、松前の島は小笠なとのやうに遠つ波間にたゝよへり。深浦といふみなとにつきて、とまりもとむ。（天註――澤邊澤といふところに冶操鞴（たゝら）の聲ありといふ。吾妻濱あり、土石みなあかし、佳景。）

五日。鵆のむれるを見つゝ此こゝをたち出來とて、浦の名をかくして、

　をのかつま戀つゝよふか浦つたひちとりしは鳴聲聞ゆ也。

追良瀬過ぐ

廣戸、追良瀬（おいらせ）（天註――追良瀬、山中一里餘、觀世音祠あり、堂塔鬼作なり。山中胎內潜を過て岩洞の中に堂あり、三十三體、見る人により數ことなり。）といふ浦つたひ、みちをそく行こうして驫木といふ濱になれは、小供ら、磯邊に咲たる小車の花ひたに折て、寄來る浪にとらせて戯てあそふに、おもふことを、

　うなひ子にひかれてめくる小車のなみにいくたひところ木のはま。

こよひはこゝに宿もとめたり。

暴風雨にて

六日。鳥井崎、風合瀬（かそうせ）、晴山といふか見へたる。（天註――辨天嵓　浦島岩。）雨のふれは、

　うちむかふ山は名のみそかきくもり千里の浪にあめ頻なり。

田の澤、西の小濱といひて、世にしらぬおもしろき處ありけり。金井箇澤、關邑、あまつゝみ通るはかり雨いよゝふりて、こゝしき浪風に、澳なる船は柱のみたてり。又、しるべはかり帆曳て飛かことにゆき、楫も浪にとられたるならんと、こなたの磯に見るもなみたなかして、あなあやうし、しつみはてなん、あら潮のからきめ見ける楫とりの心いかゝあらむと見

れは、もとゝりきり捨て万の神にや祈らん、髮うちみたれたる男、たなこゝろをあはして、いそ邊ちかうたゝよふを、

見るめさへおほつか浪のあら潮にまかせぬ舟やいかにうからん。

赤石川越されず

柳田、櫻澤、こゝに櫻明神とて、細長き石をいくつもさゝやかの祠にならへたるは、いかなるゆへかあらん。赤石といふ川、みかさ増りて行ことあたはす。川岸の牛嶋といふ苫家形に一夜をといへと、ゆるさゝるをわひて宿をもとめたり。よもすから波風にさはかれて、のこるやもなう吹たをれなんとて聲のかきり叫ふ。風いさゝかうちなこみて夜は明たり。

船破れ田畑荒る

七日。船やふれたりといふは、きのふ見しにやあらん。又こゝのみなと、かしこの浦にてもふねしつみ、人あまた死うせたるなと、こゝらのさはき也けり。こはあさましや、やかてかりをさめなん田つらの稻穗、風のために、ましろになりてうちふし、はたつものも殘る方あらしと、ふなのさはきにとりませて世中のありさまを男なげゝは、めもなきいさちぬ。又とひ來集る人も、をとゝしのけかちにやまさらん、あかくには、いかなるさきの世のおかしありてや、かゝるうきめを見るならんと、聲とよむまて、みななきぬ。けふも河水いやたかく

けかち

金井箇澤に泊る

なかれて、越へきちからなければ、かねゐか澤まてふたたひかへりて、小埜何かしかやにとまりぬ。あるし、ねもころにものしてければ、こゝろおちゐたり。更行ころ、衣うちける聲

たへす聞へたる。

いとまなみめかり汐くむ海士衣ほすま有てか砧うつらん。

八日。又牛島に至り川におりたち、こなたかなたとあさせもとむれと、水さくふかけれは身もうき、足もなかれ、すへなけれは岸邊にあかり休らふを旅人二人來て、われ、さいたちて瀬ふみしてん、つゝきたまへ。たか石をふんてあやまち侍るな、流に随ひてわたりてよ、こなたに來りてと人の手に扶られて、からうして命いきたるおもひに、やをらわたりて、赤石邑、

赤石川渡る

鰺か澤の湊につきぬれは、こゝにても、舟いくつもしつみしかは、つみ來たるたからひろふとて小舟のり出、長柄のかま、くまて持たる人磯輪みち〳〵たり。こよひはこゝにねなん。

鰺か澤にて

九日。けふも、ていけよけれと、やましといふ風吹たり。此頃のつかれにや風のこゝちにあれは、えいてたゝす、此やとりに居る。南の雲の中よりみねのみあらはれたるは、「不盡見てもふしとやいはん」岩城山なり。此みねこそ磐椅神社ならめといふ人あれと、おほつかなけれと、もし其神のおましますにやと、遠かたなから、ぬさとりたいまつる。見るたびに、画にかゝまほしきはこのすかたなりけり。

人とはゝふしにたくへてみちのくのいはきの山やそれとかたらむ。

十日。朝とく出る。高きやのうへのすまゐにならひ居て、戯れうた唄ふ女あり、此里のケン

ケンホ歌ふ

ホといふ、あそびくゞつなりと人のいふに、

川竹の世のうきふしやしらへけんほのかにうたふ聲聞ゆ也。

路しはしへて浮田といふ處に來けり。

朝露は拂ひ捨てもいかゝせんものうきたひにぬるゝ袂は。

卯之木、床前といふ村のこみちわけ來れば、雪のむら消へ殘りたるやうに、草むらに人のしら骨あまたみたれちり、あるは山高くつかねたり。かうへなと、まれひたる穴ことに、薄、女郎花の生出たるさま、見るこゝちもなく、あなめ〳〵とひとりこちたるを、しりなる人の聞て、見たまへや、こはみな、うへ死たるものゝかはね也。過つる卯のとしの冬より辰の春まては、雪の中にたふれ死たるも、いまた息かよふも數しらす、いやかさなりふして路をふたき、行かふものは、ふみこへ〳〵て通ひしかと、あやまちては、夜みち夕くれに死むくろの骨をふみ折、くちたゝれたる腹なとに足ふみ入たり、きたなきにほひ、おもひやりたまへや。このうへたすからんとて、いき馬をとらへ、くびに綱をつけてうつはりに曳あけ、わきさし、或小刀をはらにさし、さきころし、血のしたゝるをとりて、なにくれの草の根をにてくらひたり。あら馬ころすことを、のち〳〵は、馬の耳にたきり湯をつきいれてころし、又頭より縄もてくゝり、いきつきあへす、すなはち死うせ侍りき。其骨とものは、たき木にませたきて

床前の野路白骨壘々

天明三年饑饉の慘狀

馬を殺し喰ふ

我子の肉さへ喰ふ

けふりをたて、野にかける鷄犬をとりくらひ、かゝるくひものも盡て侍れは、あかうめる子、あるははらからつかれしに、亦、ゑやみに死行侍らんとするともからあまたあるを、いまた、きのをたへさなるに、わきさしをたて、又はむねのあたりくひやふりて、うへをしのきぬ。人くらひ侍りしものをは、くにのかみに命めされ侍りき。人の肉はみたるものゝ眼は猨なとのことに光きらめき、馬くらひたる人は、なへて面色黒く、いまも多くなからへて村〳〵に在けり。

母を恐れて走る

弘前ちかきところに娘をおきたる女ありて、此むすめ、あか母は、このとしのうへにいかゝしてか侍らん、見てんとて、みちは一日のうちにあゆみつくところなれは夕近く來つきて、ともに、ことなきことをよろこひてのち母のいふは、ましか、つふ〳〵と、はたへこへたり、たうびたらは、うまさ、かきりあらしかしと戯てけるを、あかはゝの空ことなからこゝろおほつかなく、母のいねたるをうかゝひ、みそかに戸おし明て、夜のまににけかへりたることも侍る。かゝる世のふるまひのおそろしさ、みな、人のなすわさともおほへす、さなから、らせち、あすらのすむ國なとも、かゝるものにやとおほへ、しなは死てん、いきて、うきめみんくるしさとおもひ捨しかと、あめのたすけにや、わかたちは藁を搗て餅としてくらひ、葛蕨の根をほりはみて、いままてのいのちをなからへ侍る。

今年も饑饉か

此としも、過つるころのしほ風にしふかれて、なりはひよからす。又もけかちの入こんと、ないつゝかたりて、ことみ

ちに去ぬ。此ものかたりまことにや、あるとある家みなたふれ、あるは、ほねのみたち、柱のみたてりけるを見つゝしのひたり。森田、山田、相野、木作、岩城川になりぬ。綱曳たるわたしなり。

わたしもりよはふにやかてくる舟やつな手も細きわさにひかれて。

こよひは五所河原といふところに宿る。

五所河原

十一日。空晴たり。龜田村、鶴田村といふ處を過來て、

つるかめのすめる田の面はちよ萬八束にみのる例をやみん。

野山より、さる毛といひ、又谷地綿（やちわた）といふ、木のくちたることきものを土そこより起し、うまにつけて行は、例の火にくへけるもの也。磐城かたけは雄鹿の角ふりたてたるやうに、雲の上に、いたゝきのみあらはれたり。この山を阿曾邊の杜といふとそ。こゝにても田村の大人、おにきり給ひたるものかたりあり。菖蒲川邑、大相邑、小幡邑になりぬ。薄のいさゝか生ひたる中に、むしの鳴たるを聞つゝ、

猿毛
谷地綿

阿曾邊の杜

一本にかくろふむしのあはれさに刈のこしけん野邊の𫟈薄。

板屋の木村（天註─板屋木の文字板柳、或いふ絲柳ならんと。）の出はしに寶量宮といふ額のうち、かんやしろはなに神のおましにやあらんと、ほふりのきよめありくにとへは、まことは虚空藏ほさちをひめ奉りた

板柳の村

藤崎に泊る
津輕野
弘前に著く
和歌の友垣

ると、しのひやかにこたへ聞へたり。朶村、松の木邑なと、暮れて野原のみちをたとる〳〵、

夕間くれみち行友のまねくかと寄れは尾花に秋風そふく。

といひ捨て、行〳〵月のおもしろうてれゝは、たゝうちあふきて、ゆきかてに、里はいつこともしらす、かり寐の床もそことさためすうかれありきて、此月のあはれに、ふる郷の方頬におもひ出られて、

樂しさと月のした道行ほとに多かる友の俤そたつ。

やをら里の近つきてとへは藤崎といふところ也。人やとすへき方もあらねは、眞蓮寺といふ、親鸞上人のなかれくむ寺に一夜をといへは、あるしの法師ゆるしてけり。

十二日。川ひとつわたりて百田邑を過て、名によふ津輕野に出たり。いまはつかのといひ、村あり、つか野邑といへり。「みちのくのつかろの野邊の萩盛こやにしき木をたつるなるらん。大久保、撫牛（なでうし）、堅田、和德、廣崎の里にいたり、笹森といふ町の諏訪の家をとふらひ、あるし行宅のぬしにかたらひたり。あるしは吉川惟足のうしのなかれをふかくしたひ、いとねもころに其すちをとき聞へたり。神司山邊行德といふ人もとふらひ來て、おなし圓居に更行ころ、あるしの書けるを聞は、

露ふかき蓬か本の草枕むすふかりねやものうかるらん。

といふうたなりければ返し。

つゆふかきなさけは身にも忘れすよなれし蓬かもとの心を。

十三日。間山祐眞といふ人にいさなはれてその家に至りて、あるし。

さらぬたに秋は露おく草枕むすふ旅寐やさそうかるらん。

返し。

露なみた物うき秋の旅衣かゝる情に袖やほさまし。

ふたゝひ祐眞のいへらく、

わかの浦にいく年波をかけつゝやみとりも深き松のことの葉。

とありける返し。

ふかみとり松にたくふもはつかしなあたにかけ來しわかのうらなみ。

このゆふべの圓居に月見てんとて、人々此宿に集る。あるしのいはく、

秋は倘露ふかくともあしのやに一夜はむすべくさのまくらを。

返し。

草枕むすひ馴にし露けさもこよひはしらしやとのまとゐに。

あるしのめなる女りち子。

友なひてかたりあかせよ草枕かりねの床の露ふかくとも。

かへし。

とひよりて友にかたらふ嬉しさにこよひは露も袖はぬらさし。

笹森建福のぬし。

數々のひかりをそゝふわかの浦に年月拾ふ玉の言の葉。

返し。

たくひなき光もそへてわかの浦の藻くすを玉とみかくことの葉。

ふたゝひ建福の云、

歸るさもわすれぬるかな此夕こゝろ隔ぬ中の圓居に。

かへし。

思ふとち心へたてぬなか垣やゆふへもしらしけふのまとゐに。

夜、更にふけて曉の空のあかゝりけれは、あるし。

わするなよ別て後も友に見し逢か宿の月のあはれを。

返し。

別てもそれとしのひてみちのくの月のあはれをえやはわすれん。

月も入ぬれは、ひち枕に明たり。

十四日。けふこゝをたゝんといふにのそみて、律子。

　旅衣かさねてあはん折もかな引別行袖の戀しさ。

返し。

　又もとはむことはいつともしらま弓引別行袖の露けさ。

津輕石の產

しそを被る

あるしとゝもに高屋繁樹のかりをとふらはんとて行に、細きなかれをわたる。名を土淵川といひていろ〳〵玉ひろふところ、世にいふまことのつかる石と呼ふは、こゝのなかれより出したり。いまへちの浦といふはあやまりとそ。此市路に行かふ男女は、やすの木といふきの皮のふみものをはきて、女はみな、しそといひて風呂鋪やうのものかふむりてけり。此ことをいひたる戯歌ならんか、「顏のしはかくしそ包む梅ほうしむかしは花の咲しみなれと。」とかたれは、祐眞、おとかひのはなる斗笑ふ。やかて繁樹の家也。あるし出むかへて、をそかりつるなとことをはりて、書つけて出しける歌に、

　かしこしないく海山かわかの浦の浪を分こし人にとはれて。

返し。

　尋ねこし道は幾重の山かつらかゝるかしこき人を見んとて。

ふたゝひ、あるし繁樹のいはく、

いはねふみ重る山もけふいくか故郷遠くおもひ出らむ。

おもはすよいかて三河にすむ人に艸の扉を問るへしとは。

かたりあふ友にひかれてはる〳〵の旅のつかれをしはし忘るや。

えにしあれや千里へたててこし人も馴てかたらふ友にまされり。

此よくさの返しをせり。

いはねふみ積る思ひのやま〳〵をけふ此宿にかたりあはする。

おもはすよ隔て遠きみちのくにすむてふ人と語るへしとは。

思ふとち語しまゝにつかれこし物うき旅の空も忘れて。

いくちさとしらて隔てし友垣になれてかたらふけふのうれしさ。

又、こよひ逢ことのありけるは、うれしとも嬉しとて、さゝもり建福のいへり。

嬉しさは包むに餘る今宵かなきのふの暮に袖はぬれしか。

この返しを、

おもふこと月にくまなく語らなんこよひは身にもあまるうれしさ。

たゝ此夕くれをまちまたれつゝつとふ人〳〵は、祐眞、建福、あるし繁樹也けり。きぬいた

岩木山詣の聲々

丹後人を忌む

附近名所

中秋望月

の音頻に聞へけれは祐眞とりあへす、

旅衣うちしほれぬる槌の音を草の枕に聞明すらし。

返し。

さらぬたにものうき秋の旅衣きぬたの音にうちもねられす。

こよひの歌あまたあれと、みなかいもらしたり。

十五日。笛、つゝみ、うちとよめきて、さんげ〱ともろ聲にとなへて過るは、此月の朔よりけふを限に、岩木山まうでのほる、うはそくら也けり。この御山開らけしはしめは延暦の頃となん人の語ぬ。其むかし、岩城の司判官正氏のうしの子ふたところ持給ふを、安壽姫、津志王丸と聞へたる、其たまをこのみねに祭る。さる物語の有けるかゆへに、丹後國の人は、このいは木ねにのほりうることかなはす。又此みねの見へ渡る海つらに、その國のふねをれは、海、たゝあれにあれて、さらに泊もとむることもかたしと、ふね長のいへり。此たけの邊に赤倉といふ洞ありて、万字、錫杖といふふたつの鬼すみしといへり。又、けふりの瀧とて水煙のみたち、おつる水は雲なとのことにちり行おもしろき飛泉ありなと語り、はた、あか石の邊目屋澤の奥に闇門か瀧とて、二十餘丈おちくなる、世に見ぬ瀧もありと、見たる人々のいへり。名におふ月を、こよひ行德の家に見てんとて、みちはしはしあゆみて其やとに

なれは、月さしのほりぬ。

うちむかふ心のくまも半天にみちてそ澄る望月のかけ　祐眞

常よりもみるかけいとゝますかゝみくもらぬ秋の半天の月　建福

いく千里くまなく照すこよひかなやまともろこし名にしおふ月　正乘

たち出てむかへは月の影清み秋の最中の夜半そことなる　繁木

名にたかくみちて澄ぬる月にけふ都の空もおもひこそやれ　行德

みな人の心にかねて松か枝のしけみをいつる望月のかけ。

りち子のもとより「十五夜の月」といふことをかしらにおきて、なゝくさの歌贈りける。

。しられけり須摩も明石も名にしおふ秋の最中の月にむかへは。

。うちむれていさ見にゆかん更級や姨捨山の月の光を。

。こよひ嘸おもひや出んあくかれて人はなかめし更科の月。

。やまの端を出てほとなくなか空に影澄渡る望月の月。

。のこりなく月にしのはむ旅人のわけこし山の處〳〵を。

。つゆ深き野邊に馴たるたひ人は月のあはれも嘸やしりてん。

。きて見るもさそなかひなきみちのくの外かはまへの秋のよの月。

おなしことに返しせり。

しのひこしなかめやすらん須磨明石なにおふ月の空に向て。

うち群て行はいさなへ更級や姨捨山の月の友とち。

この夕さやけきまゝにしのはるゝいまさら科の月の光を。

やまの端を出初しより半天にくまなくむかふ望月のかけ。

のち山路分こし月になくさめと今宵の空に似るかけもなし。

つゆふかき袖もしられて此夕名におふ月のとふもはつかし。

きてそしるさやけき月もみちのくの外かはま浪よるのあはれを。

例のころまてあそひて、夜明ちかうなれは、やかて出たゝむといふに、別のつらさ、いかはかりうかりけるとて、しけきのいはく、

わかれなは又逢事はしら糸のよるの衣の袖そ露けき。

返し。

くりかへし別れんかたも、白糸の心ほそくも思ひ引るゝ。

まさのりのいへり。

友に見し月はいく度めくるともめくり逢へき折もしられす。

弘前を出て
鄙の市女

かへし。

ともに見し月はかたみのなか空にめくり逢へき折やちきらん。

又、　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　建　福

ともにみる月もなみたに曇るかな夜半のまとゐのしたふわかれに。

返し。

わかれちの空はなみたにかきくれて名におふ月もくもるとやみん。

十六日。あるし行徳の云、みちのこゝろは露も思ひはなれすよなと、まめやかに聞へて、

立帰る雲路は遠く隔ともこゝろを渡せ天のうきはし。

寄るなみのたち帰るとも絶すたゝ三河の水の音信てまし。

となんありける、ふたくさの返し。

雲井路をたちへたつとも忘れすよかけて通はん天のうきはし。

けふよりは淵と頼て音つれん三河の水の淺き心に。

祐眞の、いさ猿賀の神のおましにまうてゝ、そこよりわかれこんとて、ともに弘前を離れ高碕をくる路に、木の皮くつおふたる女、蒲はゝきもませかけて市にや出る、其ふり、「ぞうり〳〵、いたこんごうめせ。」又、「ゆわうはゝき〳〵、よきはゝきか候。」と、かいたるふりのし

たるなと、見るく〵いへり。

　　くつはゝきあきなふ御世の市女笠きつゝ惠の露やうるらん。

津輕野

津輕野邊になれは、

　　旅衣又もきて見よみちのくのつかろの野邊の萩のさかりを。

となん、祐眞のたゝすみてよめるにこたふ。

　　たひころもたちさりかたくみちのくのつかろの野邊の萩のにしきを。

十腰内村由來

境堰村のあなたの岩のうへに、しはし休らはんといひて舟よりおりて、藤崎の村に、から絲姫のつか有しと聞しを、おろかにも、うかれかたらひて過來しことを悔たり。岩木山の雲おかしうかゝりたるを見やりて、しはしいこふ。祐眞の云、あの麓のあたりに十腰内(こしない)といふ村あり、むかし鬼のうちたる刀を鬼神太輔とて世に九腰ありて、十腰無きといふことを其まゝ村の名にせり。其處に在て作たるつるきたちならん。（天註——十こしうちたる其一こしは、十腰内邑の李木といふ川に、むかし一ふりの太刀はしつみぬれは、そのつるき今も、夏のころ行ものゝふち瀨にかけうつれは、とひ出て人をつき、身にたつ事神のことしとておちおそれ、いつも夏になれは、此川ちかく人なのそみそといふたか札をたてけるとなん、ところの人のかたる。）又十(と)面澤(つらさは)といふあり、岨なる岩を人の顏のことくに十つくりたるあり、いかなるゆへをしらすとなり。ゆひさして、ひんかし南にあたりてけるはちとせ山、禁よりいたゝきまて路の見へたるは彌介なかれ、こは人のながれし處か。いな、さに侍らす、阿部のやから義家のきみにせめ

彌介長根の遠望

猿賀の大明神

草鬼の神事

花山長根

黒石に來る

られて、おひたる由岐、夜奈久比を捨てのかれしゆへに名を箭捨といひき。流とは山の尾、あるは、岨なとのことくよこたふをいへり、なだれといふ詞にや。ところのものはたゝ、やすけなかれとのみいひあやまてり。八幡崎をへて猿賀邑にいたる、鷄栖の額は深砂大明神とかいたり。此かんやしろのほとりに鬼の頭埋しよし、處の人のいへり。義經のほりの石なごいひて人をしへたり。（天註――さるかの社の神に法師とほふりとつかへ奉り、寺をは猿賀山神宮寺といふ。正月朔より村人らをはしめ精進いもゐして、七日になれは草鬼とて、わらもておにのかたつくりて、かん司弓とりて射けり。其箭あたらさるうちはゆめ魚をくはす、箭中れは、箭立たるまゝ此おにを土にうつみけるとなん。）尾上の里といふ名あれば、

月はいかにすむ里の子にことゝはん秋の尾上の夜のあはれは。

追子野木の村ちかう淺瀬石のむかひに、くわさんながれといふあり。いつの頃ならんか、花山院何かしの君とかやさすらひ給ふか、しはしこゝにおましまして、つれ〳〵給ひしより、其名今にとゝまりぬるあとゝそ。祐眞に別て黒石の里に來つきて、齋藤行索といふぬしのやをとふらふ。あるし、あはれたる宿を、かしこくもとひ來けるものかなとよろこひて、

月影のもり來る斗あれはてし宿にことゝふ人そ嬉しき。

返し。

軒近くもり來る月の影めてゝいさ此宿に語あかさん。

いさゝかのくもりなう、月のおもしろけれは、

しそ
さしこぎ

女の歌武士を説伏す

望月の空にあはれはとゝめしと見しにことなる十六夜のかけ。

十七日。行索のよめる。

逢といへと今朝は餘波の草枕夢も見はてすかへる旅人。

旅衣たち別行此あさけくさの枕の露もはらはて。

とそありける返し。

わかれ行袖そ露けき一夜たにあかてむすひし夢の餘波に。

露しつくひかたき秋のたひ衣拂ひしものを又やぬらさん。

なへて糠部のあたりやまかつの男女、しそ、山しそなといひてかむり、いろ〱にあやなし、ぬひしたる短き衣をきたり、さしこぎのといふ也。女三人歌うたひて過るあり、さうか、いとおかし。寶暦の頃、毛見武士のまうけに酒さかなとゝのへてけるに、みなゑひしれ、さしなべとりける此女に歌うたへとひたにいへは、女、聲たかううちあけて、「白澤は出風入風あさあらし、下はひへたち實もとらす、ひいてたもれやとのゝけみ。」とうたふを聞て、みなあきれて、風情なきことつくり出て歌にしけるを、この女かなとあせしあへるに、さらにおくしたるけしきなく、たゝ、返し〱うたふを老たる士聞て、村の長ひたにうたへしか、いなといひしかと、歌はあめのをしへなれば、此女かうたふにまかせて、みつき、かろらかにとりを

さめしかは、そのあかたぬしにもほめられ、くにのかみにもほめられて身もたちたりけることなん。かゝる女のことき、歌うたひのはかせにやありけむ。しら澤は、あか石の村とならひある處也。野ぞひ、戸河、二ッ家、みしま、高館、竹鼻、本合、吉内、中埜を來る。村すゑの籬の中に、たかやかの萩の白紫にさきませたるは、いみしうめつらしければ、たはれうた。

世に誰も是やしらしのから錦此萩か枝にしく色そなき。

浪岡村

行岳(なみをか)の村に來て日たかけれと、こうしたれは宿つきたり。

むかへ見る影やさはらん雲の浪岡邊の宿の立待の月。

此夜盗人狩

このころ、旅人のこかね、衣なとぬすみとりたるぬす人ら、こゝにかくろひ、かしこに居か、夜はしのひて、め子を見てんとてみそかにとひ來り、夜半に出行なとさたすれは、このよ、とらへて縄つけれと、手毎におふこ、杈椏(またふり)、とかまをふりたて、そかやさかしつれは、まとおしやふり、にけ出たり。すは、足音そしつるは河よりこちならん、此草の中に在は今こそとり得たれ。あな、たへかた、あかつらかきやふりてうせたり。いまは眼くらみぬ。すまゐに名あるやつなれは力すくれり、われはをよはし。此はたけにかくれおらんと、あはふに身をひそみたるをしらて盗人來かゝりたりけるを、足とらへふせて、またふりとりてうちすへ、くひおさへつるを、人あまた來て縄かけたると語る。なか／＼のさはきに、いねもつかれねは

戯歌作る。

波岡によるのしらなみたちさはきあなかまともてとよむさとの子。

十八日。志左万、浦石、登久左志、杉の澤、山里。

たれこゝにかくいつおもひ入そめて山里と名の世にしられけん。

津輕坂越ゆ

炭焼藤太の傳説

津輕阪といふに越來けり、眞萩いと多し、過來るつかろ野とは、いつらをせにせん。この谷かけ、澤おくに、炭焼藤太のつか、すみ竈のあと殘りぬと馬曳のいへり。藤太か子に橋次、橋内、橋六と、みつ子のありたりけるよしをかたれは、通りたる吉内邑も其いはれ殘りけるならん歟。かゝる物語は仙臺路にもありとか、いつれかまことならん。油川、新城、岡町、大濱を

青森の湊

へて青森の湊に入たり。澳に、はるかに見やらるゝは南部の岬、こなたは鵜晉禮山、雲と波とにわきかたく、松前のしま、蝦蛦のちしまならんたゝよへり。其しまに行ふなみちは十八里ありて、いと、めやすきやうなれと、達飛（たつひ）か崎、中の潮、白神か碕とて、おそろしきなだの汐瀬をのり分て船わたりけるとぞ、人の語る。（天註――つかろ青森より松前に渡るにまほならす。西ひかた、くだりといふ風にてふなてし、又やませといふ風をまちて、ふた日和ありて、たつひ、なかの汐、しら神を越て行。みうまや、うてつの浦みな山背のふくをまちて舟いつるといふ。）

善千鳥安潟

安潟といふ町あれと、みなやけたり、かり小家のみ立ならひたり。烏頭の宮といふかん社も、おなし火にやかれたり。（天註――善知鳥山養泉寺安方に在り、古儀眞言寺の在り。）いにしへは善千鳥（よしちとり）、惡衛（あしちとり）といふ鳥、このはまに多く群てあさりしかと、今はなし。

松前渡りを占ふ

地逃げの群に會ふ

凡鷗に似てことなりとか。うとうやすかたといふは、よしちとり、あし千鳥ならん、又雌雄にや。むかし此鳥をとりて、むさしの君に奉りたるためしありけるなと、浦の翁の語る。ふるき歌に、「紅のなみたの雨にぬれしとてみのをきてとるうとうやすかた。」「子を思ふなみたの雨の蓑の上にかゝるもつらしやすかたの鳥。」「みちのくのそとかはまなるうとう鳥こはやすかたの音をのみそなく。」とすして、月見てんと、磯輪つたひありきてよめる。

外か濱海てる月もよし銜羽風に拂ふ浪のうき霧。

おもひやるゑそか嶋人弓箭もてゐまちの月の影やめつらん。

見るかうちに空行月の曇るこそゑその島人こさや吹らめ。

蝦夷人のふりも見まほしう、この海ことなうわたらん日は、いつ〳〵の空にかあらんと神にまかせて、十日の日數をかいひめ、又三年の春秋の時をしるしてうらひすれは、此十日の中になし、たゝ三とせをまつへしといふあめのおしへにまかせて、かの島にわたらんこと、三とせへて、をりもあらはとゝゝめたり。

十九日。はま路いきて有多宇末井乃梯見にいかんと出れは、鍋かまおひ、あらゆるうつはをたつさへ、をさなき子をかゝへて、男女みちもさりあへす來るは、じにげすとて、うへ人となられことをおそれて、ことくにゝ行けるとなん。此ものらのいふをきけは、過しけかちに

急ぎ引返す

浪岡にて饑饉慘話

薊女郎花を糧とす

は、松前に渡りて人にたすけられたり。こたひはいつこの情にあひてか命いきん、なりはひよきかた尋いかはやといふに、こは、濱路めくり出なは、かて盡て、われはうへ人となならん。いさ、もとのすちにかへり行てんと濱田、荒川をへて、大豆坂(まめさか)といふ處に來けり。こゝに饅頭石といふをひろふは鳥餘糧のたくひならん。浪岡にきて、一夜ねたる宿にふたゝひ泊る。けふ見しうへ人のことかたれは、さやうさふらふ、この年も、くれ行まてはむつかしき世中のすきはひならんや。去年をとゝしまて、此邑は馬をくらひて命をのひぬ。家の數は八十あまり侍れと、馬のしゝをたうひ侍らぬものは、あかやを入て七八家も侍らん。太雪なとのうへに死たる馬を捨おけは、髮はおとろをいたゝきたる女あまた集りて、手ことに栞かたな、いをかたなとりもちて、われ、よきところしゝきらんと、あらかひ、さきとり、血のなかるゝかひなに肉をかゝへてかへり行ありさま、又人の路なかにたふれふし、あるは、死たるむくろを犬のかしらさし入てくひありくか、血にそみたる面して、ほへめくるおそろしさ、いはんかたなかりしか、はた此としも、過たるとしにまさり侍らは、こたひは、かてのうま、うしもあらしかしと、いまよりわらび、葛のねもほりつきて侍れは、あざみの葉、をみなへしをつみ、これをむして、かてにはみぬと、ないつゝかたる。むへ、いろ〱の草をまな板の上にのせてうち叩音は、きぬたの音にまさりて、いとゝ袖をぬらして明ぬ。

二十日。過つるみちなれは記さす。尾上より小和杜、柏木町、吹上といふをへて藥師堂邑にとまりたり。

大鰐を過く

廿一日。乳井村、左の山へ登れば白泉あり、此水呑て甘し。毘沙門堂、少しのほれば天狗平といふ處あり、鈴石、石弩、てんくの斧。仁保井、八幡館、鯖石といふ邑をへて大みちに出たり。宿河原、劔岬則つるき坂をおりて大鰐橋を右に見て、いて湯あり。（天註——大鰐、温泉七ツ。袴腰ヶ岳、阿闍羅山、大鰐川上をのほれは虹貝村（砥石名物）、早瀬野村。蛇石、蝦石。此奥石ノ塔、奥羽ノ堺ニ在石ノ塔、高八丈五尺、上蓋六丈五尺、下蓋二丈八尺、周圍廿五丈五尺。）

藏館の木秋

藏館といふ邑、こゝにも温泉ありて、やまうとおほく湯あみしたり。大日堂の前にふりあふけは、はたひろ斗なる萩の大樹あり、里の子は萩桂といへり、いはゆるこはきならんと、めとゝめぬ。本村、長嶺、九十九森、唐牛なとむら／＼を來るに、けふも、すみ家を捨て、ふるさとしそく民、その數をしらす過ぬ。

山子

かすべといふ鱐、瓜、茄子、かたまにもりて、路もなき山なかに分入るは山子とて、杣なとのたくひ也。玃を夜万古といへは、かゝる、むくつけきふるまひにたくへたらんと、ひとりこたれておかし。

かすべ 秋味

かすべとは王餘魚のたくひにて、かすゑひといふいをの乾肉なり、夏の頃蝦夷人とりて秋味につみくるもの也。秋來る松前出の舟を、もはらあきあちといふは、よきあちに來る、あちよきなといふより起るか。つみたる鮏のしほ曳なとにもこの名あり。

碇が關

碇か關に來り、いかり石といふ石あるかゆへにせきの名とせり。ふねの長なる旅人とみち／＼

箭立峠越秋田領に入る

かたらひて、ともに來りしかと、𣘺木村を過て、碇石温泉、忘懸山國上寺の不動尊にまうてしよりおくれて、今來つきたるか、せき屋の軒ちかう寄て、われは、ふねをやふりてしかゝくのことゝかたり關越ぬ。おなしさまに國ところをいへと、關手あらてはゆるさし、弘前の里にかへりて、もてくへしといふ。道はるゝと來て又かへらんこといかゝとおもひわひて、

ふな人は賴む碇か關をけふ來しかひもなく越そわつらふ。

日くれちかけれは宿とりて、長なるものにわひてわかうへかたりて、關手くれたるをたよりに、

廿二日。あさとく、せきてわたしして越たり。このあたりの郡はいかにとゝへと、しらし、たゝ白河庄とのみいらふ。みちの左右に白絲瀧、登瀧、無音瀧、日暮し瀧、二見瀧、折橋の番處を右の澤へおりて温泉あり、鬼湯なり、大人の入湯の故事、銀山あり。やまくみちくの大木をれふし、かたふきたるは、過し六日の風つよかりけれは也。杉一本を、あたり柵してかこひたるは津輕、秋田のさかひのしるし也。せきふたつを越來て箭立峠の九曲おりはてて、ふたゝひ出羽の國に入て陣場といふ處をへて、關屋をこへて長走村といふ山里に宿もとむ。衣うつ音に夢おとろきて、

秋風の誘ひしまゝに夢さめて夜半の砧を現にそきく。

無縁車

又飢饉悲話

大館に來る

綴子村考證

廿三日。わけ來る路のかたはらに在る無縁車とて、卒堵婆にかな輪さしたるをまはすは、飢人の死かはね埋しをとふらふならん。このかたゐ、なみたなかして、ひとりごとして、あはれ、わかともからは、みな、かくなり行たるか、あさましの世のなかと、てゝらの袖に、なみたのこひたり。近つきてとへは、こたへて、われらは馬をくらひ人をくひて、からき命をたすかりつれと、又此とし吹たる風にあたりて、いな穂かゝまず（いなほの、八束にたり、しなはぬといふ國の詞也）むかしの陪堂（ほいとう）（ほいとうとはかたゐをいふ）となりて侍る。うま、人くらひたるは、まことなりや。こたへて、人もたうび侍りしか、耳鼻はいとよく侍りき。うまを搗て餅としてけるは、たくひなううまく侍る。しかはあれと、あらぬくひものなれは、ふかくひめて露人にかたらす侍るは、いまに至りても、あなきたなとて、つふね、やたこにもめし給ふ人なけれは、男女なへて、かくし侍る。たうときかたにまうて侍る旅人、すけには、かいけさんけして、つみもほろひなんとおもひ、ありしまゝにもらし侍るといひて、このかたゐ秋田路に行といふに、錢とらせて別たり。白澤、釋迦内、大館に來けり。軒端ことにさなつら（さなかつらのたくひならん）蕳藤（あけび）、まつふさ、眞餅（たゝもちをいふ也）花もち（葛かつらの根の餅をはなし餅といふ）しとき、ならへてあきなふを、いさくひね、休らへといへは、いこひぬ。このあたりに綴子といふ村は、しゝいれこと、いにしへいふ處にや。あいたの蝦夷、ぬにしろの蝦夷とて、みちのおく、いではにも、ゑみしのすみたらん。齊明帝五年三月、遣阿陪臣（名闕）率船師一百

八十艘、討蝦夷國、阿陪臣蔄集飽田、渟代二郡蝦夷二百四十一人、其虜三十一人、津輕蝦夷一百十二人、其虜四人、膽振鉏蝦夷二十人、於一所而大饗賜祿、卽以船一隻與五色綵帛、祭彼地神至肉入籠時、問菟蝦夷膽鹿島、菟穗名二人進曰、可以後方羊蹄爲政所焉、隨膽鹿島等語、置都領而歸。」とあれは、つゝれこの邑、しゝいりこならん。しりへしは岩木山ならんといふ人もありき、うへならん、うしろかた後方むらといふ處あり。又云、松前の島ひんかしのゐその國にしりへつといふ山あり、其邊に、といといふ、ゐみしのさとありといふ物語したる人もあれは、いつれかよしといはん。一里村といふほとりの米白川を舟こきわたりて、岸なる扇田といふ里の家居みな灰となりたるまゝ、いまた、ほねはかり立たるかりやかたに宿かりてふしぬ。枕上にさし入たる曉の月影は、さなから草ふしのほゐとけたるおもひせり。

扇田の火事跡

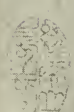
　こよひぬる宿のかりねに月そとふ草の枕にことかはれとも。

廿四日。あかつきよりの雨風に路もいかれす。大瀧邑をくれは溫泉あり、十二所といふ名ある關を越て澤尻といふ山中に宿をもとむ。此村は、いてはの國、みちのおくをさかふといへり。

十二所を過き澤尻村に

廿五日。溪水おち合、山川の水ふかく行かひたへたれは、おなし宿に在て、夜は半ならん、あしとくふりいつる雨の音に夢さめて、いねもつかれす。

旅衣たゝはやぬれん夜をふかく聞は音する軒のたま水。

雪乃膽澤邊

天明六年西磐井郡山ノ目にて百二歳翁

かんな月一日になりぬ。しりなる月うすつきたるもちゐを、けふは煎てなめるためしなれはとて家ことにせり。前屈といふ處の翁の年は、もゝとせ二とせのよはひをつみたるが、あか手つくりにしたるとて、はつよねの糯米を、さゝやかのいろ〳〵袋にいれて持來けり。人々、こは世中にたふとき齡もてるかなとて、めてのゝしりあへり。此よね、いさゝかくらひて、けふのいはひにたくへてとて、みな、さかつきとりてまとゐしたり。

初冬時雨

里の名のいはゐの水にたくへてやくむともつきしちよのさかつき。

二日。いとはや冬めきたりとて埋火ちかくよりて、こは處からなと宵うち過るまてかたらふに、山風吹來て、さと、雨ふり出たれは、

山風の又たかさとへさそふらんこゝにさためぬ夜半のしくれを。

かくなん淸古のいへり。われも、をなしこゝろものせよといへは、いへり。

あすは又いつこにぬれん旅まくらさためぬ宿に時雨ふるなり。

と、書はつるほとなふ雨又ふりて、遠方の空になる神聞へて、風おちて、いよゝふりて玉水も聞ゆ。

三日。初冬時雨といふことをよまんとてよめる。

秋くれしいろこそ見へね冬來ぬとけさはしくれのふるのかみすき。　清古

をなしこゝろを

きのふみし空はいつしかふゆきぬと雲もあらしもしくれてそゆく。　清古

又其はらからなる

むら雲のひまこそみへねかみな月あきもあらしにはつしくれふる。　清儀

四日。尋殘紅葉を

たつね入かひこそあれや山かけの色をひと木にのこすもみち葉。　清古

といへるに、われもいふ。

山風の吹たにしらすこかくれて冬もみたにゝのこるもみちは。

五日。きのふより雨いたくふりて、神さへなりて風猶はけしく、ひねもそ吹たり。

六日。いたく水の落くる根山のかたは、いろ／＼そめなす紅葉おもしろく見やりて、

ひゝきにもさそはれぬへし紅葉々のにしきにかゝるたきなくもかな。

梅森の紅葉

龍澤寺の紅葉

七日。あるし清雄、あかうへのことおもふとて、

むすふにも旅のころもて氷るらし霜かれはつゐくさのまくらは。

此かへしをす。（マヽ）

八日。雨のはれま、梅森のそかひの紅葉なへてうつくしけれは、いさとて見つゝ、

梅杜の山のもみちのくれなゐははるのこそめのいろもをよはし。

九日。このゆふへ、あるしとものして本末をいへりし春の處に、「花ちるへくとたか笛のこゑ、とありしに、「是も又やみはあやなし春のよに、といひて更たり。

十日。もみちかりといふことを句のすへにおきて其こゝろを、

木々の色も紅ふかみ野路やまちしくれていくかそむる也けり。

十一日。龍澤寺といふ山寺に、いとよき紅葉ありといひて見に行てけれは、大なる木のしたはまた時雨をまつは、一しほ、ふたしほともいひつへけん。うれは、ちしほにもすきて、みほとけのこかねの光も、あまたとゝなへたるあかのくなと、みな此紅にそみて、酒いむみてらなから、こゝらの僧たち、ゑひたるかほのつらさしいたして、のそきありき給ふ。あるしの上人、たゝ見てはいかゝと、おかしきふしにことよせて、うちつけにもあらさりけれと、いつ

〳〵のかはらぬ、かたほなるこゝろをつくりいてつ。

うすくこきいろをつくして紅葉々のわきてしくるゝ庭の一もと。　清雄

こと木またいろとりかへてもみち葉の夕陽まはゆき千入初入。　定省

わきて又紅ふかくそめかみのめくみもしるしにはの紅葉は。　清古

又人々の聞へたるもこゝにのす。

つゆしくれかさねていく日ふる寺の庭にそめなす木々のもみち葉。　爲知

山寺にきのふはふかきつゆしものほともしられて染るもみち葉。　幾奴子

けふいく日そめつくすらし露しくれひと木にもれぬにはのもみちは。　曾無子

しくれにもをよはぬいろをなへて此ゆふ日にそむるにはのもみち葉。

ちしほしむにはの紅葉のいろ見へてしくるゝ袖もうつる斗に。

露しくれそめなすまゝにふる寺の庭の紅葉のいろそえならぬ。

十二日。

十三日。あさひらけ行空のおかしう霜ふかし。

十四日。きのふにをなしく暮たり。

十五日。よあけなんほりならん、なへ、いとなかやかにゆりもてわたれは、霜かれの外山に、きゝすのほろ〳〵と鳴たるはめつらし。

十六日。よくたち、人さたまりたるころ風はけしう吹て、灯けちぬへう時雨ふり出たり。

夜あらしのひまもとめてやむら時雨もらぬにしめる閨のともし火。

十七日。きのふにひとし。

十八日。きのふのことし。

十九日。あしたくもりてひるはれて、なへしたり。

二十日。いさはのこほりに行て八幡のおほんみやにまうて奉り、又わかれにし人々にも、ふたゝひたいめせまくとて出たつ。かくて衣川にきけり。いはね、たかきしの紅葉なかはちりはてゝ、梢さひしく見つゝ過るに、

衣川經て前澤に

ころも川いろそめかへて紅葉々のにしきなかるゝ水のひとむら。

まへ澤に出たり。

廿一日。猶をなしところにくれたり。

廿二日。盛方とゝもに德岡にいかんとて野はらのみちにいつれは、こまかたの山しろう雪のふりそめたるをはる〳〵と見やりて、あないみしや、きのふさへたるけにやあらんなとかたりつゝとなふ。

雪の駒形山を望む

　きのふみしゆきけの雲やそれならんをちのたかねにはたれふる也。

廿三日。良知のやを出て、もりまさにわかれたり。枯木立ふかくしけるかたそはのみちは、くち葉にあとなく埋みはてたるに、うたひこちて柴おふたる男來けり。

　柴人のみねより谷にくたるらしわくるおち葉の音そちかつく。

鶴の物語

しらつる、まつる、かり、あしかも、しら鳥なと、のら、田つらに見やられたり。此としはたづいと多く來て、あまたとりてんなとかたれり。このころのことにやありけむ、大なるつるふたつ火矢にいられたるが、笹の葉をかんで、やふられたるつはさのきすいやさんとて、くぼたの中にかくろひたるを、たかやしの翁見つけて、おふこふりたておひめくりて二なからとらへたれと、あし手に觜にくはれぬとか。つるはけうの鳥にて、此形にまよひてくだるを、まつ、とやよりいころす。此おとにおちても、あか友をしたひてたちもはなれす、あるかき

八幡村到著

りみなころされ侍るなと、かりうとのいへり。かくて水澤をへて、やはた村につく。加美川の面にちいさき舟をめくらしありくは、鮭の子うみはてゝ死うかひなかれくるをひろふとて、やすといひけるもの手毎持て、みなそこをのみ見つゝ行かいと多し。こは、去年のけふしころ(ママ)まうて奉りしを、今ふたゝひ此ひろまへにいたり奉ることのうれしく、ぬかつきて、こよひは、畑中なにかしのかりにとまる。

水澤にて

廿四日。あるしにいさなはれて水澤に出て、のふかぬのやをとふらふ。あるし、いと久しうありしなとかたらひて、くたものともに題さくらせんとて持出て、からうた、やまとうたせり。わかとりえたるは枯野朝といふことを、

かれはつるをはなか袖に此あさけはらはぬ霜の見へてさむけし。

日山にかくろひはてゝ此やとをたちて、良道かありかもとめんとて野みち山みち、家居なきかたをはる〳〵と、あか星の光をしるへにてたとる。すみかやあらん、火のかけの見へし方をさして、あなうれしときつきたれは、茶にかゝりたる火にこそありけれ。

行くれし宿のたつきにとひよれはこはあくた火のかけにそありける。

いとくらき林のあはひより、ゆくれなふうたうたふ男出たれは、これをあなひに、からうし

てそのかどにいりぬ。

前澤にて

廿五日。前澤に出て盛方をとふらへは、こよひはとゝまりてなと、せちにものし聞ゆれはを
れり。(マヽ)

かくあり(マヽ)けるかへし。

廿六日。をなし里なる正保かやをとふらひて、かたらふうちにくれぬ。

廿七日。あけなは又、なにかしのみてらにてあひなんといひて正保云、

　あすは又あはんなこりもかなしきにさをきわかれをおもひやれきみ。

となん(マヽ)聞へし歌のかへしをす。

衣川に來て

朝とく(マヽ)衣川に來りて、西行上人むかし此あたりにたゝすみて、

かくなんのたまひけるも、いましころにやあらんなとひとりこたれて、此土橋を過るに、う
すらひにふたかりたる水の面にくち葉ちりて、霜いとふかし。

中尊寺の秀衡六百年忌山の目より詣づ

衣川みきはにむすふひもかゝみ冬の日數やかさねきぬらん。

廿八日。十二月、秀衡のおそ六百年のいみにあたり給ふを此日ものし給ふとて、人々中尊寺にまうてけれは、朝とく山の目を出て此御寺に入ぬ。知足院のみほとけの御前にいたれは、しら布のかへしろかけて、こなたのひろひさしに、さるかうすへきまうけしたり。みほとけのかたはらにはこゝらの人あつまりて、けふの手向のから歌、やまとうた奉るとて、冬懷舊といふことをうたふ。

埋れぬ名のみはかりはあらはれてゆきにあとなきむかしをそおもふ。

あまたのまうつる男女、こはいにしへ、いては、みちのおくのくにをまつこちて、しら河のせきより、そとかはまに行へきみち／＼に、そとはをさして、此みてらはなかはにあたれるとて、いたくあかめ給しなと、此きみの、あはれいにし也けるよとてなみたなかしぬ。やかて笛ふきつゝみならして、さるかう三たひかなてゝはてぬれは、日くれぬとていそきいてぬ。火わたし、猫かさわてふ處もいとくらくて、白華子、信包、正保なと清古のやに來けり。此夕、からうたいふとて、あれも樂といふ文字をさくりえて、

おもふとちふなよそひして見しゆめのたくひやなみのよるのたのしさ。

廿九日。白華子たふれて、やのあけまきなる清儀に、くしおくりける文字のするなる花とい

ふことを見て、きよゝしにかはりて、

めつらしな名におふはるの光とて人のことはににほふはつはな。

午ひとつ斗に、はしわの社にまうてたり。

はしわの社

三十日。白華子、正保にいさなはれて、いさはにおもむきて、こよひは前澤にいねたり。

前澤に泊る

うるふかんな月一日。をなし里なる、せきてふ處にいたりて雨やとりすて、高倚のやに入てとまる。あるしのいはく、

草も木も冬かれはつるやまさとをたつね來にける人そうれしき。

といひ出たるにかへし。

とひよれはこゝろにかなふまとゐして冬も人めのかれぬやまさと。

雨はいたくふるに、人よひの岡にやあらん、めぐらし貝といふものを吹すさみて、こぶれといふ男をよひて、おほやけの仰をとてふみわたしてやる。又風吹そへて、なる神すれは、桑の枝をとりかさして明たり。

こぶれに廻文を渡す

避雷に桑木

二日。ひるはれて猶風さく吹ぬ。

三日。こゝを出て常雄のやにくるみちのなかに、わらふたしきて、みてくら、みところにさしたるは、ものゝけある人を、けんさのいのりて、かく、ちまたにまつる、みちきりといふも

みちきり

初雪ふる

嫁入の粧ひ

の也。かくて其やにいたる。

四日。あるしとかたらひ、けふもゆふくれになりぬ。

五日。きのふにひとし。

六日。けふ雪ふりそめて、ひんかし山、をさへ山眞白にみゆれと、ゆきかふくつのはな埋みもはてす。

ふみしたきつゆはむとりもこゝろせよけふをはつかにつもるしらゆき。

七日。ゆふつけ行ころなへしたり。

八日。あるかたにゆくよめとて、人々のゝしりて見たるを見れは、ふとくたくましき馬に、いみしきよはひして、なりかねといふものこゝらうちふりてちかつき來けり。此女、にひいろのきぬて、さかさ袴に菅かさかつき、をとなしやかにのりたる。先にたちたる男ら、あふらさゝえ、なにくれの此調度もち行てけり。かゝることは、さと〳〵のならはしあれと、凡かゝるへくなん聞へたり。

九日。

十日。

十一日。

物著すとも牛飼へ

山居の蜂屋氏

霜月一日。けふの中冬至になりぬ。月のかしらにかゝる日あたれは、こんとしの秋は田のみいとよけれは、ものきすとても牛かふへきよしのことわさを人ことにいへり。

二日。あしたの間風とく吹て、ひるはれたり。あたゝかさは如月のころほひにひとしくくれたり。

三日。よへより雨ふる。此日山居にいたりて蜂屋のかりに入る。あるし、とし頃近となりの須輪、新山、八幡のならひ建給ふにまうてゝ、日ひと日おこたることなふ。此朔、例のことくおきつきにぬかつきけれは、いかなるわさにやありけん、さゝやかなるいしなこに三といふ文字書たりけるを、ゆくりなふひろひえて家にもていたりて、ある神のみまへにおきて、みわすへていのりける。こは、としころのねきこと、うけ給ひけんしるしにや。はた、よね、もゝの枡を石といふなれは三の石、又みそしもや、きみより給ふならんなと人ことにとなへ聞へけれは、此こゝろによそへて、

さゝれ石のなれるをや見んいはしみつ通ふこゝろのきよきあまりに。

四日。よへより中和のやにありて胤次、爲信なと歌よみて、とく起出て雪いとおもしろけれ

女に忍びて

もさ〳〵

鉢卷して寢る

は、かなたこなたと逍遙すれは、ふせるかことさやに、とよめきあらそふはいかにと、かたふき過れは、ある男、かねことしたる女をもとめて、こゝにやねたる、かしこにやふしたると、空ことゝもしらてさくりありくに、屛風引まはしてある男のねたるを、このうちにこそあれとて、みそかに入て、まつ、かしらなてんと、あとまくらもしれねは、もさ〳〵(あか妻なよといはふ詞也)といひつゝ、かしらおさへつれと、此あたりのならひとて男女老たるわかき、みな、はち卷といひて、かしらに布をまとひてふしたれは、さらに男女のけちめも、夜のかしらはわいためなふ。かゝれと男、女とひたすらに思ひ入て、をなし枕に手さし出せは、ふしたる男、あかめのしひ來るとこゝろえて、ゐよりたる男の手をとりて、ひたもの、あかふさころにさし入て、あたゝめてねてけり。いかゝにかありけん、ふたりの男おとろきて、こは、みな男にこそあなれとてあきれて、たかひのはちをやかくさんとて、いかゝして來りしそ、いかゝして引入しそと物もてうち合、あらかひて明たるとよみにこそと、雪にたふれたる中垣のこなたより、のそきたる人のつふやくにてしりぬ。

五日。雪いとおかしうふりそへてけれは、いて見んとて、こを見つゝ山居にいたりぬ。人々、常雄かやにあるしすとていきぬ。われは頭いたみていかし。

六日。けふも蜂屋のたちにくれたり。

中野

七日。中野といふ處に行に、なにかしのもとにいねたり。

姉體に來る

八日。雪いたくふりぬ。朝とく、あるしのあないにておなしすちを出て、あねたいに來て佐ゝ木のやにとまる。

三筋麻

九日。きのふのをなし宿なり。やの女のわらは、みすちそとて、ひと日に三筋の麻糸引て是をためおきて、老人なと、よみ路に行かたひらををりてきせ、又さならても、あかおやなとにすとてせり。一日に三すちうみて、一とせに一むらの布にたれりとそ。

十日。風のこゝちにてふしぬ。

十一日。あしたより雨もよに、ひるより夕にいたりていたくふり來けり。

十二日。月かけに人の行を見つゝ、

　　みちの邊の氷るみゆきをふみしたき行たひ人のこゝろさむけなり。

田の神祭る

十三日。あしたより雪ふる。此ころ田の神祭るとて、家ことにもちゐつきてあるしせり。けふもあしかきのとに、さるわさするとてまかる。

十四日。はちやのかりに行とて夕くれちかくいたらんといへは、さいたつ翁、はやすゝみ、いろときになりさふらふとこたふるに、

　　雪にふす竹のした枝にねくらとふすゝめいろときたとる岨道。

十五日。さゝ木のやにまかる。眞白のなかに、きたなけなる道一すちわたかまれるは、山賤のかりにふみわきたるといふに、

柴人のしは〳〵わくるほと見へて雪にひさすちつゝくかよひち。

十六日。雪はこほすかことくにふり來て、さへたり。家毎にあふら餅とてうすつきいとなむは、此とし、かゝけともす、あふらしめおさむるそのいはひとて、せさるはなし。

油餅搗く

十七日。よひのほと雨ふりて曉の月いとよし。

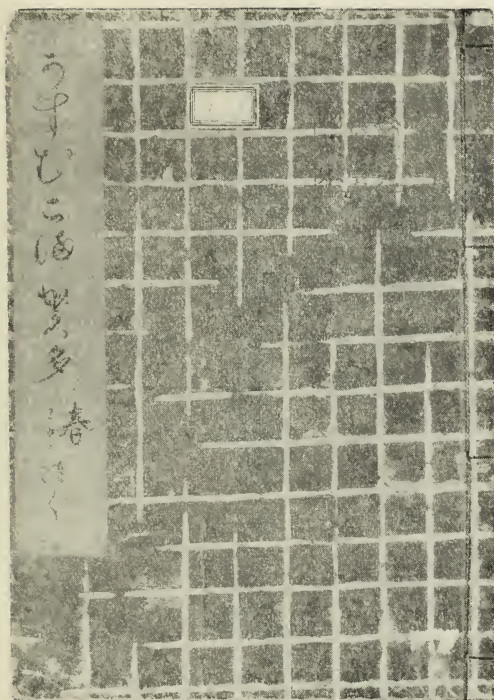
十二月朔日。あしたのま雪いたくふりて、ひる晴たり。

二日。きのふにひとし。

三日。ひつちのひとつに、なへふるふ。雪はいよゝふりてくれになりぬ。

四日。

かすむこまがた

春みちのく

迦須牟巨麻賀多

菅江眞澄誌

天明八年元日膽澤郡德岡にて

夕づゝのかゆきかくゆきくさまくら旅にしあればそことさためず。

雲ばなれ遠き國方にさそらへありき、ことしもくれて、みちのくの膽澤ノ郡駒形ノ莊ころもか關のこなた、德岡といふ里なる村上ノ良知が家に在りて、あら玉の年を迎へぬ。ことし、天明八年といふとし戊申の正月ノ朔ノ日、まづ、わか水に墨すり筆試るとて人々歌よむ。その筆をかりて、

埋木の花咲春にあふくまの河瀨の氷けふやとくらん。

ひむがしの雪の山窓より、はつ日の光ほの〳〵さしのぼるうららかけさに、軒のつららもと〳〵と音してしたゞり落ぬ。

旭影にほふかたよりとけそめて軒のたるひをつたふたま水。

痩馬をやる

初雷に天候を占ふ

祝ひの濁酒

初申の日

がんでう

二日。としのことほぎまをすとて、こゝらの人ども、たちかはり入かはり來けり。入り來る童には松の小枝に錢貫て、是を馬に乘るとてとらせ、こは痩馬也など、不足錢幣をしか云ひことわるさまは、いではの國にひとしかりき。あなたのひろびさしのおちくぼなる處には、人あまた居ならびて、濁る酒をくみかはして物語りせり。ことし雷神の年越え給ひし方は正西にてさふらふ、雨こそをり／＼零らめ、秋世ノ中よからむなど云ひつゝ大椀につぎみたらしたるを、二ッ三ッもおのも／＼も前にならべて、いざ尋飲すべしかなど進れば、ゆるしてよ、飲ね、何の樂しき事ありとも、このひと坏のにごれる酒に、あに、まさらめやとほゝゑみよろこぼひて、（末也）「出て酌とれ稻倉魂。」と、うち返し／＼うたふ。あるしは、いと／＼大なる白をとうでて進れば、いにしへの七賢人どもとて、さかなとり／＼に飲み、人みなのみにのみて心をやりぬ。こを見て、

　樂しさよ千代万代とくみかはすこゝろ長閑き春のさかづき。

（本也）「飲や大黑謠へやえびす。」と、うたひ／＼て暮ぬ。

三日。けふは申の日なりとて、ありとある馬あまた、みな馬柵の内よりおひはなち、まづ吉方の方へとて追へば、こゝらの五調小踊して庭の雪ふみならし、去年の冬より、まをりこもりゐて、かゝる樂しさとやおもふ、あるは嘶き、あるは嘶え、はねくるふさま、名所尾駮ノ牧

門松に栗枝

もしかならんか。なほ雪ふみしたき、さはかりふかくつもりたるか、やをら、まことの春庭のごと、なからけちはつるなッど、いさましき駒遊び也。

長閑なる空にひかれてつながねば心のまゝに勇む春駒。

門々の雪にさしたる小松に栗の木の枝を立添ふるためし、しりくへ繩、ゆづる葉はいづこも同じ。

幾春も猶立添(そへ)む栗駒の山にさしふる松をためしに。

四日。あゆみこうじて雪の深山に彳(たゝずむ)と見れば、かげろ鳴ておどろきぬ。かくておもひつゝけたり。

まだ去年の心はなれぬ夢のうちに鷄さへ春とつげのをまくら。

節分の豆燒占ひ

あしたより、けふも雪いたくふれり。

五日。庭の面を見れば板垣(きりかき)の際(きし)、杙(くひせ)なッどの雪うすきかたには、若草の仄(ほのか)に萌そめて、いとはや春のこゝちす。こゝを德岡ノ鄕上野(さとうはの)といへば、

おそくとくおかべの草のもえそめむ雪のうは野に春風ぞふく。

六日。きのふのごとうらゝ也。霞む名のみや空にたつらむ、遠かたのやま〳〵うすくもれり。こよひは、せちぶ也。「天に花開地に登(みのれ)、福は内へ鬼は外へ。」と豆うちはやし、爐(すびつ)の

七草はやす

邊りには並居て豆燒といふことして、一とせの晴零の灰卜問ふは、こと國も凡ッひとし。

七日。鷄の初聲たつころより屋毎にものゝ音せり。眞魚板にあらゆる飯器とりのせ、七草囃とて、此地に云ふ雷盃木てふものしてうち扣ク也。今朝の白粥に大豆うち入てそ烹るめる、こは、としの始より無事とて、身に病なきを祝ふためしになん。此日立春といへば、

　　此としの日數もけふはなゝわだにめぐれるたまの春は來にけり。

雪はなほ、をやみもなうふりにふれゝば、

　　みちのくのあたちがはらの鬼もけふ雪にこもれる若菜つままし。

此ごろ、ふみ書贈りたる道遠のもとより、

　　する墨の色さへにほふ水くきに硯の海の深さをそしる。

と、ふみにこめて聞えしかば、此返りごとすとて認む。そか中に、

　　水くきのあともはづかしかき流す硯の海のあさきこゝろは。

雪のいとゞふりて、梅、さくら、なにくれの梢ごも、わいだめなう空くらし。くれてやゝ晴たるげにや、月はつかさしたり。

　　夕附夜そらたのめなる影そへて花とみゆきのつもる木々の枝。

　　やがて又かくとさくらの春風もこゝろして吹雪の初花。

あとう語り
べこ
つりごと

家のあるじ村上良知の歌に、
　春風にさそひな行そ花と見ん庭のさくらにつもるしら雪。
その弟(はらから)良道。
　ふりつもる梢に雪の花さきて庭のさくらに春風ぞふく。
夜更、人さだまるころ、はやち吹、雨ふる。
八日。よべよりあたゝけく、あしたの間雨猶ふれり。
　草も木もこゝろやさけむふりつみし雪の上野(うはの)の今朝の春雨。
やをら雨晴れ、日照れり。
九日。雪はこぼすがごとくふりていと寒ければ、男女童ども埋火のもとに集(つど)ひて、あとうがたりせり。また草子(さうし)に牛の画(かた)あるを、こは某(なに)なるぞ、牛子(べこ)といへば、いな牛(うし)なりとあらがひ、また是(こは)なに、猿(さる)といへば、ましなりと、論(つりごと)すなと家老女(さじ)のいへば止(やみ)ぬ。つりごとは論(あげつらふ)ことの方言(くにことば)なり。また某々(なぞなぞ)かくるを聞て、
　うなゐ子が稚(をさな)心の春淺みいひとけがたき庭のしら雪。
をやみなう雪ふれり。
十日。山早春といふことを、

はだて

かせぎとり

長閑しなみちのく山の朝霞こがね花さく春は來にけり。

夕くれ近う雪ふれり。

十一日。けふは物始といひて貴賤家々に業仕初日なれば、雪の上に鉏鍬もて出てうち返す手づかひをし、また稻田うゝるとて、芒尾花、わらなンどを雪の千町に佃るあり。あな、こうじたりなンどうち戯れ、謠うたひ、小苗うち、いかになンど戯れり。帳とぢ、藏びらきなンど業は、商人ならねば、さるよしも聞えず。ほどちかき水澤の信包、ほど遠き、ひむがし山なる田河津の爲信なンどが歌ありしが、こゝにはもらしつ。

十二日。つとめて、小雪ふりていと寒し。午うち過るころより若男等あまた、肩と腰とに「けんだい」とて、稻藁もて編る蓑衣の如なるものを着て藁笠をかゝふり、さゝやかなる鳴子いくつも胷と背平とに掛て、手に市籠とて、わらの組籠を提て木螺吹キたて、馬ノ鈴ふり鳴し、また衢、鳴リがねといふものをうちふり、人の家に群れ入レば、米くれ餅とらせぬ。うちつゞきかしましければ、「ほう〱」と聲を上ゲて追へば、みな去ぬ。また、ものとらせて水うちかくるならはし也。こはみな村々のわかき男ども、身に病なきためにする、まじなひといへり。追へば、「けゝろ」と鷄の鳴まねして深雪ふみしたき、とよめき、さわぎ、更るまでありく。是を鹿踊、また挊鷄といへり。また南部路の挊鳥は、やゝにてことなり、かゝふる藁

きつ

知らぬ拵鳥に遇へば

けとり

田祭ならん

「すはくへ」

笠を鹿の角形に作り、それにさゝ竹をさし棒をつき、手籠もて餅もらひあるく。此餅くれゝば祝の水とて、うちあぶせける。また此拵鳥等に、家の主にくまれては、その家におし入り厩の前に立て、木匱とて、馬の秣咋てふもの入る舟のごときものを伏せて、「すはくへ〳〵」と口のうちにものとなへて、此木櫃の底を杖にてうちつゝきたりしが、今は、さる唱へ事ももはらとは知りたる人もさふらはず。たゞ、しらぬ方より拵鳥來れば、雌鳥か雄鳥かと問ふに雌鳥といへば、「さらばその卵とらんとて、集め得し餅を奪ひとらんとし、また雄鳥なりといへば、さらば、くゑ鳥せんといひて鬪鷄のふるまひをして打合摑合て、力立あらがひのみぞ今はしけると八十ノ翁の語れり、あやしき事もありけるものか。此拵鷄等が姿を見れば、田に立るおどろかしの人形に似たり。また鳴子附たるは鳥追ひ、猿追ひ、鹿追ふ鳴竿のごとし、さりければ年の始めの田祭ともならむかし。さて、かの翁がものがたりに「すはくへ〳〵」と云ひつゝ詛しはいかなるよしかと考おもふに、保食ノ神は馬ノ祖とし、又建南方ノ命を先牧として、此ノ二神を厩の神と祭る。此由來をもて諏訪と唱へ、また、くへは久比にて、蝸蜒は馬牛なゞの皮肉に生る虫にて、あるは腹やませ、また此虫ゆゑに、うまうしの斃れ死事あり。さりければ須波の建御名方ノ御神にまをして、此蝸蜒を起さしめ給へと祟心もていのり奉りし事になむ。ゆくりなう雨ふれば、此拵鳥ら門の外に逃出で、あるは、

十一日ノ日、物ノ始メに作リたる田の面なンごに群れたてり。さて今の世に山田の曾富豆といへるは久延毘古にて、くえびこは卽チ曾富騰也といへり。此事古事記傳十二ノ卷十四葉に精なり。

　春雨にぬれて曾富騰のたつか弓山田にあらぬ雪の假田に。

十三日。あしたより雪零れり。

　泡雪のふり來るほどもなかぞらの光に消る春の長閑さ。

拺鷄ら、雪にまみれてありく。

病を祈りて拺鳥に出るもあり

十四日。よさりになりて戊ひとつばかり、れいの拺鳥ら桐木貝吹キたて笛吹キ鈴ふり、馬の鳴輪、鳴るがね、鳴子うちふりて諠聒し。筒子といふもの、また樽もて來るには、家々の手作の酒やる也。去年は死べう病にふして、明なば拺躍してもの奉らんと、稻倉魂、あるは村鎭守にねき事して、三十四十とさしねびたる男も交レど、多くは村々の若キものゝ、戯れぞめきにこそあンなれ。

黄金餅喰ふ

十五日。けふは粟ノ餅を黄金ノ餅とて喰ふためし也。家々の嘉例とて、祖よりのをしへのまに〳〵仕つれば、ものはたちに田佃ラず、けふにうゝる家あり。日の西にかたふくころ、田うゝるとて門田の雪に、わらひし〳〵とさしわたし、また豆うゝるとて豆莖をさしぬ。また山

畑の雪の中に長やかなる柱を立て、此柱のうれより縄を曳はえ、その縄に匏籰とて、麻苧の絲巻瓠をさしつらぬいて、其縄の末を杭にむすび付ケ、また、その杙頭に、ふるきわらのふみものを、いくらともなう、とりつかね縛處あり。そはそのむかし、神ノ道をになう尊み、あが國の神のみをしへ如なる事は、こと國には、えもあらじと、あけくれ神をゐやまひまつり、父母にけうをつくし、ひたふるにうち耕て、業に露のいとまなくくらす男あり。また其近隣に、あけくれ經よみ、佛の法式をになう尊み、佛のみをしへにこゆる尊き事はあらじといひて、此二タ人の男出會ごとに、いつもものあらがひやむときなし。あるとし兩人の男、またものあらがひしていふやう、さらばことし稲田を佃れ、その田の能ク登たらむかたこそ、そのみをしへの勝らめといふに、さらばためし試といふ。此、親にけうなる男は、あしたよりくるゝまで、わら沓つゆの間もぬかず鉏鍬とり耕し、うゑにうゝれば、苗高う茂り、秋のたのみ八束にたり、八重穂にしなひて家ごみ榮たり。佛のをしへ尊める男は田も作らず、經典をとなへ香を焼き、花奉りて、ゐやびぬかづき尊みける。その秋、その男の千町田の面に夕顔ひし〳〵と生ひ、此蔓のみ延ひまとふ。やをら花のしろ〳〵と咲て、やがていと〳〵大なる壺盧の子登り。此男うち見て、何にてまれ佛のたうばりもの也、是喰ひて命生んとてうち破りしかば、その瓠の中に精米のみち〳〵たり。人みなあきれて、さらば神も佛も、志シ

かすむこまがた

花をかける

のまめなる人を守リ給ふにこそあらめとて、あらがひをとゞめて、むつびたりし。そのしるしに、今し世かけて、正月の事始にかくぞせりけるといふ、此事書にも見えたり。さりければ、わら沓と瓠を田畠の中にかざりけるとなむ。夕飯くひはつるやいなや、白粉をわかき男女掌に付ケて、是を誰れにても顔にぬりてんとうかゞひありく、是を花をかけるといふ。しかすれば稲によく花咲ためしになむ。此花かけられじと心をくはる目づかひを見とりて、いな、さる事せじ、こゝにわれ尋ぬるものこそあンなれ。さらばその掌ひらき見せよなンど、此花のさわぎに、うちとも、とよみわたれり。白粉の、さはにあらねば、近き世には山より白土を掘り來て、三四日も前日より、花白物よ〳〵と肆にうりもてありくを買ひ、水に解たくはひおきて是を塗る也。むくつけゞなる男なンどの、人とさしぐみに物語し居る後の方より、稚キ童のさしよりて、青月代に、ちひさき白の手形つけて逃行を、人みな立かゝり笑ふなンど、また、さらぬだに白粉あつ〳〵と化粧、紅かねによそひたる顔に、ゆくりなう花かけられたるは、深雪のいやつもりたる庭に、今はた小雪の降り添ひたるこゝちせられたり。また前澤ノ驛、水澤の里なンどにては、此花かけのさわぎなか〳〵の事にて、日暮ては、へそべ（釜底墨）とて鍋釜のすみをとりて、油に解てぬりありく。男女老若のわいだめなう、此墨の花かけむとてむれありければ、みな恐て土藏なンどに逃げ隱れ音もせで夜を更し、あるは夜着引キかゝふりて

病人の眞似なンどし、また大キなる蘿蔔を斜に切て、それに大ノ字、正ノ字、十ノ字、一ノ字なンどをおのも〳〵刻て、油墨を塗りて、袖にひき隱し持ありき、行ずりの男女の額につき中たるを月影にすかし見て、一文字面よ、こは大文字面なンといひて笑ふ事也。此花塗る若男等は、まづ己が面を崑崙奴の如にぬりありけば、誰かれと人しらぬ事となむ。此こゝろを、

　秋に咲八束の稲の花かづらかゝるためしをけふにこそ見れ。

十六日。いまた夜ぶかきに童とも起出て、大箕を雪の上へにふせて、楉のごときものもて此伏セ箕をたゝいて、「早稲鳥ほい〳〵、おく鳥もほいほい、ものをくふ鳥は頭割ッて鹽せて、(マヽ)遠嶋さへ追て遣れ、遠しまが近からば、蝦夷が嶋さへ追てやれ。」また、前澤ノ驛なンどにてはおなじさまながら、「猪　鹿　勘六殿に追はれて、尻尾はむつくりほういほい。」とて追ふとなむ。夜明はてて見れば、爐の端の金花猫にも花かけ、庭に居る黒犬にも、誰が花かけしとて笑ふ。拵鳥らも、けふの午のときをかぎりのゝりとて、雪吹の烈さもいとはず貝吹、かね鳴らし、笛吹きいさみ、うちむれありく。なほ雪ふりて寒し。

　玉水の露も音せず空冴て軒の垂氷の掛ケそひにけり。

十七日。きのふのごとに雪のひねもすふりて、月も仄にてりて、外は、そこと庭の隈回も見えず。猶寒し。

田植踊り

心あてにそれかとぞ見る月影の光そへたる庭のしら雪。

童ども居ならびて、はや寐て、明日は田うゑ踊り見んなどかたりてふしぬ。夜更ていと〳〵寒し。

十八日。あした日照りて、やがて雪のいたくふれり。田殖躍といふもの來る。笛吹きつゞみうち鳴らし、また錢太皷とて、檜曲に緤を十文字に引渡し、その糸に錢を貫て是をふり、紅布鉢纏したるは奴田殖といひ、菅笠着て女のさませしは早丁女田殖といへり。やん十郎といふ男竿鳴子を杖につき出て開口せり。それが詞に、「杁ずりの藤九郎がまゐりた、大旦那のお田うゑだと御意なさるゝ事だ、前田千苅り後田千苅り、合せて二千苅あるほどの田也。馬にとりてやどれ〳〵、大黑、小黑、太夫黑、柑子栗毛に鴨糟毛、躍入で曳込で、煉れ〳〵ねつぱりと平耕代、五月處女にとりては誰れ〳〵、太郎が嫁に次郎が妻、橋の下のずいなしふし、またかじかの事也が妻、七月姙身で、腹産は惡阻とも、殖てくれまいではあるまいか、さをとめども。」といひをへて、踊るは、みな、田をかいならし田うゝるさまの手つき也。「うゑれば腰がやめさふら、御暇まをすぞ田ノ神。」と返し〳〵うたひ踊る。そが中に、瓠を割て目鼻をゑりて白粉塗て假面として、是をかゝふりたる男も出まじり戯れて躍り、此事はつれば酒飮せ、ものくはせて、錢米扇など折敷にのせて、けふの祝言とて田殖踊等にくれけり。

友よびの鶴形

及川氏創始

十九日。きのふのごとに雪ふりて空冴え、去年にいやまさりて、埋火のもとに筆とるに、筆の末氷がちに暮たり。

二十日。けふは磐井ノ郡平泉ノ郷なる常行堂に摩多羅神の祭見ッとて、宿の良道なッどにいざなはれて徳岡の上野を出て、はや外は春めきたりなッど語らひもて行ク。遠かたの田ノ面の雪の中にこゝらたてならべたる鶴形は、まことにあさるさまして、眞鶴、黒鶴、餌ばみ、立首なッと、みな生るがごとし。こは、去年の秋、稲刈りをへるやいなや此鶴形を立り。此鶴の始めは、いつの世ならむ及川某といふ武士造りそめぬ。其後胤なほありて、其及川の家に刻ミ彩リたるははかなきやうなれども、鶴の能ク飛び下降るといひ、また良工もの作る人の心をつくして造りたりとも、人は、めをおどろかしぬれど、鶴の目は、そをよしともおもはざりけるにや、及川が家の鶴形には、今も能く鶴の群れくたるといへり。鶴形はいと／＼大なるものにて、二ッならでは馬に負せじとなむ。眞鶴、白鶴、黒鶴なッどさま／＼に彩り、此いろどることを、にごむと方言り。其にごみたる上へに大豆液といふもの塗は、烈しき雨風露霜、氷レる雪にさへ腐さず殘れり。田の畔に小柴さして射翳とし、その内に入りて鐵炮してうつといへり。秋は鶴形いと／＼多く、今は鵠白鳥をいふ也形、鴨形、雁形なッども作り出て、鳥もめづらしからず見あざむにや、むかしほど降りは來らざるよしを語る。行／＼鶴象といふ事を、

木々の枝は花とぞ見つるかた岨にのこれる雪もけふはかすみて。

前澤の驛繭玉削花を飾る

前澤ノ驛になれり。此あたりの家々に、水木の枝に繭玉とて、玉なす餅をつらぬき附て梁にたてり。勝軍木ノ菊ノ削花を幾英となく、某ノ木の枝ならん、それにひし〳〵とさしたり。また、こと木の枝をおし曲ヒて、青小竹の箭の三尺ばかりなるを矧て、その弓の上弭より白麻を亂し附て、艮門の方にはなたんさまして、削花の木の中つ枝に結び添へて門々たてり。こは十五日にしつる歲の祭ながら、いまはた殘りける也。延喜式に、御佛名とき、菊の削花なンど聞え、また正月門戸に削花挿むは、いと〳〵古きためしにこそあらめ。かくて、鈴木常雄、けふの事かねて書もてものし聞えたれば、前澤の鄉あたりにて出テ會むといひしごと、常道といふ人をぐして、横路より雪ふみ分て來けり。まづ此年始てのたいめなどありて常雄。

かくてこそ猶うれしけれかねごともけふにたかはで逢ぞ樂しき。

とあるに返し。

玉つさにむすふ言葉をしるへにてたかはぬすちに逢ぞうれしき。

古木の大櫻

道よりひむがしの方に名におふ大櫻とてあり、枝四方八方うちたれ、雪をおびたり。木の太さは、十二人手をつらねて周回といふ。そこに齋りて不動明王ノ堂あり、家二三戸ありて村名も大櫻とよぶ。いにしへ秀衡、東稻山に千本の櫻を殖られし事あり、そのころのたねなら

山田氏石碑

瀬原の里

衣川を渡る

衣川の來由

むといへば、此大櫻は千歳ふる木ならんと人々のいへり。

　　こと木よりつもれる雪も大櫻花も芳野のいくも(マヽ)に見む。

と書て堂にさし入たり。かくて此處を出て、右の方に白鳥明神の塔の跡も雪にふり埋れ、白鳥ノ二郎行任が名は世に人しれり。徳澤長根の雪の片岨に小松の群立るは、輝井ノ太郎が陣取し地也。また道の傍に雪に埋れし碑は、山田治左衞門とて、新墾にいさをありし男のゆゑよしをしるせりといふ。そは百とせまりむかしの事となもいへる。瀬原ノ里に來けり、金命丸といふ藥を賣る家あり。此里の艮の方に小松が館といふあり、そは、阿部ノ兄弟栖家たる瀬原ノ柵ともいひし處といへり。淺からずおもひそめしとよめる衣川を橋より渡る。此水むかしは艮に落て、今は東に流ぬ、そこを押切りといふ、いにしへは兵多くうち死し、あるは洪水に流しといへり。其とき武藏坊ばかり上に流れしといふは、北上川も衣川も一面て流るれど、衣河の水にしたがひ、上の方、北ざまにながるゝを寄手の見て、辨慶のみ上に流るは、もとあやしき事といひしとなむ。此衣川の源に、清淨か瀧とていと／＼大なる瀧あり、今そを障子がと訛りいふとなん。むかし慈覺圓仁大師衣をあらひ、かたはらの木にかけて乾し給ひしよし、さりければ、それより瀧を衣の瀧、その流の末を衣川といふといへり。順徳ノ帝「風冴る夜半に衣のせきもりはねられぬまゝに月や見るらむ、とよみ給ひしそ

北上川を櫻川とも

則任が妻投身の傳説

の關の古ル跡トは、鵜ノ木といふ地に在り。今は來藻ノ里は卯の方にあたれり。むかし束稲山の麓に櫻あまた殖て、此櫻の花の影上川北上川をいふ也の水にうつり散れば、雪の流るゝがごとくいとくおもしろければ秀衡、北上川を櫻川と名附られて芳野川にもをさくく劣らざりしが、今は束稲山には櫻一樹もなく、中尊寺の邊を櫻川とよびて、酒酤亭、そをいへるのみ。むかし貞任が舍弟則任、命惜て死ざりければ、その妻としは十八なるが、夫の勇なきをいたくうらみて嬰兒をいだきて、「いまぞしるなみたにぬるゝ衣川身は流すとも名をばながさじ、とて、衣川に飛入りしとなん語り傳ふ。前太平記には、城内の二の堀に身を投しと見えたり。また阿倍ノ則任が居城衣川に在りて、一ノ城堀へも二ノ堀へもみな衣川の水を落したる地也。巽の中に、かごしものひとり秀たる山あり、そは磐井ノ郡ノ式ノ御神二社ノひとはしら儛草ノ神鎭座みね也。鈴木常雄。

をりくに來てこそしのべこころも川ながれて遠きむかし語リを。

また村上良道。

春もまた淺き雪消の衣川きしの氷はとくるともなし。

など、人のよめるを聞て、

衣川いく世かさねしいにしへをおもひ渡れば袖ぬれにけり。

鈴木三郎、辨慶の塚松

中尊寺は弘台壽院

白山と日吉

經藏の寶物

人々の歌あまたあれど、ところせければ、みなかいもらしたり。いと〳〵ふり生る一ト木は鈴木ノ三郎重家が塚ノ松、また權ノ正兼房がしるしの石などあり。辨慶が壟松を見て、人みなイミ歌よめるを聞て、

松かねに苔こそ埋めむさしあぶみさすかに高き名やはかくるゝ。

しかして中尊寺にまうでむとていたる。そも〳〵此中尊寺といふは、鎭守府ノ將軍陸奥ノ守奥羽兩州ノ押領使從四位上少將藤原ノ朝臣秀衡入道世に在りしころ、白河ノ關より外が濱まで千本の率堵婆をさして、そが中央にあたれりとて中尊寺とはいへるとなむ、眞名は弘台壽院といふ。鼻祖は圓仁大師にて嘉祥三年に開給ひし御寺といへり。こゝに白山ノ神また日吉ノ神をうつしまつりて、此二柱の御神山をまもらひ鎭座り。四月ノ初午ノ日は白山神の祭にて、七歳男子を馬に乘て粧ひたて、白兎の作り物あり。此白兎は從者にて、もろこしより神のぐし給ひしまねびといへり。此處に齋奉る白山ノ神靈は八十一隣姫の神にはおましまさず、その韓神にてぞいまそかりける。其日は田樂、うば舞、さるがうなゞどありて、賑へるよし人の語る。經藏に戸ひらかせて入れば、立獅子に乘る文殊師利菩薩、獅子の口索曳持るは淨明居士、また筐さゝげ立るは善財童子、また佛陀波利、優闐王なゞどの佛は、みな毘首羯摩か作りといふ。うべも、めもあやに、あか國にはもとまれなる御佛也けり。また釋迦

かすむこまがた

金色堂

佛一世の經典納經の始は、七十四代の帝鳥羽ノ院のみくらゐにつかせ給ふとし、天仁元年戊子ノとし藤原ノ清衡寄附せり。世に名ある手かきの僧を集めて、古キ寺々に在る經典を紺紙に金泥してかゝせ、また一ト行リは金泥、一ト行リは銀泥の文字して書たるあり。此經典巻たるはみな木瓜の紋あり、そが家のしるしにや。また基衡納經はおなし紺紙に、金泥の文字ノ色ことにつやゝかに見えたり。此多かる經典の中には、今し世にある一切經とは文字の多小、譯のかはれるもありといへり。また婆粉紙とて黄色梵本の經あり、そは宋板にして秀衡寄附のみのり也。此經筐の文字はみな螺鈿をちりばめ、また唐櫃の内より大蛇の歯、水火ノ玉ひとつ、藕絲ノ袈裟なンどとうだしてぞ見せける。金色堂、そは俗光リ堂といふ、扉もおしひらけり。こは天仁二年己丑ノ春清衡ノ建立の堂にして、七寶莊嚴の巻柱、戸枚の光リ、長押の螺鈿なンど、みなそのさま、からめける細工也。そが中に觀世音菩薩、左ニ勢至菩薩、右ニ地藏菩薩、三尊のぼさち立給ふ。そが中の座の下には藤原清衡の棺あり、大治元年丙ノ午ノ七月十七日逝去。左の菩薩の下には基衡の棺を隠せり、保元二年丁ノ丑ノ三月十九日みまかれり。右ノ方のぼさちの下には秀衡入道の棺あり、文治三年丁未の十二月廿八日みまかれり、また入道の棺に、和泉三郎忠衡が頸桶を後に内たりといへり。その三代の人々の軀には羊の肪脂を塗て、巴牟耶といふものもて棺に攻て、沙羅布といふ布にて上へを包み封たりといふ。年

建武二年火事

辨慶の短刀

辨財天女堂其他處々

を經て布もくちやれて、ふむじも解ぬれど、此棺をひらけば、つめたる藥氣はつとたちて、つゆばかり眼に入りても盲瞽となりとて、誰れひとり手やはふるゝ。また、なにのよしありてかひらかむや。淸衡、基衡、秀衡三代の横刀あり、その飾などいふべうあらじ。建武二年乙亥の春野火かゝりて、堂社僧房院々殘りなく、四十七宇の洪鐘もみながら回祿て、時の間に灰となりしとなむ。さりけれど此金色堂のみ燒のこり、また經堂も屋根のみ燒たれど內には事なう、いにしへを見るに足れり。此光り堂、經藏のみまたくして、その外は御佛のみぞのこれる。また辨慶が九寸五分といふものあり、そは山賤のもたる山鉈てふものゝごとく、一尺二三寸のかねを厚うちのべたるものにて、劍柄は透しにて、手をさし入れて握しものとおもはれたり。むかし京都にて、ある小寺の開帳のとき、其寶物の內に見し破石刀といふものありしが、その破石刀のさまに似たり。これもなか〳〵辨慶時代のものにはあらじ、いと〳〵ふるきものにこそあらめ。また康永二年と刻りたる洪鐘ひとつあり。堂舍もみな、かりやとおぼしくて四阿兩下めけるさまに作れり。辨財天女ノ堂に金光明最勝王經の曼荼羅十卷、みな金泥もてそのあらましを彩かきたるは、めもあやに見えたり。堂舍僧房の在りし古跡を見めぐりて、物見とて杉のむら立る處にのぞめは、衣河は糸すぢのごとくみだれて加美川の流に落たり。武藏坊が流れたりし中の瀨といふも今は田畠となりぬ。和泉が城、

岸の松、龜井の松、蓮臺野なンど殘ンノ雪に埋れたり。山ロノ堂に、武藏坊が七道具負ひもて立る、六尺まりに作りて、いと〳〵近き世にすゑたるを見て笑ふ人多し。九郎判官の館の跡高館といへるあり、武藏坊が館跡、その外の兵等が住しあとも、みな畠となり山賤の住家となりぬ。義經堂に登りてむとおもへど、雪のいと深ければ、ふたゝびいたらむ、はや日もかたふきぬ、いでとて、こよひの神事にいそぐ。道のかたはらの雪の中に八花形といふ處あり、そは國衡、隆衡が館ノ跡にて、外堀なンどは千町ノ田となれり、此あたり雪いとふかし。小堂あり、此堂の内に鐵塔とて、いと〳〵大なる鐵塔の、なから碎たるあり。そが内に女の黑髮いたく納めたり、いにしへ秀衡の室の、ぬけちりたるくろ髮をかく納められしものとて、今の世かけてしかぞせりける。かくて摩多羅神の廣前にぬかづく。いまだ人もこゝらいたらねば、今しばありて來らむとて、千葉某といふ人のもとに行なんとて人にいざなはれて行ぬ。しかして此あたりを見わたす。慈覺圓仁大師陸奧國修行のとき、白毛のちりこぼれたるをあやしみ此毛を踏越て山に入り給ふに、白鹿にうちもたれて眠る老翁あり。こは、いかなる人にておはしけるかと圓仁とはせ給ふに、我は此山を守護る翁とて、鹿とともにかいけちて見えず。圓仁、こは此山をひらきて、賤山賤等かために佛法流布あれと神の造給ふにやとかしこみ尊て、藥師如來を安置て醫王山毛越寺金剛王院といふ。天台宗にてあまたの堂

舍、あまたの衆徒なンど甍をならべて榮えたりし山ながら、元龜三年の野火にたちまちやけて、今は礎のみぞ殘れる。また嘉祥寺破壞こぼれたるときは、堀河院、鳥羽院の勅ありて、ふたゝび興して藤原ノ基衡の建りといふ。また嘉祥寺におしならべて圓隆寺といふも新に建立ありき。その時の勅使は左少辨富任ノ卿也。富任、三年此平泉に住り、その跡は勅使屋敷とて、今は島崎坊とて衆徒すめる也。また康元、正嘉のころならむ、相模守時賴、最明寺して落飾たまひて、法ノ名を覺了房道崇と號て國々めぐり給ひ、こゝにもしばし杖を曳とめられしといふ庵の跡あり。また舞鶴が池も雪に翅のふり埋れ、梵字が池、鈴澤の池、柳の御所は、淸衡、基衡の館の跡にして、其むかし江刺ノ郡豐田ノ館をうつされて、豐田ノ御所とも云ひしとなむ。又秀衡、泰衡ノ館は伽羅樂ノ御所といふを、人みな、からの御所と呼り。また泉ノ御所ともいへる、そは泉酒とて豐酒の涌キたる事あり、酒は榮のよしをもて、居館を泉ノ御所とも名附られつるものか。泉酒の涌出し池の跡を今は泉崎といふ、また泉三郎忠衡ぞ此處に住みて泉とはいへるならむ、和泉のよしにはあらざるべし。また正月のやらくろずりの唱歌に、「泉酒が涌クやら、古酒の香がする、妾持の殿かな。」また、今年酒が涌やら、去年酒ヶの香がすると唱ふ處もありき。かたふかといふ處あり、そは片岡ノ八郎弘常が館跡也。また鈴木ノ三郎重家が館ノ蹟は弘台壽院（中尊寺の本號なり）の山の西ノ麓に在り。また圓位上人選集抄に誌

四月の泣祭

る、その尼寺の跡あり。また花立山といふ山あり、そは基衡の妻、某ノ年の四月二十日に身まかり、此室もろ〳〵の花を好とて、其日にあらゆる花を彩作りて此山にさして、室のなきがらをその花立山に埋てけるよし。基衡の室は阿倍ノ宗任ノ女にして、和歌にも志シふかかりける人にや、木草花をになうめで給ひしといふ。今も四月廿日には僧あまた出て、かりに葬のさまして、目をすり掌を合せ數珠をすり幡を立テ、寶蓋、寶螺、梵唄をうたふ。是を四月の哭祭といふ、もともあやしき祭也。むかしはこの哭祭の日は、知るしらす、僧等ともに經をうたひ金皷を鳴らし、あるは、その聲とよむまで、よゝと哭しといひつたふ。

義經の遺跡

また忠信、次信が館跡は、高館の下なる地の岨めける處也。義經の御館は高館とて、いと〳〵高き處に在りて、その亂ノ世に九郎判官、これまでとて怨たる一章を口に含て御妻子ともにさしつらぬき、その太刀もて腹かき切リ給ひしは文治五年閏四月廿九日、御年卅三、法名通山源公大居士と彫て、靈牌は衣川邑の雲際寺にをさむる也。

清悦物語の高館落

また清悦物語高館落のくだりに、判官、兼房をめして今は生害あるべしと仰らるゝに兼房つゝしみて申上るは、身方殘らず討死と聞かせ給ひて御前ム樣も、御兩人の公達もたゞいま御生害なし給ふと申シ上れば、義經、今は心やすしと仰られて、御坪の内の岩に御腰をめされて、金念刀にて御腹十文字にそきらせ給ひける。兼房、御諚なればとて、御前にさふらふとすゝみ寄リて御首をうちとり奉りて、兼

義經蝦夷軍談には

忠衡免る

房も腹十文字にかつさばき五臟を摑て取出して、義經の御首をわが腹の内におしかくし、おのが衣を以て卷てぞ息絶たる。清悅、常陸、近習二人して御所に火をかけて一時のうちに煙となし奉りたるは、文治四年閏四月廿八日より同晦日まで三日三夜の戰ひにて、高館の御所落城せり。其時衣川の流血の色に染めて、三日四日水の色を見ざりし。」と見えたり。また上編義經蝦夷軍談、高館落のくだりに、義經も權頭兼房が別れにいとゞ涙にむせび給へども、とても落べき氣色の見えざれば云々。杉ノ目ノ太郎行信は義經ノ顏面能ク似たればとて御姓名を犯奉り、義經の御身に替りて大將となる。常陸坊海存も存る子細のさふらへばとて城に殘りて一軍し、趾より追付奉らむ云々。高館に押寄せ勝負を決むと、文治五年閏四月廿九日泰衡が舍弟本吉ノ冠者高衡を大將とし、長崎ノ太郎佐光、同次郎俊光、照井ノ太郎高春等三萬餘騎を三手に分け、衣川の高館におし寄る。城中にはかねて覺悟云々。早や行信は自害しければ、兼房即時に介錯し、首を錦の直垂におしつゝみ座上に直し、其身も腹十文字にかき切れば海存又是を介錯し、其まゝ處々に火をぞかけたりける。煙にまぎれて、常陸坊は跡方もなく落行ける。同五卷「泰衡攻ニ泉三郎忠衡ヲ」くだりに、去程に日本奧州には、泰衡が舍弟泉三郎忠衡は義經に志氣深く、勅命をさみせしなッとかねて叡聞に達し、違勅の罪に依て急ぎ忠衡を誅すべきよし、過にし文治五年六月七日鎌倉の飛脚奧州に到着せり。同キ十三

日には泰衡が使者として、一族新田ノ冠者高衡、義經の首を黑漆の櫃に入れ美酒に浸し、下人二人に荷せ、腰越の浦まで參着し此由を言上す。是に依て、首實檢として和田ノ太郎義盛、梶原ノ平三景時、各鎧直垂を着し甲冑の郎徒廿騎相具し、腰越に來て首實檢を遂にける。（東鑑に此首分明ならず云々とあり。）是に依て腰越へ御使を下され、泰衡、義經が首を討て送らる條神妙也。就て泉三郎忠衡、よしつねに無二の忠志を盡しよし、違勅の者安穩なる事を得むや、急ぎ忠衡を誅せらるべし。然らずんば泰衡もともに違勅の名を得られむか。是賴朝が計らひに非ず、勅命の趣斯の如くなり、此旨皈て泰衡に申べしと仰遣はされ御暇を給はりける。新田ノ冠者高衡、夜を日に繼で奥州に馳せ皈り右の趣を演しかば、泰衡、國衡、表には、こはいかにと仰天の體なりしが、忍びやかに忠衡の方へ人をつかはし右の次第を語ければ、此上は御邊の方へも討手の勢を差向べし、自害せし體にもてなし高館殿の御跡を慕ひ、父が遺言の通り、蝦夷に渡り命を全くせらるべしと云送り、同廿六日、勅命なれば是非に及ばず忠衡を誅すべしとて、勾當八秀實を討手の大將として、其勢八十餘騎にて泉の屋に押寄せて、鬨を作つて攻たりける。館の中にも忠衡が郎徒ども、こゝをせんとそ戰ひける。此泉の屋は無量光院に程近し、折ふし夜に入て館に火のかゝりければ、終に無量光院にも火移らんとす。寺僧等も爰を詮と防きけるほどに、漸として打消しけり。此寺は故秀衡入道菩提所の爲に建立ありし靈地

忠衡蝦夷に走る

にて、宇治の平等院を摹し、扉には秀衡自ラ狩獵の體を画キ金銀を鏤めたり。火も旣に靜りければ勾當八秀實泉の屋を點檢するに、忠衡を始め郎從とも自害と見えて、死骸悉く燒損じて其形分明ならざりしとなり云々。「忠衡密渡二蝦夷一」といふくだりに、其夜泉三郎忠衡は、郎徒共に暫く防キ矢を射させて後は館に火をかけ、自害の體にもてなし裏道より遁れ出て終蝦夷にこゝろざし、津輕ノ深浦へとそ落行ける。頃は六月廿日餘り、深浦の港は兼て秋田ノ次郎が謀ひにて、交易渡海船一艘此港に泊して松前蝦夷の安否を聞居たりしが、忠衡は姿をやつし、主從十人餘り賈人(あきびと)の體に見せ、羽州秋田の者なるが、平泉へ商賣の爲に久しく滯留し此度松前へ渡海せん爲と僞り、此船にこそ來りつれ。又忠衡がはからひにて、義經の御臺所、姬君のいまだ四歲になり給へるを抱き、思ひ〳〵に姿をかへ深浦の邊に忍び おはせしが忠衡介抱し奉り、增尾十郎權頭兼房が一子、增尾三郞兼邑とて少年十六歲なりけるが、御臺、姬君の御先途を見屆け奉らむと高館の城を忍び出、泉三郎が方に隱れ住みしが、此度御供にぞまゐりける。其外秋田が郎徒、並に船頭、水主、梶取合三十餘人、六月廿九日の黎明に深浦の港を出帆せしが、折しも心に叶ふ追風なかりしかば、小泊といふ處に數日泊して順風を相待しに、松前船一艘此港に着岸しける。如何なる船やらむと思へば、秋田次郎尙勝が郎徒松前の者を從へ、蝦夷の白紙鼻より來りし船なり。忠衡主從、御臺をはじめみな〳〵大に悅び、

松前に於ける義經

急き郎徒に遇ひて様子を聞クに、義經主從恙なく松前に着岸し、夫より今は端蝦夷白紙鼻さいふ處におはしける云々。」と見え、また「海存、尙勝歸二于日本一」といふくだりに、既に義經、上の國に凱陣し給ひければ、龜井、鈴木を始めとし伊勢三郎も假墨太今云龜田より來り、志夫舍理の勝軍を祝しける。常陸坊海存は義經に向て、其儀は是より御暇を給はるべし。いまだ、學業熟し申さず候へば駒形嶽に皈り、彼異人が敎しごとく仙道に入て再び神通を得ば、いよ〳〵君を守リ奉るべしと、諸大將にも懇にいとま乞をぞなしける。義經も、此度汝が來る功にあらずンば志夫舍理の大敵を討取ル事難からむと、いとゞ名殘を惜み給へども、元より留る氣色なければ御暇をたまはり、又々渡り來るべし、我も此嶋を從へなば巡り會ふべき折こそあらめと、日本渡海の船など下知し給ひければ秋田ノ次郎尙勝進み出て、某も君に從ひ奉り、君の武德を以て年來ノ仇敵丹呂印を討し事、日來の本望何事か是に如ん。然る上は一ト先本國に立皈り妻子にも遇ひ、重て再び此地に渡り、尙も兵粮運漕は某沙汰し申べしと義經に懇に暇乞し、常陸坊海存、並に松前の安呂由と共に同船し、上ノ國の海濱より本國へぞ出帆しける。係りし後は松前より上ノ國までの通路自由にして、蝦夷の人民太平をぞ謠ひける云々、と見えたり。按ルに、上ノ國に太平山あり、また天ノ河といふ滯川あり、それを今マ浦人天河(てんが)太平といふはいにしへの諺にや。しかして上の國にて嶋麿君誕生あり、また秋田ノ次郎尙勝一とせまり本國に在りて、こたびは妻もろとも松前へ渡り

義經渡唐せるか

平泉の寺社堂

金鷄山

ぬ。其物語に云、「秋田次郎尙勝は、常陸坊海存と共に過にし六月の末に松前を出帆し、海上難なく日本の地へ着ければ常陸坊と別々になり、商人の姿に身をやつし本國秋田に歸りしが、頃は日本建久二年鎌倉の武威盛にして、過にし文治五年八月には、奥州に賴朝自ヲ軍兵をひいて御館を攻め給ふ。厚加志山眞澄按、重栅山にして、柏木などいと〳〵茂きを厚しといふ。此地靑葉山の近きに在りに合戰あり、終に御館ノ泰衡は家人河田ノ次が爲に討れ給ふ。奥州も鎌倉殿の有となりし事を聞キ涙を流しける。されど本國秋田は靜にして渡海も自由なりければ、密に兵粮の爲米穀を積て蝦夷に送り、又蝦夷の産物云々など本國へ積のぼせ交易日頃に十倍云々なンど見え、また奥蝦夷未曾久は蒙古と合戰度々に及びしが、程なく義經諸軍勢を催し、前後八年の間に未曾久の亂を靜め蝦夷を一統し、太平の政行れける云々。秋田次郎尙勝も後は松前にいたり住み、義經も後に未曾久に住み給ひ末はもろこしに至り給ひし事とおもはれたり。さりけれど御家人身方、みな命をまたくし蝦夷國を治めたまひし。うべも、平家の入水せし人々の末今も處々に在るを見て、その世ぞしのばれたる。」此平泉の金堂、講堂、法華堂、南大門、大阿彌陀堂、小阿彌陀堂、慈覺大師堂、無量光院、白山社、日吉社、祇園社、天神ノ社、熊野十二所ノ社、金峯山、鏡山、隆藏寺、伊豆權現ノ社、護摩堂なンどかぞふるいとまなき其甍々も、たゞ礎を見るのみ、いとゞその世ぞしのばれたり。また金雞山といふ山あり、そは淸衡の時世ならむか、黃金の鷄雌雄二翼

摩多羅神々事

を鑄させて、埋みおかれしよしをもて金鷄山とはいへり。こゝにうたふ「旭さす夕日耀く木の下に、漆千盃こがね億置。」といへるは、此金鷄山をさしていふといへれど、此歌はいにしへの童謠ならむか。出羽、陸奥に、いさゝかの違ひはあれど處々に在り。かゝるふる所、かなたこなたと見ありき千葉氏の家にいたり、日のくら〳〵になりて宿を出る。此あたりの事は吾妻鑑にみなしるし給へど、つばらかにえしも聞えず。しかして摩陀羅神ノ御堂に入りぬ。寶冠ノ阿彌陀佛ませり、此みほとけの後裡の方に此御神を秘齋奉レり。摩多羅神は比叡ノ山にも座り、まことは天台の金比羅ノ權現の御事をまをし、また素戔烏尊ともまをし奉る也。また太秦の牛祭とて王の鼻の假面をかゝふり、たかうなごをいなたき牛に乘り、手火炬うちふりて摩吒羅神の御前をはしる。また弘法大師の祭文あり、此事都名所圖會につばらか也。やをら神祭はしまれり。まづ篠掛衣着たる優婆塞出て、「八雲たつ出雲八重垣つまごめにやへかきつくるその八重垣を。」と太皷百々うち鳴して謠ひ、また「千代の神樂を奉る」とうたひ、寶螺吹たて神供くさ〳〵そなへ奉りて、隆藏寺の法印紅色の鬱多羅僧に、みなすいさうの念珠をつまぐり、濱床の上に座あまたの衆徒居ならびて、優婆塞は入りぬ。御誦經の聲尊く常行三昧といふ事をおこなひ、梵唄なンごもうたひはつれば、阿彌陀經を誦つゝ立て神の御前をおしめぐり、また柳の牛王といふものを長き竹のうれに夾て、さゝげ

もてめぐれり。此事終れば、れいの優婆塞出キて法螺を吹キ太鼓うてば、もろ〳〵の神供をおろし、圓居しける衆徒の前に居るをいなだき、神酒たうばりなンどやゝ此直會はてて、衆徒ひとりすゝみ立てこわづくりして、「上所、下所、一和尙、二和尙、三和尙、其次々の下立新入まで穀部屋へ入給と申。」と、いと長やかによばふ。是を喚立と云ひて中老の役也。御佛の脇方より、承仕とて衆徒一ト人リ出て、「上所、下所、一和尙、二和尙、三和尙、そのつぎ〳〵のげりふ、しむにふまで、こくべやへいらひたへと申ス。」と、いらふを聞て、こゝら群れ集る祭見の中より、「瓠鎗で突といふが痛い痒いと申スな。」と小ごゑに眞似すれば、大ごゑにて、とよめき笑ふ事久し。やをら田樂はしまりぬ。高足、腰鼓なンどせしとは姿かはりて、此處に舞ふ田樂の小法師等は、胡桃木の膜皮もて編たる大笠の、軒に垂とりかけたるをかゝふりて、山吹色の袖テ廣ロ衣に袴着て、桶の蓋の如なるいと〳〵薄き太鼓を胸にかゝへて、此三人が舞ふ。こは檣に登り飛び〳〵躍て、今見る、燒豆腐さませし曲はせざりけり。烏帽子にしでとり掛たるが出たり、是をしてでんといふ。物の上手をもはら仕手といふは師手也、能なンどに師手、脇あり。盛衰記に、知康はくきやうのしてでいの上手にて、つゞみの判官と異名によびけりと見えたるも、師手弟の義なるにやといへり。小鼓、銅鈸子、笛、編竹に、はやしたて、めぐり〳〵て踊りはつれば、あまたの衆徒太鼓うちて、「そよや、みゆ、ぜんせん、せ

かすむこまがた

「老嫗舞」

「坂東舞」

んが、さんざら、くんずる、ろをや、しもぞろや、やらすは、そんぞろゝに、とうりのみやこから、こゝろなんど、つゞくよな。」とうたふ。是を唐拍子とて、えしもそれとは聞キわくまじかりき事ども也。此からほうし終れは、しで掛ヶ烏帽子ひきれたる、わかほふし、ひとり〳〵踊りぬ。里人是を「兎飛」といふ。此曲はつれば黒き假面かけて、うらわかき衆徒出て、あらぬふりして、うち戯れて入ぬ。そのさま能の狂言のごとく、間にかゝる戯をのみなし、また三冬の冠とて、笏のごときものを三ところに立たるそのさま、熱田ノ社の正月ノ十一日のべろ〳〵祭に、兆鼓ふる神人の冠のごときかうふりをいたゞき、白衣清げに着なし、王ノ鼻の面をかゝふりて、左ンの袖に水精の數珠掛け鳩ノ杖を銜て、右キに白幣を持、桑の弓、蓬の箭をおひて祝詞立ながらとなふ、ひめたる事とてつゆも聞えす。また、れいの小法師あまた出て鈴うちふりて、たはぶれ唄うたひ、さわめかしてはせ入りぬ。老女の面をかけてきぬかづき、神の御前に蹲りてくしけづるまねをし、神を拜禮、たちよろぼひたふれ、ぼけ〳〵しきさましける、是を「老嫗舞」といふ。うばまひ入ればまた若小法師、産婦まねしてたはぶる。しかして若女の濕顔ノ假面に、水干にみだれあしの画ぬひたるに精好の袴着て、鈴と扇とをもて舞ふ、是を「坂東舞」といへり。また禰宜とて布衣、烏帽子にて二尺まりの竹の尖にわらをわがねむすびつけて、是を持て此舞ふ前に踞る。坂東舞をへて法師の顔に附髮ゆ

ひて、わがともは、ものしらぬものなれど、あまたの人を笑はせて來べしと樂屋よりたのまれて出たり。人のわらへば我が役はすむ也、いざ笑ひてよといへば、人みな大ごゑをあげてわらひとよめけば、さらば、よしや世中とて入りぬ。小法師二人、兒裝束に扇をさしかざしてこゑたかく、「王母がむかしの花の友、桃花の酒をやゝすらむ、さうまん是を傳へて、今が我に至るまで、榮花の袖をひる返す。」と、返し／＼うたひて入ぬ。またはぶれ事はじまり、出來／＼唄うたはんにといへど、とみにもいでこざりければ、やよ／＼と呼べどさらに人ひとりもいてねば、おのれひとり唄うたひてはせ入ぬ。かくて京殿といふが出ぬ。「吾は都堀川の邊りに住む左少辨富任とはわが事也、たいしやうきんしう二代（堀河院鳥羽院）の勅願でんかのめい、くいやうのしやうちなり、青龍、白馬（青龍寺白馬寺）の舊法をつたへて、」と、いとながやかにとなへて、「いかに有吉やさふらふらむ、小人衆徒の前にて、らんぶの一トさしも、げさむ入よ、なうありよし。」（有吉詞）「ほふ、ひえのやまは三千坊、坂本は六ヶ所、大津の浦は七浦八浦九浦十浦、粟田口、かぢむろ、つちうてば、てへ／＼こはいかに。」と、太皷の小撥の如なるものを左右の手に持て舞ふ。「みやこをいでて街道はる／＼と、日數經て、あづまの旅にも成りぬれば、京をしのぶのすりごろも、松山越えて衣河、その（御前）ごむせむこそ戀しけれ。いかに、あれに見ゆるはありよしか、はつと申たれば、口の小き小銚子にて、淸たる濁酒を給ふ、此ごんせん

かすむこまがた

延年の詠曲

「女郎花」

「姨捨山」

こそ戀しけれ。十二一重のきぬのつまをとり、立出させ給ふ御すかた、げにもらうたげなる風情して、一首はかうぞあそばされける。「朗る夜の月にあやめは見えにけるひく袖あらばともになびかむ。」「この有吉は、つきほろけたる、うす檜皮のをのこにてはさふらへども、やがて歌の御返事を申ス、これ咳病こゝちにて、」とて、かの小撥の如ものもて己が黒半假面の鼻うちおさへて、鼻聲になりて、「わがとのゝ東くだりのよな〳〵に御前ありよし月をながめむ。」「いざせんな、あらおもしろや。」有吉は富任の從者なり、富任扇の本末をとりて、「しら玉椿八千代經てん。」とうたひ舞ば、有吉も舞ふ。又「氷解たる」と富任がうたへば有吉聲おかしう、「氷とけたるゥ」と、烏帽子をうちふり打ふりもて舞ひ、富任、有吉も入れば、また戯るゝわかほふし、ゑひごゑに歌うたふ。やをら、たばふれほうしの入れば「延年」といふ詠曲あり、そは「をみなへし」、「姨捨山」、「とゞめ鳥」、「そとわ小町」也。二年に、この中の四曲を舞ふ式也。此度は女郎花、姨捨山を舞ふ也。をみなへしを舞ふ。「是はもろこしのごかんのめいていの御代に、かぶむと申ス老人にてさふらふ也。」と老翁、老媼兩人出て、己がむすめの死し事をなげき、塚にをみなへし、おしこぐさの生たるを記念の色と見つゝ、涙に袖をぬらしたるさま也。また「姨捨山」を舞ふ。いと〳〵恐ろしく、むくつけき男の假面かけ、髮ひげわゝけたるが出ぬ。またおなじさまに女の假面に、髮は、おどろと亂レたる狂女

の姿して出たり。その女の詞に、「旅の人に、ものとひまゐらせたくさふらふ。」男いらへて「いかにさふらふぞ。」女「原部山にかゝりて善光寺へは、いづくをまゐりさふらふ。」男「あら多の人や、なにのもの見か、さふらふぞ。」女「あのわらはべなにを申ス。なに、あの男、ものぐるひの女こそ、幼少五ッのとし親におくれ、伯母に養育せられて人と成りさふらひしが、女がとかう憎むよて、八旬に餘る老母を腹部山へ捨置き、やかんの食となすによて、その怨靈にて、かやうにくるふなれ。」こは、男も女もものにくるふさま也。男「姨捨山とはさふらふらむ、おもひもよらぬはらべやまかな。」なンど、互にものあらがひして、やがて諏訪のみやにいたりしとうたひて、「おもしろき社檀につきてさふらふ、宮人をもまたばやとおもひさふらふ。」やをら宮奴も出來てくさ〴〵のものかたりをして、宮奴、神をすゝしめ鈴ふれば、神鈴の音のおもしろからぬよと、ものぐるひの女うたひて、またうたふ。「秋の野に、すたく鈴虫、業平の小鷹狩り、みよりのたかの鈴ならば、それは神にもいやまさん。」と、うたひ〳〵て、はてぬ。さるがうなンども、かゝる俳優よりやはしまりけむかし。御燈なンともなから消行ャ鷄もいくたびか鳴ぬ。戯れ小法師も衆徒も醉て謠曲うたひ、また順禮唄を聞つゝこゝをたちづるとき、鈴木常雄。

見るになほしのばれそする此寺のありしむかしのすがたはかりは。

とありしを聞て、

　夜もすから聞くも尊しこゑ〴〵にうたふも舞ふものりのためしを。

千葉氏の家に歸り來てしばしとてふしぬれば、ひましらみたり。

廿一日。人々、よべのこうじにやあらむ、いぎたなうひるになりて起づれば、手あらひものくふうちに坏とりいそぎぬれば、好キ人ははやさしむかひ、いなふねのいなにはあらで、最上川といふ白(おほさかづき)を擧ル(あぐ)もあり。錀(きすなべ)のいと〴〵大なるをもてつぎめぐれば、ゑひにゑひて、御(ご)殿(でむ)、隼(はやぶさ)、三ケ(みか)の瀬(せ)とつぎ給へなンど、なほ最上河のあらせの波を酒に譬(なずらへ)て濁(にご)レる酒を飲(のむ)へくあらんなンと、下戸の並居(ゐならぶ)を見て、賢しきものいふよりはとて、ひたのみにのみぬ。床の上に鳥足の文字かゝりたるはなにならんと見れば、「心靜酌春酒」といへることなり。あなおもしろし、をりにあへり。是を題とあれば、

　山まゆもゑめるはかりの長閑さにむかふもあかぬ春のさかつき。

また常雄。

　たのしさよこゝろのとけき春の日にあかてぞめくる千代の盃。

村上良道。

　春風の吹もしつけき此屋戸にあかてぞくまんちよのさかづき。

酒の香は何々

花の內は雪ふる

かくて長き日もくれたり。

廿二日。人々出たゝむといへば空くもりたり。雪ならむとて、けふも、あるじめくなり。なによけむとて鮭の散子、鮭ノ鮓、くろがら、あか魚とり、なべて海遠き山郷はこゝろにまかせじ、此氷頭膾にて一ツまゐらせたくといへばまた飲て、價なき寶といふとも、このひと杯のにごれる酒にはなッど、はやうた唄ふこゝちにゑひぬ。常雄、顔はあしたより夕日のてれるがことにて、

をりにふれて思ひそ出むもろともに今をむかしの餘所にしのばゝ。

とあるのを見て、その筆をかりて、その紙のはしに、

おもひ出て袖やぬらさむもろともにいまをむかしの餘所にしのびて。

けふも、ひねもす酒宴のみにてくれたり。

廿三日。天氣よければ出たつ人々をこゝに別れて、我ひとり止りて、此あたりのふるきところ〳〵見てむといへば、なほ、いつまでもありてなッど懇にいへり。

廿四日。廿五日。雪ふれゝば出たゝず。あるじの翁ノいへらく、いつも花の內は雪のふれるもの也といへり。十五日の削花、また皮木の稗穗、削木の粟穗、また麻からなッどを庭の雪に正月盡まで餝立れば、しか、花のうちとはいへるなり。

達谷村山王窟

田村將軍舊蹟

正月二日の火祭

姫待が瀧

九葉の楓

廿六日。空晴て長閑也。けふなむ達谷村にいたりて山王の窟見んとて、千葉某あないして深雪ふみしだき、かついたりぬ。いと〳〵高き窟の内に堂を作り掛たり。よこたふ梯はる〳〵と登れは內間ひろげ也、眞鏡山西光寺とて坂上ノ將軍田村麿の建立にて、百八體の毘沙門天を安置、鞍馬寺を摹したる處といへり。そのいにしへ赤頭、達谷なンどいふもの此窟に籠るを、此君うち平給ひしといふ。大なる圓相の裡にさゝやかなる田村將軍ノ靈像をすゑまつる、そが右の方には、もろこしの軍扇をもたまへり。正月二日の夜は手火炬を投合ふ祭あれば、板鋪、柱みな燋たり。此むつきの二日の火祭を追儺といふ、そのため、しか、ところ〳〵むかしより焦たりといへり。百體八軀の毘沙門天王も、としふりこぼれて、今、はつかばかり殘れるをすりして十體はかりたてる也。蛇齒、鬼ノ牙などの寶物あり、中尊寺に見しものにひとしかりき。梯子下來ぬ。五尺ばかり高く、鼻垂大佛とて岩面に刻たり、こは源義家將軍弓の上彇もて彫給ふよし、某佛の頭にやといへり。姫待か瀧といふあり、また、かづら石といふあり。此瀧のもとに達谷麿身を潜て、女の來るを捕りて蔓もてつなぎ、この岩に縛おきたるよし。また、葉室中納言某ノ卿の御娘をも捕りしものかたりあり。此處に九葉の楓とて尖九ッありて、秋はことにやよけむ楓樹ありとて、やゝ日影に解わたる雪かき分て朽葉拾ふ。また崩山といひ五郎櫃森ともいふ山あり、いかなるよしの名なるにや、

三河に文を賴む

又も年越し

松林に竹森

異なる正月の慣例

知るてふ人もなし。五串の瀧なンど見べき處いと〳〵多かれど、雪消なばふたゝびとて千葉の家に歸る。

廿七日。毛越寺のふる蹟見なんとて田の畔づたひして、礎の跡なンどにいにしへをしのぶ。

廿八日。毛越寺の衆徒某二人、日吉ノ山に登り戒檀ふみにとて旅立ければ、此法師たちに、故鄕に書たのむとて、

ふる里を夢にしのぶのすり衣おもひみだれて見ぬ夜半ぞなき。

と、そのふみにかき入れたり。

廿九日。けふもとし越なりとて家々の門餝り、窓てふ窓のあるごとに、あらたに、しりくへ繩ひきはえ、しでかけて、とし忌せり。此月は小にて、けふ正月は極る也。

二月朔日。けふは松の林に竹の森とて栗の樹の鬼打立て、正月の門松竹莊飾にひとし。こと郡にては厄年の人あれば歲直入とて祝ひして、むつきのことたつごとにすれど、此磐井ノ郡はおしなめてしかり。何事も膽澤ノ郡とはことにして、としの始めの門松も栗の木を庭中に立て、つま木をあまたとり束ね置て、竹のうれに餅さしはさみて、田ノ神、星祭の守札なンどおしたる下にさし、十五日には臼、杵、鉏、鍬にも竹はさみ餅をさしそなへ、十八日まで十五日の小豆粥を喰ひ、此日、稻の穗のたなごばらみにはらめる形に太箸を作りて、その稻姙身

火棚の火埃を消す呪

年繩ひきの祝

琵琶法師來る

箸にて十八日粥を咋ひをへて、太箸を十文字に級皮にて縛て、ほたき屋の梁を投越して、その箸を屋根裡に打立る例なり。また此郷の近隣ノ里なる山ノ目といふ處には、門松も根こしたるわか松をたて、その枝に正木の蔓をうちからまき餝るといへば、

君が代はまさ木のかづら長かれと千歳を松の枝にかくらむ。

二日。厄年祝に行かふ人とら道もさりあへず、雪もたひらになりぬ。上中下みなうちあげしゐろりのもとには、若男ともあまた酒のみうたふに、たきたつる榾の火欿たか〳〵ともえて、火の散、火棚の煤に付てければ、鼻すれ〳〵とて指もて、みな、おのが鼻をすりにすりぬ。しかすれば、火棚てふもの丶煤に、火埃の付たるを鎮る咒なりといふ。うべならん火消ぬ。

三日。よべよりいたくふりぬ。今朝は若水汲はてなりとて、此大雪ふみ分てくみもて來けり。やをら年繩とりをさめて、けふは注連繩ひきの祝言とて小豆粥食ひ酒飲て、ひねもすうちあげあそぶ。四日、五日は風吹つれど、

六日。あしたは春雨めきて、夕月ほの霞て出ぬ。琵琶法師來りぬ。是も慶長のむかしより三線にうつりて、猫の皮も紙張の撥面ニ化りたるが多し。曾我、八嶋、尼公物語、湯殿山ノ本事、あるは千代ほうこといふ女の戯ものかたりなゝどの淨瑠璃をかたれり。こたひは「むか

勅使清水

頼朝下賜の品々

秀衡鎌倉へかたみ

德岡村歸著

し曾我」也と聲はり上て、「ちゝぶ山おろす嵐のはげしくて、此身ちりなばはゝいかゝせん。」と、語り〳〵て月も入りぬ。明なばとく出たゝむとて枕とれば、ひましらみたり。

七日。ふたゝびといひて千葉の家を出たり。高館の猫間が淵のふる蹟、梵字が池のあせたる跡、中尊寺になりぬ。此あたりに勅使清水といふあり、いにしへ按察使中納言顯隆卿こゝにくだりおはして、此水めし給ひしといふ。文治のいくさに燒殘りたる庫の内に、牛黄、犀角、象牙の笛、水牛ノ角、紺瑠璃ノ笏、黄金ノ沓、玉幡、黄金華鬘以玉餝之、蜀江錦、ぬひめなき帷、こがねの鶴、しろかねの燈籠、南廷鉑、なほくさ〳〵の物ぞ多かりける。そを右大將頼朝公わかちて、葛西ノ三郎清重、小栗ノ十郎重成なンどいふ人とらに此寶器どもを給はりし事は、東鑑をはじめ書ごとに見えたり。そを見て御館の榮えたりし世ぞしのばれたる。また奥州征伐記二ノ巻に、「文治三年云々、秀衡が病氣の様子を尋ね給ふに、顏色老おとろへ最期近く相見えたれば、もはや相果申つらむと言上しける處に、奥州より秀衡が使者として、由利ノ八郎惟平鎌倉に來る。鷲ノ羽千尻、矢根、駿馬三十匹、金作ノ太刀三振、砂金等進上す。これは秀衡がかたみのこゝろ也云々。」と見えたり。なほその篤厚事をおもふべし。かくて衣川の土橋をわたりて、やがて前澤の驛に出て、靈桃寺の長老かねてねもごろにものし聞えたまへば、しばし物語して上ハ野の德岡にいたりて村上が家にやどる。

病神避の祭

木の股さき蛙の目隠し

童の春遊び

高館もつけ

八日。けふは疫癘ノ神のあまくだります日とて、是避る祭りとて粢餅をつくりて、しる小豆にかいませ、そを烹て神に奉り、人みな喰ふめり。荒神祭りのよしにや、また吉田の疫神齋、津嶋の御葦流の如に鎮疫齋なンどおこなへる神事ありけるか。この九日、十日、十一日、十二日、十三日、十四日と日をふる雪に、たゞ埋火のもとさらずふみ見つゝをれば、人の訪ひ來て、二月の木の股さき、三月の蛙の目がくしとて零り、雪のはては涅槃なりといひ諺しさふらふ也なンど語りぬ。

十四日。けふは空晴て長閑なれば、雪ふみならし、わらまきちらし、莚しきて童あまた群れ集りて、笛吹、太皷、錢太皷、調拍子にはやして鹿舞の眞似をし、また田殖踊のまねして遊び、また箱の蓋を頭に戴て念佛舞のさまをし、また劒舞てふ事せり。けむばひは、けむまひを訛りていへる也。此劒舞てふものは、いか目の假面をかけ袴着、繦して髮ふりみだし、軍扇を持、また太刀はき、つるぎをぬきて舞ふ。此劒儛を高館物化ともいふ也。そはいにしへ、高館落城の後さま／＼の亡靈あらはれし中に、さる恐しきものゝあらはれしかば、そのあらふる亡魂をとふらひなごしめんとて、物化の姿に身を飾りなして念佛をうたひて、盂蘭盆會ごとに舞つる也。品こそかはれ、遠江ノ國の戈が谷の念佛盆供養にひとし。それを、男童の春遊びにせしもあやしかりき。

あまた杵

昔々かたれ

琵琶と磨碓の昔語

十五日。けふは佛の別れなりといひて、寺々にまゐる人いと多し。七八日もことなければ、きのふまで日記もせざる也。

廿一日。けふは時正也。近隣の翁の訪來て、都は花の眞盛ならむ、一とせ京都の春にあひて、嵐の山の花をきのふけふ見し事あり、何事も花のみやこ也とて去ぬ。數多杵てふものして餅搗さわめきわたりぬ、けふも祝ふ事あり。日暮れば某都某都とて兩人相やどりせし盲瞽法師、三絃あなぐりいでてひきたつれば、童ともさし出て、淨瑠璃なぢよにすべい、それやめて、むかし〳〵語れといへば、何むかしがよからむといふに、いろりのはしに在りて家室のいふ、琵琶に磨碓でも語らねか。さらば語り申さふ、聞たまへや。「むかし〳〵、どつとむかしの大むかし、ある家に美人ひとり娘が有たとさ。そのうつくしき女ほしさに、琵琶法師此家に泊りて其母にいふやう、わが家には大牛の臥ほど黄金持たり。その娘をわれにたうべ、一生の榮花見せんといへば母の云やう、さあらば、やよ、おもしろく琵琶ひき、八島にてもあくたまにても、よもすがらかたり給へ。明なば、むすめに米おはせて法師にまゐらせんといふを聞て、いとよき事とよろこび、夜ひと夜いもねで、四緒もきれ撥面もさけよと語り明て、いざ娘を給へ、つれ行むといふ。先ものまゐれ、娘に髮結せ化莊させんとて、磨碓をこもづゝみとして負せ、琵琶法師の手を引かせて大橋を渡る。娘は、あまり負たる俵の重く

うざれはかん　とつぴんばらり　荷鞍にて旅立つあとふき

さふらふ也、しばらく休らはせ給へとて休らひていふやう、いかにわがおやのさだめ給ふとも、目もなき人の妻となり、世にながらへて、うざねはかん（うきめ見んといへる事也）よりは今死なんとて、負ひ來つる臺磨碓をほかしこめば、淵の音高う聞えたり。女は岩蔭にかくれて息もつかずして居たり。かの琵琶法師ひとりごとして云やう、あはれ夫婦とならむよき女也と聞て、からうじて貰ひ來りしものをとて、聲をあげてよゝとなき、われもともにと、その大淵に飛込て身はふちに沈み、琵琶と磨臼はうき流て、しがらみにかゝりたり。それをもて琵琶と磨臼の諺ありs。とつひんはらり。」と語りぬ。

廿二日。六日入にいたる。明なば、あるじ常雄、仙臺にとみなる事とてたびだち、畠中ノ忠雄がりとひ、松島にも行かまくなッごかたりぬ。うまのはなむけとて人々酒飮む。

言の葉の色をりそへてひろはなむまがきが嶋の梅の花貝。

花の波こゆてふころもきさらぎの末の松山たのしからまし。

と書てあるじに贈る。また行道といふ人もぐして行ければ此行道にも、

言の葉も今ひとしほの色そはむ歸さのつとをまつしまのうら。

かくてくれたり。

廿三日。つとめて常雄、こまの荷鞍の旅よそひして、行道をいざなひて行ぬ。旅立の跡壽と

狢の怪異

てまた盃とりぬ。此人々の語るを聞ヶば、此ほど白鳥村にて狢の仕態にや、家のうちとに錢を雨のごとくふらせ、さま〳〵あやしきことあり。また母體の觀音堂の、うゝと呻吟音し、また鳴動せり、これも狢のなす事にやなンどあやしみてかたりぬ。そは、いにしへもさる事あり、文德天皇實錄の中に、天安元年のころ六月六日、參河ノ國の廳院のひんがしの庫振リ動シ事見えたり。

極樂寺何處

またそのおなじとし、在二陸奥一極樂寺預二定額一充燈分並修理料稻千束墾田十町云々と見えたり、その寺、極樂寺はいづこならむかし。けふもくれたり。

兎と田螺のかけ歌

廿四日。けふ村上良知のもとに行とて、童にみちあないさせて、かたらひつゝ行に、此ころふりし春雨とともに去年の眞雪も消えて、道のぬかりて、ありきつらしとて芝生に腰うちかけて休らふに、兎ひとつ飛出てはせ行を見て童の云ク、むかし田螺が歌をかけたり、「旭さすこうかの山の柴かぢり耳がながくてをかしかりけり。」と、よみたれば兎、「やぶしたのちり〳〵河のこみかぶりしりがよぢれてをかしかりけり。」と、返歌せしなどかたりもて、午の貝吹くころ徳岡につきたり。

徳岡村にて

廿五日。あしたより空うら〳〵と長閑なるに、鶯のこゑたに聞ぬなンど、うたものがたりのふみどもくり返し見つゝ、そが中に、「ふる里に行人あらばことつてむけふうぐひすのはつ音きゝつと。」源兼澄卿のよみ給ひしは、正月ノ二日逢坂にてと聞え給ひしをなンど語りつゝ

鶯のはつ音も花もにほはぬに春はなかはも過んとすらむ。

けふはなめて、菅神に手酬奉らむ梅さへ咲かてをろかみ奉る也。三四日、ことなければ日記もかゝす暮たり。

三十日。忠功寺なる玄指といふ僧去年の霜月身まかれり、けふなんその百日齋忌とて法のわざあるに、

遠さかる日數もも〻の花かづらかけてやよひの空に手向む。

良道の歌に、

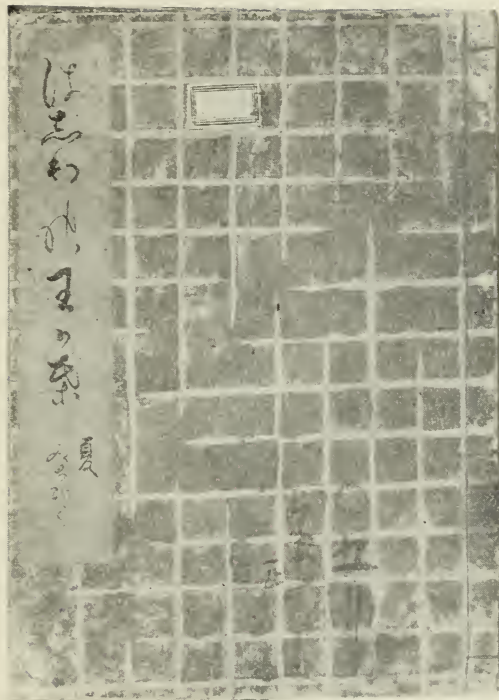
冬がれの梢の霜とかれし身もつるのはやしの花やしのはむ。

きさらきもけふにはつれば、

おすのやよひは、ことふみにしるす。

僧玄指百日忌

はしわのわか葉

夏

みちのく

はしわのわか葉はしがき

このひとまきは、卯月のつきたちごろ、みちのくの大原の里新山川のあたりにて初櫻を見、また鶴がね、龜がね、かまくら山なンどを見やり、あるは山吹ノ柵、大さぐら、檢斷櫻を見、中尊寺の田樂祭、また、さるがう、また、葉室中納言の處女を達谷麿がぬすみしものがたり、土御門泰邦卿のこゝろ葉の詠歌、時鳥の物話リまた配志和ノ式社、安日ノ社、また神星社のゆゑよし、また黑介といふ郷の百歳の老妖が物語、また石手堰ノ式社にまうでしなンど、水無月は小にしあれば、廿日まり九日といふ日、つゞき石とて座る石神ノ式社にまゐり、阿倍ノ比羅夫、蟲麿朝臣、黑麿朝臣のものがたりを聞キ、かくて河ノ邊に御祓せしまて、けふに書をへたり。こは、つたなきものから、いまだ行見ぬ人しあらば、その分ヶ見ん栞ともならむかと、こゝにしるしおきぬ。

天明八年戊申六月廿九日　　菅江眞澄

はしわのわか葉

四月一日東磐井郡大原にて

いにしやよひのころより花まちて此大原の里に在りて、卯月ノ朔ノ日、よべより雨のいやふりて、巳ひとつばかり晴たり。新山川とて溪河あり、また、砂金とるてふ濁川なンどみなとよみ流れて、それにかけわたせる橋どもはみな落流れたれば道遠くめぐりて、人行なやみ語らひ佇む。きのふまては見つる室根山の殘雪も、夜の間の雨にけちはてて今朝は見えず。はや初夏のはつ空ながら、はつ花櫻のはつかにも色なき梢ともを、ねたしとうち見やりて、

花の咲ころも經してぬぎかふるたもとは夏の名のみきぬらし。

紅梅咲盛る

けふは此里に肆市たちて、なにくれとものうりありくに、みちもさりあへず。群れわたる人の中におしまじりて是を見ありくに、並ならぶ家の切垣の内に、紅梅の、けふを盛りと咲たり。

あき人の花に馴れたるよき衣もおはぬものとて今朝はかふらし。

櫻咲き初む

二日。近隣の家の中垣のあなたに、櫻の一ト本ト生るが、きのふよりふりたる雨にうるひて、下枝のみ咲初たり。

めづらしなけふは卯月のはつざくら暮れにし春の色をこそ見れ。

近きあたりに行まくおもへど、けふは日ばしたなればやみぬ。

蟲除の呪ひ

三日。人にいざなはれて、此里に遠からぬ片山里にいたれば、軒近くやゝ萌出る麻苧の畠に、うすはなだ色なる麻衣着たる老の、枯尾花を束ね持て、それをひし〳〵とさしありく。そは某の料にかしかせりと問へば、こは、麻生に虫のゐざる咒也といらふ。

山賤が短き裙の麻衣をばなの波を分る涼しさ。

此畑中にさゝやかなる柴櫻の咲たり、そを一枝といへば、老の折てくれたり。ある家に入りてしばしとて休らひ、湯づけくひ肘を曲れば時鳥鳴ぬ。

めづらしな折りえてうれし初櫻聞えてうれしやまほとゝきす。

天幡を揚ぐ

四日。童あまた、此地に云ふ紙鳶と方言ものを、この紙老子の緣曳あひ、ひこしらふ。時ならぬ風巾やとおもへば、雄鹿の嶋なンどは七月十三日を始とし、秋田の久保田は極月の末を初めとし、三河ノ國ノ吉田は正月の末より始め五月の五日を止禁とし、五月五日を紙鳶節句といふ。うるまの國は、十月をはじといふよし琉球誌に見えたり。河岸に大櫻の咲たる根に

燕と雁と

此天幡てふものゝ糸を引むすび、すまひなゞしてうち戯れあそぶ。また櫻に燕の囀るもいまだに春の心地す。人々、花にうかれ酔ふしぬ。

うつばりのふるすわすれてつばくらめ夏と岩根の花に鳴なり。

ついたちごろの月あかく／＼とさし出て、花を照す影水の面にうつるなゞ、雁の鳴たり。ふりあふぎ見れば、ひとつら、ふたつら月に横たふさま、風情ことなり。

皈る雁雲の通路分くるとも霞まぬ月の空は迷はじ。

かくて、夕月にみちもたどらで大原に來る。

芳賀氏に在り

五日。芳賀慶明長左衛門といへる也が家に在れば、朝とく、けふ此花折て來しさて、朝露に身もそぼちて、物ならふ童の手毎のつとにせり。あるじ、此山づとをうちまもらひをりけるが、筆をとりて、

たが爲に咲のこりけむ櫻花露おくふかき山に隠れて。

と。見つゝおのれも、

淺香山なにあさからじこゝろざし色香もふかし花の家つと。

櫻眞盛り

こは花の眞盛りにあらめ、いざ花見ありかむ。樏子用意せよ、ふくべに酒つめよ、火繩わするなと云ひ捨て家を出て、鶴が嶺、龜が峯、鎌倉山なゞいふ高根／＼を遠方々にかぞへて、行

山吹が柵
伊達吉村公誕生地
長泉寺梅嶺

〳〵て八幡ノ神社あり。ぬさとり奉れば花あり、まだ、なから咲たる櫻もたちならびたり。

花の枝に卯月のいみをさしそへてまた春風のにほふ神垣。

慶明。

神垣に咲そふ花をみしめ繩かけて久しく神もみそなへ。

こゝに行キかしこにうつりありきて、永き日もくら〳〵に皈り來つれば小雨ふり出ぬ。六日。よむべの雨もなごりなう晴て、花かあらぬか、山のはごとにかゝる白雲いとふかし。松井といふ處におもしろき飛泉あり、けふはその瀧見なむ、いざたまへとあるじ芳賀慶明のいへれば、やをらこゝを出たち、うちかたらひゆけば山吹が柵といふあり。そが下ッかたに杉の一ト群ラ生ひたてる地あり。そこなむ、國ノ守吉村公誕生給ひたる御館の跡なるよしをいへり。其君そこにて、「よしや吹けとても散り行花ならば嵐のとがになしはてて見ん。」といふ秀歌なッども、こゝにおましましての事となもいへる。此歌は、しるしらぬ男女、野邊に草刈る童までも、花見ればずッじありきぬ。龜峯山長泉寺といふ寺あり。山門の左右の柱に、「嶺上松堤(マヽ)萬年青操、前溪水長千古流。」こは梅嶺禪師とて、あが父母の國、三河の寳飯郡新城といふ郷より産て此寺の住持たり、山門の聯も、梅嶺の筆蹟。また百十五代中御門院の御世享保元年丁ノ酉の秋、庭の菊を見て、「あさな〳〵おく露霜のきえやらでませに色そふ

斑鳩鳴く

松井の瀧

庭のしらきく。」とありしかば、此歌めでたしとて當今の御日記にとめられたるよし、都人のもはら物語にせしよし。そのころ在りし翁の口語(ものがたり)とて殘りぬ。

かめの峯尾上も長き泉寺うき世に引ぬ淸きながれ江。

とてイめば、櫻の枝ごとに斑鳩(いかるか)の、ひじりこきと鳴也。また紅衣着(あけべこきい)と方言(なくさいふ)ところあり。また信濃ノ諏方東間のあたりにては、此鳴(いかるか)の蓑笠着(みのかさきい)と囀(きやづれ)ば、かならず雨ふるといふ。ひじりこきとは、いづこにも鳴ぬ。「いかるがよ豆うましとはたれもさぞひじりこきとは何を鳴らん。」と著聞集にも見えたり。

花鳥の色音にあかて春よりもおもひ夏野の道ぞたのしき。

かの瀧のもとに來たる。水は岩にせがれて、三ッに分(わか)れて落瀧つ。巖のはざまに、いと古りたる松たてり。月出が比良といふ山の麓に寺あり、岩松山經藏寺といふ。此瀧のもとにありて、

岩かねの松のみどりも花の色もちらでぞかゝるきしのたきなみ。

慶明。

峯の松松井の水にうつろひてなみもみどりに落る瀧つせ。

芳賀氏、此月出山をもよみねといへれば、いらへて眞澄。

あきたらずこゝに暮なば山陰を月出やまちて又花も見む。

夕ぐれて皈りたり。

大原を立つ

七日。きのふまでは、ひむがし山、にし山、八瀬、大原の花の盛にこゝろひかれ、また江刺、膽澤の山々に咲出る花のしら雲も心にかゝりて、此ころ、花の情の淺からざりし芳賀慶明のやどを出たつ。あるじ、花ちらば、とく歸り來てましなンどありて、

夏衣うらなく語る言の葉もいひこそのこせ今朝の別れに。

返し。

いひ出ん言葉もさらに夏衣かさねてこゝにとはむとおもへど。

また清雄といふ人あり、此ぬしの句に、

今のやうにふたゝび風の薫れとや。

今しばとて、近き花のもとまで送りしける人々を別るとて、

みちのべの櫻よ花のことの葉よ花にわかるゝ旅そものうき。

鹿おどし

かくて行〱田の畔の路をたどる。馬の毛を、しのゝ長串にさしてやきくろめ、又、わらを束ね切りやいて是も串につらぬきて、田のあぜごとにさしたり。そは鹿おどしといふ。古歌に、「あすよりはやきしめ小山田（マヽ）のわかわさのねを鹿もこそはめ。」是、燒標にこそあン

猿澤に來て

觀福寺脇の觀音堂

牛行坂の絲巻石

なれ。櫻鳥といふが、いたく花に群れて遊ぶを、

むら鳥の羽風にちらん花の枝もやきしめはえよ小田のますら男。

葉山權現とまをす神ます其山の麓に、櫻の多かるを見つゝし行くとて、

匂はすは花ともえこそ白雲の夏のはやまにかゝるとや見む。

澁民といふ處を經て猿澤といふ村に來れば、ある、ふせるがごとき軒近う、花のいと〱おもしろう咲たり。こを見まくほりして、あなこうじたり、道遠き國の旅人也、しばしは休らはせてよといへば、よき事、休らひてといへれば、いとうれしく、

つかれしをかごとになしてとひぞよるしらぬあるしの花を見んとて。

此邑を出れば、路のかたはらに觀福寺といふさゝやかの寺あり。其寺の傍に高き岩とも群れ立る處あり、それに虹のごとき橋を掛て觀音を安置る。其堂の前に至れば、こゝらの岩の面々に阿羅漢尊者、また佛菩薩の名號を彫し、また古歌、詩もゑりたり。また西行法師なンど、むかし今の世人をもゑりたり。いかなるよしにかと問へば、唯うち戯れてせし事といへれど、もともあやしきもの也。苺むして見えねど、苔をはだくれば、苔の下に、あらゆる人の面像出るといへり。昔よりせし事と見えたり。牛行坂といふあり、此地は榛生ノ莊にして萩生坂なるを、人みな訛りて、もはら蓁生坂とはいふとなん。此坂の邊りに骨石、またの名

田河津の紙

横澤の鐘乳洞

河鹿さかぶ

を縲卷キ石とて、筆の管の太にて二三寸、あるは四五寸ばかりにて、そのさま、糸なんど引纒ひたる紡車の繆管のごとし。そを掘り得れど全はまれ也、もとも奇品石といへり。此あたりは東山田河津とて紙漉産、みなその業ある家ども也。誹諧ノ祖、ばせをの翁の「おくの細道」なんどいへる日記は、此東山より漉づる紙を四ッ折りとしてかゝれけるものにして、今はこを刻册としつれど、そを、いにしへさまに作れり。翁も、みちのく紙といふ名にめでてかゝれたるものならむかし。見渡す峯の雲、麓の雲はみな櫻也。村々の垣根は山吹の色に埋れ夕日かげろふなんど、又たぐひなきおもしろさ、また横澤といふ處にいと／＼大なる窟あり、そを籠山といへり。内、間廣て、石鐘乳といふもののところ／＼に掛たり。遠く桃の咲殘りたるなんど、見ぬもろこしの、桃源の画みしにひとし。こは春も見し處也。此夕爲信の家に泊る。

八日。つとめて、里の童を道あないとして、きのふの路をいさゝか分て、大金といふ處の岨に、櫻の二三本たてるが朝風に吹さそふをうち見やり佇めは、童の小河に臨てものうかがふさま、何ならむとおもへば石斑魚の鳴なり。水におりたち、ころ／＼といふ聲をしるべにすくひ上たり。此石ふしは秋に鳴くものならずやといへば、をりとして時もさだめず鳴もの也と方言り。なを此花を見やりて、

正法寺参詣

黒石寺藥師堂

正月祭事の奇習

汝れも又をしみやすらむ櫻ちる山した水にかじか鳴也。

童をさき立て拈花山正法禪寺にまうづ。此寺の署扁は光明皇后の眞翰也、吾國の鳳來寺の額にひとし。けふは釋迦佛誕生し日とて、れいの花葺るさゝやかの堂の内に、あめつちをさして香水盤の中にたてり。大衆居ならびて、一日經ならんか、また、なきたまの名にや、いと細き率堵婆に書れば、この灌佛會にまゐりたるあまたの人ども、手毎にうけさゝげて皈る。いにしへ此寺は法相三論宗なとにや、いと〳〵ふるき精舍也。今曹洞にうつりて、南朝の頃、開山禪師の高弟無等良雄和尚は萬里小路藤房ノ卿なるよし、其世は世にひめて語りしといへり。此寺の庭に、源頼朝公實種し給ひし樹とてあり。また大なる梅ノ樹あり、さるよしをもて大梅拈花山ともいへり。此寺の邊に石灰木石あり、石麪あり、また黒蠟石といふもの多し。黒蠟石あるをもて此あたりを黒石ノ莊とよべり。また山内といふ處に出たり、妙見山黒石寺とて修驗寺あり。もと太上神仙を齋りし寺にて、大同元年二月斐陀の番匠が集りて一夜の間に建し堂とて、いとふりし堂あり。とみなる事とて板など敷もわたさす、殘はぬ處あり。正月八日の神祭は祇園の削掛、尾張の天道ノ社の祭の如、夕ぐるゝより小夜中まで誰れとなう互に罵詈、根もなきあた事に枝葉付て、まが〳〵しう詈てうち笑ひ、堂をうち叩き火をたきたつれば、さばかり積りし大雪も、きさらぎ、やよひのごとく、みなけちはつ

る音せりといふ。鷄の初こゑたつころ、其長三四尺斗リの級栲の二重布の長袋の內に、蘇民將來の神符を三四寸斗の木に書て、そを千札まりも入レて、袋には蠟を流し油をぬりて神武神仙の御前に備へ、山臥梭尾螺、經よみ、いのり加持してその長袋を群集の中カへ投ゲやれば、左右に方分ケて素裸に出たち、犢鼻褌もつけず、その袋をわが方へ取らむ、此方へ奪ひてむと上へを下へ捻あひ、ひこしらふ。かゝるあらそひに、むかし犢鼻褌の前垂を、袋の端に持からみて力まかせに捻合ひ、曳に引ほどに陰嚢破れて死たる人あれは、犢鼻褌てふものはゆめ〳〵身にまとはずとなむ。此蘇民將來の神符を掌得たる組には、その年田畠の能ク豐登といへり。夜しら〳〵となれば袋を摑破、また取り持て雪踏みしたきはせ出て、小河の氷ふみ破り飛入て、淵に身を潜レむとするを曳止めなンど、世にめづらしきあらがひ祭也。此妙見山黑石寺には、慈覺圓仁大師の作の藥師佛ノ佛形をひめおける寺也。野道しばしへて黑石ノ郷に出たり。路の傍に四阿めける小屋建て、その軒に貨錢二貫を長緡につらぬいて掛たるに、童、老人などの居て、ひるさへいみじう守りぬ。此錢あやまりて盜れたらん時は、母貨に子あまた添へて、これをもてその禍を贖ふ、つくなひ償也といへり。あないせし童は此里なれば、ものとらせて別たり。伊澤ノ郡に渡るに加美川の舟とくも出ず、暮てのりぬ。月おもしろくつきたり。六日入村にきて相知る鈴木常雄の家に入りて、

黑石の郷

北上川渡り
六日入村に

前澤を過ぐ

大櫻の村

衣川村

旅衣月と花とにかたしきて樂しき宿に又こよひねむ。

夜もすがら、あるじとともに語りぬ。

九日。けふの初午ノ祭見に中尊寺にいなんと、六日入リをたちて前澤驛に出て、靈桃寺に訪ひて寺の上人をいざなひ漆寺の前を過るに、朽たる櫻の蘖花咲たるを、

枯れし枝も花の恵をうるし寺となふ御法のしるしならまし。

うまやのはしなる大櫻見てむとていたる。大櫻ノ祉あり、不動尊を祭る、いと大なる一重の山櫻あり。此さくら、人たけ立ッところにてはかれば三丈四五尺めぐるといふ、信濃ノ國市田の大櫻には勝りぬべし。こは秀衡時代の花也といへり、此木あるをもて此村を大櫻とはいふ也。また遠田郡に大櫻あるてふ、そはいかならむ。

雪をつみ雲をあつめてひともとにかゝるさくらの花をこそ見れ。

衣川村に來る。世に衣といふ處多し、近江の志賀ノ郡も衣河あり、その外國々にも聞へたり。此處に檢斷櫻とて名あるさくらあり、秀衡の世に、檢斷の役するもの置れたる處也。またいにしへ、安倍ノ貞任の館ありし跡にて、義家公「ころものたてはほころびにけり。」と弓に箭をはぎ、むかひ給へば、「としを經て糸の亂れの古しさに」と貞任、矢つぎばやに返しまをしたりしなンど語らひ、やをら其處にいたれば、

辨慶、川上に流る

串挿る辨慶といふ

中尊寺の初午祭

衣川みきはの櫻きて見ればたもとにかゝる花の白浪。

此衣川も、今はむかしと大に流のさまかはりたりといふ。高館落城のとき武藏坊辨慶、衣河を渡らむとてわたりしが、をりしも洪水て、みなぎる波を分ヶわづらひ、うちものを杖につき中の瀨といふ處にしばし彳亍ほどに、きしべよりは矢ふすま作リて射かくる箭をひし〳〵と身に射たてられて、中ノ瀨にふし流れたり。きしに立たるうまいくさども是を見て、こと武者は流にしたがふ、いかに辨慶一人リ水上に流れ行事、見よ〳〵ふしぎさよと、寄手の兵等あきれたりといへり。そは、いにしへは衣川の末、北上川古名加美川也の上の方へ落たり、今は加美川の下に落ぬ。その洪水のとき、衣河も上川もひとつになりて大海のごとなれど、辨慶はつねに見なれし中の瀨にのぼりつれど、多くの軍に射立られて、衣川水筋にしたがひて衣川の下へ流レたるを、今の世かけて、辨慶は川上に流しとのみいひ傳へ、また、あぶり串さしつかね釣りおく卷藁てふものを、出羽、陸奥の方言に辨慶といふも、武藏坊が、箭を蓑のごとくおびたるさまを、まきわらに串さしたる姿に似たるよりいふとなん、里の翁の語りぬ。かくて中尊寺にいたれば、あるとある堂の戸みなおしひらきて、白山姫ノ神社の拜殿は、かねて、かゝる料に間廣げに作りなしたるに、白き幌をたれ、白き帽額引わたしたり。おひとつうまといひて白き神馬、獅子愛しとて、ぼうたん手ごとにもたる童子なにくれとねり渡りはつれ

法師の猿樂

古杉みちのく

薄墨櫻空し

義經堂

ば、白山ノ神の御前に幔うちまうけたる舞臺にのぼりて、さうぞきたつ田樂開口祝詞をはれば、若女ノ舞、老女ノ舞なンど、いと古風めかしきさま也。やをら衆徒集りて、さるがうはじまりぬ。法師の頭に宿髮てふものにして髮髻、墨衣の袖をぬぎかけ、あるは、まくりでにつゞみうち、笛吹囃しぬ。この田樂、をとめ舞、うば舞などに事かはりて今めかしけれど、舞へる裝束は國ノ守より寄附給ふものとて、めでたく奇麗をつくしたり。今朝より風たちしがいよゝ吹つのりて、あまた立ならび茂りあひたる大杉のうれもゆら／＼吹れ、枝葉の落散れば、人みなふりあふぎ空のみ見つゝ、頭にものおほひ、もの見る空もなく、法師の附髮も吹やられ、かなづる扇も風にしぶかれて、こゝろのまに／＼さしもやられず。いざ歸りなむと立騷ぐ上に、大なる杉の枯枝の落て頭うち、ぬかより血の流レたりなどなか／＼の騷き也。經堂、光堂の方へ迯ちる人もあり。また老媼杉とていと／＼大なる空樹あり、此木としふりて香馥はなはたしければ、國ノ守めして「みちのく」と銘給ひしといふ。その木も今は吹折レ、今はたふれなんなど、人みなをしみ語らふ。此中尊寺に、薄墨櫻とていとよき花のありしが、枯て今はなし。そを辨慶さくらといふ、むかし武藏房やうゑたりし花にや。中尊寺を出て義經堂にのぼりて人々ぬかづく。源九郎判官の由來はこと處にもしるし、また、清悦物語とはいさゝかことなれり。また、此君の事をつばらかに記したる義經蝦夷軍談といふいくさ

達谷の窟
櫻原

惡路王傳說

五串村

平泉野

の書には、泉三郎忠衡、また金剛別當秀綱、龜井、片岡をはじめ、御家人ひとりも殘りなくみな松前に渡り、秋田ノ治郎尙勝兵粮を運送、此人とら大に戰ひ蝦夷治りて、上ノ國といふ處にて、御臺所若君ひとところ誕生ありて、嶋麿君と申事なッど見えたり。人々を別れて、此平泉の相知りたる民家に泊る。

十日。けふもさるがう舞あり、こよひまた一夜なッごあれど、風なぎたれば、此あたりの花のちり殘るも見まほしく、また春のころ見し達谷ノ窟、櫻原といふ處は名さへおもしろければ、ふたゝびさて平泉を出たつ。むかし惡路王ひそかに都に登り、葉室ノ中納言某ノ卿の御娘ひとところおはしけるを盜みとりて、此窟に隱れ住けり。都人あまた尋ね來つれど、一とせ花の盛に飮に呑て醉ふしたるに、姬君櫻原を迯出て、人にいざなはれ都に皈り給ひしよしを云ひ傳ふ。また出羽ノ國雄勝ノ郡にも阿具呂王が窟あり。また此達谷が岩屋といふは達谷麿が栖家し窟ならむかし。五串村に來る、此村名は五十櫛のこゝろもこもり祓串のよしもあらんか、美麗てふ名にして山水淸く、飛泉のさま、たぐひなう儼然ければしかいへるにや。嚴美ノ神ませり。此神の神社とてはあらねど、瑞玉山の奥に舊き宮地の跡殘れり、今はそのあたりを水山邑の山王が窟といふ。此奥に平泉野といふ地あり、大日山中尊寺の趾、高林山法福寺の蹟、栗駒山法範寺の跡、尼寺の趾、圓位法師の庵の趾あり、骨寺の跡あり。此あ

五串の瀧

たりの寺々を、むかし七十四代鳥羽院の御宇、天永、永久のとしならむか、此平泉野より今の關山にうつし給ひしかば、そこも平泉の里となれり。今の平泉に逆柴山といふ名あり、是も舊平泉に在る山の名也。骨寺の事、尼寺の事は選集抄に見えたり。そは、こと處につばらかに記たり。五串の瀧とて人みなめでくつがへる飛泉にのそめば、玉の瀧、またの名を小松が瀧ともいふあり。京田瀧、あたら瀧、大瀧、童子瀧、はかり瀧、魚屋瀧、麻一拵の瀧なンど瀧は平ッ飛泉ながら、こゝら立するとき岩にせがれて、はさま〳〵に、しらねりかけたるがごと白淡涌キかへり、日影うつろひて紫の波うち寄る岸には、桃、山吹、柳、さくらの枝さし交りて、世にたとへつべうかたなし。なほあきたらず見イて、

落瀧の水いつくしく画ともいろとる筆のえやは及はむ。

ふたゝびこゝにいたりて、奥ふかく、ねもころにたづね見まく、こたびは田面の路を來に、しめ引はえたり。

水ナ口に立てそ祈る時は來ぬ五串の小田にもゆるなはしろ。

山ノ目驛の大槻氏

山ノ目の驛に出て大槻清雄の家を訪へば、しばらくありて清古筆をとりて、

珍らしなけふに待えし時鳥聞もはつねのものかたりして。

返し。

此宿に聞ゝもめづらしほとゝきすけふをはつ音の人のことの葉。

小夜すから語らひふしぬ。

配志和神社

十一日。大槻の屋戸よりはいさく近き配志和神にまうづ。杜の梢は花ちり若葉さし、まだ咲やらぬかた岨の木々もめづらし。鳥居の額は土御門泰邦卿の眞蹟給ひしといふ、手風ことにめでたし。そもく此神社は、齋奉りしよしを云ひ傳ふ配志和ノ社ノ内は皇孫彦火瓊々杵ノ尊、左方は木花開那姫命、右方は高皇產靈尊也。また神明ノ御社をはじめ八幡ノ社、鎌足ノ社、安日ノ社、神星ノ社、土守ノ社、かゝるみやしろくにぬさとりくまく見ありくに、菅香梅とて、よしある梅も青さして、こゝにも老婆杉とて千年ふりけむ、枝のなからに山櫻の寄生ありて花いたく咲たり。なほ木のもとにふりあふぎて、

菅香梅

いつまでもちらでや見なむ杉が枝の花もときはの色にならはゞ。

梅多かりし

此處に菅神の御子ひさゝころさすらへ給ひしよしを云ひ傳ふ。むかしは梅のいとく多かる地にて亂梅山といひ、蘭梅山と書ひ、また梅が嶺といひ梅が森といふ。泰邦卿の歌に、「みちのくの梅もり山の神風も吹ったへこしわが心葉に。」此御神は文德天皇實錄四卷、仁壽二年八月乙未云々辛未陸奥國ノ伊豆佐咩ノ神（宮城郡式伊豆佐賣神ませり）登奈考志神（氣仙郡式登奈孝志神ませり）志賀理和氣ノ神（斯波ノ郡、南部にませり）並加ニ正五位下ヲ、衣多手ノ神（氣仙郡式衣太手ノ神ませり）石神（桃生ノ郡式石神社ませり）理訓許段神（氣仙郡式理訓許段ノ神ませり）

安日社縁起

神星の社

土守の社

「配志和ノ神磐井郡式配志和ノ神ませり「儛草ノ神磐井郡式儛草神ませり並ニ授ニ従五位ニヲ云々と見えたり、尊べき御神也。おのれ是を考おもふに、鎌足ノ社はいかなるよしありてか齋ひ奉らむ、安日ノ社は、神日本磐余彦天皇の官軍をそむき奉りし長髄彦の兄なる安日、其御代に津輕の十三ノ湊に流さる。其後阿陪ノ頼時出たり、貞任、衣が柵にすめり。此梅森山靈地にして、おのが館もいと近ければ、上祖の安日を神と齋奉りけむものか。神星ノ社はしらず。また貞任の男高星二歳のとき、乳母がふところに抱て亂レを避て、津刈の藤埼に隠れてそこにすめり。高星子あり、月星といふ。其塚ども河岸にありしかば、崩うせて水ナ底に棺の落たるが井桁の如に見ゆれば、そこを井戸淵といひしが今は名のみ也。また河越某なる畠の字に高星殿、月星殿と、近きまで云ひしといへり。阿倍ノ高星の舊跡は藤崎に殘れり。土守ノ社はゆゑよしもあらむ、いとふるめける神ノ號也。また津輕の妙見ノ社の枝神五十嶋ノ社あり、蝦夷を齋るといふ。是は齊明紀に在る問菟ノ蝦夷膽鹿嶋、菟穗名といふ、其功あるをもて葬し、塚に祠や建けむ。伊賀志麻といふ夷ノ名今も有なり、いがしまとは物の餘る事にて、十有某といふ詞也、蝦夷人名を付るに、其童、又女童が癖を見て付れば、世にいふ醜名多し。又問菟といへるところ、同津刈の比良内夷語のヒルナキのうつりたる也の藻浦といふ處の畠字になりて、いまそこを太夫と云ひ、その近きに蛇口といふ蝦夷住し處といふ。かゝる事をおもへば、恐き事から、神に勳位のお

ましませるかごと、忠誠ある人とらは神と、むかしは齋たらむかし。いざ飯りなむとて出たつに、人あまた居ならひてうたうたひ酒のむを見て、夫木集「もろ人の岩井の里に圓居してともに千とせをふへきなりけり。」と淸古ずゝじつゝ語らひ連て、大槻のもとにつきたり。

山ノ目滯留

十二日。桃生ノ郡鹿股の有隣ノ翁、ところ〳〵尋ねわびて、けふも又あはでむなしく飯るなンど書て、

尋ねこしかひもなきさにすむ鶴のこと浦遠く聲そ聞ゆる。

とあるを見て、

たちあそふ方こそしらね友つるのうら珍らしきこゑのみはして。

けふもこゝにかたり暮て、雨まばれ、庭の面におそ櫻の咲たるに月のあか〳〵とさし出て、軒にかけたる無窮の額の文字さへしるく、庭に彳ミよみときて、

樂しさはいつをかぎりもなかぞらに月あり花もにほふこのやど。

六日入まで

十三日。膽澤ノ郡にいまた咲のこる花あらむ、いさ見にいなんと大槻淸古とゝもに、磐井ノ郡山ノ目を出て伊澤ノ郡衣川の橋を渡る。衣の關は、卯の木といふ處にいにしへ跡ありといふを聞て、

時も今咲や卯の木のほとゝきす衣が關をたち出てなけ。

鈴木氏長者神を祭る

水澤の鹽竈社

夕暮近く前澤をへて、六日入になりて鈴木常雄の家に訪ふ。いにしへ此あたりはいくさのちまたにて、續紀卅三卷、天宗高紹天皇光仁ノ帝を申奉る寶龜五年云々、壬戌陸奥國言、海道蝦夷忽發ニ徒衆一、焚レ橋塞レ道既絕ニ往來一、侵ニ桃生城一敗ニ其西郭一、鎭守府之勢不レ能レ支、國司量レ事興レ軍討レ之。」云々なンど見え、また七年二月云々、庚辰發ニ陸奥軍三千人一伐ニ膽澤賊一云々なンど見えたる地也。むかしは夷賊のみ多く住たりけむ。此鈴木の家の庭にいにしへより長者神と祭る社、いかなるよしにて祭り來るとも、また長者なンどいふ家ありし地とも思はれぬなンどいへり。是を考ふに、いにしへは姓に長者あり、また日本にて男子七人もたるを長者といふと盛衰記にもいへり。また、今いふ驛の本陣といふを長者と云ひし事も見えたり。「軍書伊勢物語」といふものに、在原ノ業平なンど將軍にて、膽澤ノ郡に長蛇の備へをたてられし事見え、其いくさに勝利ありをもて神をいはひ、そを、いましかけて長者神といへるにやなンど語らひ更たり。

十四日。あるし常雄、大槻清古なンどいざなひ連て水澤にいたり、しほがまの花見てむとて出たつ。やゝその處になれは、みやどころいと〱ひろく、いつの代ならむ鹽竈の御神をうつし齋ひて、四ッの釜さへすゑまつる。花の木あまたうゑにうゑて、けふを盛りと咲たるを人々うちながめ、歌よみ詩つくるをりしも雨いたくふりて、ぬるとも花のかげにやどらむなン

ござゝじつゝ見ありけば、雨はなほ、いやふりにふれば、ほゐなう人みな歸りいぬれば、我ひとり大林寺に入りて此寺の曇華上人を訪ひ、去年よりつもるなにくれと語り暮たり。

十五日。雨も餘波なう晴たり。けふも、きのふのみやしろの花見んとてあるじの上人をはじめ、此近きわたりの人々とともに、かの花のもとにいたる。きのふに引かへて、けふはけしきばかりの風もなく、その樂しさ、いはむかたなし。神ぬしがひろひさしに人々圓居して歌よみて、神に手酬まゐらせんとて社頭花といふことをよめる。

うすくこき色はへだてご神垣に匂ふはおなじ花の眞盛り　寛　　栽

おすも又手向やせまし神がきに掛てそ匂ふ花のしらゆふ　信　　包

玉垣の光もそひて咲花は神の惠のたぐひならまし　親　　賢

ちはやふる神の惠の色そへて御垣の花や咲匂ふらむ　僧曇　華

芳野山こゝにうつしてさくら花あかすや神もみそなはすらむ　氏　　喜

おのれも、人々とともによみて奉る。

神垣の花の盛りをみしめ繩ながくもがなとかけていのらむ。

夕くれ近くこゝを出て、大林寺に人々うちつとひかたらふほとに、けふの花見露ばかりもちしらでなゞごあり。

さひ寄らむこと葉も波のへたてなく道しるべせよわかのうら人。

と、常珍といふ人のよめる返し。

淺からすなれこしわかの浦人にこたへも波のよるもはつかし。

小夜うち更るまでよめる人々の歌とも多かれど、こゝには記ず。

蝗避の呪ひ

十六日。此寺の背面の小田のあと口といふ處に、燒米をまきありく男あり。何の料にしかするにやとゝへば、こは稻田に蝗のゐざる咒也といへり。かくてくるれば、れいの人とら集ひ來けり。

十七日。雨ふれば、花あるかぎりはいつまでもこゝにありてなゞど、曇華上人なさけ〳〵しう聞え給ふ。

よしふらば雨にかさねん旅衣花にぬる夜の數ぞすくなき。

結婚俗習

いとがり

十八日。ある翁のいへらく、近き山里に婚姻あり。片田舍にはことなる珍らしき事のみ多し、見せ申さむ、いざたまへといへば、此翁にいざなはれて水澤を出て、その山里に道はる〳〵といたりて、婦の隣の窓の内に在りてこれを見つゝしをれば、七戸銹鐵水なゞどをはりて其齒黑母も來りて、外に莚しき若キ女あまた來集りて、此未通女が顏に綖剪といふ事をせり。そは麻苧の線糸を左右の指にて、此糸をちどりかけにとりて曳磨に、顏の生毛剃りたる

にごむゝ

縁の綱

すくひ守木

聟莚婦莚

天地和合の手

聟の袴著て

如にみな落ぬ。剃刀てふものは用ひざるならはし也。かくて髪結はて紅粉、白粉などによそひたてば、翁さしのぞきて、はや彩色しかといふ。こは、此あたりにて物彩色事をにごむといへば、しか戯て翁がいへる也。その婦人に縁綱とて、能狂言俳の婦人の鬘布の如に額よりあてて、後さまにむすび下ゲぬ。そは白布あり、紅布あり、麻布や絹布あり。福者などは此縁綱、ことさらに長し。遠きは馬、近きは歩行して婿の家近けば、先あら男、新婦を負ふ也。その負ふに肩荷布、またいふ守布とて八尺斗リの布をもて負ひ、また守木とて二尺あまりの丸木（勝軍木(かつのき)にて作る、老て死たる死骨を、此木を箸として拾ふ也）を二本紙ニ重に包て、水引もて陰結、陽結といふ事して、此守木に婦人の腰掛て負ひもていたれば、聟の門に菅莚重敷ぬ。聟の莚を上へに婦の莚を下タに重ぬべきを、若雄等、婦の莚を上へに布てむとあらそふ。壻の莚の下になれば聟の方のいみじき恥なれば、互に小刀手毎に持て大あらがひせり。老たる人出て、是を貰ひといふ事して左右しづまれり。二ッ結ひのあぶら少竹筒、あるは守木のうけとり渡しに天地和合の掌、入リ手、出手などあり。聟の袴もて出て、嫁を重ね莚におろして水を飲め、かの袴を婦人に着ぬ。そは前襞積を後へ、後腰を前へに當て、聟の家の横座踏ば袴は取りぬ。此夜はゆめ〳〵蠟燭を用ひず、みなあぶら火、巨松也。世に八寸臺といふものを九寸といひ、平器てふものを角といひ、その外古實風多し。かくて夜ふかく、馬にて水澤に皈りつ

きたり。
かねて、一夜をやどりねなゞど、ねもごろに聞えたりしかば祥尙の家を訪へば、あるじ、まちわびつるなゞどかたらひ更て、祥尙。

いひ出む言葉は露も夏ノ夜の庵にやとれる月の涼し。(マヽ)

とありける返し。

ことの葉のつゆの光もなほはえて心涼しき月の小夜中。

十九日。あるし祥尙のいへらく、けふは此あたりの人々をこゝにつとはせて、くるゝまで樂しみあそばむ、こよひもこゝにありてなゞいへるほどもなう小幡ノ爲香のとひきて、

數ならぬ身も橘にとひよればえならす袖の匂ひこそすれ。

とあればいらへて、

いつまでも人を忍ばむ立花のあかぬにほひを袖にうつして。

また、あな久しさて邇高筆をとりて、

まち〳〵て遠き雲井の時鳥人つてならでけふこそはきけ。

とある返し。

雲井路をけふたつねすはほとゝきすかゝるはつ音も餘所に聞かまし。

雨のいやふるに白玉椿のおもしろく咲たるを見て、あるし祥侚をはじめ邇高、爲香、紡松なんどよめる歌ありしが、もらしつ。

二十日。朝とく大林寺とふらへば曇華上人、庭の山吹眞盛り也、きのふの雨にことさら色はえたりなんどあれば、いざとてはし居すれば、から鶸とかいふさゝやかのひわ、さはに來けり。

雨晴れて旭影も匂ふ山吹の露ふみこぼすひわの群鳥。

廿一日。あしたより雨ふる。

廿三日。けふこゝを立出て此里の人々をわかる。曇花上人、もはや、かくぼけ〳〵しう老たり、ふたゝひのたいめこそかたからめとて外に送り出て、

歸り行人や待らむふる里の花橘の咲匂ふころ。

とあれば返し。

言の葉のにほひはかりは明日も見むあかて別るゝ軒のたち花。

氏喜の翁。

こゝろのみはこゝにしのばむほとゝきす遠き雲路をよし皈るとも。

返し。

あすよりはつはさしはれてほとゝきす雲路はるかにうきねなかまし。

信包。

たちかへる道は雲井となりぬともこゑなへだてそ山時鳥。

返し。

鳴かはすこゑをかたみに別れては人をしのふのやまほとゝきす。

かく人々を別て、花見し鹽竈ノ神社にまうづ。いと多かる花ども、なから過るまでちりたり。

ほふりらがいはふ社にちる花をこゝろありてや朝きよめせす。

社司佐々木繁智の家を訪ひ語らひ別て、こゝをめてにとりて野くれ山くれ、散り殘る花見がてら德岡ノ村に來りぬ。村上氏のもとをとひて、去年より雪の下タにまちわびし櫻の今散行なンど、ほゐなう見やり佇めば、また、ちるも一ながめ、おもしろしなンど人のいへり。

去年よりも雪になめなれしさくら花いまはた庭にふりつもりぬる。

しかして、あるしのはらから良道とともにかたらひ暮たり。こゝに三四日あるに雨風はげし。

廿六日。內場に磨臼四ッ五ッするゑて男女曳廻し、こゑをあげて唄ふを聞ヶば、「河を隔て戀夫を持てば、舟よ棹よが氣にかゝる。」と、おし返しうち返し、ほうしとれり。かくその意を、

德岡村

俗謠一ッ

舟なくて渡る瀬もがなおもひ川こゝろにかゝる波のよるひる。

良道ノ云、庭の盛りの頃はかならず訪ひ來んとありしかば、そのころ詠し歌とて、書刺にさしたるをとりて見せける。

　こゝろあらば盛をまちてくれなゐの梅も片枝は花をのこして。

とありしを見て返し。

　梅が枝は青葉ながらも色ふかき人の心の花をこそ見れ。

三河國殖田氏と文通

廿七日。よんべより雨いたくふりぬ。蓑笠着たる人こはづくり、やをらふみもて來るを見れば、此春平泉の毛越寺の衆徒皇都に登りけるに、あが父母の國、吉田ノうまやなる殖田義方のもとへ文通あつらへしかば、其書の返事來るをくり返しまき返し見て、

　うれしさに袖こそぬらせ事なしとむすひて送る露の玉つさ。

あるし良知、良道はらからの歌あり、また、こと人の歌もあれどこゝにはもらしぬ。

時鳥物語

廿九日。木々のいとふかく生ひ茂りたる中に時鳥の鳴クを、童の集りふりあふぎ聞て、「町さへ往たけとか」と、此鳥の鳴く眞似する諺ノあるなり。此處に町といへるは肆市立に行ク事をいへト。また時鳥を五月鳥とも五月鳥子とも、また田うゑ鳥ともいふ處あり。また小鍋燒といふ鄕もあり。此こなべやきといへる事は、むかし、男子ふたところもたるひんぐう

五月鳥子、小鍋燒

尾たゝくしやう
本尊懸たか

の君あり、太郎は亡妻の兄にて次郎は後妻の弟也。此弟しばし兄の外に出て遊び居るをうかゞひ、なにくれとあなぐれいでて小鍋燒てふ事して物煮を、兄のゆくりなう外より來て、こは某烹かとさしのぞけば、兄に見せじと、かなたこなたともてわたり、また兄の來たらばいかゞせんと、もの陰にかくろひて、唯一人是を喰ひにくひて、あな腹くるしとふしまろび、背中裂て、くるひ死たり。其弟が靈魂霍公と化て、しか「あつちやとてた、こつちやとてた、ぼつとさけた」と叫び鳴ク也。そは其よしなりといへり。和訓栞には、出羽にて尾搖くしやうと見え、東海道にては「本尊懸たか」と鳴クといひ、また杜鵑の字もさま〴〵多く、また沓作りの翁と云ひ名もさま〴〵、またくさ〴〵なる、はかなき童物語多し。一とせの夏尾張の國名古屋にて、五ツ六ツ斗リなる男子をいざなひ、ものにまゐりけるとて人あまた群れ行クに、霍公の頻リに鳴クを此稚子の聞イてうち笑ふを、人々、若子はいかに聞キしか、某と鳴クぞと問へば此童、「父へ母へ」といらふを聞て、居ならぶ人みな、おとがひをはなちて、はと笑ひし事あり。其子痲疹やみて死り。その親ごもは、時鳥は、うべも黄泉の鳥か、かの國より、はやこ〳〵と父母を呼かと初音より血の淚を流して、霍公の鳴けば、あなかなしと、耳をふたぎし事ありしを思出たり。

三十日。をちかへり時鳥の鳴ケば、

ほとゝぎすこゑなをしみそ庭に咲く花の卯月も明日はちりなむ。

五月朔ノ日。あすは此家を出たゝむ、去年より馴むつびたる人々に、ふたゝびのたいめ、いかゞなンどおもふ曉郭公の鳴けば、

時鳥なみたなそへそ見る夢もこよひばかりの宿のまくらに。

ほどなう、しらみて、

二日になりぬ。去年より、なにくれと、たのもしかりつる人々の情さすかに、けふの別れに、むねうちふたかり淚おつるを、心つよくも巳ひとつ斗にあゆひしてたちづれば、良知の弟良道の云、

別れては道のちさとをへたつともかきつめてとへ壺の石書。

と聞えたる返し。

書かはし壺のいしふみ音づれん行クみちのくはよしへたつとも。

とて外に出れば、家にあるかぎり門の外まで見送りせり。

おもひやれ去年よりなれて思事いはでしのぶの袖のなみだを。

良道聞て、

言の葉を今は記念とみちのくのしのぶの山ぞともに露けき。

前澤に來る

しかして人々をわかれて、村上良知は前澤の驛に在りければ、そなたにて逢はむと、良知の子いまだ總角なるをみちあないとして、去年見し水文字の瀧（流のさま、草書の水といふ字の如也）を見がてら前澤の郷にやゝ出たり。良知のやどれるもとに至れば、

あひなれし契りわするないつこにもおなじ心の友はありとも。

と良知のいへる返し。

別るともなにわすれん友かきのへたてぬなかのふかきこゝろは。

此夜は靈桃寺に泊る。此寺に三四日はあれなンど長老聞え給ふに、語らひ暮て、

端午の節句

五日。けふ軒に蓬、菖蒲ふける事、こと國にかはらず。陸奥は實方中將の故事ありて、五月五日はかならずかつみをふかせ、あやめはゆめ〳〵ふかさるよし云ひ傳へ、また宗祇旅日記に藤原義孝か歌に、「あやめ草ひく手もたゆく長き根のいかであさかの沼に生ひけむ。」とよめるをもて、其處の者に尋ねしに、中將の君くだりて、何のあやめもしらぬしづか軒端には、いかで都におなじかるべきとて、かつみをふかせられたるよりの事也といへり。また圓位上人熊野へまゐりける道の宿に、かつみをふきけるを見て、「かつみふく熊野まうでのやどりをばこもくろめとぞいふべかりけり。」著聞集に見えたり。さりければ淺香ノ沼ならでも生ふる草にて、紀ノ國にも葺けるならはしにこそあらめ。なにくれかにくれと、いにし

男の子のみならず

別れ難き前澤

へ今はことなれど、思ふまに〳〵。

かつみふくやごこそなけれあやめ草長き根さしの御代をためしに。

軒に幡立るは、男子ある家々には、いづこにてももはらすべき例なるを、此里にては女子持る家にても、また、さらに小兒門にても、とみうどの門はことさらにものして、そのけぢめなきは、出羽路もひとし。こよひ、さうぶうちにやゝ似たり。安平廣長がりとふらへば、こよひはこなたにあれとて、

時鳥聲さへ匂ふあやめぐさかりねのやどの軒のあたりは。

とある返し。

言の葉も菖蒲も薫る宿になほこゑうるはしみ鳴ほとゝぎす。

とて更ぬ。

六日。那須賚福の牡丹けふを眞盛とて、人々にいざなはれて見に行しかば、雨、けしきばかりふりて晴ぬ。

ぬれてほすいろこそまされ五月雨のふるもはつかの草の數〳〵。

那須氏のもとを出て、

七日。いと近き良友の家に、けふも人々も來集ひ、あるじめくわざして、うまのはなむけを

かごとになど、ねもごろにものしければ、かついたれり。ひねもす、さよすがら語りて明ぬ。
八日。よべより雨ふれば例の人々來けり。
九日。けふ此里を出たゝむといへば、あるじ良友。
衣川袖のなみだは包めどももれこそ渡れけふのわかれに。
返し。
いひ出ん言葉も夏の衣川うらなくおもふ君が別に。
廣長。
別れてはまた逢事もたのまれずいとゝ餘波のをしき老の身。
返し。
又いつとちぎりもやらで老の身の言葉の露に袖そぬれぬる。
廣影。
行袖にかけてちぎらむ別ても又あふくまの川波もかな。
返し。
別れても又あふくまの名はあれど袖やぬらさむ波のよるひる。

正保といへる琵琶法師のよめる。
　行人にあふてふ事はしら河のせきの戸さしてとゞめてもがな。
とある返し。
　おもひあふ心は通へしら川の關のうちとによしへたつとも。
靈桃寺にすめる僧(ほふし)茵雲ノ云(いへらく)、
　結交數月如同盟　豈計高樓此送卿　請見陌頭楊柳色
　回風猶耐杜鵑鳴。
とありける韻(すゑ)の、鳴(なく)といふ字もて返し。
　青柳の糸くり返しほとゝきす君に心をひかれてそ鳴く。
那須ノ資福。
　したふぞよ軒端つゆけき草の庵にやどりし月の今朝のわかれを。
返し。
　あかで見し月を殘して此屋戶にいとゝ餘波の袖そ露けき。
方長。
　とゝめえぬ袖の別のつらきかな衣かせきは名のみ也けり。

返し。

此里にかたしき馴て夜を重ねいねし衣が闕（マヽ）立うき。

桃英といふ人の句に、

とゞめはやせめて早苗の五寸まで。

かくて人々を別れて、けふは六日入邑にいたりて鈴木常雄かり訪へば、あるしのいへらく、黒助といふ片山里に百歳の老嫗あり、その長壽を祝て酒さかな贈る、いざたまへ、久呂太須祁へといへれば、ともに出たつ。加美河の舟渡りして江刺ノ郡にいたり行道といふ人をいざなひ、しかして其家にいたれば、そが孫ならむ五十歳の男、ふくだみたる袴の襞積をたゞし、こは、はる〳〵の道をなンど、かの酒さかな、老女の前にとりすう。老女は麻苧の綵うみ居けるか、糸うみさして手をつきぬ。耳いとさく目きよく、髪は黒髪ましりのおもざし、歯は一歯もおちず、かねぐろ〳〵と見え、年は七十八十とやいはむ、三輪くむけぢめも見えず。もゝとせの嫗といはむには、にげなかるべし。世にかゝる人もありけるものか、うべも國ノ守より、ものかづけさせ給ひしとなむ語レり。此老女に酒すゝめ、その末の坏をとて人みなとりめぐらす。此嫗、十三ノ歳にて此宿に娵婦となり來て、今八十翁の子あり、五十の孫あり。うからやから、ところせきまで居ならび、盞めぐりにめぐれば醉ひしれて、此孫なるも

の傘をひらき扇を持て、うたひ舞ふさま、かの、もろこしのけうの子老萊子が、舞ひ戯れて倒れたるに似たりと、人々もこゝろをあげてはやしぬ。

もゝとせの親に仕ふる樂しさ人（マヽ）も千とせの齢をや經ん。

日くれて、みちはる〳〵と行道のもとにつきたり。

盲法師の物語り

十日。あさいして、日たけて起たり。けふは、此江刺ノ郡黑石ノ行道の家に在りて人々と歌よみあそび、あすなん膽澤にいなんなッどいへるに、とみなる事とてふみもて來れば、こを見つゝ常雄は皈り去き。よべよりこゝに、めくらほふしども來宿りたるをよひ出れば、南部閉井ノ郡の浦人、宮古の藤原といふ處といへり。語りさふらへといへば紙張の三絃とうだし、こわつくりして、尼公物語とて、佐藤庄司が家に辨慶、義經、僞山臥となりてやどりし事を語り、をへぬれば小盲人出て手をはたとうちて、それ、ものがたり語りさふらふ。「黃金砂まじりの山の薯蕷、七駄片馬ずつしりごつさりと曳込だるものかたり」、また「ごんが河原の猫の向面、さるのむかつら」、「鉈とられ物語り」、「しろこのもち、くろこのもち」などかたりくれたり。

龍門の瀧

十一日。もろこしの外にも大和ノ國、また此處にも、龍門の瀧とておもしろき瀧のありと聞て見にいたれば、木々深く落たり。

また前澤に

松柏高きいはねにたつの門梢にかゝる瀧の涼しさ。

蕨の岡といふ處に、躑躅の盛なるを見つゝしはしありて、

夏草にまじるわらびの岡のべにをりたかへてやつゝじ咲也。

行道をわかれて、北上川わたりて常雄のもとにつきたり。こゝに二日三日と日をふる雨ばれをまつに、前澤の杉ノ目眞門といへる人訪ひ來て、今一日二日はかりわがかたにありてよ、あまりとみにいそきたちける、いざ〳〵といへれば、眞門にいざなはれてくら〳〵に前澤につく。

十九日。けふは、つとめてこゝを出たゝまくよそひすれば、あるじ。

わかれ行人に餘波をおくの海の波かけ衣いつかほすべき。

と眞門のいへる返し。

おく海のなみかけ衣袖ぬれてふかき情をいつわするへき。

片雲禪師、いましばしはありてなど聞えて、

秋風も吹來ぬ空にたちかへる人をとゞめよしら河の關。

とある返し。

言の葉にさそふ秋風身にしみてこゝろそとまるしら河のせき。

秋房。

別れても時しあらばと行人の飯らむほどを松しまのうら。

返し。

たび衣かさねてとはむまつしまやなごりをしまのけふのわかれ路。

要寛といへる翁。

とゝめてもこゝろ止らぬたひ衣袖の別にのこる言の葉。

とある返し。

ふるさとにたちかへるともたびごろもかさねてこゝにまたかたらなむ。

六日入りに皈る路すがら、蓬藁いと〳〵多く花咲たり。

くるゝともふみはまごはしみちのべのいちしの花のいちしろくして。

かくて暮ふかく至る。

六日入にて田圃風景

廿一日。雨の晴間加美川を見れば、ちひさき舟どものこゝかしこよりこぎ出て、あるは夏艸しけりたる中を白帆ひきつらゝき、田の面には、やかてうゑわたらむ料に、こひぢかいならし、長やかの竹綱して馬くり廻しありく。その竹綱とる女を、させごといふ。また畔ごなりには早苗採り、家〳〵にては養蠶にいとまなみ桑こきちらし、けこ、ちゝご、たかご、ふなご、

早丁女花

初聟に祝ふ

豊年ならん

にはごなゝど、女童桑とりありく。また田うゝる日は上下なそへなう、いと〳〵長き萱の折筯にて、ものくふためし也。田面に在りては、朴のひろ葉の小豆の飯は、いづこもおなじ。

廿五日。うゑわたすさなへ見なんと、人々とともに畔傳ひ行ヶば、いくはくならん、菅笠白〳〵と千町の面に見えわたり、森かげに卯の木の咲たるを、それも時とて、早丁女花といへり。

菅笠の雪かあらぬかさなへとるたもと涼しきさをとめの花。

廿六日。あしたより雨いたくふりぬ。去年ことし來る聟なゝとは、田面のをとめらに泥うたれて、ごころ(マヽ)まみれになりて身も重げにイムを、はた、うち笑ひては、また祝ひすとて打かくるに迯迷ふなゝど、とよめきわたり、家は飯かしぐをさめ、蠶養する丁女のみにて、殖女は星をかざして田面によそひたち、ひねもす雨露にぬれそぼち、くれて螢のたもとにすがるころ、やに皈り來て、ふす間なき夏ノ夜に夢もむすばぬいとなさ、おもひやるべし。此早苗採りうゝる日に雨ふれば豊年也とて、ぬるもいとはでよろこびあへり。うべも古キ歌に、「さなへとるけふしも雨のふることは世のうるふべきしるし也けり。」

廿七日。雨のいやふりにふりて田井も溝も水うち溢れ、千町の面はさゞ波ぅち渡り、北加美川の流れ込ム小川なゝどに舟さしめぐらして、鱒、鱸魚漁もあやうげ也。こなたのあげた、

くば田に、早丁女むれり。

ぬれ衣ほすまも波の袖こえてさなへとる也五月雨のころ。

廿八日。あさてばかりこゝを出たゝむといふを聞て、姉體といふ處にをるくすし安彦ノ中和。

たび衣袖のわたりの別より涙の川のせぐ方もなし。

とある歌の返し。

なみだ川身もうくばかり旅衣袖の渡にくちやはてなん。

盛方のもとより、

別てもおもひそ來せ朝夕もたえず其名はわすれずの山。

返し。

情ある君がその名はわすれずの山また山はへだて行とも。

祥尙のいひ贈ける。

みちのくの山路はるかにへだつともめくりあはなんことをこそ思へ。

返し。

別れてもけふを契にみちのくの山路はるかに分てさはまし。

六日入な立たんとて

守清ノ翁は八十とし高く、眞白髪は雪とつもり、髭もしらみはげながら筆をとりて、

五月雨にみかさまさりて衣川たち行人をしはしとゞめよ。

また此守清翁の句に、

螢ともなりて送らむさつきやみ。

此翁のこゝろざし返すぐうれしくて、

衣河ふかき情に五月雨のはれまはあれど袖やぬらさむ。

廿九日。常雄とともに、麻生といふ處に栖家千葉ノ道利といへる人のもとにいたれば、山丹花のいたく咲たるを、

風吹ば露も盈れて庭もせにさゆり花咲くやぞ涼しき。

例の酒進めけるに時うつりぬ。あるじ道利の翁、なにくれかたりける中に、此膽澤ノ郡若柳ノ莊駒形山ノ麓なる金入道といふ村にては、老嫗の事を「ごんご」といひ、三四十歲とわかき女をさして「ごんごびめご」とよび、娶なンどは「姫子」といひ、あるじし、酒宴あるときに小謠舞といふものあり。そは盃を左に持て右に扇をひらいて、「酒は諸白御酌はお玉、さしたきかたはあまたあり、さすべき方はたゞひとり。」とて、つと、なみゐる人の中に、ゆくりなう、うちつけにさしぬ。さゝれたる人は、した心はしらねど、うむじがほつくりて、かしらかきか

麻生の千葉氏にて

ごんご
ごんごひめご
ひめご

小歌舞

槲葉しきて

き盞とりてひとつほし、あるは、かさねたうびなゝどして、又たちて小唄舞をせり。かゝる小歌舞に、いとゝ酣になりぬとなん。夏の始め楢のわか葉をとり、敷莚の下にしきおして乾槲として、是をふところ紙として、人に、さかなかいのせて進せぬ。」など語りぬ。さすがに山里の古風見るこゝちせり。かくて道利翁がもとを暮ふかく出れば、しばし野原の路行ほど螢いと〳〵多し。

さつきやみわけこしぬれて草のはら露も螢も袖にこぼるゝ。

更て六日入につきたり。

蚤の舟撒く

六月朔日。あくるやいなや、くま〳〵のこるかたなう、蚤ノ舟てふものを、節分の豆はやすやうに散ありく。こは、羊蹄草なゝどいふ葉の銀蕎麥をかく蒔ありけば、是を舟として、蚤の、海にみな皈り去ぬてふためしとなん。しかして、時の間に掃き清めぬ。

ますらをが刈りてつみけむ草のみの舟こき今朝はくたる夏河。

ぬけの朔日

けふの朔旦を脱ノ月立といひならはして、桑の林のもとに行ゲば、空蟬のもぬけのからのごとく魂魄さびさりて、人脫のみ殘り止マれるとて、桑の木一ト本見ても恐れかしこみ、蠶の養も、よべにとりてけふはものせず。秋田路のごと、齒固とて氷室餅のためしはせざる也。

齒固めなし

ひるはれて、夕くれ近く風たちて涼し。

杉ノ目氏に告別

鈴木家由緒寶物諸品

五日。近ごなりの里なる杉ノ目眞種といふ人のもとにいたりて、餘波とて夜ひとよかたらひ、ふすかとすれば水鷄鳴ぬ。

夢もまた殘る鵐のねやの戸を叩キもはてずあくる夏の夜。

六日。杉ノ目の屋戸を出るに眞種。

別れなばふみこそ絕えめ思ひやる心は通へおもわくの橋。

とありしかば返し。

わかれてはふみこそたゆめおもわくの橋は心にかけてわすれじ。

常雄のもとに皈る。

七日。つとめてこゝを出たちなんといへば、此家に、保元平治の世の亂のころよりとり傳へたる、札よき小櫻威とおぼしくて、とし ふり破れたる鎧 あり。是は常雄が前 祖鈴木兵庫ノ頭常信の甲 也。鈴木常信は鎭守府ノ將軍源朝臣義家ノ卿の家令にて、すなはち將軍の眞筆給りし感狀あり、常信は數度の戰ひに勳功ありし武士也。世々に勇士ありしにや、義朝ノ將軍をはじめ北畠ノ顯家卿まで、代々の感狀五枚あり。また掌形なきいとく小サく、虎の皮布たる鞍あり。唐鞍てふものにや、結鞍なンどのたぐひにや、いと古キ物也。敵よりとり得たる鎗あり、横刀あり。また家の幟標 あり、そは頸なンど包みしものとおもはれて、いたく血にま

みれたりしあとあり、よしある家の末葉也。あるし鈴木養作といふ常雄のいへらく、吾世まで廿四代を經たり、かく今は民家き家ながら、此よろひは千歳近きものから身の守りともなるべし。いさゝ分ヶ贈らむ、故郷の裏にもていきねなンどいひつゝ贈られしうれしさに、庭牡丹を見て、

千代かけてたねやまきけむよろひ草いや榮行家ぞ久しき。

あるし常雄、又かならず訪ひ來てなンどありて、

浦波はよしこゆるともちきりおく事なわすれそ末のまつ山。

とある歌の返し。

別れ行末の松山こゆるとも波のたちゐにかけてしのばむ。

雨のいたくふり來けり。家の人々みななみだながら、此雨にいかでかなンどあれば常雄。

けふのみと人をとゞめむこゝろをや空にもしりて雨のふるらむ。

返し。

ふる雨は菅の小笠にしのぎてもなさけの露に袖やぬらさむ。

あるしの聟なりける鈴木常茂く、

夢うつゝこゝろもとけず行人にあかぬわかれをしたひもの闕。

六日入を立つ

とありける返し。

　うちとけぬ思ひむすひてへたて行袖はなみだのしたひものせき。

常茂、近きわたりまてとて送りして、やゝ常茂を別れて綾織といふ處にて雨もをやみたれば、田つらの路に立て、

　千町田にあやおりみだれふる雨の餘波涼しき露の玉苗。

やをら姉體邑に來て安彦中和のもとにつきたり。あめなほ微雨て夕月の空ともいはず、さながら、さつきやみにことならず。遠かたに炬松二ッ三ッもてありくが、木の間に見えかくれゆくさま火串のこゝちして見つゝしをれば、その影は見えず螢のみぞ多かる。

　とぶほたる照射は見えず雨にさへ汝れがおもひのけつかたやなき。

あるじとゝもに語らひ更たり。此處に四五日とありて雨のやゝをやみぬれば、

十二日。けふは石手堰ノ神にまうで奉らまく、あるじ安彦中和を前に北上川の岸づたひに行ケば、雌嶋、雄嶋なンどいふこゝらの岩群ありて、分ケやすからぬ路也。梢をよぢ蔓をたぐりて、からうじてみやところにいたりぬ。そも〳〵此御神は式の神社にして膽澤ノ郡の七社の一社にて、三代實錄五卷ニ、貞觀三年云々、陸奥國鎮守府正六位上石手堰神、並預ニ官社ニ云々と見え奉る御神也。こゝに忍穗耳ノ尊を齋奉りて、いにしへはゆゑよしありて、宮造も

北上河昔は神川

大(おほ)キやかにおましくけむものかと察(おもは)れたり。今はさゝやかなる祠(ほぐら)の神にしませば、人みな、そことえ知り奉らぬはかしこき事かな。むかし此北上河を加美川と云ひしも古神川(もとかみかは)にして、此河上(このかはのべ)に石手堰(いはでゐ)ノ御神鎮座(しづもり)ませるよしをもて、加美河の名に流れけむものかと考(おもはれ)たり。御前(みまへ)にぬかづきて、

いはでゐの神の御前の涼しさはきしによるべの水清くして。

安彦中和、おなじさま奉る。

みたらしの清き流は絶すなほめくみも深きいはてゐの神。

こゝにしばし休らふほどに、ゆくりなう雨ふれば、いそき皈るとて、

夕立に菅の小笠もとりあへずみのしろ衣ぬれて涼しき。

中和、しとゝにぬれてイて、

かきくれて外山をすぐるゆふだちの雨のあしときあとの涼しさ。

くれちかづきて安彦がもとにつきたり。

山伏の家

十四日。つとめてこゝを出たつに、中和、近きわたりまでとて送りす。妙見山黒石寺のこなたに休らへば、いと高き木のうれに幣(みぬさ)、しらゆふ如(やう)のもの付て、木のいたく茂りたる中より見えたるは山臥(やまぶし)の栖家(すみか)にや。

拈花山正法寺

無等良雄は無底の弟子

居酒屋情景

優婆塞が一夏こもるおこなひのしるしを峯のまふしにぞしる。

かくて拈花山正法寺にまうでむとて其寺に至る。けふは始祖無底禪師の齋忌日とて僧侶あまたなみ居て、御讀經のこゑとよめかして、此おこなひも、なからをへぬ。此禪師の御弟子は無等良雄和尙とて、俗生は万里小路中納言藤房卿にて、出羽ノ國秋田ノ郡山內莊松原村の補陀洛寺ノ二祖たり。開山は卽無底和尙也。無等良雄西來院を建て閑居し、又嶺梅院に住て後寺を出て、至る處をしらずといふ。

法の師の心の花もゑみのうちにひらけそめにし山ぞたふとき。

しかして安彥中和を別るゝに、なかまさ。

今しばしひきやとゝめんつまごとの緒絕の橋を過るたび人。

返し。

行がてにこゝちひかれて爪琴のをだえのはしをえやは渡らむ。

ふたゝびとて別れて、夏山といふ處に來る。

さらぬだにぬれしなみだのたび衣また夏山の露分て來ぬ。

酒酤軒の胡床に人あまた居て濁酒飮つゝ、なによけむ、西根の池西膽澤ノ郡に在る大池也の鯉鮒と鼻聲に唄ひ、今ひとりのあら男、面は丹塗二王の姿して、あな世ノ中や、ますこし飮けれど價なし、

こしふな

なじよすべい
ひさげ

田河津より猿澤村へ

麥稈の牛馬

葉山社緣起

はや腰鮒腰錢をいふ。むかし錢を鮒形に鑄たるよしをもはらいへど、是を考るに、蝦夷人賃料をブンマといふ、ブンマの轉たるブナならんかしみながらつかひはたせりと酔哭すれば、後なる翁、いかりはらだちて聲高にのゝしり、あのばか、あさましのやつかな。わがふところに金一分あり、是とらすべし、なんぼも飲へと投やれば、酒店の女、手の前へには錢すこしたうべ、かねひときりを、なじよにすべいと云ひつゝ提にくみ出たり。みなひぢを曲て、はなうち鳴らすぞ多かりける。

　味酒にゑふればうさもなつ山の木陰涼しくひち枕して。

此夜は田河津に出て宿かる。

十五日。けふは、あまつゝみせでいでたつ。此あたり、野にも山にも水乞鳥いと〳〵多し。狹衣に水戀鳥のおもひし給ふといへるも此鳥の事也。鳴聲あはれげに聞えたり。こゝを行〳〵思ひつゞけたり。

　雨晴れてまた袖ぬらすうすごろも水こひ鳥の聲のあはれに。

此あたりは前にも見し處也。猿澤ノ村なる中津山忠といふ人の家に宿づく。童ども小麥の莖を束ねて牛馬の形を作り、桃の木にて弓を造りひきまがなへて、さゝやかなる篠の矢をはぎ、それをその馬うしに添へ五穀の苗を負せ、また粢をつくりて是秣として、うち群れ手ごとに曳ありく。としごとの、けふのためしといへり。日高ければ大原寺にまゐりて葉山ノ社

奥の葉山

猿丸太夫の生地

小葉山觀音

小丁翁物語

補陀洛山の菩薩を崇む

の來由を問へば、寺の優婆塞いらへていへらく、神はかしこくも、なぎ、なみ二柱の御神、八幡ノ御神をいつきまつりて、いとふるき神社也。いにしへ氣仙ノ郡に菅原ノ中納言某ノ卿とておはしけるが、都の名處ゆかしからせ給ひて、大原、小原、八瀬、東山などをうつし給ひしころより、奥の葉山と云ひし處也。猿麿太夫も此猿澤より出生られし處とて、家居の跡さだかに殘れり。今そこを鶴が嶺ノ大權現とまをし奉りて、内には彌陀、藥師、觀音安置まつる。また小葉山の觀世音は圓仁大德の作佛也。其菩薩堂もあばれはてしとき、此山の麓に小丁といふ翁夫婦ませり。ひねもす此山に登りて木の實、草の實を採り、草の根を掘りてくひものとして世をわたり、いつも觀世音を拜奉る事久し。あるとき山鳴り谷ひゞきて、圓仁大師の加持寒泉たちまち涌キ上ガり、あやしの光かゝやふ。小丁おとろきてこれを見れば、黃金ノ佛あらはれませり。其くがねのみほとけをおのが家にもり奉り來て、柴棚を構へてすゑ奉りて、あけくれ、あなかしこ、我に子一人たまへと、いつも、いもせ、あけくれ祈れば、二人の夢に、汝かせちなるこゝろさしにまかすべし。見おごろき、いよゝぬかづきいのり奉れば、七十に近きいもせの中に男子ひとり產り。恐さ尊さ身にあまり、名を大夢とつけたり。大夢、をとなしうなりぬれば、かゝる尊きみほとけを、かゝるきたなき、おのが埴生におき奉らむ事恐しとて、此處にうつし奉りしとなむ。また七十五代崇德院の御宇保延二年丙辰のとし、

名取ノ郡の旭ノ神子、補陀洛山の菩薩をうつしまつりし處也。今は寺めぐりになすらへて、廿六番の札うちぬ處也。陸奥守藤原準房ノ卿の歌とて、「歌人の言の葉山の名も茂りもるゝかたなき誓ひうれしき。」名取の老女の事は新古今集に見え、また謠曲にも作りて世にいちじろく、人知れる女也。

小蛇の奇事

あやしき事あり、此山に鉏鍬たつれば小蛇いくらともなう出るは、いかなるよしにか、さらに知れる人なし。むかしよりしかりと、いひ傳ふといへり。

大原の芳賀氏滯留

十六日。こゝを出て大原ノ里につきたり。此郷五月三日の夜みな灰となれど、芳賀慶明が家は河ノ邊に在れば事なしとて訪へば、よろこばひて夜打更るまで月見語らひて、歌はいかにといへるに、

　　おもふどちこゝろのくまも夏ノ夜の月にかたらふ袖の涼しさ。

歌二ッ三ッあれど、みなもらしたり。

二十日。こゝを、近き日出たゝまくいへば芳賀慶明ノ云、此暑サにいづこへか行べし、秋の來らば松嶋、雄島の月は往て見てまし。夏のかぎりは、此川のべの家に在りて暑サを避ねなンど、いとねもごろ聞えける事のうれしう、こゝろおちゐぬ。

蠶はまぶしに麥ははつきに

養蠶の多かるも、みな、まぶしのわらにとりすがり、外には太麥刈りて、はつきに取りかけて乾し、この雨間なくてと、いとなきをうれひあへり。

宥映師の事

室根山登山

君が鼻山

廿二日。「河夏祓」といふことを、

みそき川つみも流にはらひては水のこゝろのちりものこらず。

廿四日。家に在りとある人々季忌宮精進せり。けふ八幡ノ宮に詣て此寺に訪ひて、なにくれかたらふに住僧の云ク、享保のころならむか此寺に宥映上人とておはしき、いと〱好キ人にてよめる歌多かる中に、「露すがる鳴子の綱も長き夜の月ひきこぼす小田のますら雄。」といふ歌は、世に知られたる歌也といへる。よしありし歌人とぞおもはれたる。

廿五日。牟婁峯山に登らむとて、芳賀慶明をはじめ、人々うち群れて吹上といふ處にいたりぬ。うべも風たち、あな涼しとて、人みな、なめらかなる苔のむしろに圓居せり。

水無月のあつさもさらに夏衣裾ふきあげの風の涼しさ。

といふを聞きて慶明。

分のぼる道をさかしみやすらへば風吹上のみねぞ涼しき。

猶のほれば、むかふ方遠からず君が鼻といふ山あり、此山のさま、擲石うち重ねたらんやう也と人々見イむ。そを見やりて、うち戯て、

いくばくの峯うちこえし雲印地勝チしか君がはなの高サは。

とよみしを人々笑ふ。尾越嶺こえ小竹かい分て、やをら御神の鎮座丹幃にいたる。新山、本

新山、本山

山とて神祉ふたつならびて、まことにかみさびたる處也。そも〳〵此本山は、「養老二年戊午ノ九月十九日陸奥守鎮守府將軍從三位兵部卿大野朝臣東人建之」と棟札に見えたり。室峯ノ權現とまをし、内には十一面觀世音を祕まつるといへり。こは四十四代元正天皇ノ御即位の靈龜の元より三四年を經て、天明の今年までは千歳餘年やふるらむ。また新山權現は九十四代花園院の御世正和二年癸丑のとし、陸奥ノ司葛西形部太夫淸信建之」とあり、内には聖觀世音菩薩を齋る。

幣とれは心も涼しむろね山峯より尾よりはらふ山風。

芳賀慶明。

かしこしなゐやび並居て諸人のあふくも高し神の惠を。

山上展望

圓仁大師護摩おこなひの跡とて、梵字彫たる石苔に埋れたり。高キに猶のほれば氣仙郡の浦々、味、二タ渡リ、金花山なンど、雲のむらだてる中に見えみ見えずみ見やらるゝ、いはむかたなし。人々樏子、竹筒ひらきて坏とりぬ。かくて山を下ル。山のなからはかり小高キ處あり、そこに白牛の臥る形して方解石あり、眞白なる處、いさ〳〵上品石也。此飯さ、麓なる山里に

麥餅を食ひ濁酒を飲む

休らへば家の刀自、こは、につかぬものから、ひとつ、めせとて、蕎麥の餅とうだして進む。人みなたばむものは、なにゝまれたうびてむとて、ひたくひに喰へば、未嫁、桶にしたみこのせ

楢葉ほける

藤天蓼の葉柔多し

小林の良善院

續石神參詣

て醸酒うち入れて、かいやりしぼり漉て、大ひさげに盈して、是また、のみねとてもちづれば打ゑみて、いざ一坏の濁酒を飲べくとて、居ならひて飲ぬ。門田には田草とり〱にうたひ、また畔に休らひ、けふりうち吹つゝ語らふを聞ば、此田もやゝ穗に出なん、小楢の葉のはや二度毫たり、今一度開葉ば、いや穗に出なん。此年は秋世の中ならむ、藤天蓼の葉柔白厚いと〱多しといふを聞て、稻作良ば、民家はなにのうれたき事かあらん。あな樂し、飲や唄へと又手をうちてうたふに、はてしなければ、日も山に入りてくらければ、手火炬ふりて大原に皈る。

廿七日。小林といふ山里の良善院ノ清隆法印を訪らへば、法印はふるき器財もたる家にて、なにくれとうだし、また古佛いくはしらもをがませ、又石弩あまたありける中に、品よげなるを五六贈られ、また大なる雷斧石をも、つとにせよとて贈られしが、此石半分碎しかば、

此屋戸はいく万代になる神の斧の柄さへもくたす山里。

こゝを出て、くら〱になりて芳賀のもとに來る。

廿九日。水無月も、けふをかぎりにくれ行となもいへる。都都喜石ノ神にまうでぬ。こは阿倍比羅夫、あるは虫麿朝臣などの寄附品ものもありて、むかしは榮し處也。黒麿の歌とて

云ひ傳ふ歌あり。「よき事を万代かけて續き石の神の惠も大原の里。」しかいへれど、その時世の風ともおもほえず、いにしへ貞觀のころ、山城國大原野の大明神を齋奉りし處といへり。また寺を續石山大原寺といひて開祖は圓珍大師にして、藤原清衡豐田の館より平泉へ移り來て、吾館の鬼門を守護給へと誓願せしは此神社也。本地は藥師如來を齋りて圓仁大師の作也。此石神はいと〳〵古キ御神也、さりけれど石神といふもいと〳〵多し。文德天皇ノ實錄四ノ卷に、仁壽二年八月乙未云々、辛未陸奥國云々、衣太手ノ神、石ノ神、理訓許段ノ神、配志和ノ神、儛草ノ神、並ニ授ク從五位下ヲ云々。」と見えたり。（天註――三代實錄には衣多宗ノ神、理計段ノ神とあり、異本をもて誤字落字を補ふ。）

治れる御代いつまでもつゞき石なほうこきなく神や守らむ。

良善院の清隆法印をふたゝび訪へば、さけ、さかなもとめ、あるしめけば、人々語らふ。雨のいたく零り出れば、此ほどかれ〳〵なる田もありて水ほしく思ふ處へ、よき雨かなと人みなよろこびあへり。夕くれ近うなりて雨も晴たりしかば、河ノ邊に出て手あらひ口そゝぎて、

みそき川あめにみかさもますかゞみ秋うつしよる波の涼しさ。

れいのごと、くれて芳賀のやどに皈る。

委波氏迺夜麼

南部

天明八年の夏のころ、みちのおくのくに膽澤の郡をたちて、松前に行のみち行ふり也。

南部路のことのもはらあれは、「いはての山」てふこともて、このふみの名とせり。馬門のせき屋より筆をとゝむ。かくて津刈路に至りては「そとかはまづたひ」てふ册子に、島渡りまてつはらにかいのす。

松前への船出待てど

松島、鹽竈に遊ぶ

わは、いつことなうさすらへありきて道奥に至り、こは、雲離れ遠きくにべにも來けるものか、蝦夷か千島の月のあはれはいかゝあらんと、そとかはま波こゝろにかゝりて、蒼杜のみなとへより船出せまく、まづ善衞のみやしろにぬさとりたいまつりて、なみ風たひらかにみそなひたまへとかしこまりて、やませといふかせを追手に行といふなれは、その風のふきこんかきりは、海士のとまやにあまた夜旅ねしつれと、さちなるかぜのたつきもなう、見やるわだのちさとには、あら浪のたちにたちてあれにあれ渡は、よき日のいてこなん空は、いつ〳〵にかあらんと浦人にとへは、葉月のころは海のならひとて、かゝるものにてと、ひんなう聞へたれば、すへなう、えしも嶋わたりせで、けにや、かうやうのことも、ふなみちやすからさるさとしを、いのりし神の、みさかにてやとおもひめくらし、ふたゝひとこゝろにちきりて、こたひはとゝめたり。やをら、あたゝら眞弓ひきかへし、松島や、をしまの月にあくかれ、しほかまの浦こくふねにむやひし、宮城野の萩のまさかり、眞野のかやはらわけつくし

膽澤郡前澤に來て三年

て、石上ふるきところ〳〵を尋ね、ふたゝひ膽澤の郡にめくり來て七のみやしろにぬさまつりて、來藻川のこなた麼弊舍波のうまやのほとりに、さゝやかの庵むすひて冬籠せり。あら玉のとしたち春にもならば、こさふくゑその島人も見てんとこゝろほりすれと、ことしは世のなりはひよからず、行みちのわつらひやあらんと人々のせちにとゝめ、あるは、こゝちそこなひふしくらし、いて、ことし〳〵といひもて、手ををれは三とせにたれり。こや、入江のあしのほゐにはあらて過にしことのくやしう、すゝろに、こゝろあはたゝしう。天明八とせの夏みな月のなから斗、かとてせんといへは、ふたとせ、みとせをこゝになつさひたるとて、

六月十五日前澤出足

里の子ら、わらはへまて、ほろ〳〵と袖ぬらして來集り、あるは老たるわかき聲をそろへ、とく〳〵又もこゝに來ませなと、みなこととひていぬれは、わきてあさゆふ、とひ、とはれ、むつかたりせし友垣なと、菅の根のねもころに、うまのはなむけせんとて圓居したるをりしも、靈桃寺の文英上人のもとより、たてふみにこめて、

見はてすもとくたちかへれみちのくのかきりしられぬ蝦夷か千島を。

となんありけり。此歌の返しをす。

ゑそ舟にのりてちしまをわくるともかきりも浪のたちかへりこん。

おなし寺にすめる潜龍法師のこと葉に、

白河遠去向邊州　惜別慇懃送壯遊　常伴腰間秋水劍
復收懷裡夜光球　青森山岳雪花亂　合浦關門紫氣流
縱是松前風物好　歸程自誤莫淹留。

この末の文字を末にむすひて、

うら山のなかめありとも皈り來んたつきもなみにこゝろとゝめす。

と返しす。信應の歌に、

浪遠くたちわかるともつな手縄又くりかへせわかのうら人。

とありける返し。

こきなれし浦をしるへに綱手なはくり返しこん和歌の友ふね。

安平廣影のいはく、

境望欲極海東州　離曲送君萬里愁　至日松前秋應近
渺茫雲路乘孤舟。

といへるくしの返しを、

いましはしこきわかるともほともなみおなしうら輪によるのともふね。

俊龍のいへらく、

積水渺難極　安知澤國東　雲霞如散雨　滄浪若乘空
停撓往看日　征帆自信風　孤舟應有興　裁比櫂歌工。

おなし人のことはに、

河梁柳色幾離居　六月海風轉欲疎　雲路縱遊九州遠
冥鴻寧忍報書虛。

といふふたくさの返し。

わたつ海はいかに見はてんもろこしの鳥もつはさのつかれてやこし。

よな／＼はかはるあるしにかたらひて長き旅路をひとりゆかまし。

高橋久武ふみてをとりて、

海山をへたて行ともたよりあらは來るはつかりにかけてつけこせ。

といふ歌の返し。

そなたへと行はつ雁のたまつさをこゝろにかけて人をとはまし。

盛芳のもとより、

わかれてのよすかはいかに海原やまつほとなみのたちかへれかし。

とありしかは、此返しかいやる。

別れてはよすかも波の海原やしほたれころもたちかへりこん。

那須資福の、

行ふねの蝦夷かちしまをめくるとも秋風ふかはこきかへれかし。

とありつる返し。

さらてたにうけき秋風身にしみてとくめくりこん夷のしまふね。

かくてわらくつさし、つかみしかの筆して、

すみすつる庵そ出うき柴の戸のかりそめふしも三とせへぬれは。

と、ゆんての壁にかいつくれは、人々見て、うちすんすれは、正保といへる、ひはほうしの聞つゝ、

出うきと君かいひけんことの葉をのこすいほりにありとしのはん。

とよめるもおかし。けふは大室てふ處にいきて、鈴木常雄をとひ別れてんとていつれは、正保、わらはをともなひをくりし、したかひ來けり。みちいと近く、六日入の、かのおほむろに至りぬ。とみなることのありとて、正保は前澤にいにき。あるし、なにくれとかたりくらしぬ。

六日入村に

十六日。あるし常雄、しはらくのわかれなるへし、けふはかりはと、せちにとゝめかたらふ

名殘盡きず

ゆふつかた、賚福、盛芳、久武のぬしとふらひ來て、餘波やるかたなう、ぶたゝひなとありて夜ひとよ語ぬ。

十七日。あしたの空かきくもりて、やかてふりくる雨によそふとて、那須すけとみ、まつとなふ。

旅衣したふたもとをいましはしたちとまれとや夕立のそら。

とありし歌の返し。

たひころもしとゝにぬれて夕立のふりわかれゆく袖そものうき。

あるし、つねお。

わけわひん山路を遠み見るかうちにこゝろにかゝるゆふたちの雲。

とそありける返し。

あすも又こゝろははれすわけわひんよしいふたちの雲たゝすとも。

たかはしひさたけ。

いかゝせん千里をすくるゆふたちのふり別れてはぬるゝたもとを。

返し。

白雨は波のちさとをはるゝともこゝろはくもるうき旅のそら。

高梨もりか。

いましはしわかるゝ袖に夕たちの雨もなこりの露むすふらし。

この返し。

ゆふたちのよそにはれても行袖につゆの情のかゝるうれしさ。

もりか、ふたゝひ、

たひ衣明日のなこりをおもふとてはれにし雨に袖そぬれぬる。

とありし返し。

あまはれにかはくたもとをかたしきて明日の別にぬれてゆかまし。

雨又ふり來て日はくれたり。やをら更行ころ、かみ河のへたならん、川長をひたよひによぶ聲の、雨の音にまきれてほの聞へたり。

舟よはふこゑもをやますふる雨やこやわたしもりとまにぬるらし。

雨のをやみし雲間ゆ、月のさしのほりて、さうしゝら〳〵と見へたるとき、けしきはかりおしあけて、あるし。

海山をへたつるとても空にすむ月にこゝろをかけて偲のはん。

となかめてける返し。

うみやまをへたてしとても友に見し月のなさけをえやはわすれん。

久武。

よな〳〵はおもひそいてんまとゐして月にかたらふかゝる樂しさ。

返し。

うちむかふたひにしのひてみちのくのそらはいつこと月にたとらん。

とりの、かきろと鳴は、あるし。

けふも又あかすかたりて呉竹のひとよをあかせわかの友とち。

といへれは、人々にかはりてこの返しをす。

おもふこと語りてけふもくれ竹の夜半のふすまもしらぬたのしさ。

枕とらんとすれは、とは、しらみたり。

十八日。つとめて雨いたくふれり。人々、よへのこうしにや、あさいして、はれたるころ起出て手あらふ。けふ、このおほむろをいてたゝんとしたるに、あるしの云、

皈り來て尙もかたらへほと遠き蝦夷か千島の秋のあはれを。

とありける歌の返し。

いつの日かおなしまとゐになにくれとゑそかちしまのことかたらなむ。

又、つね雄。

おもふそよなみちも八重のしほ風にふかれてわけんきみか行衞を。

返し。

おもひやれ八重の潮風身にしみて友なし小舟さして行衞を。

かくて、よそひして小笠とれは、資福。

うき旅の友とし契れこよひよりかりねの床にやとる月影。

返し。

こよひより人の面影しのはなんかりねの屋戸の月にむかひて。

久武。

おもひやれ名殘つきせぬことの葉につゝめと餘る袖のなみたを。

返し。

わすれしな人のこと葉の露なみたわかるゝ袖にかゝるなさけを。

やとのあけまき、あるしをはしめ、人々に、ふたたひといへは、長き旅路をことなうなと、みな、とにわかれて、水澤のうまやにつく。こゝにまつる鹽竈のみやしろにまうて、ぬさとりて、この神ぬし、さゝ木なにかしかもとに、こよひはとまる。夕くれかけて雨又零來ぬ。

十九日。あしたより雨猶ふりて、空さためなきけしきなれは、あるし、ひとひ、ふつかはありてと、ねもころに聞へてくれぬ。

鹽竈社修復

二十日。あるし、あさきよめしけるとともに廣前にいたれは、たくみらあまた來て、けふ、みあらかをふきかふるとて、そぎたもてわたり、千木おきかふるなと聞へたり。こは、こんふん月の十日なん、血鹿の浦のみやところに、おもきかんわさのあれは、こゝにいはひまつれるみやしろにも、おなし日祭してすゝしめ奉る、そのもふけとなん。

かしこまるたひにめくみのますかゝみうつせはちかのしほかまの神。

さゝ木をこゝにわかれて、みさかおりはつれは、けふたつ市女のたよりにふみもて來るをひらきみれば、人々のことつてもいひて久武の歌あり。

いくたひかふり返り見るたひころもたち別にし人の面影。

この返し。

たちわかれひとりゆく〳〵たひ衣なれ來し人の俤にたつ。

大林寺曇華

たよりもあらはと、かいて、相しりたるかもとにのこす。雨のいたくふりくれは、大林寺に入て曇華上人をとふらふ。上人、老たる身は、ふたゝひのたいめ、いかゝあらんなと、おなしくにうごのよしみありて、ひたふるにとゝめたまへば、こゝに語らひて更たり。

八幡村にて

畑中氏を立つ

廿一日。いさゝかのあまはれにとて出くれば、又ふり來けり。畑中なにかしのしるよしは、鎮守府八幡のみやところに近く、そこにかりの栖居しけれは、とひよりて日はやゝくれたり。廿二日。雨のやみてけれと旦の空うちくもりたれは、いかゝとためらふほどに侚ふりしきりて、けふは岩谷堂といふ里まて渡らんとおもへと、水のいとふかくして此上川の舟いたさしなど人のいへは、すへなう、いかゝして江刺郡へいかんと、ひとり空のみあふかれてものおもふをりしも、あるし藤白華、別のくしとて、

韎鞨城頭瀚海流　路通魏絳論邊秋　波間織綃泣珠客
鵬際宿雲燃犀舟　雪帳風旗逢夜獵　胡琴羌笛足春遊
歸來應見名山誌　如畫烟霞是滿州。

となん、かい聞へてけるにむくふ。

笛の聲ことのしらへもあら磯の浪にまきれんゑその遠州。

八幡の神籬にまうてて久斯美多万をも拜み奉らまく、いて、そのみやしろへとおもふに聲高う舟よはひせり。こは、かみ川の行かひやあらん、とく〳〵と人々のいへば、いそきほゐにはあらずて、そのかたをよそに出たつ。しかはあれと、去年、さをとゝしも、ぬさとりをかみ奉りし。「あめつちとともにひさしくいひつけと、とすんして、こゝよりをかみ奉りて、あ

るしにわかれて、やはたを離れて川のへにいたれば、足さくあれ、舟いづとて、さかまく波を棹あまたの力してつきたり。いはや堂の里に至り、相しれる大和田なにかしのもとにつけは、三とせ斗近となりになつさひたる、前澤の福地なにかしこゝに在りて、きのふとひ來て待わひつるなとありて、ふたゝひのたいめせまくてと、ねもころにものし聞へて、このぬしの歌あり。

わかれてはそれとよすかも夏衣たもとに露をおくのほそみち。

返し。

夏衣うすきたもとに露いたくおくのほそみちひとりたさらん。

このぬしのめなりける志咩子のもとより、

別てはたへすそおもふみち遠くひとりゆくらん君か面影。

つねにかく聞へしふしもあらねと、人をわかるゝをせちによめるなるべし。

草枕かりねのやとの夢ならてわかれし人をえやは見るへき。

と返しす。この宿にやまうとありて、人のいて入りもうるさからんとて、あるしのゆかりの、ことやとにうつりいきて、こよひはこゝにねなん。かつ至れは、はらふくらかなる女とも、いと多く行かひをせり。けふは子安地藏尊の祭なりけれは、かく、はらみとのみ、いつも

縁結の夜祭

聖徳太子宮達摩尊者社

伊勢詣での標し

鶴脛五郎の館址

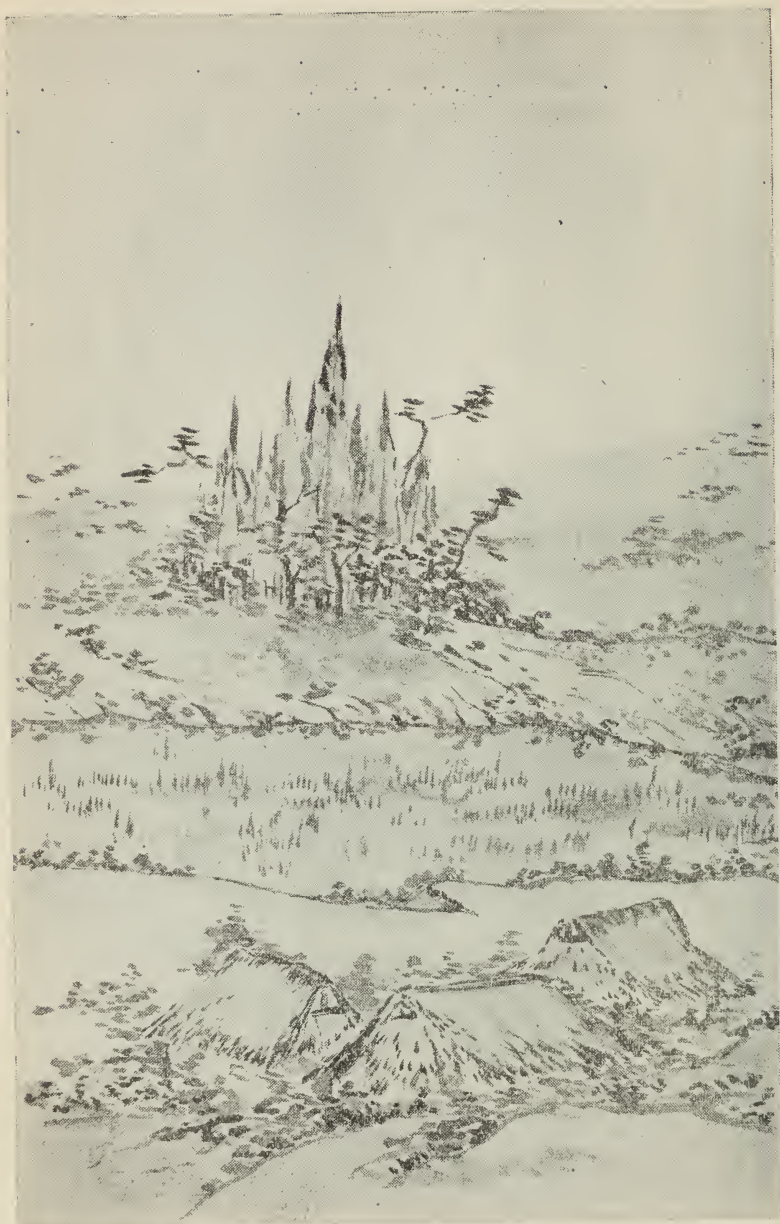
まうてけるならはし也と語り、いにし十六日の夜は、この里に近き小田代といふ處の、十一面觀音ほさちのまつりありしは、世にことなること也。いかにとゝへは、わかき男女さはにむれまうでて、それらかかへさには、われよしどおもふ女にけさうして、松のしたかけ、堂のかたはらにても、まくばへり。こは、男さたむるわさなればとて、一とせにひとたひの、いもせむすぶの神まつりとて、まうつることを、おや〳〵も見ゆるしてけるならはしとなん。大原のさこねも、しかあらんかとて、あるし、はと笑ふ。

廿三日。きのふのことに雨ふりてけれは、おなし宿に、おなし友かきとものかたりして、けふもくれんとす。

廿四日。いとよき日になりて出たつ。このかた岨に、聖徳太子のみや、達摩尊者社とてあり。そのゆへは、秀衡、くにゝ都をうつしたるものかたりありて、此あたりを片岡ともはらとなへて、いかるかやとみの緒川のふることをもて、いにしへを祭り、ふることを殘しおきけん。田の中に家のふたつ、みつあるに、かはきたる鱈のかしら、鮭のかしら、あるは魚のかたを木にて作り繩にかけ、そのかご〳〵にひきはへたるを人にとへは、伊勢まうでしたる人あれは、それか皈りくまで、そみかくだなとの物乞ひ至らさる、けがらはしき人の入り來ぬ料、法師をよぐの門しるしといへるもおかし。倉澤といふ村に出て、見やる高岨に松杉の生

三照村
佛堂に鳥居を立つ
鎌倉尼將軍塚
下門岡村
圓仁坐禪石
石經塚を築く

ひましりたるは古館とて、鶴脛五郎家任のいにしへをしのふ。三照（みてり）といふ村に名たゝるふるつかのありけるよしを聞て尋れは、坂井田といへる、鳥居のあるをしるへにと人のをしへしまゝ、はるばるとそこに至れは大日如來の堂あるに、おない、をくれ來てぬかづく。みちのくのならひとて、あみたほとけ、やくし、くはんおんほさちにも、神とひとしう鷄栖をたててあかめ祀る。この堂のほとりなるところに、つちの小高く草生ひしけりたるをさして、これか、かまくらのあま將軍の御塚也とをしゆ。いかゝして、こゝにはかくしおましましてけるならんと、あない、いふかしげに語る。むかし此あたりは、みな、つるはきのしめしところにてなと、語りすてて別たり。男岡とて、あたごの祠あるをめてに出來るに、人あつまりて、つゝみうち笛吹すさむは、けふなん湯祭そせりける。下門岡のやかたに出て、みちしはしのほと行て國見山極樂寺の前を弓手に、眞木の立ある山中のみちをよぢて、胎内潜とて、巖のしたを、せくごまりて通る。此石の上におはして、圓仁大師のごま、みときやうし給ひし、名を坐禪石といふとか。山かすかに鳥鳴て、伐木の音聞へたるとわけのほれば、老かゝまれる法師の、木の根をほり、いはほをくだいてけるとて、手に大鍵、ついたびなといふものをとりて、ひたうちにうちてけるか斧のひゞきと聞へたり。さる法師は、百とせに近き齡なから眼あきらかに、小石にみのりをかいて、こゝに埋み塚してけるとて、いさゝか人手をもからす、

委波氏迺夜圖

ひねもすあせし、日にくろみてける、この極樂寺の老法師なりとか。鐘の聲のいと近う山谷にひゝきわたれるは、まうてし人やつきたらん。やかて洪鐘のもとにいたり、かくて、よこたふはしこにのほれは、三間を四面の堂を、そひへたる岩の上に柱つき立て、いとたかやかに、かみ河にのそんでつくりたれば、大なる松杉なとの生ひ茂りたる、木のうれのみふむこゝちせられてあやうげなり。おましませる觀世音は、かしこくも圓仁の作り給ふて、くにうごたふとめり。うち見やらるゝ山々嶽々、北上の河くまを見れは、水上は見へねと、むかしいふ狹布の郡、いまいふ鹿角の郡よりもおちそふるか、岩手郡をなかれては江刺、岩井をめくり、鹿股のほとりにてふたつにわかれて、本吉の海に入はつるまて、布、たく縄なとをひきはへたらんやうに、見へみ見へずみめくり、めぐれり。をはしまによりたる翁、見たまへ、あなたのひんかしの木の中には、金福山定樂寺とていにしへ大寺ありて、寺てふ寺のをさたりし址なり。北は口吸森、西は三鈷か嶽、男岡、女岡、午王坂はた岩脇山ともいへり。寶塔山には八幡の祉、大日の堂あり。南は高森山にて神明の祉あり。八王子、尖か杜、そのひんかしに釋迦ふちの堂、その南に毗沙門天、岩入りの觀音、わかれ山、屏風石、とつこ水、こは、みな近きさかひなり。丑の方には稗貫郡内川目村の早地峯山、藥師がてんしやう、池上山、これを三の山とはいふ也。亥のあはひに見ゆるは田茂山の姫か嶽、この山は岩手郡にそ在ける。乾は

斯波郡にあたり栗谷村の南昌山、この山なんむかしは德か杜なりしを、人もはら毒か森といひあやまれば、しか、くにのかみの名つけ給ふるとそ人のいへる。いはで山、いま人の岩鷲山と唱ふ。しはの郡の吾妻岑、とやが森ともいふ、これなん片寄村に在り。ところの新山權現、よねか森ともいへり。眞酉に仙人峠、かの水澤山にては銅ほり、この千人たふげを越れば澤内とて、いとひろき村里のあり。坤に三笠山、前塚見山、鞍懸山、土倉山、鳥坂山、駒か嶽、この山は南部、仙臺をさかふとか。經塚、若柳、横岑、小檜山、高日山、酸川峠、高檜山、こは午未にあたれり。かしこはとゝへは、南部路の飯豐杜にて侍る。南にはるかに見やられたるはおとけか杜にて、栗原の三の迫に在り。この良に近きは明神山といふ、こは抓木田村に在り。又、躑躅が比良とて口内邑に在り。はた、まとらのかたに人首の物見山、卯のくまには伊手村の河原山、横瀨なる女國嶋、おくにしまやま、小田代山、巽に見へたるは太田代山、黑石山、長部山、獨活の森、こは舞草に在りて、いにしへ時平のをとゝを祀りたりしところにて、そのをとゝのもたまひしといふ、觀世音をおきて、いま、をとゝの森ともしかいふ。

うどの森

うとのもりとは、しかすかにみなよこなまりて、うとの觀音とはいへり。いなせの渡りはいつこ、あしこの男岡のかなたを、むかしはわたいたれと、いまは相去りのうまやぢに通ふ岩城川といふ。「道奥の門岡山のほとゝきす稻瀨のわたりかけて鳴也。」とは、圓位上人の歌と、

稻瀨の渡り

尼将軍の
大日如来の堂

門岡村に下りて

杁木田村

もはらこの國にさたせりなと、つはらにかたり聞へてけり。此なかめおしけれと、日もやゝ西にかたふけは、翁にいとま申せば、黑川郡の七森、岩井の郡なる霧山絶嶺の、あくろ王かすみつるあたりは、秋ならては見ゆましきに、又ものほり來ませとわかれて、樓をくだりてあないのいふ、こたひは左に落んとて、さいたつ。老法師あせおしぬくひて、ことなうなと、極樂寺の軒にまくたりに門岡村に出て、あない去ぬ。このあたりに、雀の宮といふさゝやかなる社のありと、かねて聞しかば、とひたつねても、いつことしらす。このすゞめてふ名の、しづめおかの神の御名にいさゝか相似たり。かくいひはぶき、いひあやまれるたくひいと多し。いま陣が岡に祀れど、まことしからさるよしをいふ人あり。鎭、陣、こゑの似たればしかいふにや。もとも陣か岡もいとふりたるところ、右大將賴朝も、そこに旅寐しおましませしことなとありきと、おもひ出たり。江刺郡の一座鎭岡神社は、塩安の神をあかめ祀ると傳へ聞し。

かしこしなあらふるとてもぬさとらはこゝろしつめの岡の神籬。

こゝより手酬奉る。杁木田の村をさ及川胤修がもとに、くれて宿つきたり。あるしの翁、こゝろある人にて一夜を語る。

廿五日。空のいとよけん。さりけれと、きのふの水いとふかく、いまた北上のふなわたりあ

夏とゝこかねご

南部領に入る

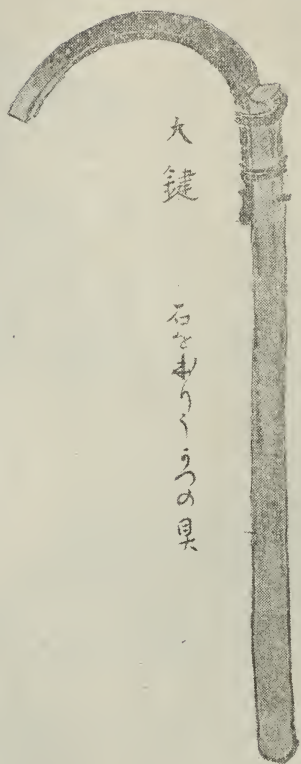
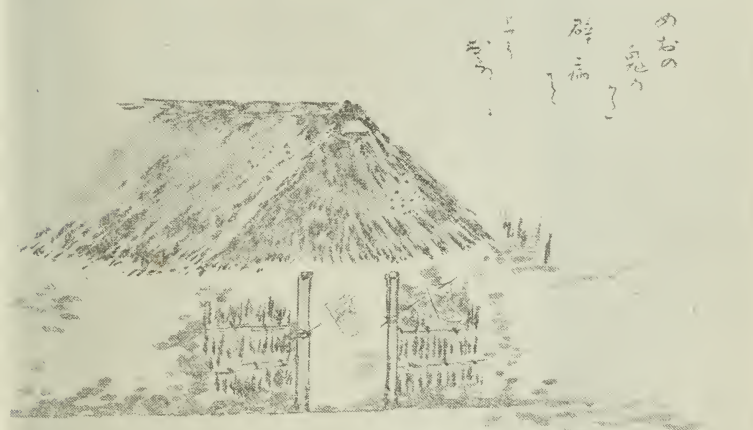
避病の禁厭

阿吽の鬼

花巻邊の毫塚

らされば、おなし翁と、ひねもす話りてこゝにくれたり。
廿六日。あるし、つふねを呼て山路のあないにつけとて、此男の行にまかせ、しりにしたかひて出たつ。村のうなひめ夏蚕（なつご）かふとて、このとゝこの中には、かねご多かるなと桑の葉こきかくる。とゝこは尊しといふこゝろにや。科野の路にては、たふとさまなといへり。かねごは死たるをいへり。いくほともなう南部のさかひに入て、黒岩といへる村に入くれば、家ことの門の柱の左右にわらのかたしろを作りて、弓箭、つるぎをとらせて、それがくびより、しときやうのものを、すゞのことくかけたり。風なとをひし／＼と人のやめば、かゝる人のかたしろをつくり、もち、だんごにても、家／＼にすめる人の数ものして、人ことに身のうちを撫て、糸につらぬきかけて門にゆひ立ておけるとか。はた、里（マヽ）なとにては阿吽の鬼とて、紙に面のみかいて、にぬり、串にさしはさみて軒にさしてけるも、ふりことならずと、あないのいふ。このあないにわかれて、かみ川のわたりをし、二子といふ村をへて、はいまのつかひの行かふは、うまやちになりぬ。花巻の里近うなりて、頼朝の、槻の木のもとに上箭ふたすちを射立て、これを神に奉りて、いのりし給ふたるはこゝにて、殖槻といふ、今いふ毫塚ならんか。相しれる伊藤なにかしといふくすしば、三とせのむかしもかたらひてける人なれは、こゝに、うまのつゝみうつころつきて、あなひさとて、かたりてくれたり。

大鍵

晴山
地震ぬる山
久曾万留川

廿七日。あすのためよからんとて、日はしたなから、ひるよりこゝを出たつ。みち行友の云、かたはあしこと手をさして、晴山とて、女の乳子を負たるすかたの岩の立たる。此山にいつのほりても、午より申かけて、かならすなへふりぬ。いかなるゆへならん、われ、こころみにのほりしこと、ふたゝひに及ぶなと。晴山は負山ならん、子なとをおふことを負れるとはいふ也。宮の目といふ村のこなたに渡りたりしは小瀬川、又の名を瀬河といふは戀瀬河となん。

誰れとなくふるさと遠く戀迫川おもひわたれは袖ぬれにけり。

八幡の神のおましある村をへて、久曾万留川といふを橋よりわたりぬ。たか、いかにつけし名ならん。しかはあれと、ふりたる言葉の、こゝろにくし。はた、そのかみの歌に、くそかつらなとよめり、はた葛の葉を、くぞの葉といへるのたくひいと多しとひとりおもひて、かつ戯歌をつくる。

行水の神ともならていつの世にくそまる河の名になかれたる。

此水上は大瀬川といひ、まほなる名には遇瀬河也けりとか。旅人ふたり、あせに沾れたるたのごひをひたし、かれひこをあらひ水をむすひたり。

旅人のまた來ぬ秋にあふせ河あつさもなみのゆふ涼して。

石鳥谷
火よけの呪
多具那河
田の蟲追ひ
櫻町村の曝し首

日くれはてて石鳥屋に宿つきたり。
廿八日。朝戸出に見れは、軒をつらねたる屋の上に、わらをくみて、月の輪のやうにわかねて、ふたつみつあけたるは何の料にてかと人にとへは、むつきの氷餅を、みな月の朔のあした齒固の祝にくひて、つゝみわらを屋根になけあけて、火よけとそしけるとなん。ゆく〳〵小川あり、名をとへは多具那河とこたふ。又河あり、とへは、たくな河といらふ。うべ此河は、志和の稻荷の神籬のほとりをへて、こゝにてふたつにわかれたり。しはのいなりのおましこそ、まことの志賀理和氣の神のふるきみあとにとは、かねてきゝつ。河の流に、人あまた足あらふを、

おなし瀨をあまのたくなはくり返しいくたひぬれてかち渡りせん。

村ふたつみつ來れは、つゝみうち、貝、かねをならして人さはにむれて、「なにむしぼふよ、嶽からふりくだつた、こせ虫ぼふよ、こさいむしばふよ、ばら〳〵にまつられて、たけのぼりせうものを。」と、あまたの聲にうちはやし、小田のくろみち、ふみしたきありく。櫻町村に來て赤石明神をふたゝひをかみ奉りて、みちしはらくへて、郡山にさし入るへうあたりとおぼへて、人のかうへきりてさらされたり。こは十六文すまふとて、すまひとりありきしわかものなから、寺のきぬわたなとぬすみて、きのふ、この河原にてきられたりと、見る人のかた

五郎沼
走湯山高水寺
盛岡の船橋
いたこ

る。人のいふ、此五郎沼は、比爪の五郎俊衡、宮古濱にやきたる鹽をもてはこはせ、人をなみたゝせて筑たる塘なり。こゝに、はなちかふ牛のたかはきに、うるしのいたくつきて來りしを、いつこともしらさりし。はた、「旭さす夕陽かゝやくそのもとに、うるしまんはい、こかねおくおくなと、平泉に聞し物語のこゝにもせりけり。走湯山高水寺、むかしは郡山にありたりし。そのころ稱德天皇の建させ給ひしは、そのたけ一丈に高き觀世音也。伊豆の國走湯山權現を、淸衡こゝにうつし祀られたり。そのころほひは、もとも大なる佛閣たらんかし。金堂の壁の、その板十二枚をはなちたる。糺明せられしかは、そのもの、宇佐美の平治實政かつふねたりしなと、しるし殘たるふみ見てもしりき。此寺は今、盛岡にうつしてけるとなん。盛岡にいたるに、上川のふなはしかけかふるとて、はたあまりなる小舟をひきみたし岸べによりたるを、つかりしてつなぎ、くろかねのつなを、きしよりきしに引延（は）へ、駒ふみの板ならべたれば、ひし〱と人のおし渡るにましり、めしゐの男女ふたり、たつさへて行は、ひはほうしならんか。この女は盲巫女（いたこ）といふものなり。里の子の句に、「ふなはしの板子夫婦や秋の風。」と聞しは、いとおかしかりし。いたこてふことを、いかにと、誰にとへと、しれるはなう。此ものや神おろしをし、いのりかぢ、すゞのうらとひをし、あるは、なきたまよばひし、みさかをしらするは、神の移託（いたく）てふことをや、しかいたことはいへらんかし。け

浪速人に會ふ

盛岡の産物

あたゝら山

岩手山また岩鷲山

ふはくもりて、岩提山の尾上斗見へみ見へすみ、やをら晴たるを見たゝすむに、よそまりの法師ひとり、みしかき衣をまくりでに菅笠ふかくきて、ゆくりなう、しりより、こや旅人、松前の島渡りしてけるよしみちにて聞つれは、ともなひてよと名のりしけるは、浪速なる袁邇奇治とて、わさおきやうのかたりしてける人なりとか。ひとりのみ、おくのなかみちを分いかんよりはとて引連て、こよひは檢斷の宿にとまる。

廿九日。つとめて出たつ。もはらこゝのつちけとて、夏引の糸あまたくり返しもて、つむぎ、しまおりをし、黄精を蒸してそ沽る宿の、軒をつらねたれと、偏精やいと多く、正精や、まれならんかし。この市中になかれたる中津河を橋よりわたれは、鹿角郡へわかれたる巷ありて、西にわかれては猶黄精(あまどころ)をそうるめる。黄精膏もあり、つとにせよなとよはふ。さゆりの根は、大なる人の掌ふたつにのせつへう、あまたとりつかね、鶉は、名たゝるふかくさの野邊にまさりて、引聲(ひき)、ふくみ、こは明灰、尾花、袖䌫なと名づけて、とりこを軒のはしらごとにかけならべて、人にもうり、あがものと聞つゝ、あきなひものしてける宿のいと多かる。こゝに近きあたゝらやまは、いま踏鞴山ともいふとか。きけば、此山に鹿(しゝ)の宮といふかありと人の話る。うべ、あたゝらの根にふすしかの、こゝろあらんとおもはれたり。なへて此あたりは、狹布のせは布につはらにしるして、こゝにはことそきたり。岩提山の雪の、いまは

たけち残りたるをうち見れは、翁ひとり、わらはへの手をとり木のもとにたち、あのおいわしの雪といへり。嵩に鷲のすかたしたる岩の在れは岩鷲山ととなへ、おいはわしといふへきを、もはら語路あしく、はぶきていへり。いはては岩手の文字なれは、岩鷲のころに、いまし世の誰かいひたかひけん。人のいふ、岩城判官のきんたち、津志王丸のみたまを神とこの山にいはひ、津刈路に在る岩樹山の嶺には、安壽の姫のみたまを安珠比咩と祀り岩木山大權現とあかめ奉る。又いふ、此岩鷲山のいたゞきの霧か嶽といふには、いまも鬼のすめり。はた、あやしのもの、むかし埋しところ也。こなたさまには見へねども、いはでの森とて、ひかさふせたらんやうなるやまありなと語りて、此翁、いはて山の句やあらん、たうひてと、こゝろありけに聞へしかは、否とこたへて、たゝう紙のはしに、

こゝろにはそれとおもへとおもふことことの葉にえもいはてやまなん。

さかいてとらすれは、こは歌なりけりなとて、くりかへし〳〵見もて去ぬ。「おもへともいはてのやまにとしをへて朽やはてなん谷の埋木。」とすんして過れはいまはた時鳥の鳴たるを、「思ふこと磐手の杜の霍公鳥終には聲も色に出にけり。」と、いにしへ人のこゝろはへも、かつ、あらはれたるはおかしかりけり。ゆく〳〵片岨の梢より、あら鷹の、つはさをならしてとふに、林の鳥は、うちひそみたり。けにや、このあたりには島渡りの鷹ありて、すがた

もいとよげ也。其むかし、「みちのく、いはての郡よりたてまつれる御鷹、世になくかしこけれは、になうおほして御手鷹にし給ふてけり。名をは、いはてとなんつけ給へりけるを、それを、みちにこゝろありて、あつかりつかふまつり給ける大納言に、あつけ給へりける。夜るひるこれをあつかりて、とりかひ給ふほとに、いかゝし給ひけん、そらし給ふてけり。なと、大和物語にも見へたりとそ。おもひ出られたる。

　むら鳥の聲うちたへてならし羽にいはてのたかの行衞をそしる。

澁民村

このくれつかた澁民の村につく。こゝを、むかしは枯杉とかいひしと。麻の葉をきりにきりても、とすんして、

　いくはくの旅にしつもるうきことをけふのみそきにいさはらはなん。

ふん月の朔。つとめて、霧こめたるはかり小雨そほふりて、やをらはれゆけは、

　ゆく／＼は身にこそしまめ涼しさよ薄きたもとに通ふはつ風。

巻堀金勢神

道作り人々

巻堀のやかたなる金勢明神のほくらは、むかしもぬさとりしあたり、芋田、川口なとの村をくれは、むさしより、くに見めくらせ給ふのえたち、日あらす至り給ふとのゝしり、そのもふけにとて石ほり、くさ刈り、木こり、枝うち、路造りけるあらおら、すき、鍬、かつさび、手ごとにとり、ゐぶといふものに土かいいれてひきありくを見れは、それらがぬかにしな／＼の文

沼宮内過ぎ
御堂村泊り
籌木、化巾
中山村
かつかべ
ちごめる
ごほうほる
どす
くうるう

字をかいて、人あらためのしるしとせりけるも、あせにながれて、いよゝつらぐろに、あつげなり。「吾君のあまねき御代の道作りくほめる身をも哀とは見よ。」といふ信實のなかめ給ひしを、ふとおもひ出られたり。沼久内、かいらげ、ふがね、御堂村になりて日はくれて、御堂もりのうはそく正覺院の宿に、一夜をとこひ、いねたり。よんべより、かやりたかねば、ましてこのあたりは、蚊帳なとたへてあらじ。かゝる山里めけるほとりなとは、科野路の山里にひとしう柾とて、そきたをさゝやかにし、あるは、いたごりの太く生ひかれたるをくだいて、ちいさき箱に入てかわやのくまにつりて、これを、くぞまることにものしてけるは、もろこし人のふりにひとし。その名を籌木（ちうぎ）といひ、化巾（くわきん）とそいふめる、いにしへふりや殘たらんかし。かゝる御堂のゆへあれと、けふのせばのゝの日記にしたれは、かいもらしぬ。

二日。朝たつ空のくもりたり。雨ならんといひもて中山村に來にけり。こゝにすむくゞつやうのもの、小蝶の飛來るをとりて、このわらし、かつかべちごめるそ、といひてやる。わらは、あやまちてはなちやりて、なきのゝしりけるを母なん來て、こぼうほるやつかな、いつこへも、いなくなれ〳〵といひつゝ入ぬ。姨のさしのそき、あのめらし、かつかべとりてやれと聲いとあららかにいへは女聞て、どす、おほばが、又、くうるうとて猶蝶をひゆく。かつかべは蝶をいひ、ちごめるはあづけおく、たのむ也。こぼうほるは、童の、なきいさちたるをい

小繫を過ぐ

麥打ち麻刈り

故將堂

まはまつ

一戸

ひ、ごすとは癩の病をいひ、くうるうとは、つくるとも、じちをいふともいひて、はらぐろにいひのゝしるをいひ、はた、しぼるこゝろも聞へたりとなん。火行(ひぎやう)、小繫、笹目子に至れは、さとふりたる雨も、午はかりならんはれたり。

むら雨の雫ほともなくたひ人のさゝめこみのゝひるま來にけり。

山鳴り谷とよむまて、たきち流る水の音に、暑もしらてわく。ときもいま、小麥ふとむぎ、はつきよりおろし、まとりとて、またぶりしてうちたゝく女あり。苧生に麻刈る男は、科あめる前だれとて、むねより腰にみのゝことくまとひ、雪袴を着て、かしらは布につゝみて、笠着たるも沓ふみたるもまれに、いとなう見へたり。小鳥谷(こじや)といふ村にものくひ、ひるねしてくれは故將堂といふあり。こゝところにも聞へたれと、こゝには秀衡を祀たるとか。猪の袋、女鹿口(めがくち)、白子坂、關屋、洲輪の村に來り、母屋山、鳥越山なと遠かたに見つゝたゝずめは、ぬまくないのこなたに、ひとつ屋のあり、そこは馬羽松(まはまつ)といへり。いにしへ義家のきみ、こゝにおもむき給ふの頃、はたごうまの料にとて穄もたまへるが、ながちにくちはてて、つゆ馬のくはされば、そこの名を馬はまずともといひし。その穄捨たる處を腐穄(すゑぬか)となんいひきなと、きつれかたる友のあり。かくて磐手を放て一戸の里になれは、なへて二戸郡とよべり。わけゆかは、波うち峠の坂中に日やくれなんといへは、こゝに宿る。

末の松山

福岡の館址

かきれかいたま

三日。一戸をたつ。つちは、きのふにあきて、朝戸出いと涼しく浪うち坂になりぬ。盛岡に松か坂といふ處あり。そこを本の松、きのふ過來し中山はなかの松にて、こゝなん末の松山といふかうへなりと、人のもはらいへり。宮城の郡に在りしとはいづら。「波に移るいろにや秋の越ぬらん宮城か原の末の松山。」といふ、俊成女の歌ありけり。むかしみしところなから、いとおかしう、「をのかつま浪越しつとや恨らん末の松山をしか鳴也。」とすんし、やすらひて、

わけ來れはあつさも波のこゆといふすゑの松やま秋風そふく。

峠になれは、れいの山よりいづる葦貝、松の皮貝、はまかづらなとのくたけたるを、人々ひろひもて、つとにそしける。うへ、波のうちよりしあとあり。さりけれは山坂の名におへり。はた、末の松とは、もはらにはいはしなと語つれて、村松といふ處におり來て、福岡にそなりぬ。呑香稲荷といふ額の鶏栖あり。此みやところのほとりは、天正のころ、九戸政實のほろひたる館の址ありけり。なへて此あたりを九戸郡といへり。南部路の十郡といふは、喜多郡、二戸郡、三戸郡、九戸郡、鹿角郡、閉伊郡、岩手郡、志和郡、稗貫郡、和賀郡とそ聞へける。いにしへ、みちのくの郡たりしとは、いまはいさゝかことなれり。此あたりの人のくちくせとて、かきねかいだまといふことをいへは、そのころ、みやこぢよりも軍いたしして、人さはに

入來るをりしも里の翁が、しか、かきねかい玉といひたるを聞て、このいくさの、はとうち笑ふを、翁、兵ともにうちむかひ、いかに、そこたちは「蛛の巣におく籬根かいたま」てふ歌ありともしらさりけりなと、都人をわらひ返したる物語あり。こゝに欟綱(かいたま)の塚とてありと聞て、尋てもしれさりけるは、いつこならんか。

龍巖寺と觀音堂

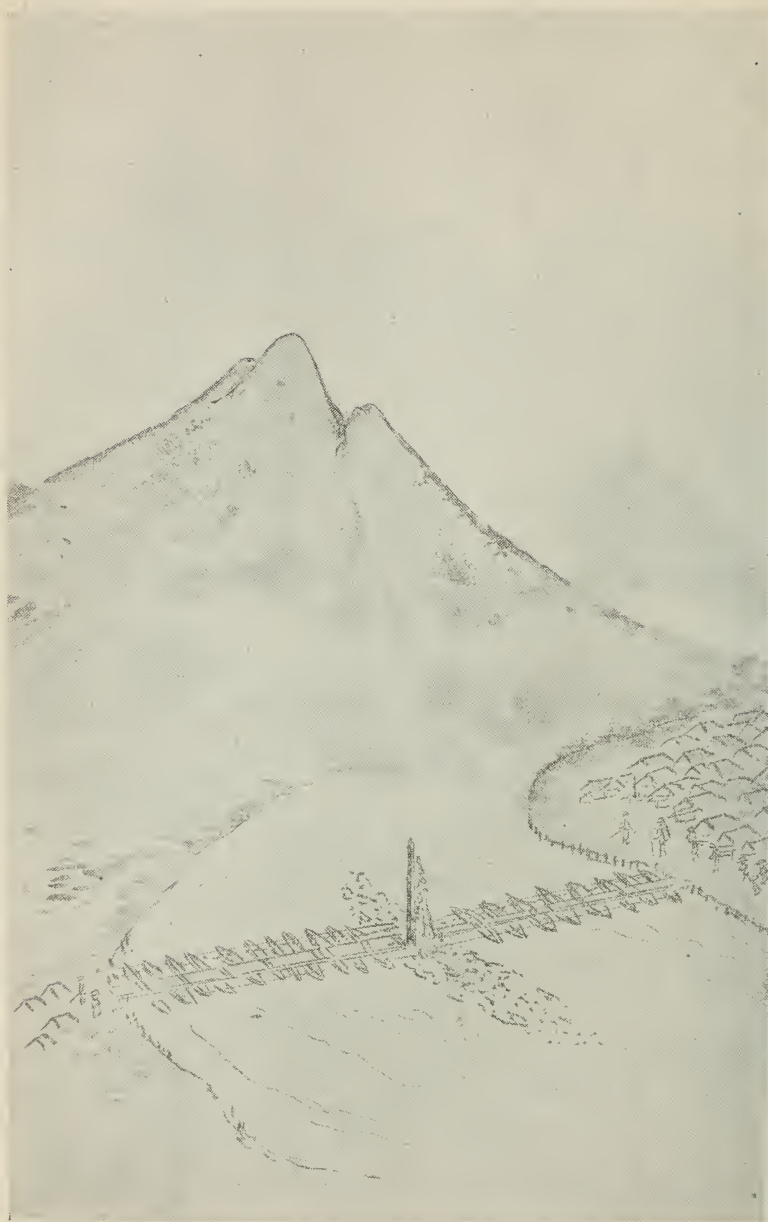
八戸の海におつといふ白鳥川の橋に立て、ゆんてをのぞめは、龍巖寺に行にかけはしありて、巖をほりうかちてみほとけをすへて、こうしさせり。松島の雄嶋に見しにひとし。めてにも橋ありて、これも、觀世音の堂を岩のうつほに作りて、いとおかしきところなれば、行かふ旅人はまつとゝまり、あせのこひて休らひ、なかめやるところ也。

山畑の營み

山ひとつ越れは、長澤といふ處の橋落たりとて、ことところなる土橋の大なるを渡りて前澤村にかゝりて過る。このあたりの山岨みなはたけにて、粟、稗のみを作りて、おげ田、くぼ田はひとしろもなく、うるしの梢しけりあひて、みちも畑もいとくらし。まとりふりもて、うちたゝく麥秋に女うたひ、あるは男女集ひて斧ふりあげて、むぎ穗うつ里もあり。そのあたりを遠う見やれは、夕日のさしかげろひ光りて、いなつまにことならず。

金田一をすぐ

青森縣地に入る

金田市といふ里に金田山長壽寺あり。小野、川口、釜の澤をくれは杉のむらたてるあり。田村將軍の、こゝに月よみのみことをいはひ祀り給ふのいはれ、大同の物語あり。かくて此くれつかた、三戸といふ處に宿かる。

三戸にて

淺水の驛

五戸に來る

十曲湖傳説
南層の物語

四日。夜や明なん、とりの鳴づるころ雨のいたくふれり。きのふ聞しなる神は、かゝる雨もよにてなと、相やとりのたひ人の語れは、やのあるしゝ寐さめして、はたけのくさ〳〵に又なきくすりの雨や、ありかたのなもあみたぶとゝなへ、あくひうちせり。はや女の起出て、麻機をる音のしたり。「かけて織る賤か麻はたあましやまとを（マヽ）にたにも君か來まさぬ。」とすんして、この宿をたちて黃金橋（きがねはし）をうちわたる。むかし長者とのさいふかありて、こかねあまたもてかけたりしかは、しか名におへり。その末いまもありとか。三戸を放れて淺水のうまやあり。遠きむかしは家二三ありて、よへ宿しつる旅人を、うむすといひ人しらすころして、その人をあさ見ざる名なりなといへれと、こと處にも淺水の橋なといふ名ところも聞へたり。過來つる村はいつくならんと、古町、小向、淸淨寺、宮澤、この淺水にて侍ると人のいらふ。前なる水の細くなかれたるを、

　里の子が汲ほすはかりあさ水のなかれつきせぬものにそありける。

五戸に來けり。八幡坂のしたより西に別れて、種原村にかゝりて十和田山に行の路あり。一本松、傳法寺村、藤島に來て、以地川といふに木の皮の綱をひきはへて、くり舟の渡りしたり。この水上は、十灣（さわた）のぬまとていと大なる湖のありて、盛岡なる奈良崎といへる處の永福寺の僧侶南層といふか、彌勒ぶちのいてませるを見奉らまくほりして、ふかくいのりて夢の

三國傳記の難藏物語

をしへにまかせて、たうばりたるわら沓さしふんで、此、やりたらんところをもとめありくに、十曲(とわた)の水海にいたりて沓のやりはててけれは、こは、わかねかひこゝにいたれりと、あめにむかひ、つちにふしてそよろこほひ、こゝにすみつる八郎太郎といふ、みつちをおひやらひて、われあるしとなりしといふ物語をせり。しかはあれと、いつの世のことならん、みかしほの幡摩かた、書寫の山かけに難藏といへるすけありて、あけくれ、ほくゑきやうをとなへ、うちには經典をすんして露のいとなう、外には權現をいのることのおこたらすして、さうしんのとこあり。みすきやうのいさおし、つもり〳〵て三千部にみち、神まうての日數三十度になりぬ。しかるに難藏おもへらく、わかいのち世にながくいきたらましかは、猶みすきやうし、彌勒のほとけをもをろかみたいまつりてんと、熊野に三とせはかり山こもりしてひたふるにいのり、浦のはまゆふ、もゝ重に日數のかさなりて、すてに千日にあたれるの夜半うち過るのころ、夢となくうつゝにもあらて、みあらかのうちより白髮の翁のいておはして、いかに、いましか願のいとかたけれと、あかいふについてあつまにくたりて、陸奥の國と出羽の國とのさかひに言雨(ことわけ)といふ山のあんなり。そこにわけ入てすまば、みろくほとけのいてらんその曉にもいたらんと、みさかありつることのうれしう、いてとて旅たちはる〳〵といたり、八重山遠くわけ入て見れは、大なる池のほとりにたてる、としふる松のもとに、窟

のあるをたよりに草ひきむすひ、木の菓をとりくひ水をむすひて、みときやうのみして、やま人にことならす。かゝるに、かほかたちきよげなる女のいつこよりか來て、みのりをきくこと日久しかりき。難藏あやしみなから、さらにことなう猶ほくゑきやうをよみてけるに、この女の云、われ希有に得かたき妙典にあひ奉りて、五障の雲みのりの風にたちまちに晴て、心の月いとすゝしくすめり。あふき願はくは、あか棲に來てみときやうして、群類をも化導し給ひてよ。難藏、われ神の告によてこそかゝる山おくに入たれ、女かもとにいたらんこと、かなふましきよしをいへれば、女、わかすめるかたとて遠からじ、この池のこゝろなりといふ。難藏かおもふ、これも神のをしへにて、千佛の世に値ふのたつきならんか。女のふたゝひ、われといもとせのかたらひをしてなかくこゝにましませ。難藏、わか此女におちて菩提心のうしなひて、なとか惡趣の底にしつまんゆめ〳〵とおもへれと、はた、これも神のみちひき給ふことならん。かくて、慈尊の出ませる世に會ふことの山口にやと、女のいふについて、いさなはれて、はかりもしらぬ太池の面にうち入ぬとそ。そのをりしも女、かの僧にむかひていふ、この山の西に、奴可の嶺とて、いと高き山の麓に又池あり。この、ことわけの嶺より、みちはつか三里はかり、かの池に八頭の大蛇ありて吾れを妻として、月ことの上の十日あまり五日は、ぬかの池にすみ、月のなからより下は、このことわけの池に來りてす

めり。いますてに來らん、こゝろへたまへお僧、といふ。難藏さらに怖れたるいろなう、八まきのきやうをかうへにふりかさせは、かしら九のたつとくゐしたり。とく風ふき雨のふりしきりて、八かしらの龍のさと飛來りて、このふたつ龍七日くひあふ。といきの音は、なる神のごとくなりひかり、雨かせいよゝはけしう、つゐに八龍のくはれおはれて、もとの池に皈りいなんとせしかと、大松の生ひ出たるにへたてられて、しほ海のかたへ、にけうせてけるといふもの語りは三國傳記にも見へたれと、此ふみには、みちのく、ひたちとをかいあやまれり。かゝる物語は、みちのおく、出羽にてまち／＼にいへり。言雨は十曲の湖にてやあらん、奴可は、糠部(ぬかのぶ)なと郡の名に、むかしこのあたりをいひしかは、いまいふ八ッ耕田の嶽をやいふらん。此たけのなからに大なる湖のあり。春雪氷たるを通路として、そのたけのそかひのかたにあるいて湯浴に、此あたりよりも津刈郡よりも、きさらき、やよひには、人あまた行といへり。かくゆき／＼て、相坂といふさゝやかの村に泊りてと、ゆきすりに人のいへは、その名たよりに、霧にこめて、屋根のみはつかはかりみゆるを、しるへにたとる。河にそひたるこなたかなたは、みな六戸の郡なりけりとか。川霧に猶くらくその村にいたる。

言分と奴可

相坂に來る

　里遠みそこともしらぬ霧のうちにみちとひまとふ夕くれの空。

せんたびつやうのものをおひ行翁あり。かゝる五七の戸の山里のあたりに、嫁入のとき、か

嫁入の時の櫃に屍な

く、木匱てふものを女のなにくれと調度入とし、その女の身まかれば、この木匱にむくろををさめ、わかへのそのに埋むとなん。

三本木平

五日。つとめて相坂をたち、三本木平（たひ）といふひろ野に出て、こしかた行末のはる〳〵と見やられて、ひんかしは、さめ、しろかね、いま河、あか、根井、三澤なと、南は三戸のやま〳〵つらなり、遠きたけ〳〵のさかひは雲と霧とにへたてられてしらす。こは、わかくにのもとのゝはら、しなのちのきちかうかはら、遠つあふみの、みかたかはらなとにたとへつへう。行かふ人もまれに、朝つゆふかくわけ來るに、つふねつれたる法師けふりうちくゆらせて、休らひてよとて語る。

眞野の萱原は何處

「故郷の人の俤月に見て露わけあかす眞野の萱原。」となかめたるは、此野良也とてたち別ぬ。しか、このあたりの人のもはらいへれと、尋ね見たりし牡鹿郡石卷の港べなる、零羊埼のかん籬のほとりに在りける舍那山長谷寺といふ寺の池の面に、片葉の葦とてありけるは、むかしのしるへはかり殘りたる處とは、いつれをいつれとも、えおもひわいためす。

いつこともおもひまとひてしら菅のまのゝかやはらわきてさためん。

七戸の里

狐の柵

七戸といふ里にいたる。西にいなきあり、その名を槲木といふ。そのしりなる鶴の子平（たひ）といふところありて、きさらき斗、のこんの雪のやゝ氷たるをふみて山に雪舟（そり）ひき、春木こる

狐の館、狐の森とも

小荒沼

坪村石文村

千曳明神

とてわけ行、そのかへさは、そりひき捨て、もゝあまりの人むれ立休らふに、春風いさゝかもなう長閑なれは、夕日さしかけろふをりしも、三本樹平のあたりに、人のたけよりはいと高う、ふたつらに立て、幡ある鉾なとの見へたることもあり。これを狐の柵をふるといふ。きつねは人のかけをかりて、かく戯れ遊ぶ。ことしも五度見きなと里人の語るは、山市てふものにや。和賀の郡の后後埜(マヽ)のあたりにて、師走より、むつきに至るまて山市あり、これをきつねの館(たて)といふ。越の海に海市あり、狐の森といふにひとし。はた、枯杉よりはこなたならん影沼平(たひ)といふところありて、春雪うち霞たるを遠う見やれは、行かふ人、引かふ駒なとの波をかいわくるかと迷ふも、蜃氣樓、氣見城のたくひにこそあらめ。かくて馬やとひのりて中野を行て、ひんかしに沼の見へたり。むかし都のはらからの女、いかゝしたりけんしつみたりけるとなん。あねかこがら、いもとかこがらといふ、又の名を小荒沼といふ。坪といふ邑に來る。つぼ河かちわたりして石ふみやいつこにかとゝへは、石文村へいきてたつねよといふ。さらはとて馬を野はらに引やらせて至れは、家二、おちくほなるところにありてけるに、とひ入てとへと、碑ありたるはいつことも、その、ありつる址たにしらしとて笠縫ぬ。日もやゝかたふくころ、千曳明神のおましませる尾山とかいふにわけ入は、千曳大明神の雞栖の額は、盛岡の東皐文眞といふ人の手也とか。ひろ前に至てぬさとり奉る。この社の下に、

壺の碑何處

千曳の石は千重のあらこもにつゝみて、ふかく埋て神とはいはひ奉る。その千引の石や、壺の碑ならんと人のいへり。

くりかへしいのるこゝろの綱手縄おもきちひきの神もうけひけ。

宮城郡浮嶋邑のさかひにたてるいしふみは多賀城の碑にて、この坪村にか石文村に、まことの碑やありつらんかし。「おもひこそ千島の奥をへたつともえそかよはさぬ壺のいしふみ。「碑やけふのせはのゝはつ〳〵に逢見ても猶あかぬ君かな。「いしふみや津輕の遠にありときくえそ世中をおもひはなれぬ。顯昭、仲實、清輔なとの、なかめ給ひしをおもへは、蝦夷かちしまも、毛布の郡も、津刈郡も近くよみ聞へたり。もとも名所なとは、遠きさかひもおもひあはせてよみつべけれと、壺のいしふみ、外かはま風なと、みな、近となりのみなかめたる歌のいと多し。さりけれと碑のすかた見されば、何をもて家つとと、見ぬ友かきに語らん。

野邊地まで

水くきのあとかきたへてそこともよみとかれえぬつほのいしふみ。

と、馬の上にてくちすさみ、ふたゝひこゝに來て、ひねもすつはらに尋ねてんと、あしとくをはせくれば、日ははや烏帽子山におちかゝり、清水目(しづのめ)、久田(くんた)なとをへて、みちもさりあへす牛にものつけて追來るか、みな、ときはなちて野かひをせり。遠う釜臥か嶽の雲の中にあらは

十府の浦とも

南部の九牧十二野

れ、横濱のやかたにかゝりて田名部のあかたにゆくといふすちのありと、馬ひきのいふ。

ゆふ月のかけもほのかにみちのくのおくのうら〳〵浪の遠しま。

霜松川とかいふを渡て野邊地の港になれば、うまさくれの水に、馬のすねがらふかくふみこみたり、おりてよといふ。「数ならぬ身にしられぬる駒さくりさのみやおなしあとをふみみん、といふこゝろはへもありし。又、「みちのくの賤か縄手のこまさくりあやしの月の宿りところや、といふこゝろに猶かなへりと、おかしう宿つきたり。こゝをも十府の浦と人のいへば、「見し人は十府の浦人音せぬにつれなくすめる秋の夜の月。「むへさへけらしとふのすかこもと、ふして砧の聞へたるを、

浪のよる十府のうら風身にそしむ三府にねもせてころもうつこゑ。

六日。朝たちづる宿のあるしに、をふちの牧やいつこならんとさへと、さはしらて、左井の港のこなたに大馬の浦、奥戸の浦とて大牧ふたつあり、そのあたりにや。此牧の二とせのあら駒を、葉月のころとりてけるなと語れり。此南部路には九牧十二野といへり。九牧とは三戸の住谷(すみや)の牧、同相内の牧、五戸の木崎のまき、同又重(またしけ)のまき、野邊地なる有戸(ありと)のまき、野田の北野のまき、同御崎(みさき)のまき、田名部の大馬(おほま)、同奥戸(おこつへ)のまき、十二野とは、この九まきに七戸たちの里馬、八戸のまき、遠野のまきをあはして、十あまり二の、うまきとはなれりとつた

治備貴迺寶具樂　棟札

四天王寺流本家番匠平内政治門第武
州江戸深谷治直傳之御棟梁阿倍與
三郎景明定之者也奥州南部磐手郡盛
岡十三日町大工平澤喜八宗之宣
千鬼大明神御再興大工面月覺
明和二年　　　別當
　　　　　喜行院

津輕の五牧

名馬出でし牧々

濱つたひに

あぐり子にが

へかたらふ。津輕郡にありといふは枯木平、入内、母谷、瀧の澤、津輕坂、おしなへて五牧なりけり。ある人のいふ、むかしありたりし尾駮の牧は、この、のへぢよりもいと近き、泊の浦のほとりにあらんと、はた、梶原ののりし磨墨は住谷のまきにたち、佐ゝ木ののりたりし生唼は七戸よりいで、熊谷がのれる權太栗毛は、一戸の里ゝまのうちたりし。「みちのくのあら野のまきの駒たにも見るはみられてなれ行ものを。」あら野は、小荒沼のきしべより木崎牧といふ、そこにやあらん。秋きりの立のゝ牧とよみしは、つかろなる瀧の澤てふところと人のいへり。立野てふ名は、武藏にもしか聞へたり。「吾妻路の奥の牧なるあら駒をなつくるものは春のわかくさ、なとよめるは、こゝらの牧をや、おしなへてもいへらんかし。秀衡の、ほとけのしろにひかれしといふ、糟部の駿馬とかいたるはあやまれり。糠の部の郡にて、いまの五七の戸のあたりをさして、いひけんことこそおもほゆれ。かくて濱つたひしてくれは、老たるわかき女、むたりなゝたり、馬門なる、いて湯に行たり。近き明前の浦に皈るとて、いたく醉て、「わかいときやァ、岨も大地とあゆみたか、いまは、だいぢもひらと見る。」とうたへば、又うたひつぎて、「しづ〳〵と清水もたひらに井戸をほれは、水はわかねでこがね涌く、と、足のほうし、手のはうしをとりて、はとわらひ、あぐり子よ、にがつれてこ、乳のませんにと。科野路なとにても、女子あまたもてば、末の子をあぐり女郎、おあぐり

と名づく。さりければ、かならず男の子生れくとて、もはらありき。こゝにても、うめるも〳〵みな女子なれば、女子にこそあきたれとて、阿栗子とはつくといへり。安久利は飽たるこゝろにや。ものゝ盈るをもあくるといへり、あふれたるこゝろならん。爾賀は五十日子てふことにてやあらん。女に、子文字つけていふならひ、いにしへぶりの殘たり。馬門のせきのあら垣に入て、野邊地にさり來りたるせき手いたして越へて、つかろちになりぬ。」

馬門の關

卒土が濱つたひ

津軽 共五冊
津軽

南部路を過る、いはてやまてふ日記にかいつきて、此冊子を、そとかはまつたひとせり。

津輕さかひに入て青盛にいたり、うら〳〵をへて、うてつの埼より、松前わたるのみちゆきぶりをもはらのせたり。

天明八年七月六日津輕領狩場澤を經て

かくて狩場澤のやかたになりて關手とりつ。いつこの誰れ、着がへ、わきざしあり、たがかたへさして行べきものにて、此せきぐちをあらため通すとかけり。ふみてのしろ、はかまのしろとて、いさゝかのあしおきて、このとひまろがあないして、せき手わたして越ゆ。いつこもふりことならす。村はしに、おはしかたなせる石を、ほぐらにひめて祀る。しかたくひの、みちのおくにはいと多し。手酬したるをりしも眞上に鷹の羽うつを、行つるゝ友のふりあふき見たり。ゆく〳〵、

性器神多し

たはなすか秋のかりはの澤水にかけもさしはのみそらとふなり。

路いさゝかくれは堀刺川をわたり、口廣、清水川のふた村をへて雷電山といふ嶺の大鳥居あり。大同のむかしに田村麿、かんときまつりして、なる神を、こゝに齋ひ給ひたるといひ傳ふ。その御前の入江なとにて、あさり、はまぐりやとらん、そのかひつもの、いと多くみちのへに捨たり。おなし林のうちにかんみやところ見へて、神明の鷄栖たてり。この流江のあ

雷神を祭る

田澤の椿明神

小湊の七奇

栂木峠

鍵かけの坂

なたより浦々のやかたつゝきて、田澤とかいへるに椿山ふたつまて磯輪に在りて、うつき八日の頃はひし〳〵と花咲き、そのまさかりは波も紅に寄せ返り、あさ日、ゆふ日の、海にかゝよふひかりのみち〳〵て、巨勢の春野はいさしらす、世にたくふかたなきよしをいへり。そこに神の在して椿明神と申と、こは五瀬の國にもおなしみなの聞へたり。潮立テ川の橋にたちてしはしは見渡し、小湊に來る。なへての名を比良奈以とよべり。こゝのふる翁の云、むかし、此ところに槻の生ひたるあたりを、錦樹の里といひしよし聞つたへて侍る。さりけれと南部路にもありといへり。こゝに七不思議のあり、聞たまへや申さん。一には猫に蚤集(たから)す、ふたつには水虎(かつは)の人をとらず、みつには玉味噌、汁と煎て泡たゝず、よつには、稗の實ふたつならびてみのり、いつゝには雨そゝぎの音なし。むつには、なる神とけず、なゝつには男女のかためほそしと、手をとり、ゑまひしかたりて別たり。この里にせき手をとりて小豆澤、藤澤、山口、中埜といふ山里をへて、土屋の浦の關屋に、せき手あらためて栂木峠を下る。なかむかしの戰ひのときは、一の木戸すへたりしあとゝて、いとさかしきみち也。かくて鍵縣といふ坂うち越る、木のひともと立るに木の鍵をかけたり。こは、わか、けさうしける人あればその人を心におもひて、いもせむすふの神をいのりて、もぎ木の枝をかざして投やるに、ふと、うちかけたらんものは、おもふおもひのかなふしるしをう。ふたゝび、みたびな

げやれど、えかけざれば、それが願ひのむなしかりけるとなん。みちのおくにはところ〳〵にありて、もはら人のせり。岩の上に小石うちあぐるも、おなしためしとか。かくて淺虫の浦になりて、煤川のへたに馬あらためとて、つがひのえたちの宿あり。

淺虫に著く

秋たちていくかもあらねとたひころも袖にすゝしき外かはま風。

出崎に近う、いくはくか高き岩の立たるを肌赤島といへり。その島の形したるを鷗嶋といひ、磯に近う木々ふかく鳥居見へたるは、湯の島とて辨天を祀る。しうりこといふ貝つものとる女の、しほ聲たかく、「名所〳〵と淺虫は名處、前に湯のしま霞に千鳥、みやこまさりのはだか島。」と唄ふ。出湯のやかたに宿つきたり。湯は瀧の湯、目のゆ、柳のゆ、おほゆ、はだかゆなとのいときよげにわき、はた、軒をつらねたる家々のしりにも、ゆのありてやよけん。里中に烹坪(につぼ)とて、ふち〳〵とにへかへる溫湯あり。この月の末ばかり、そのふの麻刈もて糸釜といふものにて、いつこにてもむしとゝのへれど、この浦ばかり、かゝる、につぼにひたして時の間にむしぬ。さりけれは麻烝といふ名はをのつからなれと、をり〳〵火のわさはひにあへれは、火にしたかふ文字をいみて、淺虫とは近き世にいへると、老たる長の語り。こや、ゆけたの數はいくらかあらん、いよのゆけたをたとるこゝちそしたるといへは、ゆふねのこゝほと多き處も侍らず、わきて此津輕には湯泉の數のいと多し。いつこ〳〵にとと

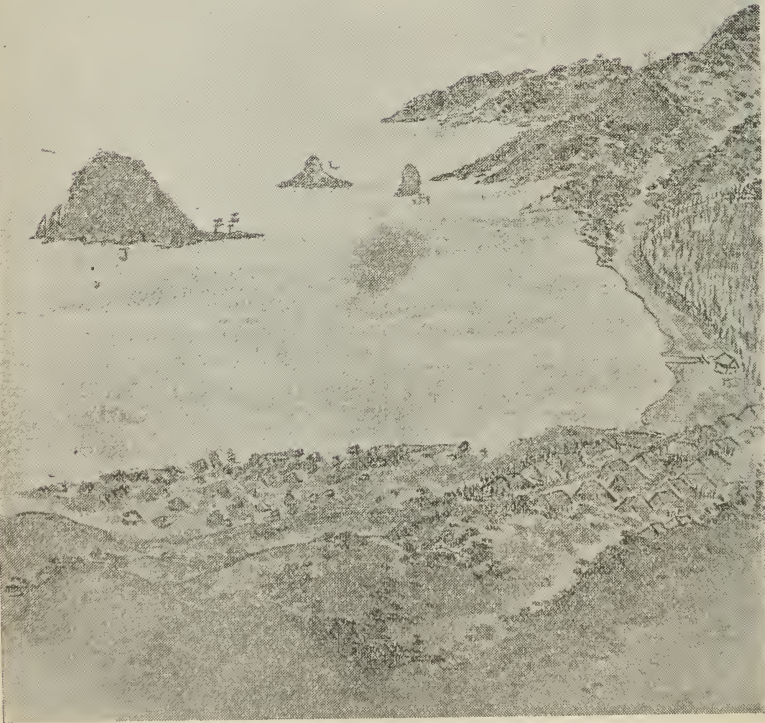
淺虫溫泉

元は麻烝

津輕は溫泉多し

へは、しり給つらんか關の湯の澤、碇か關の湯、大鰐、藏館、嶽、湯谷、切明、酸ケ湯、下湯、温湯、板留、叶目、沖浦、二升内、大河原、田代、根子、猿、佐々内、追良瀬山、しか淺虫にて侍る。又涌し湯とてもはらあり、川水のさし入ればくみもてたきぬ。そのところ〳〵は、今別のほとりの湯の澤、金木の河倉、尾別內のゆ、浪岡のほとりなる本鄕のゆ、戶門のゆにて侍るとかたり、いさたまへ、あない申さんとて衣うちふるひ着て、八幡のみやところの、山のかた岨にありけるにぬさとる。をかみとのめけるかたに觀世音をおきて、くぬちの寺めくりとて三十三番をうつせり。こゝなん廿三番にあたれりと。かけたる札に、「月も日も波間に浮むはたかしまふねに寶をつむこゝちせり。みやつこの、うはそくかもとにしばしはかたらひて、山路のたみたるかたを出くれば、夢宅庵といふ寺に、藥師ぶちをあかめて湯の神とせり。ふたゝひ浴して、あつさわすれたり。

廿三番觀音

七日。ひんかしよりしほ風のはけしう吹は、けふも又やませの吹てと、ゆもりの、あさゆあみしてけり。みちは山路ありて馬かよひ、濱路ありて、かち人磯つたひしたり。うたうまへのかけはしを渡る。國人は、とうまへのかけはしともはらいへり。高岸の岩つらに、尋斗の板をわたしてあやうけ也。ふりあふけば木の中に婀岐都が窟とて、むかし、あら蝦夷人のこもりて、行かふふねをうちとゝめて寶をうはひたりしと、けにやさかしき處に、人さらに至

やませの風

あきつの窟

竾石の浦

海栗の產

神木坂の名木

らぬいはやご也。「おくの海夷かいはやのけふりさへおもへはなひく風や吹らん、なと聞へて、蝦夷はかゝる處に多く栖たらんを、むかし人もしかなかめ給へり。蛇塚の浦に來つれと、うらのながめのいとおかしければ、ふたゝひかけはしをふみて、さいのかはらをゆんでに千貫石のあたりより馬みちをわけ、山にのほりて見やる。うへも清少納言の、濱はことかはまと、名さへめつらしう、かいなし給へるもあはれ也。ゆのしま、かもめしま、はたかしまなと波の中にたゝよへり。わけ〱て蛇塚のやかたをそなたに、潜戸川をわたり竾石の浦に出たり。又の名を根井といひ、くゞり坂とよぶ。うつきよりさつきをかけて、くゞりさかの海栗(かぜ)てふものをとりて、しほからとせり。こは、あはび、さたおかにならびて、催馬樂にうたふのひとくさ也。旅人、さかとのにしりうたけして、これをさかなにゑひ、ほうしばらは海味噌と名附て、ひたなめになめ、たうひゑひたり。いそのかみは小豆澤のほとりより山路をめくり、あるは、童子山中をわけ神木の坂といふをおりて、ふしたる岩の、はさまをくゞりて行かひをせり。そこを潜戸といひ潜坂といひし名をこゝにうつして、磯邊の不動尊の岡のしたつかたなる石を、わらはへくゞり通へば、しか浦の名におへりと。その神木の坂のほとりより、むかし、雌雄の槻とて、大なるみや木のふたもとたてるを、都にひかれて、お木を、いつれのみかとにや、ゆんての御柱とし給ひしと、杖にかゝりたる翁の、しらぬむかしを

庄と云はず組と唱ふ

つばらに傳へかたりぬ。こゝは何の庄とかいふところへは、横内組といらふ。おほむかしに津輕は郡の名たれど、今はなに組、かぐみと、親村の名をもて組とさだめて、庄とおなしう聞へ、なかむかしより津刈の五郡といふあり、田舍郡、平賀郡、花輪郡、馬郡、入馬郡、庄ととなへしとも、今はもはらとはせざりけり。峠越れは雄元の形をせし大石の立たり、浦島森といふ。大浦、小浦、冠山とておもしろき磯山也。闞のこなたの、みさかいと高う、社のあるにまうつれば、神ぬし、御前をきよめけるかかたりて、これは山城の貴船の神を、いにしへうつし奉る。辨財天といはひまつる末社あり、これなん鬼が女十郎姫のみたまなりとも、又義經のをんなめにてやあらん旭の前といへるか、此君をしたふのこゝろせちに、寄りたる船の中におもき病をして身まかり給ひしを、こゝにけふりとなし、しらほねは山おくの玉清水といふ村に埋み、塚してしるしをたて、その寺を朝日山安養寺常福院といふ。又神の社あり、神明をあかめ奉る。貴布禰の御前にかしこまりて、「おく山のたきりて落る瀧つ瀬の玉ちる斗ものなおもひそ」とすんして、かみぬしともにみさかおりく。その鬼か娘とはいつこの鬼にてか。云、蝦夷などのたけきをいひしにや。朝日の前も、いつらの人ともさらにつたへもさふらはす。こなたへとて徑にさしいさなへるに、おやしうさし出たる岩とものあり、名を龍(たつ)の口といふ。とは、あら垣を波の中までもうちめくらせてまもりたり。磯山かけに、けさ

辨財天社の來由

朝日山安養寺

磯の岩々

もりといふあり。むかし、すきやう者のけさかけたるいはれあり。艮のかたに、自呂左久と
いふ蝦夷人の栖し家のあとあり。たゝみ石、わしり岬、はた祖母石といふは、その立石の又
の名也。じろさくが妻の老たるころ、わが子の遠島わたりしたるをこひわび、山にたてるが
石とくゑしたるすかたなりと、望夫石とおなし物話をせり。はた、水江の浦島か子のふるこ
とをこゝにひいて、むかしかたりあり。網屋場といへる處に、義經の車にのりて、眞くだり
に磯にくたり給ひしふるあとあり。はた、よしつねのこゝに船つなかせ給ひし巖を、はなく
り岩とて猶あり。山の名もしかり。かくて野内の關のくいぬきに入て、せきてわたして越
ぬ。かみぬし柹崎なにかしがもとに休らふ。あるしの云、乃南以とはもと蝦夷の辭にして、
まことは鷲の尾の港といふ。むかしこゝに、鷲の尾羽落したるためしもありてなと聞へき。
「人とはぬ太山の鷲も哀なり誰にむくひの羽おとすらん。」といふ歌のこゝろにも、かなひ
つらんかしとおもひ出て、すんし、風のいやたつに、
なれも來て身をやぬらさん鷲の尾のこはみなと風うしほふくなり。
綱不知、原別、作り道なとの村をへて、群松のあるを五本松とかいひて名たゝり、茶屋町とい
ふ處より、塽川とていと大なる流に長橋をかけたり。岸のこなたに遠う、ゆんでに、飽脛膝
の神の杜といふか見ゆ。めてのきしへに木の高う茂りたるは、武南方富神を祀り奉るとい

青森に入る

へり。河は、みなとのいと近し。かつ渡り青盛になりて、市中をはる〳〵と、米町とかはつれば烏頭の杜あり。かくて、ふたゝび烏鶏のみやしろに、ぬさ手向奉る。つたへきく、延喜の御代とやらん、善知鳥、惡衙のいたく群れあさりて、濱田、浦田の早苗ふみしたき稻のみのらされば、國人うれへて都にうたへ申しかば、からしめ給ひて、その鳥のむくろを集て山とし、高く塚したりとも、あるは、烏頭大納言藤原安方朝臣といふやんごとなき君の、いつれの御世になにのおかしありてか、さすらへおましましてこの浦にてかくれ給ふたるが、そのみたまの鳥となりて海にむれ磯に鳴てけるを、しか名によひ、その君を齋ひ祀て鴪大明神と唱ふなと、浦人の耳に殘たる物語とものあり。今は棟方明神とあかめ奉る。宗像の神は、三女神を祀りてけるもゆへやあらん、いさしらぬひの筑紫なる、胷肩の郡なとの物語もやあらんか。此みやところは、ふたもゝとせのむかしとやらんに、こゝにうつしたり。もとも、そのふるあとのありと聞て見まく、新町といふ處を出て里のやかたのはし、安潟町のすちよりこなたに在る大みちを左に入て、田の畔つたひて、いつこならんと、草刈る翁に錢とらせてあないさすれば、毗沙門天王の杉村をいくはくならず離れて、耕田山をゆんでに遠う、岩樹の嶽をめてにむかひ見てゆく〳〵至れは、あれ田の中に小高く木のふたもとならび立るに、草のふかうしけりたる處あり。一もとの木は、いたやとていと多かる木なれと、いま一もとは、な

善知鳥社の由來

善知鳥杜の跡を尋ねて

善知鳥沼

善知鳥多し
しちりつなぎ

鷗に似たり

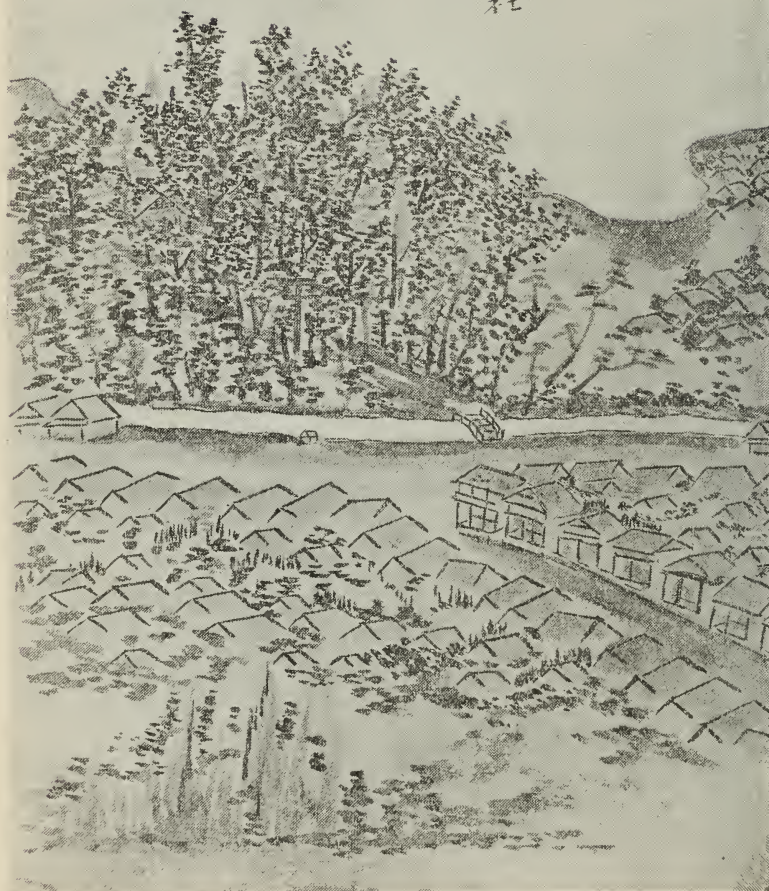
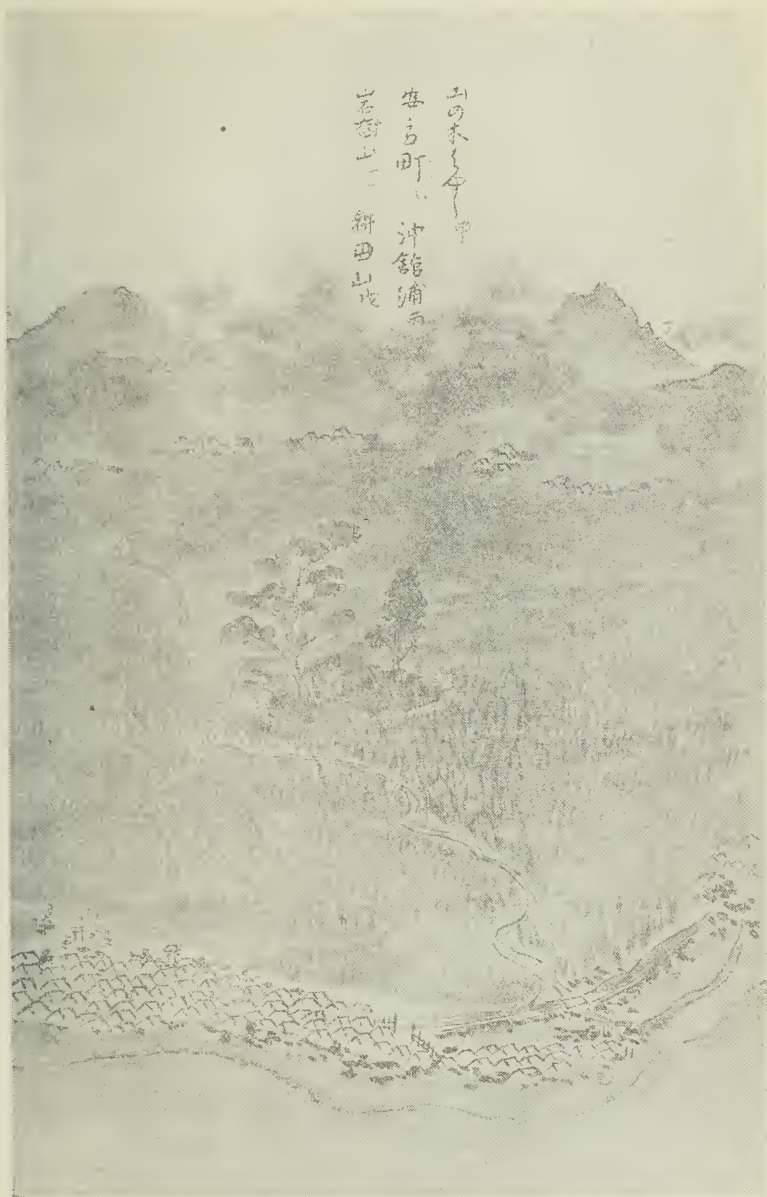
にの木と、さらに杣山賤すらつゆしらさる木にて、たゞ山の木といひ、山の木ばやしといふ。こゝなん、そのむかしの跡なりとをしゆ。此木も近きとしまて、ふたもとありしかは二本木ともいひたり。いにしへ青森といひ初たりし名も、こゝや山口たらん。その一もとの、名もしれざりし木の、としをへて朽たふれしかと、板屋の木を殖つぎて二本木の名はかれしなど、はた、此二本木のほとりより、いまの、うとふの林のあたりまて大沼のありたりけん。それをうとふぬまとて、うとふ鳥のむれすみ、この山の木林にも多かりけん。こゝに來鳴たるといひつたふその鳥は、今七里ともつなぎともいふ。都奈者は觜に鍼のごときものありて、うるめ、いはしなと、さゝやかの魚をひし〳〵とさし貫きあさり、斯知里は、七里の灘も磯邊も見へぬまて多けれはしかいふとも、又、しちりとつなぎとはおなしからじとも申き。われわかかりしころは沖のりわさをのみして、一とせ、風にはなたれて小島といふ處にからくしてつき、舶にすりを加へ風まつほとに、かてつきてすへなう、此鳥の此嶋に多ければ、日の入て海より島にむれ歸り來て、つちのそこにふかく、こゝらの穴あるをたどりて、さばへの如くむらがるを、たのごひ、小綱のはしもてうちおとして、あぶりくひて、やゝ命いきて松前のわたりしたることあり。松前の沖べには、その鳥のいと多しと語りもて翁を別たり。翁かものかたりのしかすかにおかしう、うべも聞へたり。善衜をゑがきしかたなとを見れば、鷗

うとふ考

善知鳥沼は安潟か

大濱に泊る

のすかたしていろいと黒く、觜を赭黄にいろどり、足は、うす墨にゑかく。頭はたかべ、あちむらなどにことならずして、眼のあたりに白き羽のまだらに生たてり。おもふに、みちのおくの人、わきてこのあたりにて、空(うつほ)なるものをさしてうとふといひ、うつほなる木をうとふ木といふ。南部の山里に至りたるとき、のりたる駒の、とゝと、ふみとゞろかせば、いたく鳴りひゞくところあり。いかにといへば、こゝは、うとふ坂なれば、かく鳴りて侍るといらふ。こゝろ／＼に空坂(うとふさか)、うとふ山てふ名も聞へたり。さりければこの鳥の、うなのほとりに穴をほりうかちて巣づくれは、しか、とりの名を空鳥(うとふとり)とやいへらんかし。善知鳥沼は、鳥の多くむれあされはいひつらんか。この沼も潟にてやあらん。海士、山賤等か、いやしくも潟と湖と沼とを、おほぞう、おなしさまに呼ぶたくひのいと多し。さる潟のきしべあたりに、椰(や)須(す)てふ木なとの生ひたらんを潟の名と、むかし人の呼たらん。はた、彌栖潟にてやあらん。ふるき歌に、「みちのくのそとかはまへの喚子鳥鳴なる聲は善知鳥やすたか。」このこゝろはへも、鳴こゑは空鳥(うとふとり)にてや、すめらんところはいつこなるよ、安潟ならんとおもひやり給ふたらんか。又もかい聞へたきことのくさ／＼なれと、猶ひがことの、かたはらいたげなれは、かいもらして、ことふみにのせつ。沖館、新田を過て大濱のはまやかたに宿かる。こうしてけるにやあらん、とく休らひてよとて、なさけ／＼しう湯なとひかせて暮たり。

善智鳥社

安方町
沖館浦
岩木山
耕田山

星會の空やあふかん雨もよの雲ふきはらへ外かはま風。

いよ〻風ふき雨さへふりしきり、浪の音の高う聞へ、衾にすたく蚤のうるさく、雨の、あと枕にもりしたゝりて、とりは鳴たり。

ねられすよ泉郎のとまやの波まくらぬる〻ならひとかねてしりても。

かくてあけたり。

青森の琥珀漬

八日。あめ風の猶はけしう、しほ霧といふもの窓より吹入て、いやさむきに、あるしのとうめ、なによけんとて、潜阪のかせに青杜の巨波久漬といふものをもて酒しゐそしなと、時うつれと、つゆのあまはれもなう、え出たゝず。このこはくつけてふものは、ほや、すぼや、いぬすぼやなと、たくひのいと多きかなかに、酸保夜といふものをつけたる。そのいろの、琥珀に似たれば名つけたり。

大濱又油川

九日。山背風いやふけと日のほのかにてれは、油川の泊を出て瀬田綵川をわたる。むかし、皐に鶴の子うめるか野火のか〻りてやけわたるを、めづる、子をおもふの心せちに翅やかれたれは、おつるも飛來て羽をふためかし、ともに死たり。その鳥のあぶらの流たれば、大濱の又の名を油川とはいふとなん。鶴神といふ山のゆんてに見へたり、そこにすくひたらん。

鶴神山

飛鳥の浦

十三森をへて十曲川をわたり、田澤、夏井田を過て飛鳥といふ浦のあるに、ともなへる人の、

道作る人々

阿彌陀川村

よごみ田村

「きのふといひけふとくらしてと、くちすさみつゝたゝすめるは、細きなかれに女の物あらふにことゝへれは、「飛鳥川せゝの玉藻もうちなひきこゝろは妹によりけるものを。」ととなふれは、はとわらふ。かくてわれもたゝすみて、しほ浪に水のへたてられたるを、

これも又うらの名におふあすか風ふくにまかせてふちせとそなる。

瀬戸子なとの濱をくれば、れいの道つくるとて、蝦夷人の、木の皮の糸して織なせる阿通志てふ衣に繡したるを着、あるは、この浦の乙女らかをりたる、はなたの麻布に、背のあたり斗ふときしら糸して、あやにぬひものしたるをも着て、男女さはに入ましり、手ことにかなべら、てんすき、たち、かつさびなとをたつさへてむれり。瀬戸子、奥田、前田、淸水、內眞部、左堰、小橋、六枚橋、後潟の浦にいたる。行人嶽とていと高山の見へたり。四斗橋、中澤、長科をへて阿彌陀川といへる村あり、小橋かけたり。此なかれに、むかし、すきやう者の、あみたほとけをゆくりなうえて、浪岡村に庵つくりて、をこなひをりし物語のあり。村をさかふくゐせに、蓬田村とかいつけたるをうちまもれは、來かゝる人の、よごみだ村とさふらふといふ。此あたりのうら人は、蓬をよごみとそいふめる。すみしやたそならん、大舘のあととてありけり。かつ行て鄕澤といふ村のあとあり。卯辰のうゐに、いさりするに魚たにあらて、犬をつくり馬を屠りてくらひたりしころ、人身まかりやけたりしと。瀬戸地をへて廣瀬と

蟹田を過ぐ

いふところの細き流にのぞみて、「ひろせ川袖つくはかりあさきをやこゝろふかめてわかおもへらん。」と、おなし名あれはこゝにすんして、蟹田のうまやをこゆるに川あり。つな舟くりわたせり。中師、石濱、深泊、小館、二ッ屋、杉の浦に至る。もとこゝなん「見し人はとふのうら風音せぬに、と聞へしところにて、そのむかしは菅ノといひしかと、いまし世には、なへて杉てふことを村名とはよぶなといへる人あれど、うべなりともおもほへす。今津を

野田村にて

過て野田の村に泊をさたむ。村中に小川のふたつながれたり。そのひとつをいひて、「しほ風こしてみちのくのと、もはらこゝになかめたりし歌といひなかし、仙臺はさらなり、南部路にいふすら、うたかはしと、うら人のいへれと、いかゝあらんか。こゝともこゝろゐされど、月のかけおちてすゝしうおかしけれは、見たゝすみて、

ゆふ月のかけこそみつれしほかせの越てふ野田の玉川の水。

しほ風こして氷る月かけ、と、すんして更たり。

根岸雜觀

十日。あさ日、島かけよりさしのほるころ宿をたちて、みちしはしくれは根岸といふところに至る、又の名を根梠(ねっこ)とそいへる。此浦人は、いむへきやまふいと多し。むかしはかく家居の數なかりしかと、いつこならんか、男女いくはくの人の船にのり來て、こゝに住つきて、男はすなとりをわさとし、女は割織とて、麻苧のいとをたてぬきに、毛布のやうにあつく〱と

平館をすぐ

宇田

をりぬ。出羽の渟代にをる割織とはおなしからじ。こは新保先織といふものに似たりと。あるはいふ、此浦人は越前の國なにかしの庄より來るともいへれは、さもありぬへし。くにうどの諺に、ねつこかみ衆といふ。うべならん、ものいひぶりの、ところ人とおなしからざる也。この磯山かげに湯泉あり、根栫の湯といふ。そのほとりに長屋形やま、あるは丸屋形、腰懸なといふ山ともの見へたり。平館（たひらたて）に來けり。石崎の浦をへて轉々（ころ〳〵）川といふ浦やかたあり。「うなひ子か氷の上をうちならすいしなつふてのころ〳〵の里。」とおもひあはせたる歌あれは、うち戲れ、うちすんして、小石なかるゝ小河のへたに休らひて、

　ときもいまかしか鳴らしころ〳〵と名にたてゝゆく秋の川波。

宇田といふうらに來る。「みちのくの浮田の小濱のかたせ貝あはせて見たき五瀨のつましろ。」とよめるは、宇田の郡にてやあらん。なへて、みちのおくに宇田といふ處のいと多し。いくほとなう傳治が宇田てふ磯邊をつたふ。鉾か碕といふに、そのさま、人の蹲りたるすかたの石あり。磯近うふりかへりて見れば鷹人の狗飼、あるは山たちなとの居たるにひとし。門建岩といへるあり、窟の觀音とて鳥居あり。むかし、鬼のこもりたるいはやなりと。鬼泊川なとわたり、かたがり石を見過て、又、綱不知てふ名の聞へたる浦に來る。南部のやま〳〵霧の中に仄に見へて、舟ともの見へたり。

鬼の門建岩

錦濱に來る

鵠、鷲多し

母衣月過ぐ

ふねあまたかけしいかりのつなしらすをちのなみまになかめかる海士。岩摺とい ふ處の磯山の白瀧とて、おかしうおちたり。鉾か岬のこなたなる、清水の澤の瀧よりは猶こそまさらめと、

音せすはありともそことしら瀧のいとくりかへしなかめてそゆく。

奥平部のやかたを過れは、茜澤といふ、まはになる浦あり。小高き處に生ひしけりたる木草の根まて、みな赤く、渚なとは血を流したらんかことく、そこにひれふるいろくずすら、あかそいなといふ魚はわきて色こく、なへて、此浦の魚なん赤しと人の語る。うべ、濱の眞砂も猩々石ともいひてんか、丹砂なとやあらんか。近き世に、こゝを錦濱とそ名にいふめると聞しかは、

誰か糸によりてまさこをからにしきをり〳〵なみのかゝるなるらん。

砂か森といふやかたあり。鷹の岬といふをへて、高きを下りて海べたのみちあり、山路あり。なぎさに大石のたてるに鵠のすくひ、かずなく鷲の聲も聞へて、いとすさまじきあら磯也。胎内潜とも犬潜とも、あるは、しろいぬくゞりともいひて、その高さいくはくならん、ひきまたのやうに分れたる岩窓を通りて、かつ、母衣月の浦に休らひ舍利濱に至る。地藏の瀧とて、ひはらのあたりをおかしうおちたり。この地藏菩薩は、今別の浦やかたに在る本覺寺

貞傳和尚

の五世貞傳和尚建られたりとか。此僧侶世に聞へたりし人にて、都より今別のふる里に歸り、享保の末のころ身まかれりとなん。そのとこをあげてこと〳〵に記したる、東域念佛利益傳といへるふた卷のふみを見しことあり。

石舍利多し

この瀧のおちく、流の末のあたりの眞砂をかいわくれは、黑き砂の中にましりて、露のこぼれたるやうに石舍利のいと多し。こは沖邊に舍利母石とて、ふせるかことき大岩のある。そのめぐりに、したゞみの八重はへわたるか、晴れる星のごとになりいつるが海におちて、浪に、さと、いさなはれてはこゝに寄りくとなん、うら人のいへり。　「見渡は近きものから磯かくれかゝよふ玉をとらすはやまめ。」といふ歌のこゝろも、しかとすんして、名は七曲りといふつゝらを十曲りもおりて、深澤といふ磯

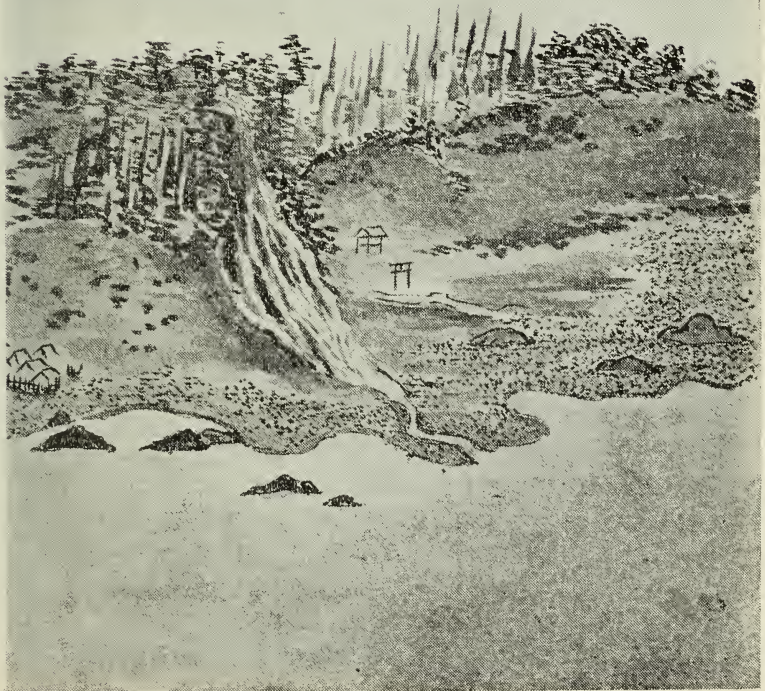
深澤の岩々

山かくれにおもしろき處のありと聞て、大泊のやかたに人たのみてあないさすれは、こゝはせんちやうしき、こは盞岩、鯉岩、あるは武藏坊のあしかた、かねかけ、銚子、いぬのくび、象の形、なにくれ〳〵と、大なる、いはやとのうちの波をしのぎてめくりたる。うへも、ことなるところなり。ふたゝひ大泊の濱に出來て、黑犬潛を越て山崎といふ村あり。四方内川をわたる。六粟山、五本嶽、關内山なと見へて、村はしにふるつかのあるは、日持上人の、こゝに、ほくゐきやうを石にかいて埋み、松前の島わたりして、こまに至り給ふたるふるあとゝて、人なへてとふとめり。

日持上人遺蹟

一本木といふ村ありて山路あり、はまみちあり、われは、はまちを

鬼泊
窟ノ觀音

地蔵瀧
舎利濱

今別の浦
木の中より古鏃
入日の岩
今別石

行て今別の浦やかたに至る。京川といひ都川といふあり。むかし、やんことなき人の此水むすひ給て、こや此流のかろらかにして、都の水に露斗もたかはしとのたまひしとて、名になかれたり。其河のへに、かみさひたる八幡の社あり。近きむかし、此杜にふるき齋槻の枯たるを伐しかば、その木のうつほより、くちたる鏃のいくらともなう出たりといへり。此ものかたりは仙臺の邊にも聞へし、兵等か射立て神に奉るものにてや。高徳山正行寺の前を過ぬ。智覺山本覺寺に、なもあみたとなふ聲〳〵聞へたり。このほとりに入日の岩といふあり。むかし、たふとき人の、落日ををろかみ給ひしよしをいひ、はた、ほろづきのほとりなる岩の上にて筑紫博多の一行寺の僧なにかし、三日のほどみのりをときて、浦人むれ集ふをりしも、「通路の外まて照らすほろ月の釋迦の御法にあふそうれしき、とそ、なかめられるなと浦人のかたりたり。やすみじし、わかおほきみのみけくにとて、普天のした、いつらのくまわものこりなうしろしめして、率土のはま風もたひらかに吹をさまりて、磯うつ浪のかゝるかしこき御代とて、行かふ旅人もいとやすげなるをめでて、よろこひのなみたに猶袖ぬらしぬ。いはゆる今別石とて、磯輪の玉ひろう。あるふみにいふ、靺鞨はもと蠻夷の名たり、その國に寶石あり、中つ國の人はこれを靺鞨といふ。その色殷紅にして、大なるは栗のことしといへるも、此濱に在るにまさりやはする。こはみな寶石にこそあらめと。

松か崎一泊

　もろこしのまかつもこゝにありきぬのたかあら玉をいさひろはまし。

渚名といふ浦に來て、「風渡る渚名の橋の夕汐にさゝれてのほる海士の捨舟と、おなし名なれは、爲家のたまひしふることをすんして、遠つあふみの名ところをおもひいづ。増川の浦をへて松か崎といふ處に日はくれたり。いつこならんか鶴の聲の遠う聞へたるは、「千年ふる松かさきにはむれゐつゝ鶴さへあそふこゝろあるらし。」といへる歌のこゝろにもかなへりと、その名ところをおもひやり、しはし聞たゝずみて、あやしのまろやに宿こひいねたれと、なにくれといぶせく、いもやすからてひましらみたり。

　野山へてつかれし夜半はくさまくらかりねのやとにゆめもむすはす。

三厩の浦

十一日。松前の島の、浪の上に遠う見やられて、しほせさしのほる、あさ日のてりみちたるころたちて三馬屋の浦につきたり。かの、みたりのおほんまふけとて、三のふなよそひして磯近くつなぎ、脚艇なといつくしう見へたり。此浦やかたに神明のみやところあり、養信庵といふいほりあり。御厩石のほとりよりのほりて觀世音の堂あり。

觀音堂縁起

こは、むかし、越前の國足羽なにかしといふ人の夢に、われとし久しくこゝに在り、ねかはくは、みちのおくの三馬屋にいたり島わたりの舟をゝもり、浦のまもりとならんと見おとろきて、いそきこの浦にをくり奉らんとおもへど、よるべなければ、すへなう月日をふるに、そのくにうご久末なにか

大泊の浦ハ

問丸伊藤五郎兵衛

圓空來りて

義經所持の觀音像

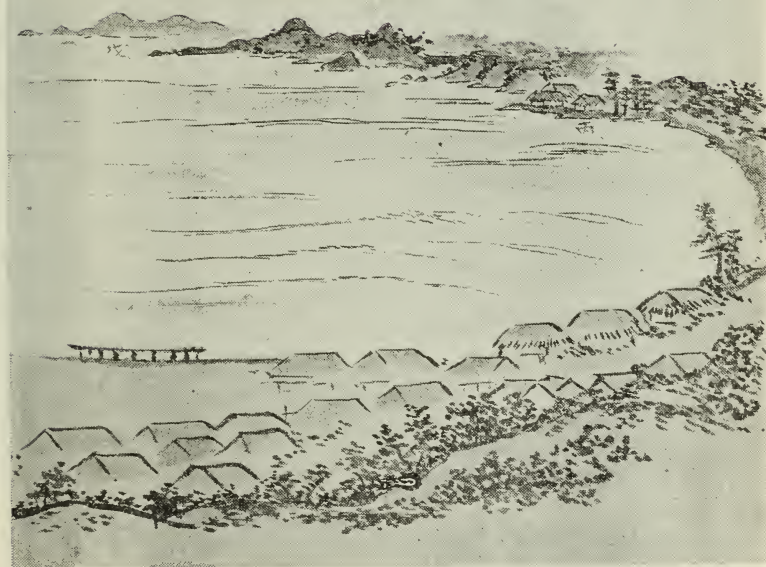
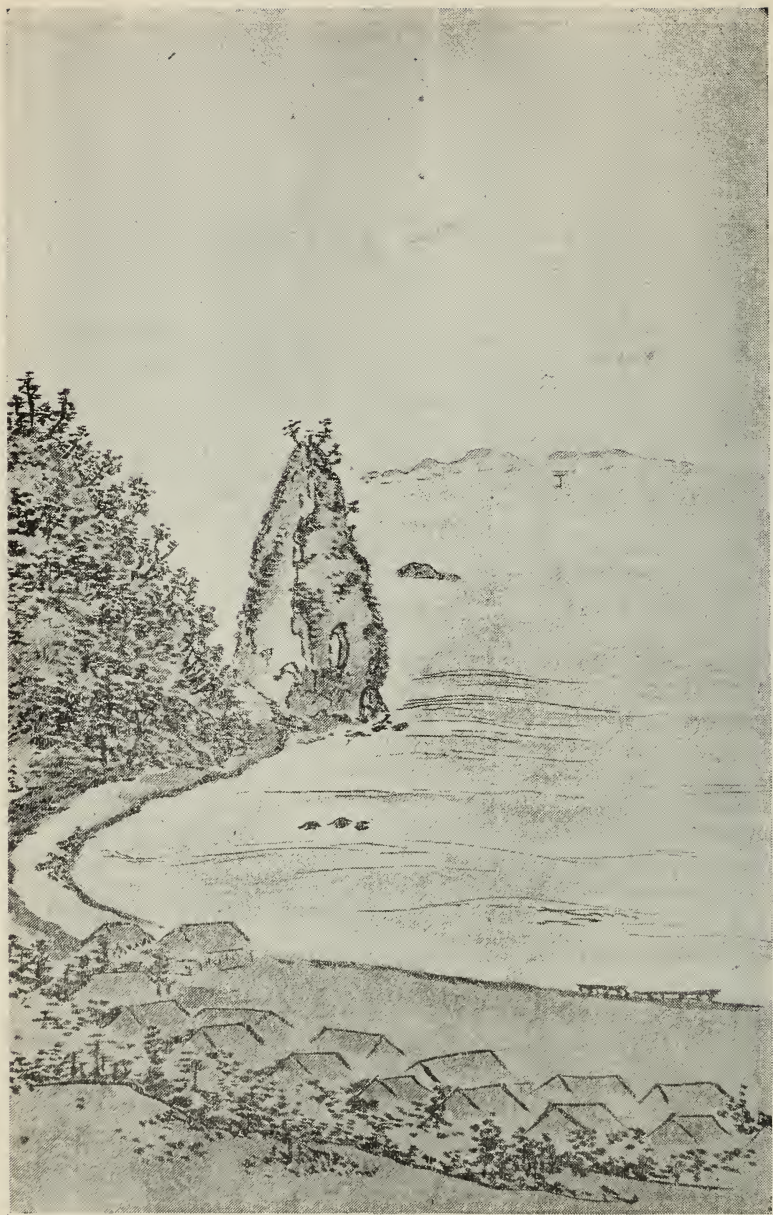
しといふもの津輕にいきて、檜原の杣に宮木伐らせ、おほふねにつみくさて、ふなてしける
と聞て、これにたぐへて、みほとけを奉れば、久末、としころ宿りつる問丸伊藤五郎兵衛がも
とにもりいたりて、しかくのことありといふ。あるしは、ひんかしのみてらのながれをく
みて、ことのりのをしへにはかたふかて、をりもあらんとて、からうづに、ふかくをさめぬ。
としへて足羽がもとより出たりける圓空といふすけ、島わたりせんとてすきやうし來りて、
これも夢をしるへに、みちのくの國にいたれは三厩の港につきて、そのほとけのおましま
せる宿ともしらで伊藤かもとに泊りて、この浦にさることやあらん、いつこならん。あるし
こたへて、わが家にこそあなれ。こは、ゆくりなうさちなるかなとよろこひ、猶たふとく、わ
れ御堂を建んと。此法師かくて、三厩岩の上なる磯山をひらきて、そのみほとけをおかん。
この觀世音は源九郎義經のきみ、かぶとにをさめて、そのたゝかひに、しかまのかちをえ給
ふのとこのましませし、一寸二分の、しろかねの、みかたしろなりけり。それに、足羽かもと
へのもんじやう、花押あるをそへたり。圓空みづから觀音の像を斧もてつくり、しろかねの
みかたしろは木のみかたしろのむねにこめて、そのもんじやうに、圓空法師、ありつるゆへ
をかきそへて伊藤かもとにいま猶あれど、いたくひめて、この浦人すらゆめしりたるものも
あらねど、ある法師のこゝにとしをへて、なりむつびたるとて、そのあるしが、このほうしに

のみみそかに見せしとて、かのほうしの人にかたりていふ。いとふるめける紙のあつくとしたるにかいて、義經とあり。又圓空法師か書そへたるかみは新しけれど、こころくしみのはみて、文字のさたかならさるもありきと。その圓空か作れる觀世音を、一とせ、みとはりひらいて人にをかませ奉れは、雨風しきりにして海あれ、ひかり、かんさけしたれは、此たゝりにやと、いそぎとさしてより、いまは住僧のほか、さらに拜み奉りし人もあらしとかたり、春の末は三寶鳥もかならすきなく、もともたふときところなと浦人の話りたり。「けふもかもみやこなりせは見まくほりこしの三馬屋のとにたてらまし。」と、すんじぬ。人もしかおもふにや、松前のきみの廳に、「船うけて月をみまやの浦邊行らん。」と、太氣能綾太がなかめて奉るかた歌てふものを、かのきみ、盞の皿にかゝせ給ひしとなん。この三厩の、

三厩梨由來

新谷勘兵衞といふものゝ砌に在つる梨子のいとよければ、おほんつかさとやらんめして、めて給ひしあまり紅梅瓶子と名つけ給ふを、われも人も接換、寄枝とし、あるは嫩なるをうつして、いま三厩梨子とて、その果、津刈のくぬちにいと多し。そのもとは、此宿なりしと人のいひて、この門をすぐ。宿てふ宿にすゝとり清め、そのもふけなへてならず、いつくの日、

烏鐵に向ふ

むさしをたちてこゝに至り給ふなと、人さはにいりみちて、しはしとて休らふかたもあらねは、烏銕の浦にいさ行てんとて、三馬屋のはしなる中濱といふところにしはし休らへと、此

昆布刈小家多し

竈の澤村

上烏鐵の浦

蝦夷の後裔

あたりも屋根ふきかへ、さうしはるなといとなければ、磯邊にたち、渚なる冑石とてたてるを見たゝすみ、朝川わたりて算用師といふ村に來けり。この山河をさかのほれは、小泊の浦にいつといふ山越のみちあり。六丈間といふやかたをへて藤島といふかあり、そのやかたもありき。あかわしりのみちに行なやみ休らひて、

春は咲く花のすかたを寄る波に見せてそかゝる浦の藤島。

此あたり、過來しかたも、柴ふける屋に木の皮の戸さして、磯邊にかりの栖居して、夏はかり、ひろめからん料にそせりける。眞砂地にほしたる昆布をのしたゝし、ゆひつかねて、男女いとなう見へたり。巖の上にのほりて四枚橋とて、細き木をいはのはさまごとにかけわたしたるを、うちよる波のうへあやうけにふみて竈の澤村になりぬ。このやかたの邊に、田村將軍の、ゐみしをうちたまひしころ、すへたりし釜のあとてありけり。舊烏鋏川をわたりて、上烏鋏の浦といふやかたに巳のとき斗につく。此浦人はもと蝦夷の末ながら、ものいひ、さらに、ことうらにことならず。近きむかしとやらんに鬚そり頭そりて、女も文身あらて、そのけちめなし。うらのをさ四郎三郎といふかもとに宿かる。むかしは浦〳〵に蝦夷や多かりけん、にぎえそ、あらえぞなどもはらいへり。猶ありたりし母衣月の弊岐利婆か末の子を又右衞門といひ、松か崎の加布多以武、その末を今は治郎兵衞といひ、藤島の牟左訶以

武、いまその末は清八といひ、宇氏通の久麼他可以武か末なるは、此宿のあるしの四郎三郎なり。此四人の保長(をさな)とて、濱名浦の七郎右衛門をいまもおやかたといひ、としのくれなとには刀万府てふ、海狗にたくふ、うなのけものを小島のあたりにとりて、その濱名のをとながもとに土毛にをくりたりしよし。この、うてつのうらよりは家居もたへて、牟土の濱輪のはてにこそあらめ。

赤玉石出づ

なへてうらわに、あか玉とつくるへき石のあれと、委万弊都の濱にくらふれは、あるがあるかは。しはしは、ひちをりて休らひ、ふたゝひ、海べたに出てあたりを見めくり、「到合浦者不求裏寶珠、登摩嶺者不染有衣香。」とか、家つとにもとひろひたり。かく寶石のところ〳〵に在れは、外かはまべに合浦の名をいひわたり、からうたなとに孟甞がふることをひいて、もはらいへり。やをら日の海に入て、さしのほる夕月をたとりておきべ〳〵へとこきゆく小舟は、網させりといふか、ほのかに遠さかる。濱風の寒けれは入て枕とる。

　浦つたひそことたつきもなみまくらかゝるたひねのよる〳〵そうき。

松前を望む

十二日。あさひらけ行海の面に、松前の島は乾のかたに晴ていと近う、ふなみちの七里とかや。うべならん墨かきの画のやうに見へて、しろう見やられたるものあり、たかとのなとにやと、めなれたる海士のいへり。この浦の末に龍濱(たつひ)といふ處のありて、そこに、帯嶋といふあらいその岩に辨財天女の祠あり。そかあたりにいかんには山背(やませ)泊、柾刈(まさかり)泊、梨の樹間、蚊

鳥鐵泊り

三厩昆布

杜、鳴神、椎神、兵粮、甲嶋(よろいしま)などの名はあれど、みちさらになきをめくるなどいへり。沖にふねのいかりかけたりと、あるしのみるめはやく、よきふねの來也。いそぎものしてよ、たよりしてんとて、小舟をとばせてのり行てとへば、小泊の浦、十三(とさ)の港べにをふふね也といへば、ほゐなう、あるしもこぎ暮て歸りぬ。近となりに砧の音の聞へたり。

をくしとるいとまも波のぬれころもいかにほしてかあまのうつらん。

十三日。あけ行海つらに、眞帆曳たる船とものの追手こゝろよげに、うす霧の中を、こゝかしこにつらなりわたるひんかしの磯山に、浪かあらぬかとよこたふ雲の、いふへうもあらぬわたのなかめは、春に見たらましかはいかならん。あさ日さしのほれは、こなたかなたの磯べより小舟のり出て、から長き夜須てふものもて艘つきありき、ひろめかる泉郎は、大なる木のまたのかきをふたつゆひそへ、石を礎につけて水底に投やり、根こしてひきあぐる。これなん三馬屋昆布とて、みつきにも奉り、くぬちに、このゑひすめをあきなひものとせり。猶船の行を、

眞帆かたほ見へみ見へすみたちこめてへたつ霧より奥の浦ふね。

鵜の、はねを、ふためかしひらきて、日かけにむかひたつ岩に、さと波の寄かへるさま、「夏とても身をはいつくにおくの海の鵜のゐる岩もなみやかくらん。」と、なかめ給ふたるにひと

精靈祭り

しかりき。宿に入は、たま祭すとて、佛の前にあか棚たかうゆひあげて、をみなへし、小萩、小車、水かけくさをり手向、よこたへる棹には五色の紙をかさねかけて、菼をいろ〳〵にそめ、仙袂、青豆、はまなすび、山葡萄なとを糸につけてうちかけ、昆布を細くたちてかけませて、荻、芒のくきを青こもとあみ、棚のうへにきよげにしき、かいばとて、朴のひろ葉をひし〳〵としきならべ、荷葉あらされば、これにかふるこゝろにや。ふねの磯近う來寄たるに、

ブンマピルカ

宿の男岩の上に立てしか〳〵といへは、ぶんまよくはといふ。いらへて、ぴるかならんといへり。こはみな島渡りなれたるものゝ、ゑみしらか言葉を聞ならひていふなり。夫牟万とは賃錢をいひ、比留加とは良（よし）といふこゝろなりとか。さりけれど、やませのふかねばとて錠（マヽ）かけたり。

やませの風

やませとは、山の背なとより吹をはしめにやいひけん、艮の風をいひて、これを追手に松前渡をせり。日は西にかたふけは、たうめ、をさめ、わらはうちこぞりて、磯山かげのつかはらに灯とり、すゝすり、かなつゝみうちならし、なもあみたほとけ〳〵、あなたふと、わかちゝはゝよ、おち、あねな人よ、太郎があつぱ、次郎がゑてなと、なきたま呼ふに日は入たり。わらはのはせ來ていふ、やませ吹來ぬ、したくしたまへとていぬ。

　見わたしの近きものから蝦夷のすむ千嶋のなみの夕くれの空。

松前行乘船

小舟にこかれいでて大船にのりうつりて、帆繩ひきあげて、こはよき追手とて、あまにもた

四枚橋の峠
檜原

都の崎
帯嶋の

せて宇底都の泊も放れば、達飛か崎來つれど浪風もしづまに、こは、たつひ、白神、なかの汐とて音聞へし、あらき三のしほせのそのひとつながら、いさゝかのしほ波たちもおこらず。辨財天の嶋かげをうちめくらすをりしも、楫とりの聲あららかに、よき日よりたもれ辨財天と叫ふに、はと聞おとろきかしらもたぐれは、月のくらく見へて海の上たひらかに、泙たるしほ風さむけれは、

月もいま雲の衣をかさねきてなみのおひしま夜寒をそしる。

中の潮迫のほとりに風の吹おこり、しほも高う浪たてと、ふなこらはやすげに、「いやな男とやませの風は、そよとふけども身にさはる。」と、飯筒うち叩てうた唄ふ。はしらも吹たはむべう風いよゝふきにふけば、舶を、みたになとにのり入るやうに浪のうねりきて、ちりたる、たか葉なと見るごとく波にいざなはれ、からくして、そのなごろをいづるやとおもふに、はやこゝなん白神か岬のしほなりとて、猶うたうたふに、たかき山とはおもへど、ふなぞこは、なる神のことくかう〳〵とひゝきて、こゝろならねは、ふしにふしたれど、いかならんと、かしらをあげて海の面を見やれば、みなぎり落る瀧つせなとに、月のおちたるがことに、かゝる汐起りのおそろしさに、うなの神にぬさとり、しほせに投て、

風はやみなみのまに〳〵行ふねをみそなひたまへ綿津海の神。

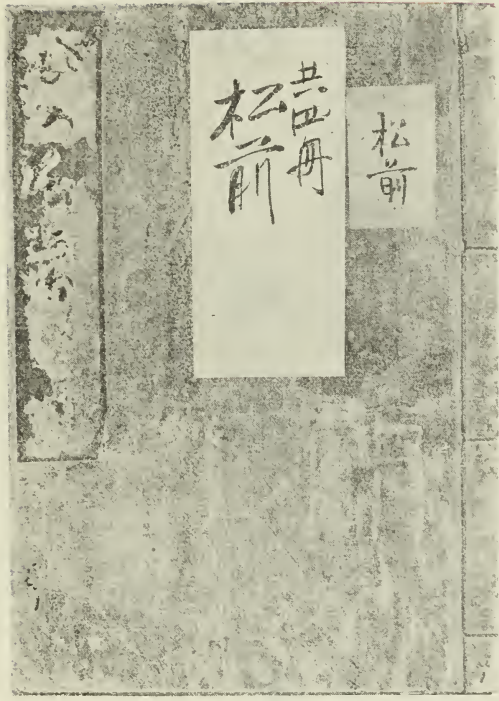
と手酬すれは、うけひきたまふにやあらん、あら汐のからきわたなかをこき出て、風もやゝなきたり。月はいとおもしろく、千里のくまものこりなうてりわたれど、いまたこゝろもおちゐず、ゑひふせるに、犬の聲の遠う聞へたるは、はや島の近つきぬらんかしとて追行に、月も入はてて、いとくらきふなみちを、そこともしらす星をかさして、その末こそ見へね。

眞北なるうこかぬ星をしるへにてふねのゆくゑもしらぬ遠方。

かげろとゝりの鳴音も聞へて、みなとべしるき、たかきともしびのひかりをそこととさして、とりかぢ、ようそろ、おもかぢと鍼すぢを見てよばひ、沖のしら浪しら〳〵と明はなれ、嶋山の梢も手にとるやうに見へそめて、やかた〳〵もそことしるべう。朝日のさしのぼりては、島のすかた、なにくれと、いよゝ見わきたるやとおもふ間に、くに〳〵よりこきより、むやひしたる、あまたの泊舶のあはひにこぎませて、ふねつきたり。」

七月十四日朝明け北海道に著く

ひろめかり

布止

卅四冊
松前
松前

寛政元年北海道にて

かゞめ

鰤釣り

横泊の浦

十七日。上風といふか吹て空の晴たれは、此運上屋を出たつ。こゝにおましある觀音菩薩のほとりの草の中に、まろひたる石ふみあり。いかなる人のしるしか、文字ほろひたれはしらず。行〱、はまにアキノ、メノコをたつさへて、かゞめてふものを刈もて來けるを見れは、ひろめに似てことなり。男（オツカイ）ひとり、はなれその立岩の末に立て、いとなかやかなる木のさほして、鰤魚（オソボロスケ）てふチエツフ釣とて、かもしゝの角を、ふたきあまりにけづり、河豚の皮をいさゝか附て鉤（ケム）をさし、糸をつけて浪のうへに投て、ひたうちにうつやうにしてけり。そのちのかたちの水に入ては、いわしのひれふるに似たれは、ヲソボロスケのひくとなん。けにやあらん、大なるぶりひとつを釣りて岩をくだり、こなたさまにもてく。やをら横泊といふ浦に來るに、磯にいと高うつみ重ねたるは、いかなるものかと見やれは、大竹の根こしたる也。世にいふ大よしの波にいさなはれて、いつらのくにによりや來るなと浦人あやしみ、行人々もとゝまりて、こは、もろこしの塘なと、水のためにやふれたらんと、かたらひてすぐ。

山路に入る

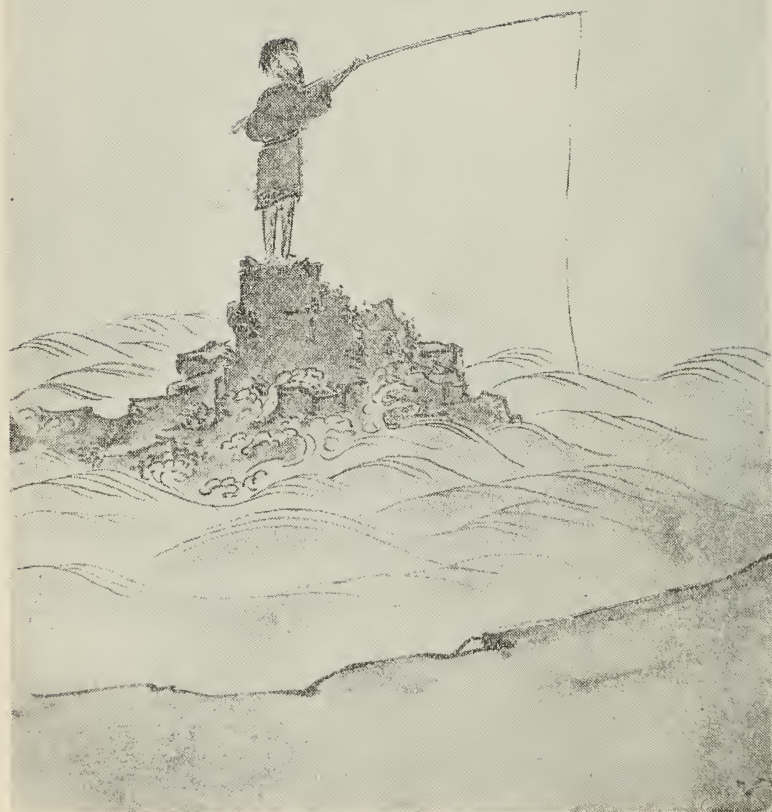
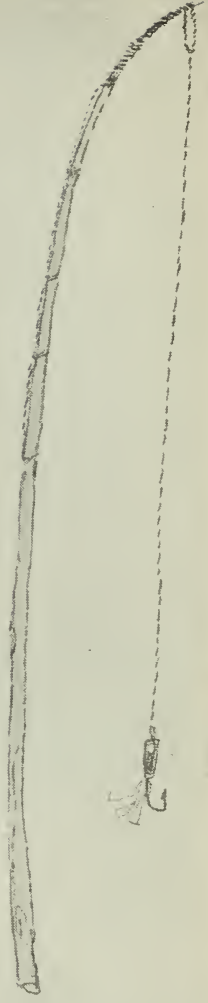
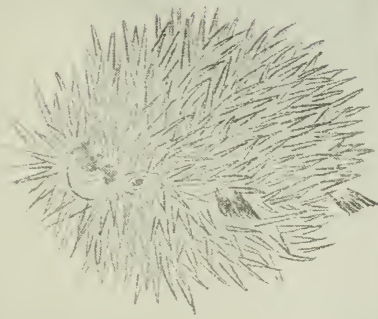
地藏穴の怪物

石子積

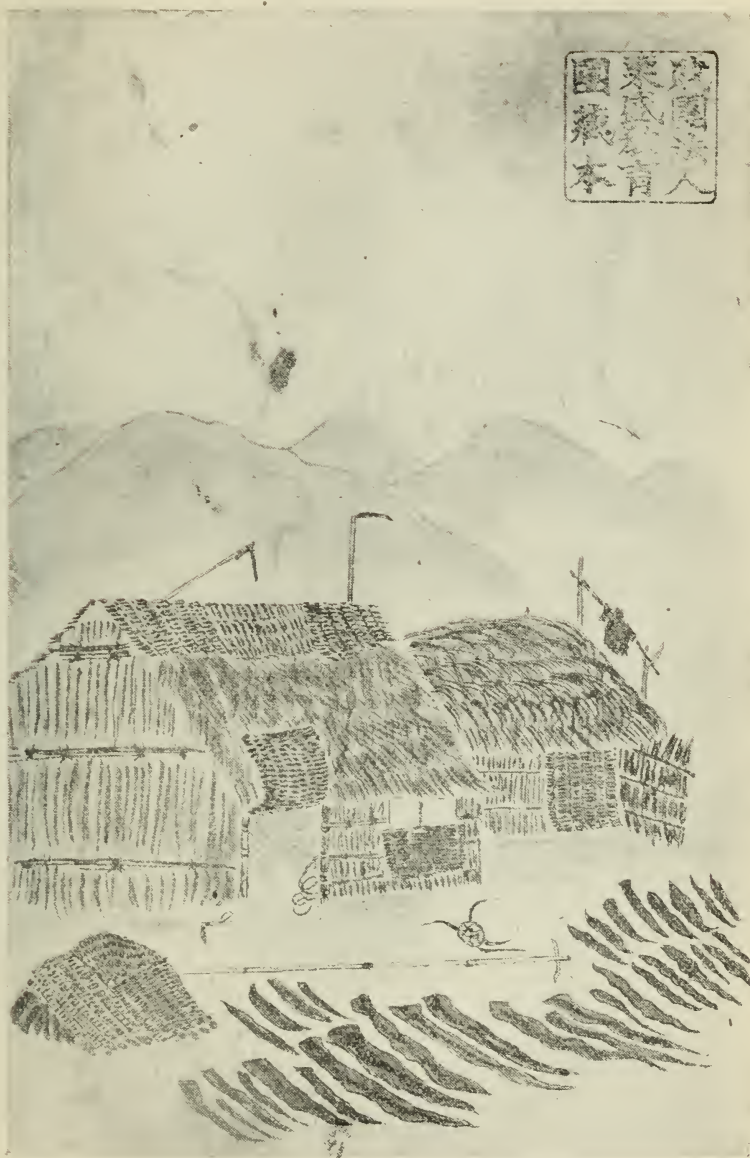
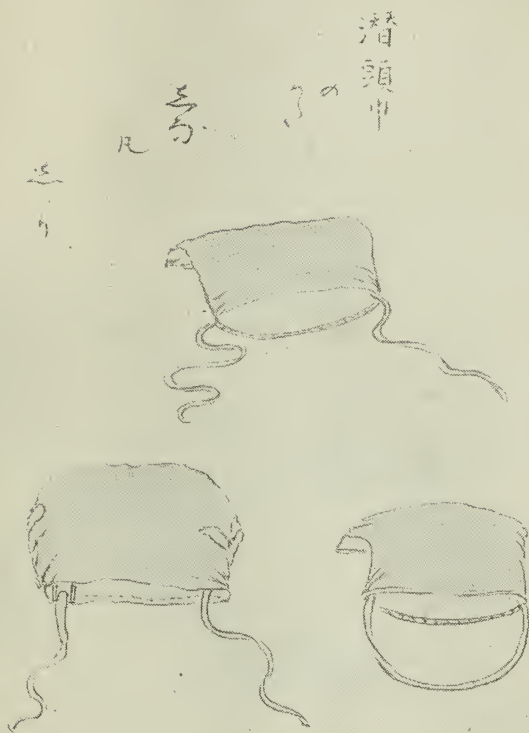
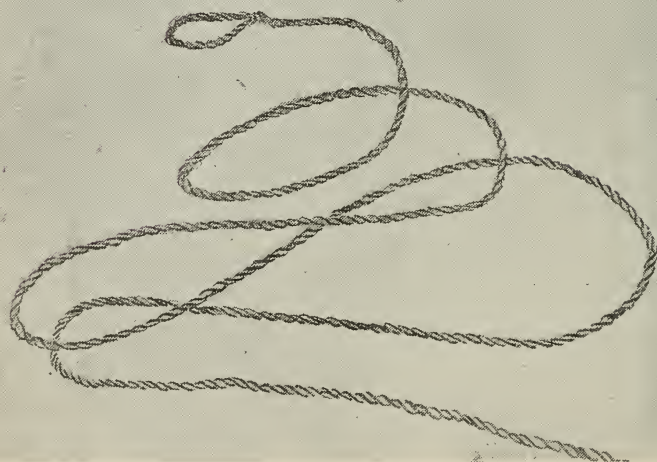
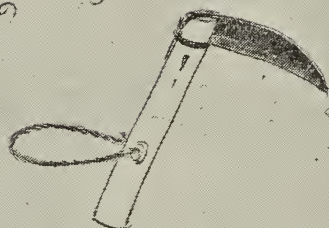
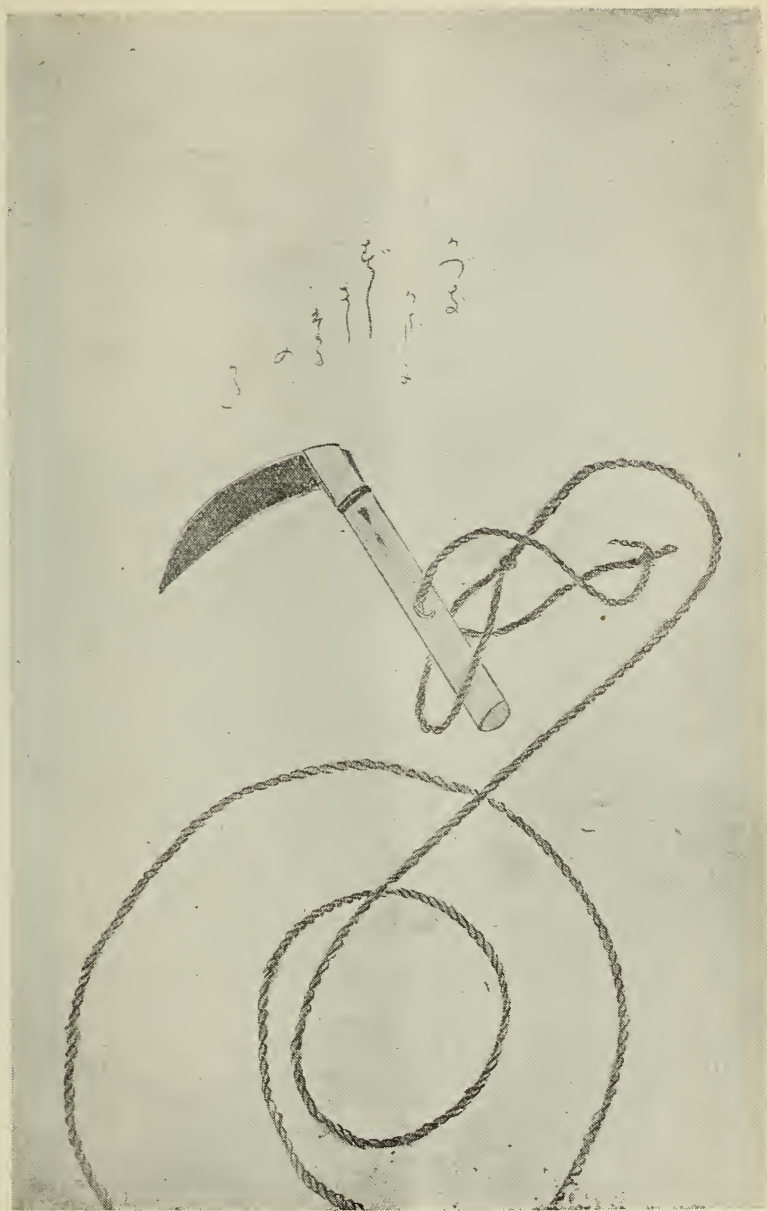
辨財間、川尻、齋藤間、水無シ、しづかうだ、よもぎない、セタラキより、れいの山中にかゝれば七之助おとし、彌八おとしいとあやうく、あらきいはねにぬさむけてとすんし、地藏穴といふに、あら雄ら石をまろはし入れば、はる〴〵とおち行音の聞へたり。この穴へたに、鰒、かせなどの、燒くらひたるからども、つねにあり、さらにけものゝわざとも見へず、たゝ、あやしきものゝすみけるとのみいひつたふ。冬は、雪の上に大なる足のあとの、海へより山につゝきてあることあり。又去年のいましころ、童ふたり磯舟にのりて、やすもて鮑つきありきて、舟よせ磯におりて休らふ岩の面に、たかもりにしたる强飯あり。こは誰かこゝにおきしぞ、いさくひてんとて、ものゝほしさにくひてければ、そのたけ七尺の巖とひとしう、いろ黑き女の腰はかりに衣ひきまとひ、乳ふさなかくふた〴〵とたれ、眼くるめき立たるを見て、こや、此女のひる飯を、わはくひしそ。この女は、たゞうとにてはえもあらしと、舟をとはせて浦ににげ歸ッ來て、今しか〴〵のことありしそと、いろ青さめて語るに、いてわれも見てんと、わかく、いさめる男とも昆布小家よりはせ出て、舟あまた車がひを飛せて見しかと、その女はあらて、岩の上に、わらはのたうひのこしたる强飯のみこほれたり。はた、夜みちなとひとりすれは、このへんくゑにとられてけるにや、落うせたる太谷の底の死むくろに、かならず、つまあとのふかく、ところ〴〵に立たるなと、人のかたりついて、石子積といふ名ある

石碕に宿る

錢神澤

函館滯留

處に來て、石佛の前に、れいの、さいのかはらやうにつみたる石を、誰か重ねたるとはなけれど、むかしよりは高うなりたるなと語る。ゑぞむら、ほやがら、しほくび、しろいはま、渾荷川わたり、石碕に來て宿とふ。

十八日。風のこゝちしておなし宿にふして、泉郎のなさけにあへり。

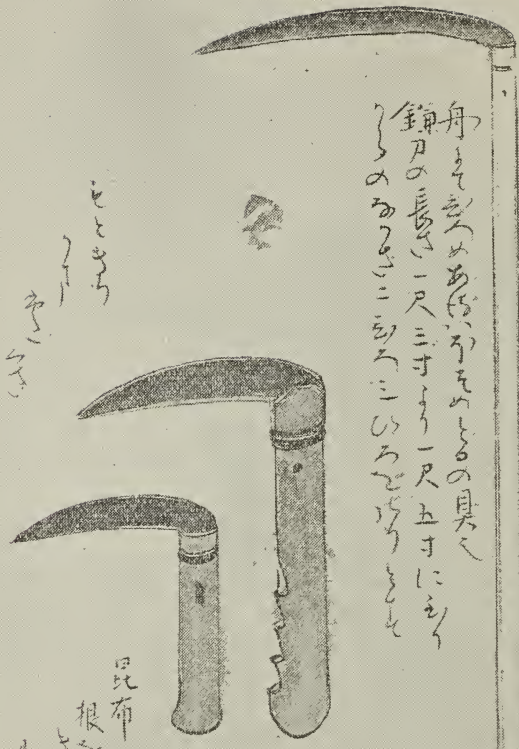
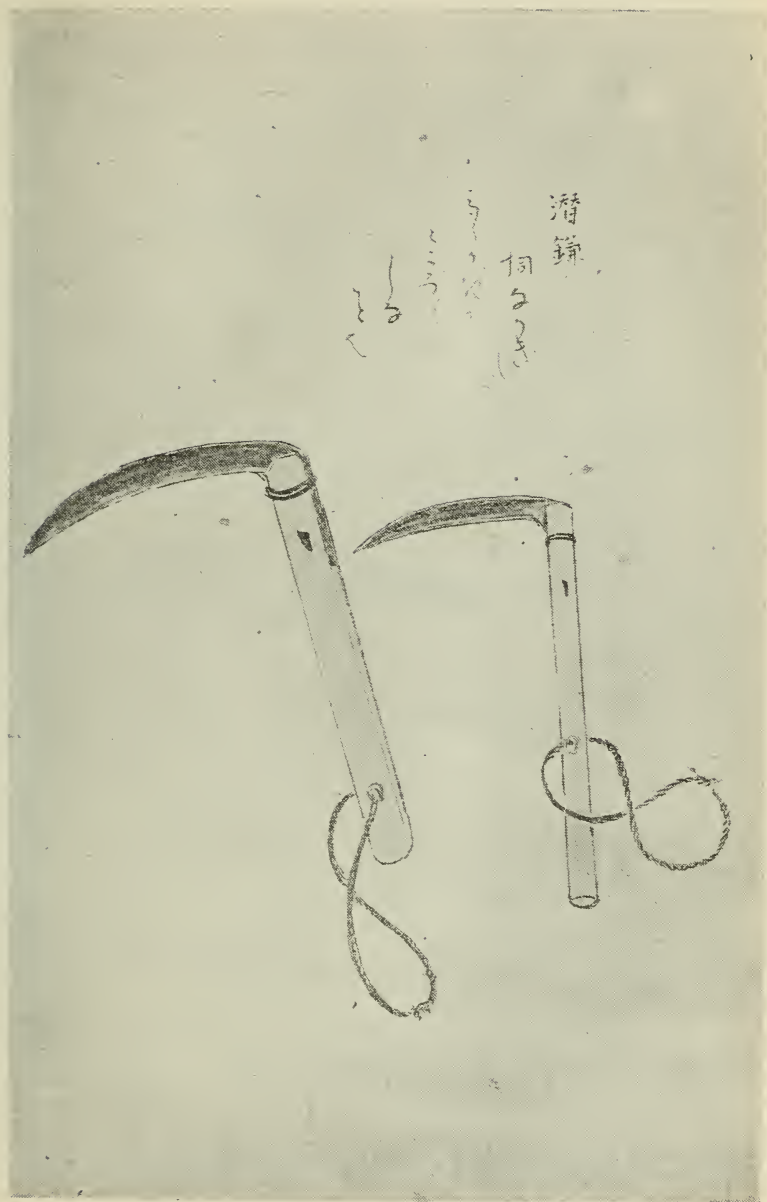
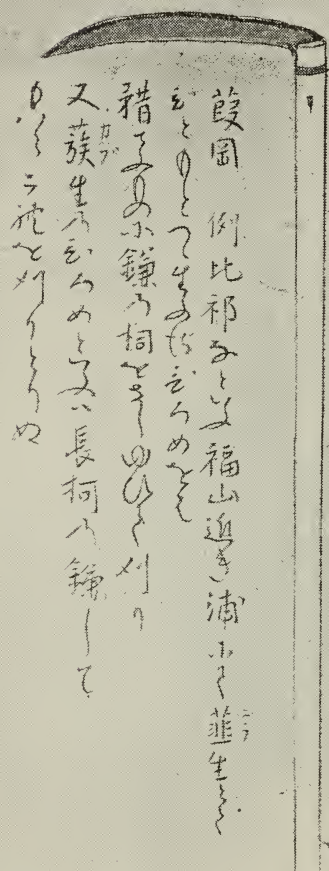
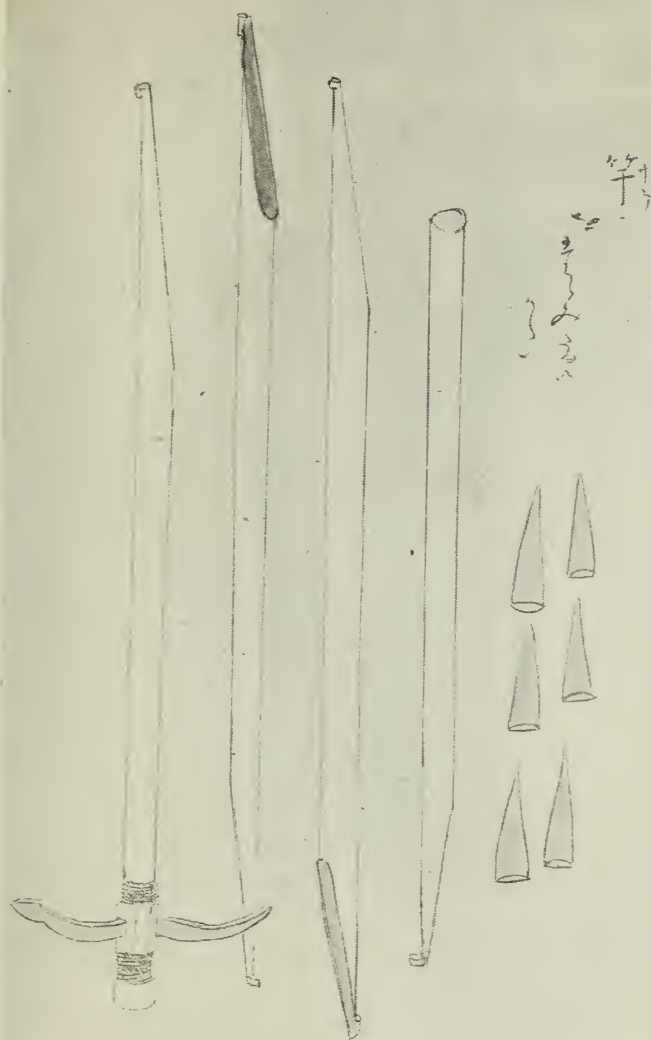
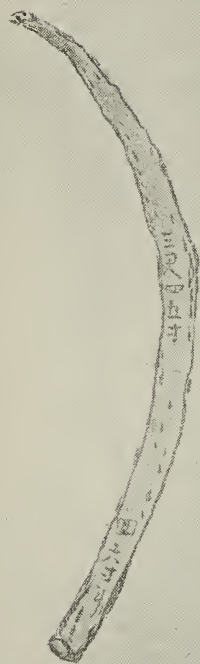
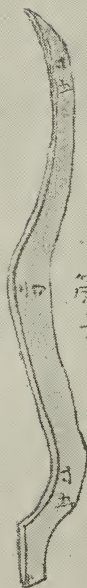
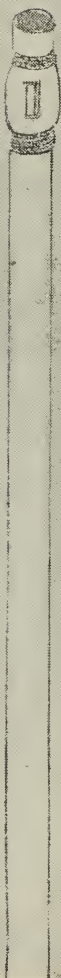
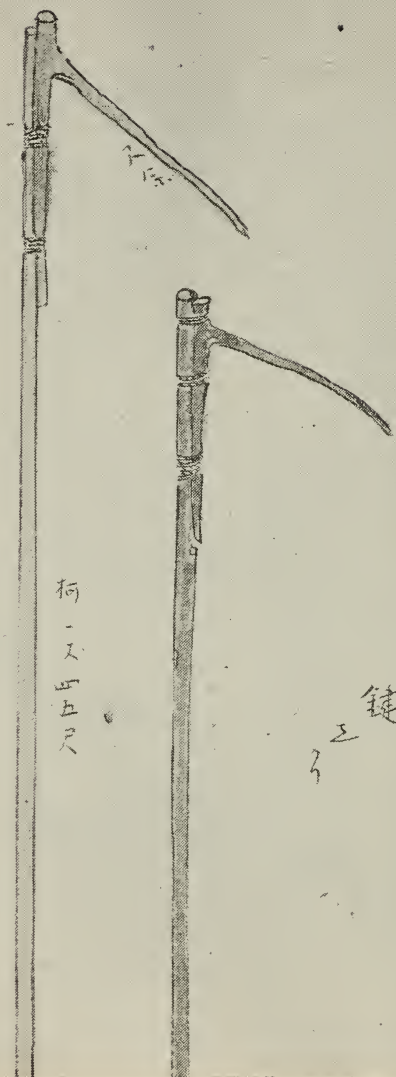
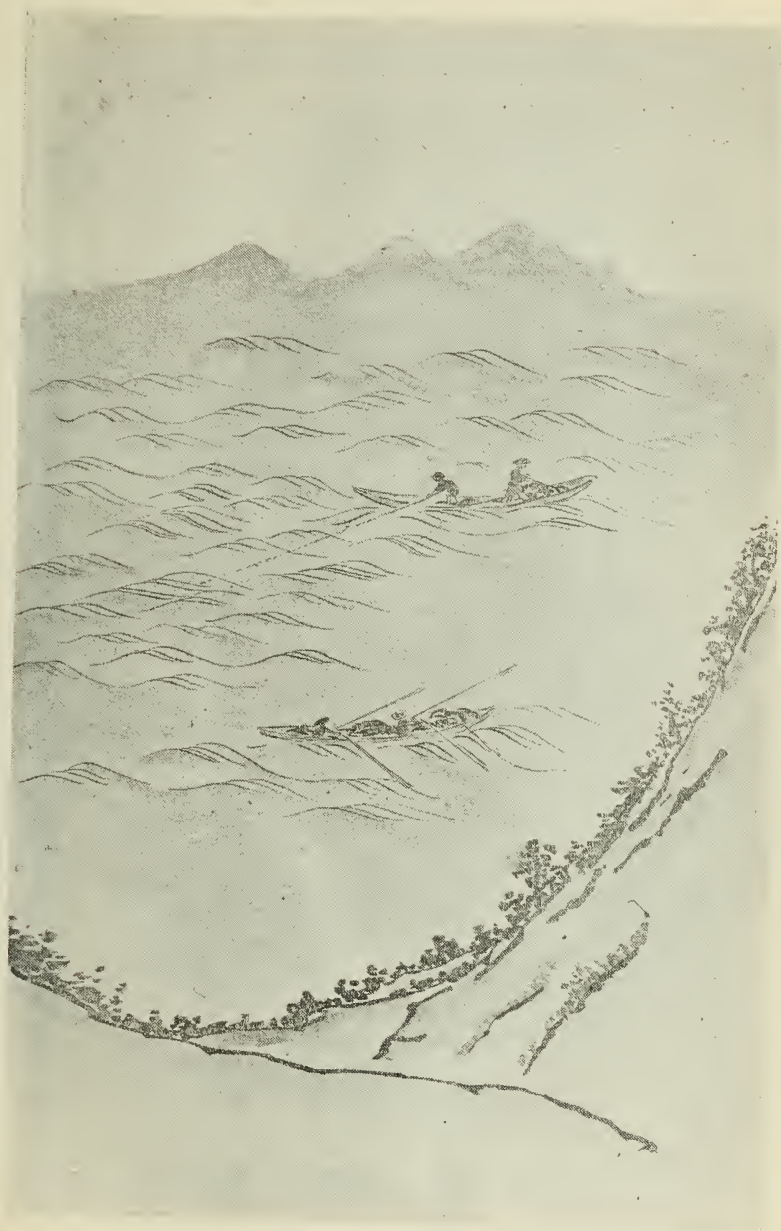
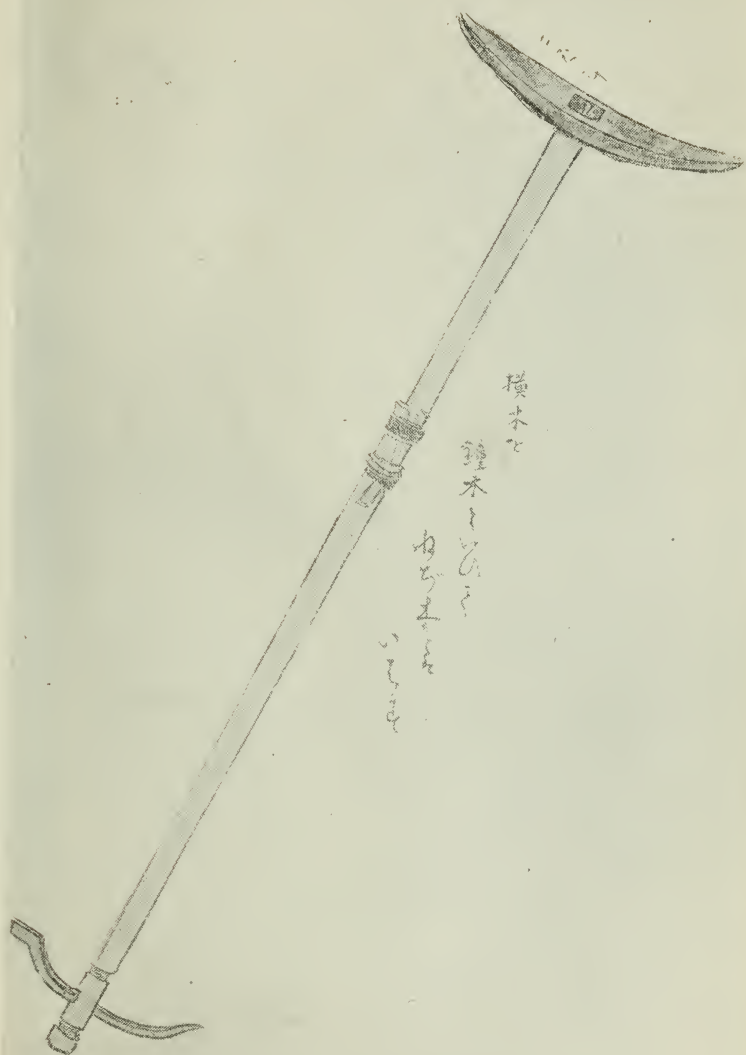
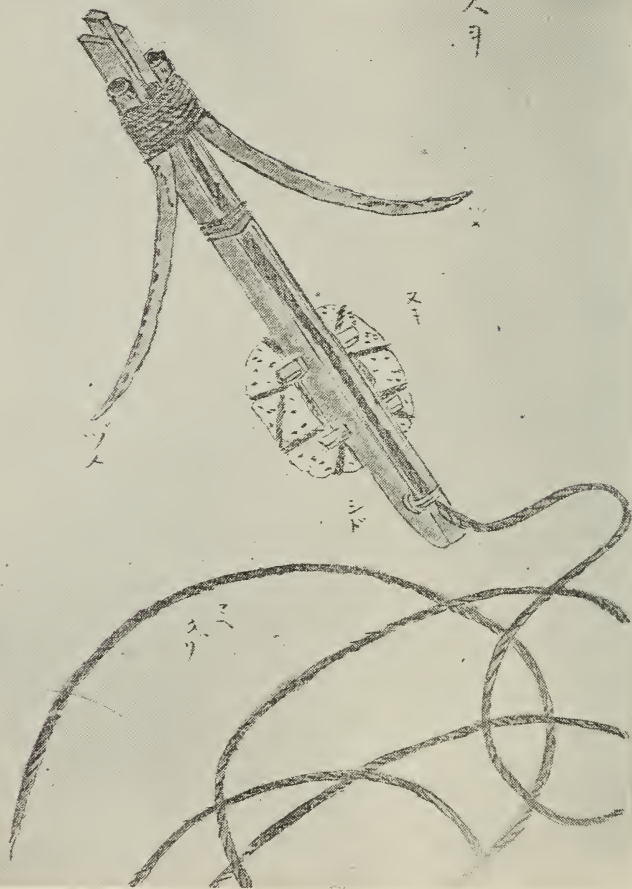
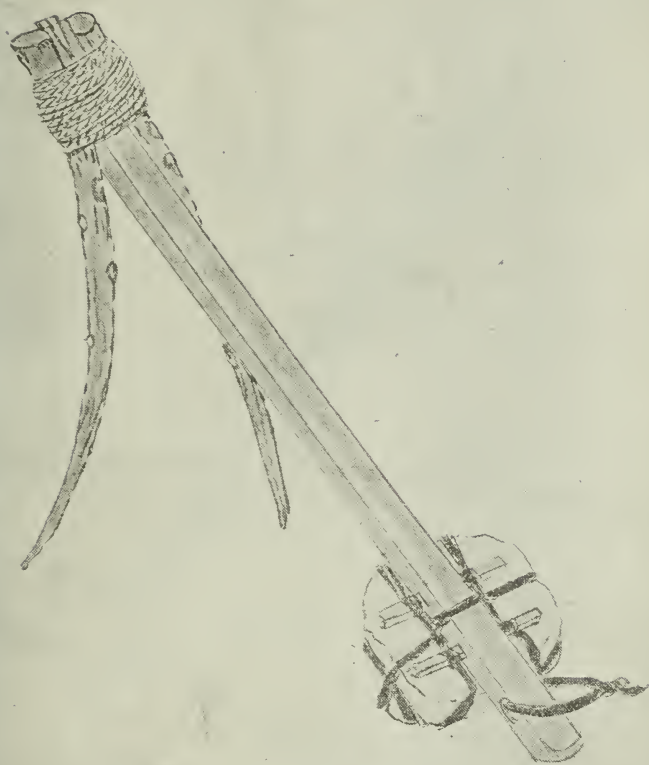
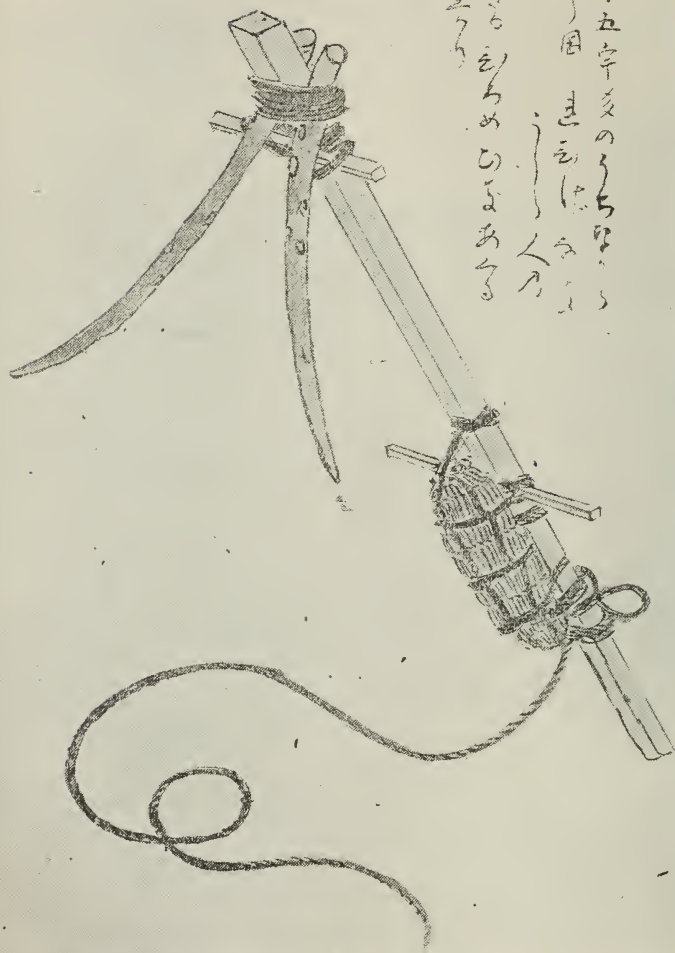
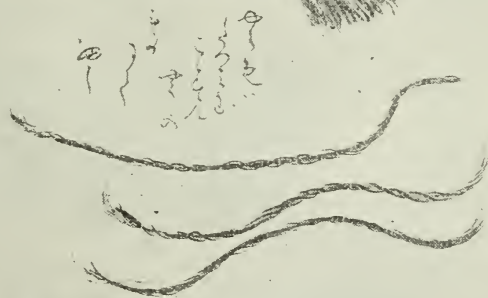
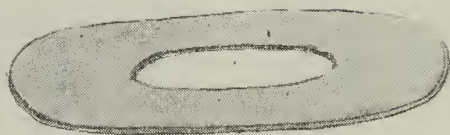
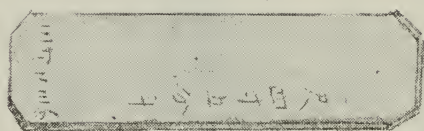
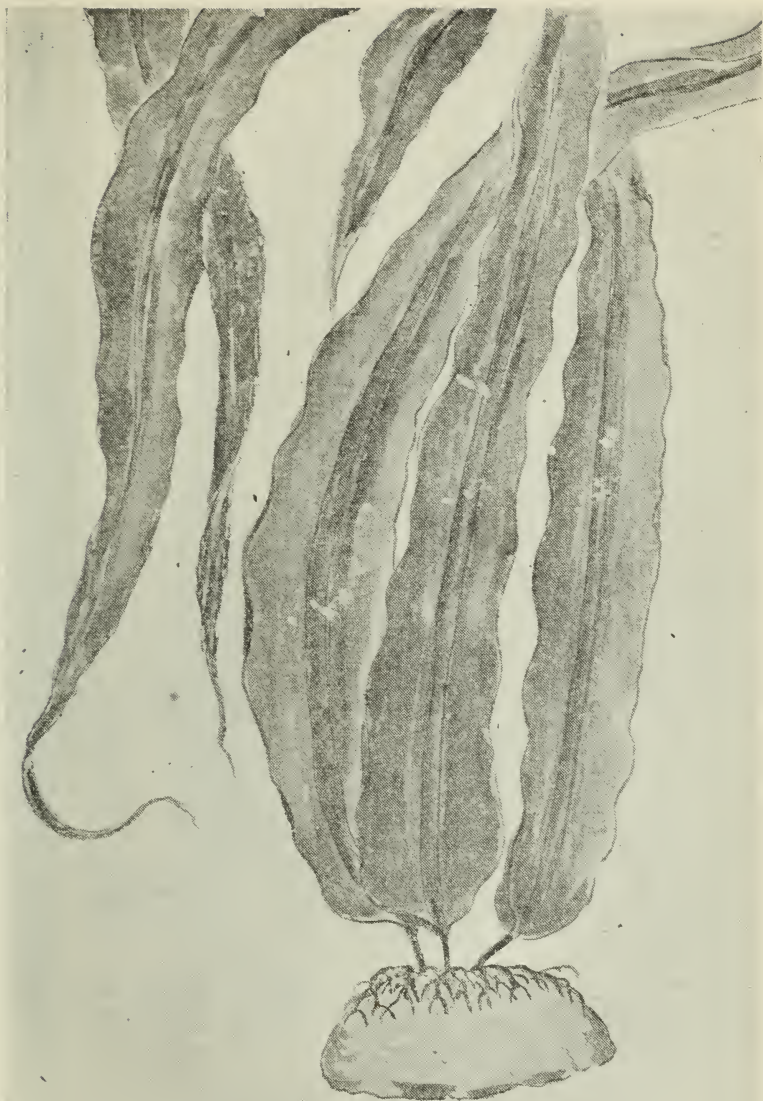
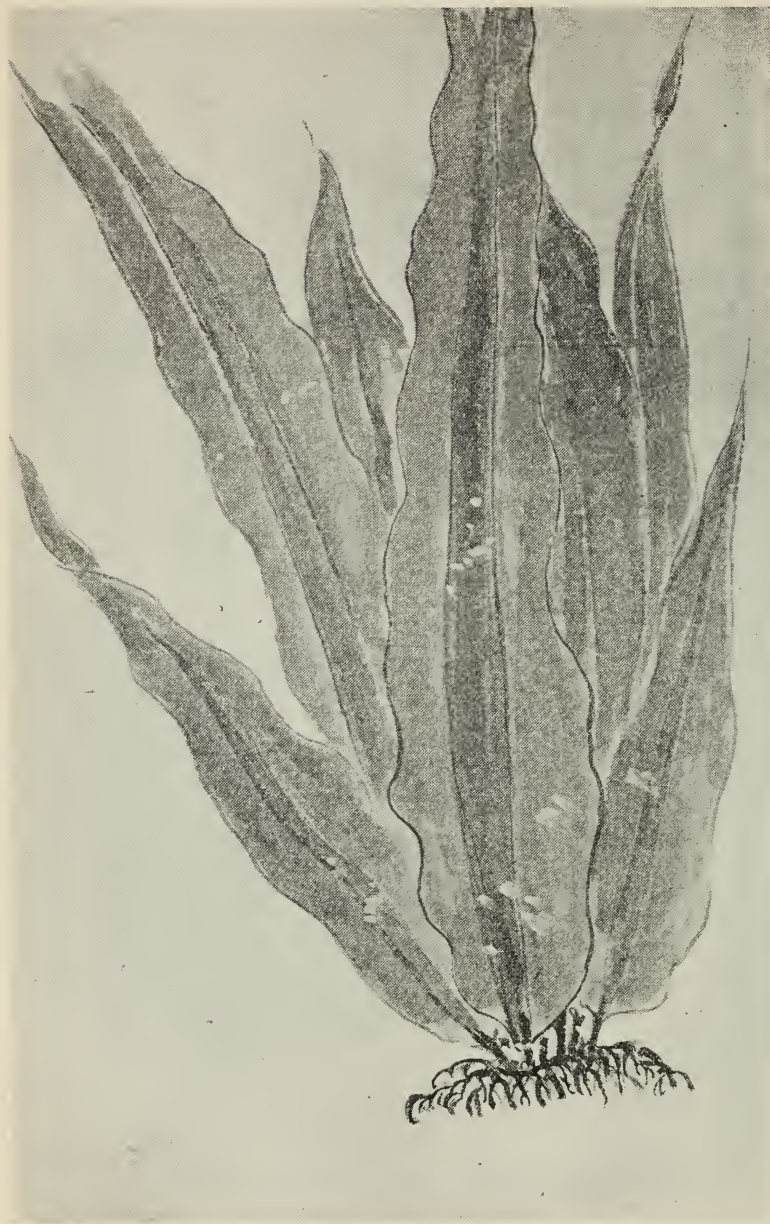
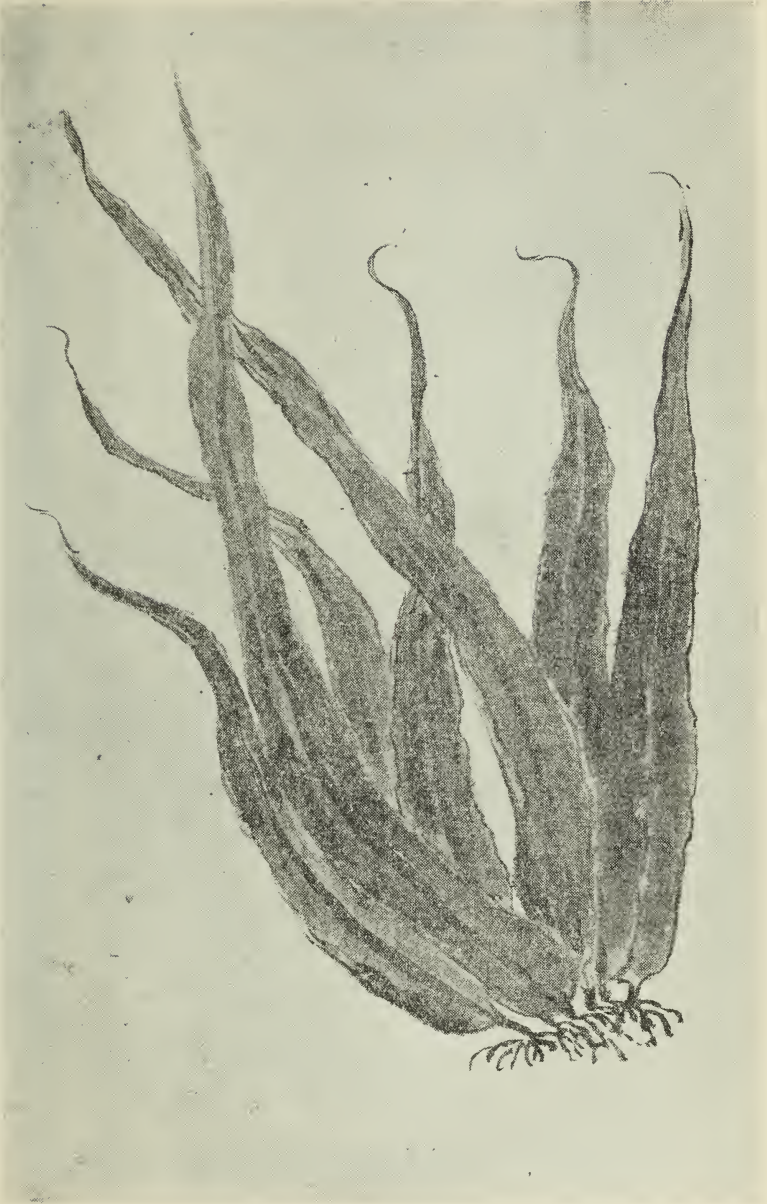
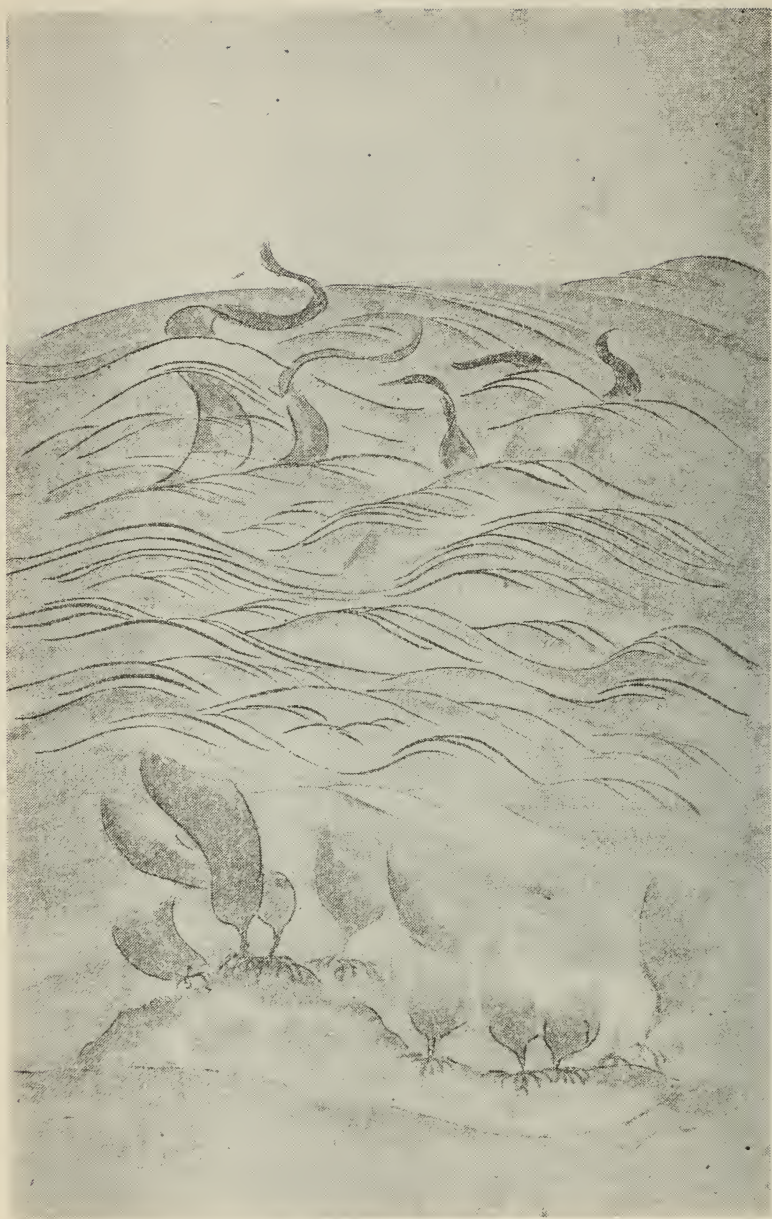
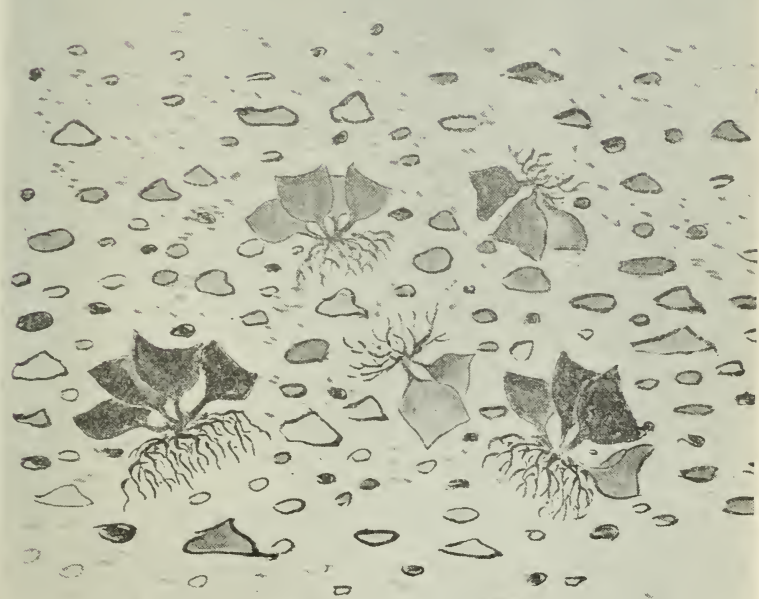
十九日。潮泊の河にしほなみうち入て、ふかし。山路は、しくまのをそれあれは馬にて出たつ。めてに遠う石倉とて、岩のむらたてる處に、飯成の神のほくらあり。こゝに黑ぎつねのすめり、をりとして見しなと、この馬ひきの物語にしつゝ、錢神澤に來て蛯子のもとに至り、こゝに月をへて、龜田、有川、箱館に遊て月日をへたり。その見しをあらまし、ひろめにたつさはる具なとをさへ、をよひなきふみてもて、ひたんにうつしぬ。見る人、をさかひをはなつへけん。」

潜鎌

潜鎌

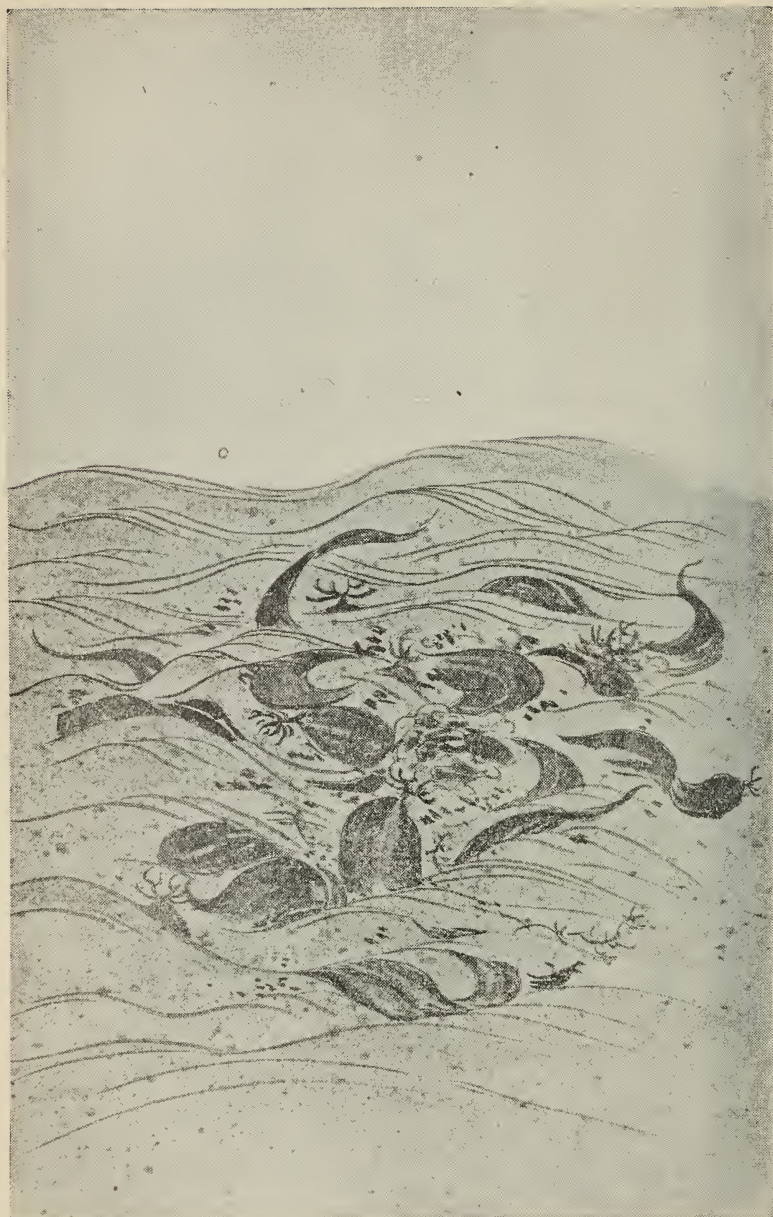
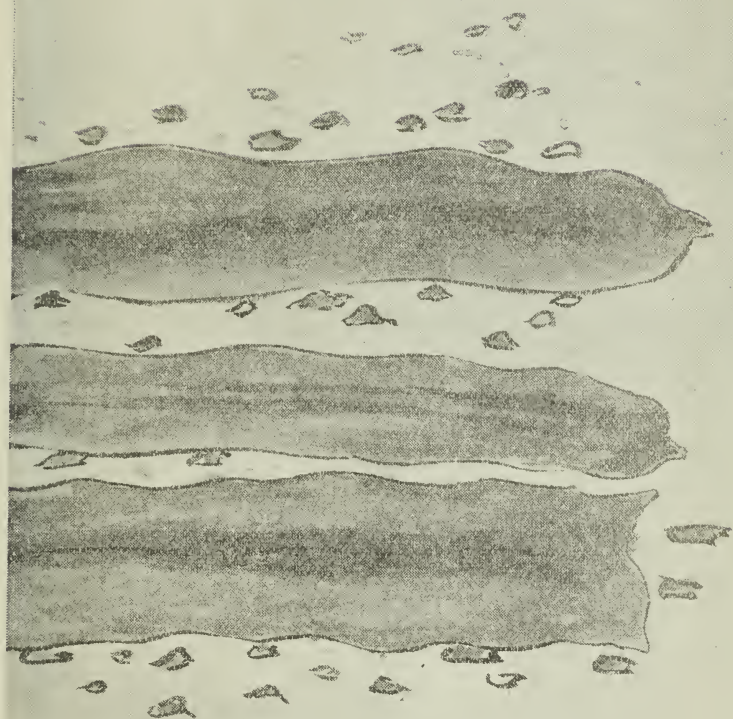
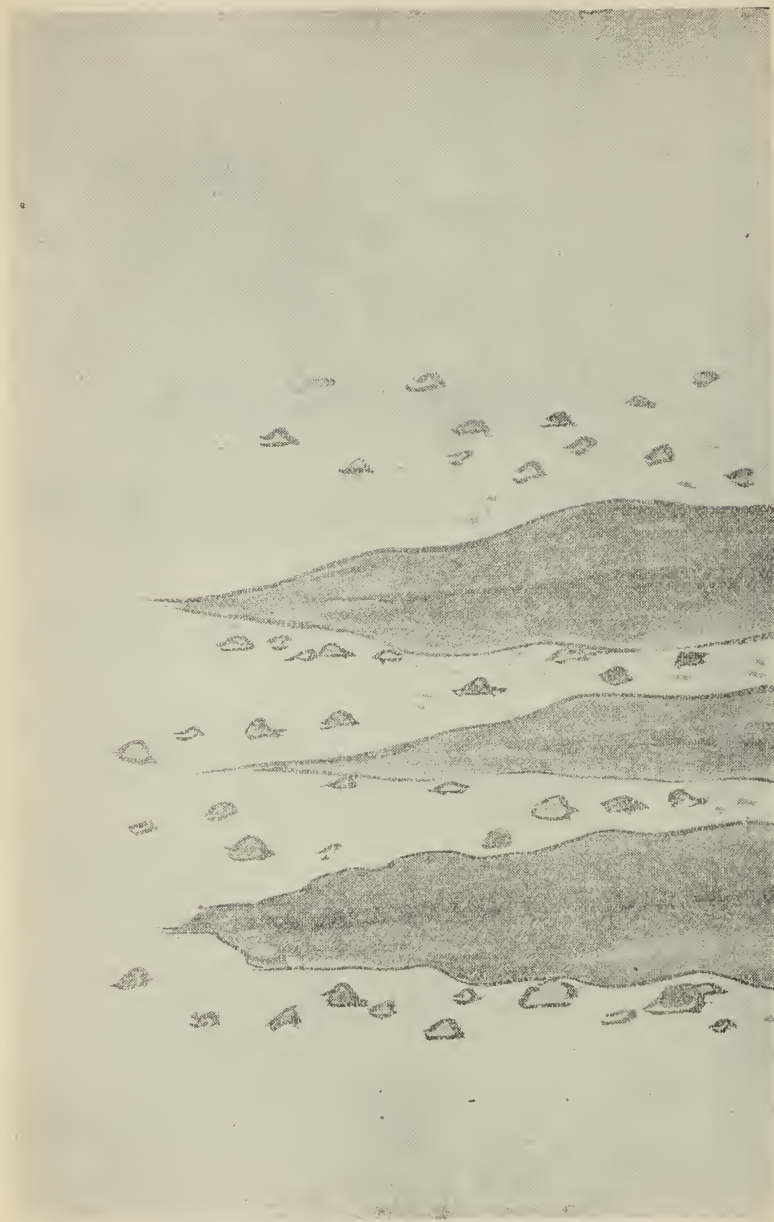
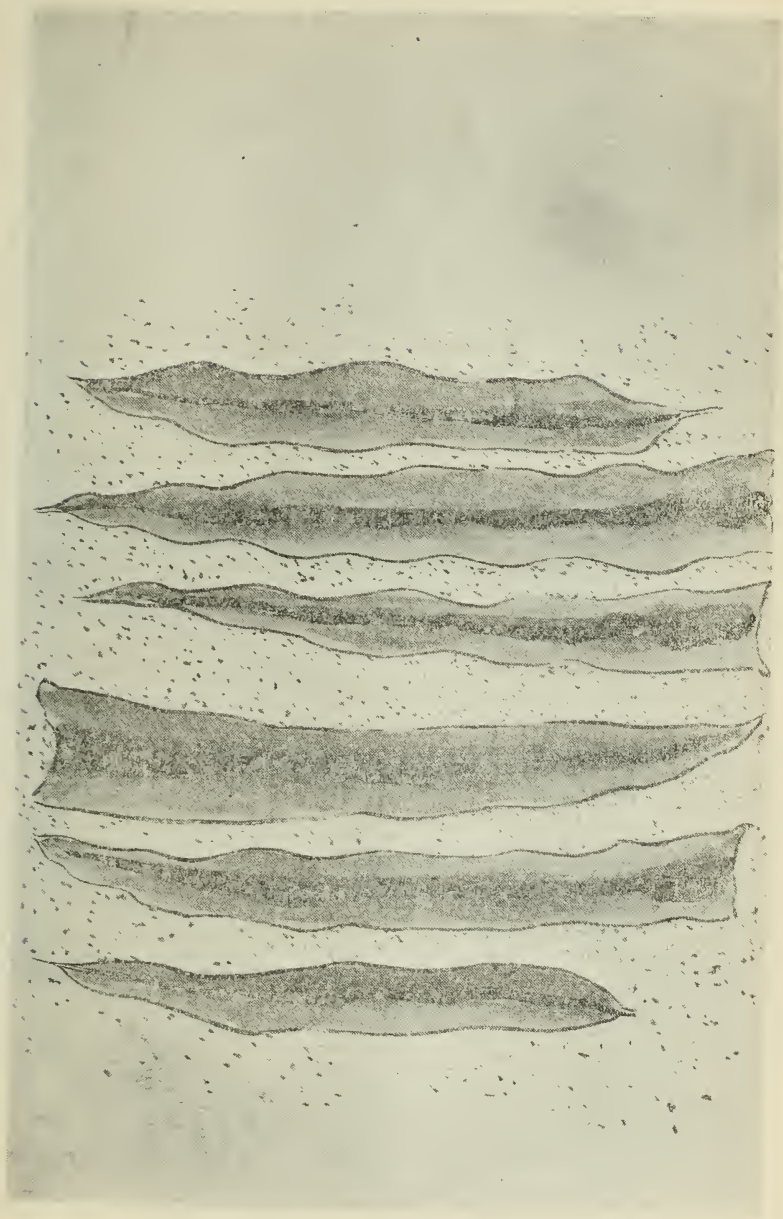
鎌圖　例比布なと云福山近き浦にて韮（ニラ）生まく
おとのしてやあはさらめとも
猎てあふ鎌の柄をうしのひろく刈り
又蕪（カブ）生のさらめといふ長柄の鎌して
かく　ら花をとかりとるめ

錘石

横木と

シド真通シテ三尺ヨ
貫五寸余
爪ニ三尺ヨリ
前絆八十余尋
ヌキ
ツメ
シド

ひろめかり

ひろめかり

ひろめかり

「津輕郡三馬屋、今別のはまに採るも凡似たり。南部のうら〳〵、斯都介利、自離夜にては、繩てふものさらにひかす。ひとりとび入り、うなのそこなるいはを、とこふみて、その足のちからしてうきづる、かつきかりあり、もとも、あさき磯に刈りくにや。この島人は、をさなきより昆布のわざにのみたつさはりて、潜男あまた集ふ。へたこんぶとて、四尋、五尋、六ひろ、なゝひろのふかさをはかり、あら汐のそこをたどりて、われかちに鎌たてて刈めぐり、身のかくろふまでかゝへてかつきあげ、いとふかきところは、三尋の柯をあはせて十尋、十二尋と、繩もてゆひつぎ、つぎめ〳〵に蟬とて、みさ、よきのくさびをさし、つぶいしとて、重さ一貫泉零の石を付て錘とし、柯の重さ五十斤、六十斤もあらんを、いとちいさき舟の上にとりてさしくたし、いくもとの昆布をからみ根こして、根には折として、大なる石つきながらひきあげてけり。さらぬたにおもさ百斤に餘るを、水のうちにかけたりとも、ひとりのちからしてとりをさむるのわざ、おもひやるへきことにこそ。」

函館を出て

霜零月十四日。うしほ　いや寒く、福山の港に歸らまく函館をいてたつ。かくて、ふりつむ雪の磯つゝきをくれは、このころの寒さに、潮瀬の浪もいそきはの氷て、寄せたるまゝにたちも歸らず。目遠きも近きも雪いと高うふりうつもれて、青うなはらの外は、たゝましろにて、ことなれる色のつゆもなけん。行〳〵て磯邊にたちなかめて、

わけ過しあとゝはなくて朝またきいそわのなみにけぬるしら雪。

ウヅンケツ

渚によこたはるはこたての山、委多久差のみねなと、おしなへてウヅムケツと蝦夷人の言葉にいへば、

いくはくの日をふるまゝにふりうつむけつかた見へぬやまのしらゆき。

藥師ふちのおましませる高根さして、ゑみしらはイタクサといふとなん。

クンネベツ河

千代の岡、龜田村なと右になして（天註――龜田にたくへて、ちかとなりの野原を千世の岡といふは、鶴の居を啓したるころ、文子のかた名付給ふたるよし。）七重濱にいたりて、冬かれの粥原をわけて、クンネベツといふ小河を橋よりわたりく。此水に入りくる鮭の魚は、みな、はなのみねのなゝめになりつ。さりけれは、クネベツの鼻曲り魚と人ことにいへり。ゑみしはこゝをクンネベツといひ、シヤモなん、くねべつといふ。クンネとはくらきことをも、淸らかならさることをもいふとか。この河水つねに濁りたれは、しかいふにやあらん。

ベケレベツ

へきりちに至る、アキノはこゝをベケレベツといふ。ベケレとは淸き水をいへり、

べツは河をいふといへば、すみたる川と、にごりたる川とならべていふを、ところの名とこそせりけるならめ。此浦に相しりたる海士の宿あれは、くらく〳〵につきたり。雪はいよゝこほすかごとくふりくるに、

泉郎の家のあしの簾のひまもなみ雪ふりかゝる夕くれの空。

雪尙ふれり。

モンベツの網代家

十五日。つとめて雪の中路をわけて、岨をつたひ磯輪をわたり、あつき氷をふみて三ツ屋村とひ、川村をへてモンベツの磯屋形にいたるに、雪のしたに、けふりのひとむすひたつは網代家とて、鮭のあひきのために、小家つくりして海士の集れり。そか中に帳つけ、村君といふゑたち、かならすあり。こは、あまのむらきみをさたむてふなとの、ふるきためしもこゝに殘ぬとおもはれて、いにしへを偲ぶ。トツフベツといふ處あり。竹といふことゝしきけは、むかしたかむらやあらん。モンベツももへちといひ、トツフベツもいまはとふべつと、みなシヤモのくちにいひかふ。

三石の苦家

三石といふ磯に暮て、ちいさき苫屋に宿かる。やとの翁の、こゝろありけるものかたりして云、過來給ひしみちに岨山といふところあり。遠きむかしのことにて、をさとのと呼てける館の址あり。そこを櫻か臺と名を申て、いまも櫻のありきなと。

キコウナキ 羆荒る山路　シリウチ村　雪深き道を　荒木大學館址の大藤

かくはかり降つむ雪の梢をや春はさくらの臺とや見ん。

翁聞て、ほゝゑみてけり。

十六日。釜谷、コウレキ、泉澤、サツカリを過來れは、キコウナキになりぬ。此浦邊に、西の海上の國てふ浦より、あら山中の通ひ路あれと、羆のあらふるをおそれて、人あまたならねば行ことかたき山路なれと、むつき、きさらき斗雪ふりかたまれるころは、しくまも穴にかゝまり、いたるにみちもよけんとか。こゝなん、いにしへに聞し柵養の蝦夷にやあらん、いと大なる川をかち渡りしたり。此河、二月、三月のころは、やま／＼たけ／＼の雪けち、小川／＼のあふれ落入り、淵も瀬もしらす、野原も谷もおしなへて海もひとつにみなきり渡りて、行かひ絶てなけんとそ、あないの語る。シリウチの村なかに、誰れとかいひしかみぬしの、人やどしてける家のあれは、こゝに至りて宿はかりつ。

十七日。けさよりは山路に入なんを、雪のいやふりにふりてふかけれは、みちふみとて、へちにあないをたのみそへて、かれかさいたつしりについて跡をしるへに行は、かもの神みやところをうつし奉るあり。又あら神とて雷をいはひ祭る祠あり。ハギシヤリといふ川渡りて、雪の山みちをたどる／＼分れは、うしとらのあはひに、荒木大學といひしものゝふの、ひとかまへの址あるに、世にたくふかたゝなき太き藤の、九のもとまて空たかう、としふる木

漸く湯の平に

しんべ
つまご
あみがけ

湯守の翁

々にはひまつはりぬ。あなめつらしといへは、卯月の末つかたは花さはに、こたるゝまて咲かゝりてける處と、あないもうちあふきて語る。雪の白藤かゝるへしとは、おもひきやと戯れて立れは、あない、雪をしと／＼とふみならし、けら、みのうちしいて、おひたる荷をおろして、寒さもしらすあせおしのこひ、たのこひをしほりたり。チラ／＼といふ小川を渡りえて、みねにのほり谷にくたり、太雪に、はきふかくさしいれは、さきへも、しりへにもいかれす。まして、しんべといふわらくつ、つまごといふわらくつ、あみがけなと、おもひ／＼にさしはいたるふみものも、雪にまみれたるやうにしみ氷重り付て、あゆみもはてねは、はるかなる谷そこに、けふりの立のほるは、こゝを湯のたひらとて、いて湯のありて、春秋の頃は人のあまた來集ふ處也。さあらは、こゝにくたりてこよひはいねあかし、あさとくものしてんと九折をはる／＼とくたりて、あないをさきに家につかはしゝとき、軒はの山より、画がけるあすらのやうなる大男の、ちいさきあみ笠をきて、小山のことく樵こりつかねたるに、雪さへいたく降かゝりたるを、かろけにおひくたりて、家の門につま木ふりおとして笠ぬきたるは、此湯もりの翁となん人のいへり。この翁は眼ひとつのしらめにて、つねにいかりたるかほはせに、おひたるたき木なとは、力あるものゝ、三たり、よたりかからくしてもてわたるへきを、老たる身のかたにかけて、七尺の太雪をはきつよにふみしたき、夏山をありくやう

八十翁
おんこ
うるける羆を打殺す
藥師佛堂

に、いとやすけに見へたり。から長き斧を杖について人見たるさま、さらに人ともおもほへす。うちまりたるを、あない、この翁にたちむかひてしか〳〵といへは、ぬかたれて、よきこと、入て一夜をあかしてなと、かたちには似すねもころにいひて、ともにいりて居ならひて此翁かふるまひを見るに、頭はくろかみに、雪のさとかゝりたるやうにしらかみのましりて、としは八十とたかけれど、さらにをきなひたるふりも見へす。老に似つかぬこと多しといへは、あないとものいふ、こゝのおんこの力は（天註――老をさして、もはらおんことそいふなる。はた箱館のほとりにて、弟をさしておんこといふやからもあり。いかにといふに、みちのく、いてはのならひに姉をあばといひ、弟をおぢといふを、よこなまりておんことはいへるならん。）、いまの世にならふものもなき力士にて、いとわかかりしとき山に木こりたりしを、羆（しゝ）（しくま）のうるけて（天註――けもの、あれてけるを、うるけるといひ、をろけるとそいふなる。）くひかゝらんとせしかは、斧なけ捨て、すまひのことくくみあひ、しやくびかきふせ、わか身もいくはくところもかいやぶられなから、しくまはつゐにうちころしてけり。そのころ、ひたんのまなこも、ひとつしゝにつふされたれと、なか〳〵力はいまも、さのみをとらしと話る。此翁か、いろ〳〵衣の袖にをさなき子のはひかゝりたるを、わかき女のいたきとりぬ。こは、むまこにやあらんとおもふに、翁かうませたる、ちこにてそ有ける。あなめてた、かゝる齢たもてる人も世にはありけるものか。浴せんとてゆけたのほとりに至れは、藥師ふちの堂たてり。さしたるむな札に、應永十一年甲申五月廿五日荒木大學たつとしるし、鰐口のめくり

泉源か嶽

碁盤坂

眞下に福山見ゆ

には、寛永廿一年申五月吉日松前の城下春女と記したり。このゆふねにあし手さし入て、あたゝかさ身おほへて、こゝちいてきにけり。けにや、湯のめくりは雪のいさゝかつもらす、さゝやかの青草すら見へしもめつらしくて、

ふりうつむ雪のみやまもいつるゆのあたりは冬のいろとしもなし。

夜とゝもにほたたきついで、家の寒さに、夢もむすはて明たり。

十八日。ゆのたひらをたちて、あさとく市の渡といふ山河をわたる。いぬゐのかたに泉源か嶽といふ見へたり。此山は、山てふ山のをさにて、此いたゝきより落くる水は、もゝ川となり行は、いつみのみなもとといふとも、又千軒榮へたる處ともいふとなん。碁盤坂、ゐこの臺に似たれはいふ。こゝは鍋こはし坂といふ名のあり。むかし、たれとのとかや、山中の湯あひしに出ませるに、なにくれの具ともおはせて、はたこ馬なとあまた行なかに、飯笥の調度入たるつゝみを岩にうちあてて、さしなへひとつ、うちおとして破たりしよりいへるなと、かたりもて行みちのかたはらに、大なるいつ葉の松に、とちの寄生のあるを、これそ、こゝに名高き五葉の生ふるとて、あないもあふき見て過る。

松の葉にちよとちきりてをのか枝もいろをときはに倚榮ふらん。

又雪ふみ分てよちのほり、峠になりては、キコナキなとのうら／＼、つかろちは權現か鼻、い

福山歸著

はきね、福山のみなとべは、ましたに見やられてくたる。この澤水の中より、いさこにましりしこかねほりたるいはれ、こゝに在るつなはへ野のいはれを、いさなかやかにものかたりしてさいたち、しはしは寒さしのかんさ、山崎さいふところの畑もりか家に、ほたたかせ、たのこひ、頭巾のしみ氷りたるを火にさかし、をのかこゝろもさけたるや、あない、はな音たかくねふりたるを、かたはらよりおひやかして出る。こうしたるにや、風のおこりたるにや、こゝちよからねは、例やうにつはらには記さて、日くれて、たさるく福山のやかたになりぬ。」

寛政元年冬十一月二十日

蝦夷喧辭辯

西

蝦夷喧辭辯
松前
松前

寛政二年四月十九日北海道福山にて

この福山の西なるちかゐそのほとりに、太田といへる、いとおもしろきいそやまのありて、わけのほりし人は、めてくつかへりてかたりきこゆれと、島ののりいつくしうして、ゐそかちしまを、旅人なとの、みたりに見ありくことのかたけれは、いかゝとおもひわひためらふに、くにめくるすきやう者、そみかくたやうのともからは、しのひ〳〵に行まうづるなと人のいへれは、われもそれにたくへいきなんと、おもふとちにうちかたらひ、そのまふけして、うつき十九日、夜へよりの雨なこりなう晴て、あすはものにまうてんと、近となりなるみてらにこのころ來ける、いてはのくに、むらやまの郡ちとせ山の禁にすめる雲みつのすけ、超山といふほうしのおはしたるにこのことをいへは、われもいさなひてよ、こはよき友こそあなれとうけひさためて、かりねしたる龍雲院を出て衣祁布に至り、ひるねの床の夢もまはゆきころ下國の門に音なひ入て、れいの人々のまとゐにけふもくれて、夜ひとよかたらひ、とりの鳴づるころ、わかれの盞とりめくらすをりしも、つぶね、かごのとよりしはぶき來て、文

雲水超山

衣祁布の下國氏にて

子のおほんもとよりこれまゐりたりとて、ふみなんもて聞へ給ふ。

かけさらすおもふこゝろのそふそともしらて山路をひとりわくらん。

とそありける歌の、返しつかうまつる。

たつきなくわけ行友と身にそへん君かこと葉の花をかさしに。

過つる、やよひのはしめにやありつらんかし、遠つ蝦夷人のつとにもてわたりたりし、理氏武者てふ、かだまやうのものを贈せ給ふにそへて、

きみにけふいさ贈りてむ木々の枝の花こき入る籠にもなれやと。

かくのたまひたるに、

こき入てとく歸りてんきみかため見ぬ山くまの花のさかりを。

かゝる返しをなん奉りたることありしを、いまおもひしなとかい聞へ給ひて、

こき入て歸るさをまつ旅衣たち行みちの花の色香を。

この返し、せうそこにこめて奉る。

ことの葉のあかぬいろ香の又もそへ歸さのつとに花しをくらは。

やをら、しぬのめの空也。

二十日。けふのわかれのつらさ、いかはかりならん。この朝びらきのおかしさ、友なひゆか

文子の君との贈答

りてんき

餘波の圓居

まほし。山路は花の盛ならんなとかたらひ、あるし季豐の、

きのふまて圓居し人もこよひよりいつこのくさに夢むすふらん。

とありしかは、

くさ枕かりねの床にこよひよりけふのまとゐのゆめやむすはん。

さゝき一貫の、

たか里にかたらひすともおもひ出よ餘波おしみしけふのまとゐを。

とそ聞へつる返し。

なにくれとかたらふまにもおもひ出んあかぬなこりのけふのまとゐを。

あるしするとよのはらからなる季政、この砌の櫻さかり近きをさへ、なと見捨て、とくはいてたちけるそなと、うらみ聞へて、

咲花のうつろはぬまに人そまつはやくも來ませまとゐして見ん。

この返し。

このやとにとく歸來てまとゐせん花も日數もうつろはぬまに。

さらはとて出たゝんとせりけるに、かねて、ことゝいひかはしたれは、かのほうし、旅よそひしていてませりけるをともなひて、するとよ、くにつらのぬしたち、近きいそわまて送りして

んとて、さゝえ、かれひけなともたせ、すんさども、ひとりふたりして、こゝにいこひ、かしこにたゝすみ、いそつたひして、野はらの草のうへにするゑとよ、たたう紙おしひらいて、これなん、よんへかいつけしをとて見せける。

暁にきつゝ起行旅ころもとくたちかへれ人はひくとも。

この歌の返しをす。

たひ衣ひもかさならすとくきなんこゝろひかるゝなかめありとも。

くにつら、とりあへすいひつげり。

花もやゝ咲そめにけりけふよりはいくかなかめて君をまたなん。

とありける返し。

行ほとも浪かけ衣たち歸り來て花さける宿をとはまし。

するゑとよの、

かたらひし面影と見てなくさまんいまいひのこす人の言の葉。

といへる返し。

あなたのし花の言の葉花のやまひとりわけ行なくさめにせん。

あさ日さしかぎろひたる海のうへ、いと長閑に海狗鳴わたり、菫咲芝生の雲雀こゑ〳〵にあ

立石野

烏子灣

差通万衣の浦

がり、みちのくの春は、この卯月ともいはんか。雉子のたへて音せざりけるは、うへ、此島にすまざりけることのしられたり。立石野といふ原に出たり。藤巻石といふ石あり、かゝる石どものたてるより野の名とも呼ならし。いつの頃ならん、藤のいと多くはひまつはりたりしとぞ。

ふぢか枝の花こそあらねきしなみのたつをむかしの面影と見ん。

下處坂をくたり小都久志那爲の河わたり、大都久志那爲の河わたり、烏子灣といふ磯にいづ。むら立るこゝらの岩の中に、はたひろばかりの石たてり。この石の末に、鷄の居たるやうに、石のをのつからかたちなれり。むかしは雌もならひ居たりしかと、あら浪にうちとられたるなと人のかたるを聞つゝ、尼府多といふ磯やかたに來けり。衣祁布よりの路は一里やきつらんに、はやこうじたるなと、紫菜ほしたる莚のかたはらにみな休らひ、かくて差通万衣の浦のやかたになりぬ。村はしに渡海明神といふ神、舟にのりて立おはしませりける。そのかたはらのほぐらのうちには、いををむねにかゝへてたゝせ給ふ、事代主の神のみかたしろも、あやしう造り奉る。村のをさ太郎左衞門といふか家に入て、人々けふりうちくゆらせて、なにくれとかたるに、やかのくまなる大臼の、くちふりたるを、こは、いくはくの年へたらんとうち戯れたるを、あるしのめ聞て、わか家には、またとしふりし物あり、見せまうさ

百余年前の薄衣

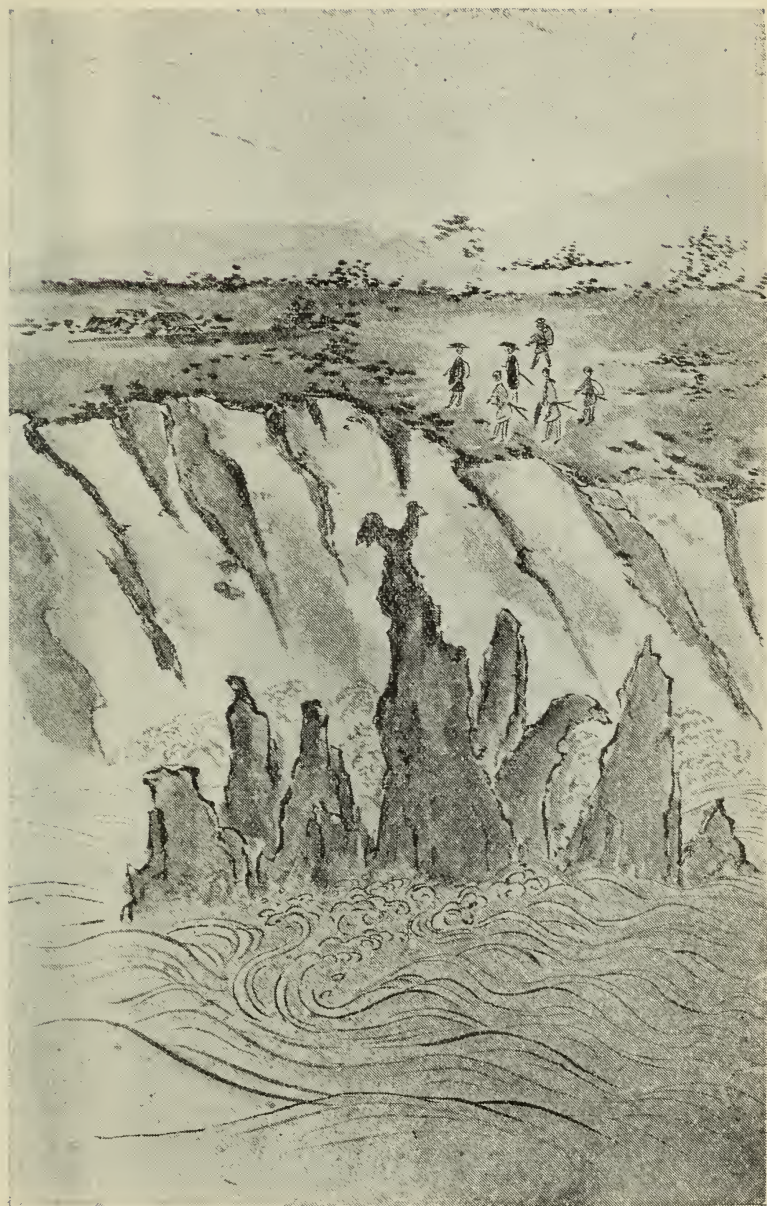
安可加美濱

蝦夷が窟

んとてこうたしたるは、島をりの、あらたへの衣なり。あるしの翁は、七十にいまふたつといふが、ものかたりして、見たまへ、とし〳〵の夏ことにきふるし、いくたびもきよめ、きのふ、かくあらはひをしてをさめたり。この衣はむかし、此島の長者安兵衞といへるあき人のもとより買ひたりける、梁瀬仁兵衞かもとより、ふたゝび一貫二百のあしにかへたりと、女、手をひし〳〵とをりて、あか十七になりける春ならん、もゝとせに十とせたらぬ翁(おつこ)の話聞へたり。われ、としすでに老て七十になりき。そのころより、とし〳〵きよめきて、百とせあまりとしへ侍りつれど、露はかりやり行ことも侍らす。いかにも命の長き薄衣なりけるよとて、からうづの中におしかくしぬ。ものゝことふきは、はかられさるものかなといひもて、安可加美といふ濱やかたに來る。しら神のいそあるにたぐへて、こゝに、あか神やおはし給ふ浦輪にてあらんか。いてはの國牡鹿の島べの赤神とは、ことならんとか。神ぬしらがこゝにうたふ神歌に、「しら神をこい紅にそめいたしあか神たりといはひそめけん。」ほぐらのうちを見れは、ちいさき石の臼ひとつをあかめ祭る。こは、科野の國伊奈の郡にある、臼杵のみやところにたくへてんかし。この山おくに蝦夷かいはやといふあり、おもへはなひく風や吹らんと、家隆のなかめおき給ふたるも、さんへき處をいふにやとおもへと、みち遠く、はた羆のあらふる山なかなればとて、えいかですぐ。さいだつ男、こゝにいはれこ

本妻石妾石

大島小島を望む

衣良万地に泊る

そあれ、朱なる巖を本妻石(もとめいし)、芝生に埋れて浪うつきしへなるを妾石(をなめいし)といひ、おとこ石は浪にしつみて侍るなと、ゆへありげにをしへたり。こゝらの立石ともに波うつさま、ことなり。

磯の浪くたけてたきつしらいとのよるなみかゝる岩のたかけむ。

小島といふかいと近う、浪のうへに牛のふせるかことく、大嶋とやらんは、ひかさの形して、けふりつねにたへず。此けふりのいくむすひたちなひくを見て、風はいつこより吹きく、なに風なと見やる。おきべに雁の一つらはる〳〵と帰るを、

行かりのつはさやぬれん沖つせの浪もひとつにこしまおほしま。

雨垂石(あまだれ)をへて、毛久左てふ浦の館にわりこひらき、ものくひ、なかやどして、伎與部に來けり。加母知といへる小河の、雪解の水かさ増て波いや高う、人の手に扶られてからくして渡り、衣良万地といふやかたに行つかれぬ。こうじたらばこゝに宿りね、いさ別なんとて、

すゑとよ

いましはしわかるゝ旅のみちのへに歸るたもとそ露けかりける。

かくありたりしかは、

あすよりはたより夏野のつゆしけみぬれて分なんたひの衣手。

となん返しす。

くにつら

たひころもたちわかれては歸るさを日數かさねて夢にむすはん。

とある返し。

ゆめにそれと見るほともなみ旅衣日數かさねてたち歸りこん。

いつまてかくありて名殘つきんや、かへりなん、とく〳〵歸り來てなとありける。しはしのわかれなから、しかすかにこゝろうけくて、いにける門のとにさしいてて、おもひつゝけたり。

君にかくつけてしもかな花もなみやまわけころもぬれて來ぬると。

この歌、あや子の御もとへまゐらせたうひてよと、季豐、一貫のぬしにわかれて、こゝなる喜兵衛といふかもとに泊もとむ。

廿一日。つとめていてたつ。このあたりの家居、三日の夜の風あらかりけるにたふれ、あるは、ほね斗たてる屋いと多し。この村に在る洪福山泉龍院といふ寺のあるし、文龍上人は相しりたる人にて、けふなん知以左胡といふ浦まて、おなしすちをともなひいかんとて出ませりけるに、ものうちかたらひてゆく〳〵文龍の云、此ゑらまちのたれといふもの、あらたに家作ればやけ、また、にゐむろつくりしければ三日四日、あるは三月、よつき、あるは三とせ、四よせをへて、火のために、ほろひけることのあやしう、けんさごもの集て、いのりしけれと

文龍上人

土中より白骨出づ

あさづき

こだす

椎蕈

原口に休む

足痛に昆布

も、そのしるしもなうやけゝれば、つちまつりといふことしてけるとて、けがれたる土ほりうがちすてて、きよげなるつちを山よりうつしてんと、ほりにほりければ、うちふしにふしたりける人のしかはねの、木のくちたるやうにてありけり。此ほねとつちとをあつめて、柴火にやきて灰となしをさめ、あさとふらひ、みすきやういのりをしてより、ゆめ、火のわさはひのなけん。むかしのなへ、つなみなとにとられ、しにふせる人にてやあらんと。」野路行ほと、あさづきといふくさ、みちもせにしけりて、かち人の、ふみしたきありく匂ひの、風に吹まよひ、はなをうつ音のたへがたし。ゑみすの祠の鳥居たてるほとりを、けふりふきつれて、腰に胡陀數(こだす)とて、かづらもて造る籠のこときものをつけたるものらは、石長根、片子山なといふ太山に入て、栖蕈(しひたけ)採るとてはる〳〵と入ぬ。椎の木あらねと、栖のくさひらをしかいへり。ふたこゑといふ山中に至る。

ほとときすなけや一聲ふたこゑの名をなつかしみやすらひにけり。

蛇喰(じやはみ)坂をくだれば河わたりして、笠間(かさま)、曾万留閇(そまるべ)なといふ名の聞へたる處は、おばしがたのなりしたりける巖の、磯邊にそひへたてれば、これなんひめかくして、うら人らが、ものかたりよりいふ名也となん。於古志部(おこしべ)、深澤を過て、原口といふ村あり。屋に入て休らひ、あなうらのいたく、そこねいたむとかたらふを聞てあるしの女、これ、わらぐつのうへにしきて

さしはきねとて、つかねたるゑひすめの、いとあつけなるをおしやふりてくれたり。昆布(ひろめ)は、いみしきまめのくすりなるとそ。けにやあらん、いさゝかくるしさもわすれて、いととく懸石(かゝりいし)坂をくたり、さはべのやうなるところを分るに、科野路なとの山々にいと多き、そこにては山櫻草といふ、葉は楓に似たるか、こき紫にこゝら咲たるを岩葛花(いわづら)といらへ、岩かづらともいらふ。

岩葛花多し

うこきなき御代のためしといはかつら花やちとせをかけて咲らん。

地以差呉浦

地以差呉の浦に至りて織田善四郎といふ海士のもとに宿つきたり。あるしは遠き浦に鯡のあびきにいきて、いまた歸りもいたらねば、さそさう〳〵しうやあらん、かゝるわひしのやとりになと、老たるめの、ひとり宿もりしてなにくれかたるに、少兒(ちいさこ)のいはれありけるよしをとふに乎佐女こたへて、ふるきむかしかたりに、この磯山の土採りにとて、ちいさき舟にみさかはかりのおのこ、あまたたりのりたる舟寄來るを此浦人見おとろき、いかなるものかとたちさはき、小舟のゆかんかたはいづこならんと、それらが舟の楫あとをしるへに、ふねあまたしてこぎ行ほどに、うなゝかのあら潮にへたてられて、そのちいさごか舟をふ末は何かたともしられす、かいけつやうに、浪としほとにまきれうせたりしとのみ聞つたへ侍る。

小人來航の傳說

綱浮寄り來

それらか國の綱浮(あは)てふものゝ、木の皮のやうにて釘にとぢ重ね、あるは柹の葉のやうなるも

コルク栓か

小砂子を立つ

蝦夷の子供

みな、くち木のやうにて、いとなとの付たる網の具の、をり〳〵浪にうち寄せて、濱磯といはす、ちりあぐたにまじりてあまたありけり。これなん小人嶋より來ると、もはらいひ傳へさふらふか、まことにてその國のあるにや。この安婆を火にやき霜(すみ)として、火やけ、湯やけのたゝれたるにつけて、いゆる藥となしける。その阿波とて、あみの糸のきれまとひたるを見せける。こは紅毛人のもて渡る、いはひべやうのものゝ口ふたきたる、キユルコホウムとやらんいひけるものにこそあなれ。さりければ、遠きさかひより流れ來るほとのしられて、いつれの國てふことこそしらねなと人々とかたり、沖邊こぐ船、あまた楫とりそろへて行なん、ことしは鯡のすなとり、れいよりもおとりしかば、いとはやあさりとゝめて、すむかたへ波遠ういぬなと。

舟しはしとゝめてもかな波のをちいさこへゆかんたよりもとめて。

かくて日はくれたり。

廿二日。あさ日ほの〴〵波のうへにさしあかりて、大島小島の、ちいさやかに見やられておかし。

けふも又はまちいさこちふみこへていつらやいつら波まくらせん。

文龍上人よんへよりあひやどりして、近き磯まで、あないし送らんともなひいつる。さき

白毫石

蝦夷女

わしり

たちて蝦夷人(アヰノ)の、としは、みそちあまりなるか、七八はかりの童子(ヘカチ)ひとりを誘ひてゆく。このヘカチ、岨に生ひたる卯つ木を手折、おし曲て弓(クウ)に造り、木の皮をよりて弦として、親のまねひをそしたりける。ヘカチとてさらにたかふけちめこそあらね、たゝ泉郎の子のやうにて色黒きわらはなれど、眼(シキ)のまろ〳〵として耳に朱なる糸つけたれは、一めにしるし。蝦夷人、をさなきころ鍼(ケム)に紅(フウレ)のいとをつけ、耳鐶(インカレ)(みみかね)をさしてん料にまづこの針(ケム)もて耳(キシャラ)をさしつらぬくに、血のなかるゝを見て、ことわらはへとものゝ、おとろきこりてなきさまよへは、血の色もひとつに、紅の糸とのみ見なさしめんため、みな、かくぞはかりけるとなん。はたインガレのかはりに、紅のいと、紅の絹なと、さきよりてさしむすひたるもありけり。やをら白毫石といふに至る。いかなる佛のといへは、猿田彦のおほん神をいはひまつる。この石の面に石名子を産いづることと、栗原郡におましあるもゝのかんみやしろのひとつ、遠流志別石の神にひとしき巖也。ぬさとり過れは、さかひ河とてさゝやかのなかれあり。野みちあり、渚みちあり。われははまぢよりわくれば、夷女(メノコシ)、鷲居(わしり)とて、あら浪の寄せかへる、さかしき岩つらに手をかけ身をひそめて、あしもそらにつたふ。あやうさ、うへ、こゝにて、メノコひとり浪にとられて、死(ライ)したりけるむかしかたりを、行つるゝアヰノのしたりける。メノコシとは蝦夷の女をいへれと、メノコといふかまほにこそあらめ。ワシリとは、アヰノ辭にや和人(シャモ)

ヤケトロプ野

鯡漁が生命

車かひの船

志保布企浦

こと葉にや、いつこにても海邊なる、いとさかしく、いたりかたき岩つらをつたふをいふと
なん。飛魚間といふ處に出て、かの文龍上人に別たり。大瀧といふをへてヤケトロプ野と
いふ處にくたり得て、ふりあふき見て、

しら雲のかゝれるみねをいくわたか九曲おりゆく谷のはるけさ。

沖なる船の眞帆片帆に、あまたひきつらなりて行なと、風情ある木草の、やゝみとりたつ磯
山のおもしろさに芝生に休らへは、小舟さしよせ聲をのみて、こはいかにぞや、ことしも海
のさちなう、鯡えとらぬふねのあまた歸りくなるはと、ひとりことしてける海士あり。この
島には、いな田ひと代もなく、よねは、こと國の大ふねにつみ來て、すなとりし魚にかふるな
れは、鯡のあさりはあさりの中のをさにて、鯡てふ魚は、此島のいのちにこそあらめ。うへ、
磯の翁の、はなこゑになくもことはりにおもふ。石崎といふこなたに河あり、人々のよばふ
に川長來けり。このふなをさは、アキノのまねひに車かひといふものを左右の手にとり、き
しへ離るやとおもへはつきたり。みちしはしへて羽根差といふ處のやかたに休らふに、木
の葉のやうなる舟の、遠かたにつらなりて行あり。

ゑそ人のとか箭にわしのはねさしてあしかやねらふ浪のはやふね。

志保布企の浦に至る。磯近く潮吹明神といふ神のほくらありければ、

志泥呉野

沖つ風さそひ來ぬらししほ吹の神のしらゆふ波かけてけり。

岐乃古村をへて志泥呉の野良を分る。こゝの野良にきつね、うぢなや多かりけん、日くるれば、あやしのものかたちをむすびて、おびやかすことあれば、しねごのばけものとて人おそれたり。かくて波良宇多といふはまちをくれば、ひろ野に出たり。すき來しあたりの、垣ねの梅のやゝほゝゑみたれど、野邊の蓬生、いたどりは、みさか、よさかに生ひ茂り合たるをしわけてかよふ乙女ら、うちむれ、聲をそろへて、「露ではをりのつまぬらす。」と、おもふひとふしをぞ、うたふなる。

勝山の城址

いたどりの葉ひろはうしと草のはらうたふうなひの歸る夕くれ。

加美乃久遢といふところに、きいたる。こゝなん勝山とて、そのむかし、この島のおほんつかさの遠つおや、こゝにいなぎをさため給ひしところにして、そのふるあとに、ものゝふの栖家のありたりし處も今猶ありなど、あごとゝのふるふる翁のかたりぬ。

上國寺の櫻　松逕上人

華德山上國寺に、むさしの國より來りける、松逕上人のおはするをとふらへは、ねもころに聞へ、いさなひ給ふ。この寺の砌にいと大なる櫻咲たり。松逕の云、この花咲初ては、はや鯡てふ魚の群來侍らしと人なげいて、かゝる櫻の、とからぬことを人ことによろこひ、咲たるころは、浦人ら、ねたうのみいひのゝしりて、さらに見侍る人もさふらはじと、ほゝゑみてけり。

いにしその春をみてらの軒近くむかふこゝろや花のいろなる。

となかめしかは、松逕の返し給ふ歌に、

花もけふいまひとしほの色そはんこと葉のつゆのかゝるなさけに。

夕日花にかげろひて、やをらくれたり。

廿三日。あるしの上人、うらふれやあらん、けふは休らひ花見てなとありけることのうれしう、人々と物語し、此寺のかざさし出れば宮とこころあり。何神とといへは鯡神といらふ。いかなる神をあかめまつりてしかいふにやと返しとふに、もゝとせのむかし大藏法印秀海とて、ゆゝしきけんざの磯へたに庵して、たふとくをこなひおはしましき。しかるに、ことしのことに鯡の群來侍らさるとしのありて、うらくの人擧りてうちなげいたるを秀海法印聞て、汝等せちなるこゝろまことならば、われ神にうたへ祈て、鯡とらせ得さすへしと。浦人とも このことを聞つゝ、こは何おぼし給ふそ、今は、さつきのなからもすぎ行さふらふなり。くきなんころほひにこそ、くきもし侍らめ、いそかあまりも日數たちおくれて、いかにおほんいのりのいみしきとも、そのしるしのあるべうともおもほへ侍らずと浦人どものいふに、秀海法印うちゑまひして、時にくきたる鯡は、しるしとはいはじかし。時ならぬときにいのりてこそ、まさしきしるしともいはめ。われおぼろげのねがひにあらず、わか露の命はこゝに

鯡神の由來

大藏法印の祈願

あら

祈りの驗し

けちたうばりても、あまたの人をあはれと見たまへと神に誓ひて祈らん。人とらも心ひとつにして、あめに、いさいのりてよ。われいのり得たらば、うら〱の泉郎人のもとより、とりえたりし鯡いくつかといふをわれにたうべ、それをもて、しろとなし、寺のすりしてんと。うら〱の人きゝて、いとやすきおほんねかひなり。いかに仰さふらふとも、まかせ奉らんと、うけひぞしたりけるなかに、世のさかのみ好く男ありていふ、今は、いつとこゝろふぞ人々、ときは五月の末つかた也。くきなん日数の六十日あまりもすきはてて、いかに、くされにしんひとつたにくきなん、まいす山伏のそらいのり、われいさゝかのよろこびあらじ。このいのり何のためならん、かたはらいたのけんざどのと、おとがひをはなちて、あざけり笑ふことかぎりなし。人々、さることと、なのたまひそ、あめの惠み神の力ははかられ侍らじ。このとし、にしんのくき侍らずは、われ〱何をくひていのちやいきん、親、めこのなげきいかゞせん。人々こともに祈してよといふにつかず、世ににくさげなることのみいひつゝ、人の惡となりぬ。（天註　阿艮とは人にさからふこと葉にして、そのはしめは、よれ、ふとむきなとよりいひ出たる諺にこそあなれ。）おほくら法印、まづ、いもゐして注連を七重にひきはへて、いつしなのみてぐらをおしたて、すゞの音たかう鈴の聲たふとく、くひものをたちて夜るひるとなういのりて、いまだ日は七日にもみちざるに、志加問てふ鳥は沖に集り加毛免は海をふたぎ、鯨は、をのれと大波をおこしてしほふきあさる。こ

ねぢけ人との爭

れみな鯡のくきなんさゝし、れいのことにそありける。かくて、うなの上はしろみわたりて、浦てふ浦に群來さる處もなう、としぐよりも多く鯡のあびきをして、あなありがたのいのりや、おほくらの法印は、そも神にてか佛にてか。かゝるたうときしるしを見せ給ふはと、こゝらの人の集ひよろこひあへる聲は、潮の涌きくがことくとよみ聞へたるに、かの、ねぢけ人も鯡いたくとりしかど、人なみに、かへりみをいさゝか秀海にをくらされば、人々、見あざみそしりてなみたをながし、いかで、かへりみをばとくたまはらぬぞ、おそろしきまておほんいのりのしるしみたまひしうへ、などかは、ものをくらではあらん。とくぐしたまへと、ひたふるにいへば、かのねぢけ人の云やう、此年、せちのをくれて海まだいとわかければ、をのづからくきたる鯡を、なま山伏の、なまいのりたるしるしと、なおもひそ。されはわれ、このかへりみをすべきいはれ露ばかりもなさじといふ。秀海、かれがさがこと聞もあへず、ものあらがひとなりて、いさゝか、ねぢけ人いひやまさるを浦人らのいふ、けんざのおもとへ、曲て鯡はや贈たうべと、いろぐにこしらへて、やゝいくつかといふ魚なん、をくらせたりければ、けんざのこゝろも、つゆうちなこみぬ。さりけれど、あやつがやうなるろくでなしは、その數のほとさへうたがはしければ、それ、かそへ見よと數へさせて、しかぐといふ。さは、おもひしことゝ也といへり。こは、ふたゝひあらがひをして、けんさに、はらぐろな

法印を齋る

大藏鯡

上國寺上祖

らせんの料に、いとあしかりける鯡ともをひろひ集めて、三四の數足らさるやうにつかとし、いさかひのたねをそおくりたりける。けんさ猶やすからず、さきにいや増りておほあらかひとなりしを、人々とゞむれど耳にもきゝいれず、はて〳〵は、おふこふりかさしたるを、あやまちたまふなといふほとに、うちところやあしかりけん、老たるけんさのいきくるしう、たふれふしてけるまゝに、きのをたへうせたり。人々たちさはけど、いふかひなし。三日、四日ありて此ねぢけ人も、ゆくりなうやまひおこりて身まかれり。日あらずして、それらがめこども、みな死ほろひたり。そのうらみのむくひ、めの前に見つゝ、身の毛いよたつおそろしさと、法印のみたまをわかみやといはひまつりて、鯡神とは申なり。又ねぢけ人のなきたまや、ありし世の、つみあかなひてさゝげやすらん、秀海の庵のありたりし跡に、いつも、むつきのころほひは、かならす鯡ふたつ、みつ、浪もてうちあくる也。これをおほくらにしんとて、とりておほんつかさにも奉りしかと、此十とせこのかたは、その鯡も波の寄せさるゆへにや、群來なん鯡のくきも侍らす。こゝなる上國寺は、もと天台のながれくむ僧侶すみて淨國寺といひて、快山法印の永祿のむかしひらき給ひて、秀海法印は上國寺の四世にあたり給ふ法印にして、ちかき世となりて、なもあみだふとなふ寺とはなりぬ。いま、この寺のゑかう帳には秀海和尙とかいのせたるなと、こゝろたしかなる海士の物語に、つはらには聞

上國寺にて

へたり。松逕尋ねおはして、こゝにおはしたるか、いそ山あらし吹おちて、花のちるへう見へてさふらふ。花のなこりのおしけれは、いさ木のもとにたちて、なと見たまはぬなといひて、風前花てふことを示し給ふに、

おもふとちのとかにやみん咲花をちらさしとふく風のしつけさ。

あるしの　　松逕

發しよりつゝみかねたる花の香をしりてやかせのよそにふくらむ。

風いよゝ吹て日は暮たり。祁爾宇知がたけにやあらん、野火のたかうもへわたり、磯崎にも火の見へたり。（天註——ケニウチの名を、もはらけんにちといふ。ケニウチは、はんの木といふものにして、その木にてやおへりし名ならん。今もその木の多かりけり。）

泉郎をふねさすもしられていそ山のかけにいさり火ほの見へにけり。

なかめに更ていぬ。

廿四日。よんべよりの雨、けさも風まぜに猶やますふれゝば、花ちることのいかはかりと、からうたのこゝろはへをとなへつゝ、ほうし超山の手あらひけるにおとろき板戸おし明て、

をやみなき雨こそうけれさくら花つたふしつくにいさぬれて見ん。

あるしの上人聞たまひて、

匂ひをは袖にとめんとふる雨のつゆにもぬるゝはなのしたかけ。

となんよめり。

天の河越す

廿五日。つとめて小雨そほふりて、ひるのほとの空はれたり。松逕のいへらく、かみいそに行さふらはゞ、今しばしありて出ゆきね。さらは、みちのぬかりもかはき侍らんなと、せちにとゞめければ、さるのときはかり、近きわたりまでとていづ。村はしに、つなひく、ふなわたりありけり。此河の名を天の河といふ。こは、太平山といふやまの麓よりなかれくなれは、ところの人は、てんがたいへいとゝなへて、太平山の鳴りうごき、あまの河のみな戸の、ながれ洲にふたがれて水せきあふるれば、ふさはしからぬことなんありける、ためしありといふ。舟つなくりはてて川長の云、見たまへ、多已万知の犬潜をと手さしして、磯邊の岩に穴明たるに、波のうち貫くをさしへたり。見る〳〵、河口のいさゝか洲の寄り來てふたぎたるは、いかゝあらんとつふやくを、舟長も、このことうしとやおもふ、まゆうちひそめて去ぬ。

兎那に至る

兎那といふ處に至る。梅咲たる垣ねのあれは、しはしとゝまりてたちさらんとすれは、やのうなひ、やすらひてなと、おひぎやうづきて聞へしとき、

　みちのへに見てこそ過れ梅か香を袖にとめなて行旅そうき。

虎杖の道な

ふのりつみありく女の腰につけたる、こだすてふ、繩のあみ袋より、ほだはらとり捨たるは、「いそかくれのりにましれる莫鳴菜の名のりも今はしる人そなき。」といふ歌のこゝろにも

相似たりと、すんして野中になれは、わらはべあまたの聲して、つく〳〵しつみありくにみちこひ、虎杖かいわけて、

いたどりのしけゐ葉ひろにかくろひてありとも見へぬ野邊のかよひち。

宇地古といふところをへて、海狗川とて、さゝやかのなかれを渡る。この川むかしは瀬ひろく、淵ふかくして鮏いと多く、あひきそしたりけるか、一とせの秋、そみかくたこゝにやすらひ水むすひ、かれ飯ひらき、破子のふたに、山ぐみの鹽づけなるをあまたとりのせて、それをあはせに水つけをなんくひぬ。行かひ見あざみて、このほうしは、いをの子くひてけり。なまぐさのほうしよ、ものとらすな、宿くれな。見よやあれ〳〵と、浦のわかうどなと來あつまりてけるに、法師、見たまへ、これはものゝ實にて侍る。われは、露はかりおかしある身もて侍らす、ゆめ〳〵といへと、あまたの人にいひけたれてけり。ぐみの實の、鮏の子てふものに露たかふことなう似たりけれは、見たがひていふにこそありけれ。さりけれど、いひたてたる人々もいひやます、ものあらがひになりて、そみかくだ、やすからす、かくはかりほねをくだくすきやうを、おろかにこそおもへ。汝らに今より末は、鮏ひとつをたにとらせしとて、この水にさかのほり、たゝう紙にものかいて水上よりうちなかしてけるより、こゝに、たへて鮏の魚のほりこしとつたへ聞侍るなと、浦の子らがかたりもて、五勝手とて、江差の港

海狗川の鮏の傳說

江差の滝
法華寺日正
境内を寫す鏡

のこなたに至る。こゝに在る潮元庵の法師とかをともなひ、かくて江差につきたり。成翁山法華寺に、甲斐の國山梨の郡よりすめる日正上人をとふらへは、かねて聞つる人よとて、ねもころに聞へ給ふ。この寺は、福山のほくゐきやう寺とおなしころほひにひらけしながら、上人あらたにすりを加へき。みほとけの御前をふりあふけば、龍の、かしらまほにさゝげもて、三間にわだかまれり。これなん、みやこの霞樵か、七日いもゐをして清水寺にこもりて、たかうなを筆に造てかいなしたるを、おしてけり。上人、高岡になりところを建て、名を方壺亭といふ四阿のあるに入れは、海のみるめいとよし。

やま人のこゝろもしりきこの壺の庵はうき世の外なる世のなか。

こゝを出て庭の小高き處に、ちいさき城やぐらなとのさまもて、上人の手わさに作りならべて立るが木のあひよりあらはれ、盛なる櫻、あるはこごろふの梢、ゐそ檜なとの枝さしかはしたてるまで、ひちを曲てこれをうつしむかふ鏡とて、臺にかけて床の上におけるは、上人、ひねもすみすきやうのいとま、眠きさせば、ひちををりてもろ〳〵の梢、やかたごものうつりたるを見て、ねふり、やゝをこたれるこゝろやりにせりけるとて、ゐみもて、かゝみおしひらき見せ給ふに、砌のくまのなごりなう、なにくれとこの鏡の中におちて、山市、海市をうちみたらんやうにうつりたるを、上人、いかに蜃氣　の傍にことならすやと、手をほとこうち

てほゝゑみ給ふ。

浪遠く見る樂しさにますかゝみうつしてむかふ沖のたかとの。

と、なかめて日くれ、灯されるもねたし。はた、ひとまの障子おし明れは、雄島、松嶋のかたをつくりてすへ、この洲崎、はまひさし、いはかきのさかしさ、濱やかたの軒近う波のうち寄たるしら洲なと、情ふかう、こゝろを盡して、上人日ころ作りおけるをとて、このかゝみにうつして身をよこたへむかひて、

松島や雄しまのいそのなみまくらよるかけて見るともし火のもと。

とて更たり。

廿六日。けふもこの寺にとゞまりて、あたり見ありく。なへてこゝのやかたは、とみうどの多かりけん、家榮へ、船あまた入津してにぎはゝしう。高きにのほるには、木をならべて虹のかけはしのことき阪として、いさゝかことなれるところなり。ちまたに、姨神とかいたる雞栖いと高し。文字はこかね色に、糠部の郡田名部の縣にすめる、德玄寺のりし秀琳のかいたりける額也。さはいへど、いかなる神をいはひもて、うは神とは申ぞと、藤枝なにがしといふみやつこにとへば、こたへて、いつのむかし世にかありつらん、この磯に、かた斗の庵して、としいやたかき女すめるか、朝夕麻苧をうみ糸により綱をむすひて、鮏とるわさを

浦人にをしへて、この島人、鯡のあさりすることなんもはらならへり。この老女、むかふ島に辨財天の祠を建てつねにいやまひまつり、わか老のすがたは、かげのごとくけちうせてけり。うはのまつりし神をこゝにうつして媄神といふとも、はた、その功ありける媄のみたまを神といはひ祭て、媄神と申ともいひつたへさふらへど、今は折居明神とあかめ奉るとなん。

おりん堂と

浦の子ら、おりん堂と申ここたふるは、折居のみやを、かくそいふめるにやあらん、あいだちなど、ところ〳〵に聞へたり。ほぐらの三、いときよらかにならびたてり。そのむかしは、こゝところに雨つゆにくちたりしを、ちかき世となりて、うつし奉りたるなとかたり捨て、ひさつき、ぬさとれり。

九艘川

市中に、九艘川といふ細ながれの川あり。此水上のおく山より、おほふね九の丸か料の、ふな木を伐出したるいはれとて川の名におひ、處の名とはなりけるとなん。

正覺院にて

夕まくれ、木をたゝみあげて坂としたるをのほりて、正覺院といふなる山寺にとひ諦觀和倘ともろともに話り、こよひは此寺に旅ねしたる。曉の月いとよけんと、方丈の室に嘯きよみしける聲にきいおどろき、とに出てなかめたり。

おくの海あらき汐瀬そ明わたる月のみふねはさすほともなみ。

やをらしら〳〵と、みなとひきはなるゝ空のけしきいとおもしろく、海のみるめもおかしかりけり。

於古斯離島

鼠蛇多し

島の大路

廿七日。高き岡にのぼりて、磯邊近き辨天島をはしめ、遠き波間にまゆすみのすかたしたるは於胡斯離とて、しほくもりてはる〱と見やられたる島は、こなたよりのふなみち廿里斗ならん。島のめくり二里にたれり。島かげにかりやどのところ〱にありて、沖のふね行なやみ、あやまたんとせりけるほりは、此島にのかれんため、米、鍋、火うちげまてをさめけるに、風にはなたれ、しほになかされたるもの此島に船よせ、いかりかけて、よき汗日をまちて命いきていに、よねつみたらんふねは、さきのことに、ものたくはへおけるとなん。島に鼠いと多くありて、うちあさる音は群鳥の羽音にひとしう。鹽かれ汗たるをりは、磯の鮑かづきあげ、あつまりてくらひ、木の根、草の根をほりはみ、多かるしのゝうれ葉までひし〱とはみつくし、くひものゝとほしければ友ぐひをして、あれわたる音の山にひゝき、海にひゝいてかまひすしく、蛇はこゝらすみてけれと、この鼠ともにくひ盡され、はた蛇の多かるとしは、鼠、蛇にとりくはれけるとか。この島近う船くつかへりたるとき、そのふねにかひたる猫ふたつ、からくして板にのりたゝよひ、風に吹よせられて此島につきしかど、あまたの鼠に追れ、おちをそれ、いその岩あるににけのび、海にや入たりけん、うせにき。三たり、四たりはかり漁舟かけておるに、おそろしきはこの鼠也。はた此島に生る大路は、いつさか、六さかにたけたかく、莖は、むき、なゝきにめくり、葉は四さか、五さかにひろく、此した

寺跡あり

にかくろへば、雨露のうれへさらにあらしかし。いつの頃にか、雪峯和尚といふひしり住おはしたる處とてあり。遠きむかしより寺やありつらん、ふる寺のあととてあり。その寺うつして、松前のひんかしの浦なる泉澤といふに在て、越尻山大泉寺といふ。大泉寺をふたゝび福山にうつして、松前山法源寺といふにこそあれなど、しりたる海士の、つばらにぞ語る。うへ、ひろき島ならん、たか山のことく、波のうへにつとあらはれたり。小舟のあまたつらなれるに、

潮風に波おこしりのしま遠くみるめかるてふ泉郎やわくらん。

夕くれ近う正覺院に歸る。

津鼻より船にて

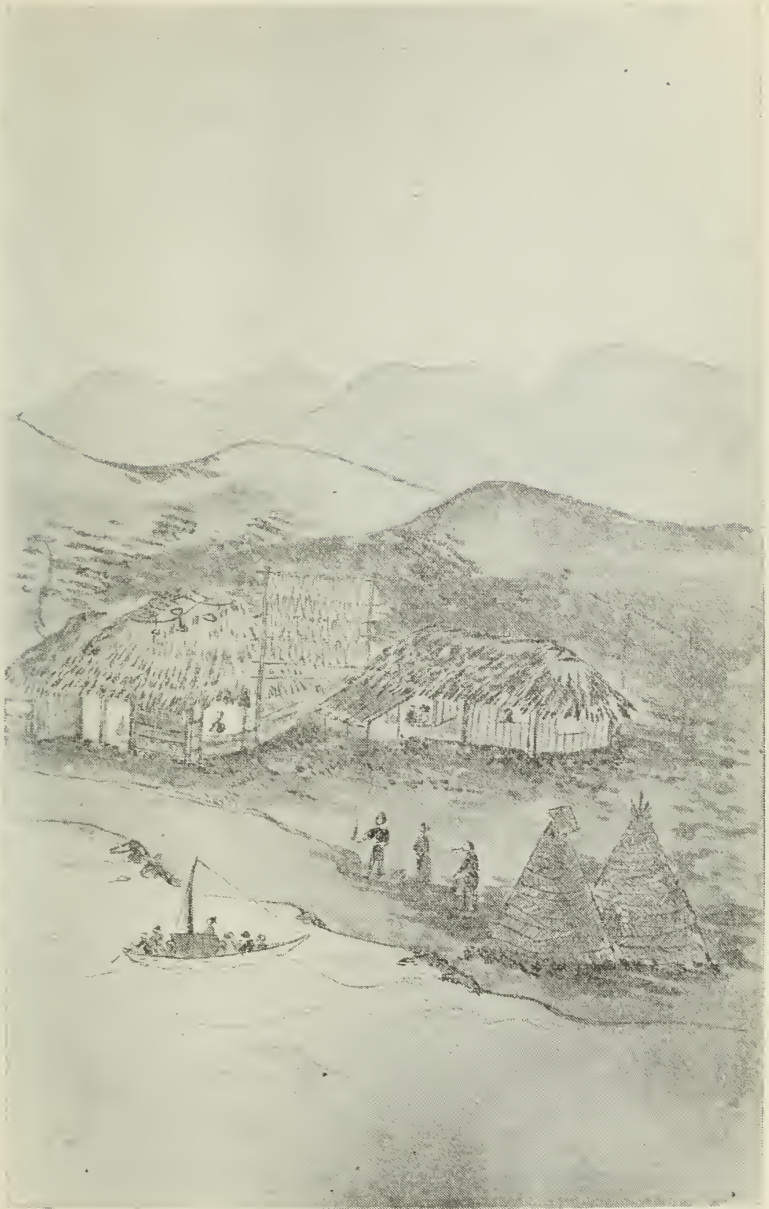
廿八日。つとめて、よきふなたよりあり。いさ、もとめてよなど、人のつけ來れりと小法師はらの聞へたれは、ふたゝびといひて、いそぎ津鼻といふ處よりのりつ。葦寒（あしさぶ）、乙部（おとべ）、水屋、蚊柱などいふうらうらもこぎさくるほど、こゝにいふ呉咩（ごめ）てふ鳥そ、いと多くうちむれる。

沖つ風吹にけらしないはたてるしまのあら洲にかもめむれゐて。

夕日浪に入て、くれ行わたのはらに、はるはるとふねをふ。何をよるへに、千船もゝふね、くらきふなみちに、をくれさいたちて浪かい分る。小舟ともに舟子のこゑごゑして、

暮にけり海のおもかちとりかちの聲をしるへにつつく友ふね。

甲　山背泊
乙　傳兵衛間
丙　鍋弦
丁　阿春宗鳥

相沼の苫屋

相沼といふ浦に泊もとめんとて、いかりかけており、ひんかしの海白府の泉郎にて、阿部たれといふもの、鯡の魚のわさすとて、この浦にいとなみをる苫小屋に宿かりつ。こゝかしこに、いさりたくかと見渡は、立ならふ丸屋形のうちには、人あまた、ほたたき居ならびて、三の緒かいならし歌うたふ。陸小屋の窓よりも、ひまもる灯の光など、河邊の螢よりもしげう。この火かけにさしうかゝへば、軒にいと高う木を立て、大口魚の肉をほじゝにすとて、さきつらねかけたるを魚屋とて、その臭さしのびかたく、夜はいたく更たり。

船卸しの歌

廿九日。いまた明はてぬ海の面に、人あまたして歌うたふ聲して、よき風の吹來けり、これを追手にはやいなん。とくのりね、やとよばふに、人々と友にうちのるほともあらて楫さしおろし、帆繩ひきやり、なだ行ほと、祁爾宇地が嶽の、夏さへけたぬ白雪の、しら〳〵と雲のひま〳〵見やられたるも、けしきことなる明ほのに、梶とりの聲いさましく、「正ぐはちの、ひと夜ふつかのはつ夢に、きさらぎやんまの楠を、ふねに作りてはやおろす。」とうたふは、むつきの、はつふなおろしする祝うたに、かならすうたふべかりけれど、うちたはれ、酔のまぎれなとには、もはら、つねにもうたひけるとそ。

四の海浪のたちゐもしつかなる御代はたのしとうたふふな人。

蝦夷地の境以南遠崎

日のさしのほりて、舟はとぶやうに熊石なといふ浦もこき過て、和人と蝦夷のくにをさかふ

久刀布

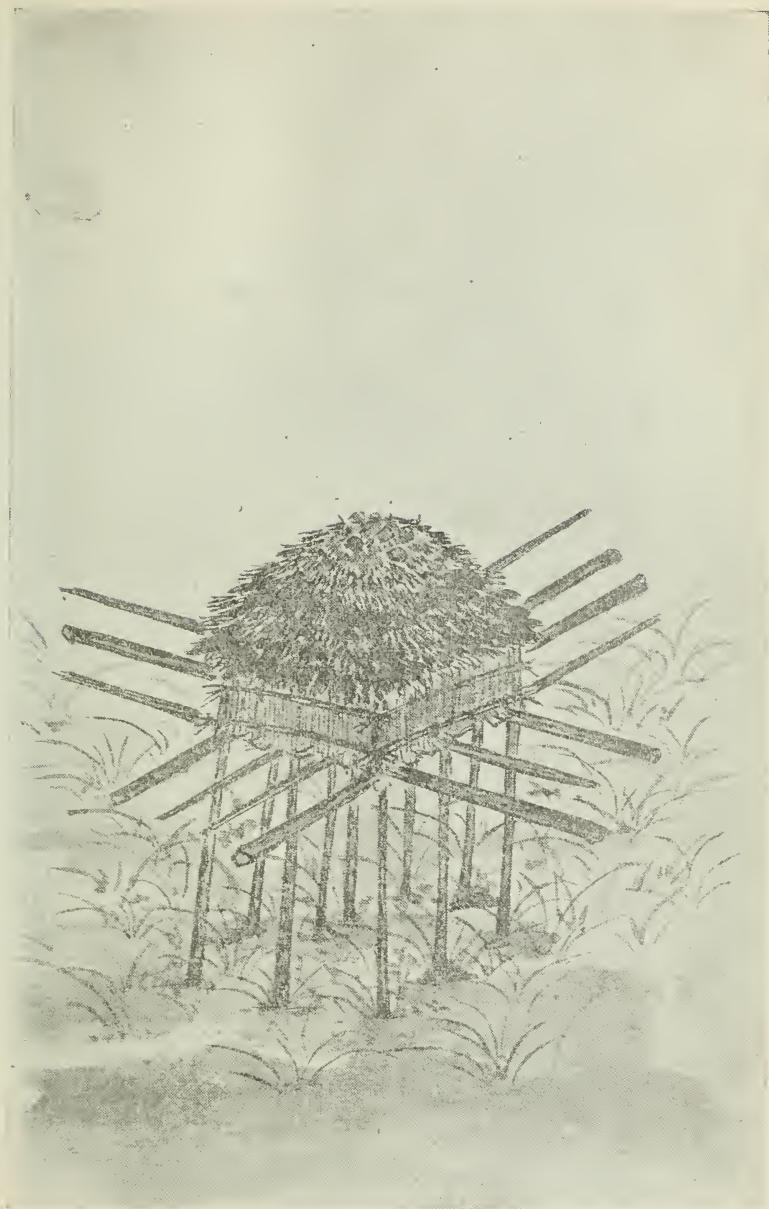
運上屋

蝦夷の母子

以南遠(いなを)ざきとて、とごろふの木を伐て枝ながら岩の出崎におし立て、爲那乎(イナヲ)とて、木を麻苧の糸のやうにけづりて、ゆふのごとくとりかけたるは、鯡の魚多からんことを、このいそべなる神にいのりて、夷人(アキノ)ともの、春のはじめことに手向けるとなん。福山にすめる杉田晴安がアキノ詞もて、「タンバ(此年)、アナキネ(舊歳)、ヘロキ(鯡)、イロンネ(多)、キナヲシリ(幣礒)、シキシヤモ(和人)、アキノ(夷)、カモキ(神)、レンガイ(隨意)。」となんよみたるとかたりしは、このところにこそありつれ。ほどなうふねつきたれば、くだりて久刀布(くどふ)といふ蝦夷の地(コタン)に至る。このあたりよりはもはら運上屋とて、うなのものとりをさむる、さふらひやうの屋形をたてて、そのゑたちの人も、こと人もすみ、アキノの栖家も、軒ならびて入まじりたり。齋藤といふあまのもとにやどつきたり。このちかとなりに笹ふきのまろやのありけるより、童男(ヘカチ)どものふたり、くひせのごときものを持出て、かうがいつきといふことをして、右にうち左にうちて、はて〳〵は、ものあらがひのごとく、たかひにいひのゝしるを、そが母(ハンボ)ならん窓よりたちのぞきて、「ホンノペリ」、「ルカマ」〳〵とよぶ。ルカマとは、路をよこさまにあゆむをしかいへり。ポンノペリも、そのごとき人の身の癖なとをもて、名とそせりけるならはしとなん。こゝやどよりたちいづる蝦夷(アキノ)の、としははたちばかりならんか、リクトンべといふものをくびにかけ、マタブシとて、はちまきやうのものを頭にまとひ、ものうちさへぐやうに過たり。夕けふりたちなびくに、

蝦夷の倉庫

ハナリつきの眞似

海荒れた舟にて

「おくの海夷かいはやのけふりたにおもへはなひく風や吹らん。」とすして、

蝦夷人の立るけふりの末までもにきはひなひく御代のかしこさ。

それらか軒のあたりに庫（フウ）といひ、シャモ辭に多加久良（たかぐら）といふ、間遠に柱つきたて、棚のやうに横木をならべて、そのうへにかや、小笹などふきかさねたる、ちいさき屋をつくりあけて、粟、稗、たら、にしん、さけなとのほしをも、こめおくとなん。やごと〳〵のくまわにそありける。ヘカチともの あつまりて、虎杖の莖の一さか斗なるを投やりて、ひろはかりの、しのゝうれを箭はづに、とかりたるを手ごとにとりて、このくさぐきを、なげつきにつきけるこそ、うなのわざを見ならひてせりけるならめ。これを波那離（ハナリ）つきとそいひける。ゆくりなう雨のさとふりくるに、鹿のかは衣きたるヘカチふたり三たり、こなたかなたに草かい分ていぬ。

かはころもわけぬらすらしいたとりの葉ひろの露のちれはなりけり。

かくて、けふもくら〳〵になりぬ。

三十日。この久刀布より於本多（をほた）の浦に行ふねのあれば、たぐへてんといふにのりぬ。遠近の波路、しほくもりてしらず。ゆく〳〵、風のとく吹來て浪いとはやく、帆越といふ山さしに至りて、

あら波のからきおもひよふねはやみかゝる帆こしの山めくりして。

此山のそかひの雪も、きのふけふ、やゝけちたるたかやまなり。原口の浦より海越しに見しは、こなたにこそあれ。いよ〳〵風ふき波こゝしうたちて、のりたる人々はふねのくま〳〵にうちまろばし、命あることゝちともせさりけるに、舟長、いそ山の櫻咲たり、あれ見たまへといふに、柱にとりすかり帆縄を力に、うち入る波にぬれて、からうして、やをらあふきつゝ於本多近つきて、

花の枝も波やかゝらん舟のうへにみのしろころもぬれて來にけり。

太田上陸

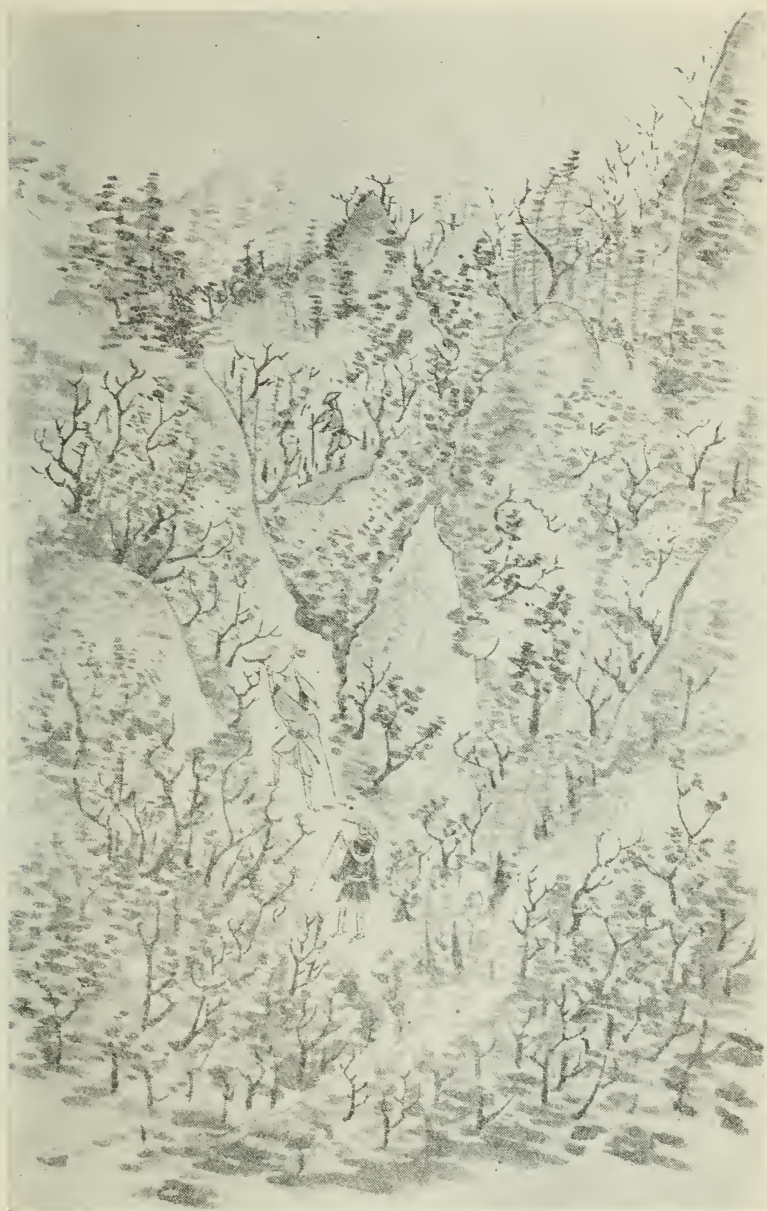
二里はかりのふなちといへと、ときのまにその山の麓につきたれば、蓮上屋ひとつあるに入て、しはしはやすらひをして、磯をつたひ岩むらをつたひ、さゝやかのとりゐのふたつたてるに入て、

山の草木

山はなへて、いろ画のさまして夏木立のやゝしげれるすら、こと國のやよひのなから、末つかた、あるは、うつきのはしめとも見つへし。ところ〳〵に櫻ちりのこり、咲はじめ、高根の太雪もたへ〳〵に、早蕨のもへ出る木のもと、ちひろの岩そびへたち、見しらぬ梢そむき〳〵たてり。紫のむしろ、いはほをめくりてしきたらんやうに岩面(いはつら)ばなの咲たるを、アキノか詞に、イソメキナとかいふとなん。山牡丹とて、よひらのくさはな、葉は女蘿(つた)のかたちして大に、白きも紫もさきまぜたるを、アキノのシュルクワナといらへたるが、いと多

木の根を佛と刻みて

太田權現

圓空の斧作り佛

し。木の根、岩つらをよぢて山のなから斗にいたれば、やゝ木のめはる梢におしへたてられて、紅のうす花さくらの盛なるか、たぐひなうおもしろければ、しはしとて見たゝすむを、とくいきね、かくては日もくれなん。雨もふりこんと、しりなるほうしにいそかれて、

行やらてこゝにくれなは莓むしろしきて太山の花のしたふし。

みちのかたはらなりける木の根を、斧のあたるにまかせてつくりなせるほさちに、きぬうちきせ手向たるも、おかしうたふとく、花も咲かゝりたるに、

ふり來なはぬれなんもうしさくら花あすのさつきの雨もよのそら。

神のいはくらもやゝちかからん、いくはくかあらんそびへたちて、のぼるへうもあらぬ巖のつらに、ふたひろあまりのくろがねの、つかりをかけて、これをちからにたぐりのぼれば、いはやごのうつむろに堂をつくりかけたり。こは太田權現のおましませり。太田命をやあがめまつるならんとおもへば、於多てふ浦の名なれど、よこなまりて太田とぞいふなる。ヲタは砂といふ詞にして、砂ざきなどのありけるにや。おく蝦夷國には砂路澤(ヲタルナヰ)といふコタンもありけりと、人のいふなる。斧作りの佛、堂のうちにいと多くたゝせ給ふは、淡海の國の圓空といふほうしのこもりて、をこなひのいとまに、あらゆる佛を造りをさめ、はた、ことすぎやう者も、近きころ此いはやにこもり居て、はる〳〵と高き太谷(みたに)へたてたる岩のつらに注連

引はへ、木のたかくつをふみて、山めくりをそしける。その木沓も猶のこれり。小鍋、木枕、火うちけなど岩むろのおくにありけるは、夜こもりの人のためとか。御前のすゞひき、ぬかついて、そこにいで、いさゝかいはの上をつたひて、又岩のうつほありけるにも、圓空が作れる佛のみかたしろあり。しはしたゝすむほど、苔の雫は雨とふり溪は雲ふかくとちて、さらに世中のありさまともおもほへぬしつけさに、佛法僧の聲聞へしかは、超山ほうし、あなたふとしと念珠おしもみ、ふりあふき、ふしうかかへど、雲いよゝとちかさなりて、そことしられさりければ、

山の上にて

雲のうちに三のみのりを鳴とりのこゑかすかなる山のたかけん。

山上に鉈は禁物

かくて山を下らばやと、みさかにたゝすめば、沖べいとくらく、おこしりの島山もかくろひて雲いやふかく、休らひていでこし屋は、稲穂など刈つかねたるかと見おろされて、やゝ麓近つき磯邊にくだりはつれば、手籠(てこ)とて、かづらもてあみたる、かだまめけるものに、夜万咩といふ河魚をとり入れ、これを餌(えや)(天註―こゝのうら人らは、もはらエヤとそいふなる。)として、うなの魚をつりてんと、小舟さしいづる翁のありていへらく、いかにたかき山にやさふらはんか、見たまへ、御山のあのいたゞきこそ天狗嶽なれ、こなたは何くれ〳〵とかぞへ〳〵て、たけ〳〵のあたまにて鉈(なた)はふられ侍らじとかたりつるは、海士の物語には似つかす。こや、山賤めけるとうちわらひ

運上屋泊り

て、ふたゝび運上屋に入るほど、笹の葉のやうなる舟にアキノふたり、魚のひれふるやうに四のカンヂして、なだ行なん、いづこの蝦夷(アキノ)にや。日かげかたふき雨さへふりつれば、こゝに宿かりふしたる枕上に、波の、さとよりくかとさはかれて、いねもつかれねは、

前は海うしろは山のほかならてとなりたへたる宿のさひしさ。

更行ころ、狐の、家のとに集りて、鷗のねぐらをさしうかゞひて捉くらふといふ。うべ軒近う、はねをふためかして叫ふに、いとゝ夢もむすばてあけたり。

歸途につく

五月朔日。雨一むらすきて晴わたる。あさひらきの海つらを左に見やりてわけ入るは、いはゆる帆越ごへ。山は、なべて、すゞのみ生ひ茂りて行衞見わくべうもあらぬを、そこそこゝろあてにかいわくる袖、あさ露にたへがたう。木高き櫻のもとに、

さく花をふきなさそひそ小笹原わくれはそよと風の音して。

ヌベの根

相泊といふ磯邊にくだりて丸屋形ひとつ造たるは、樵とるとて、こゝの山路に入なん料にいとなみしとか。水くみ歸る女に行末をとへば、ねもころにをしへ、しはし入りてなと、ヌベてふ草の根をアキノにならひしとて、火にくゆらせてすゝむ。超山とりくひて、めつらしかりつるものかなとて、衣の袖におしつゝみて、こは仙人(やまひと)のつとゝて、もていなんなと戲て、いぬ。保呂島、曾以泊、不毛地(ウエンコタン)にいたり(天註——和人ウエコタンといひ蝦夷人ウエンコタンといふ。なへて、よからぬところをさしていふ。)、無水(シツナシ)といふ崎の、

宇多とは

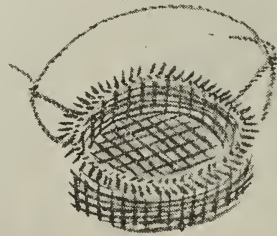
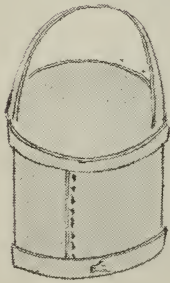
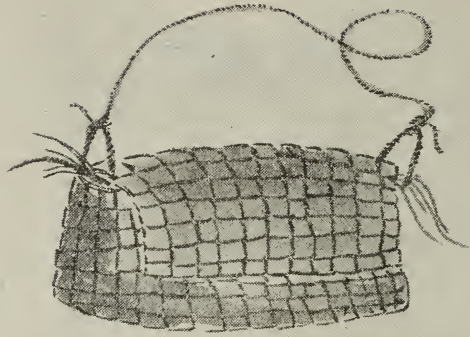
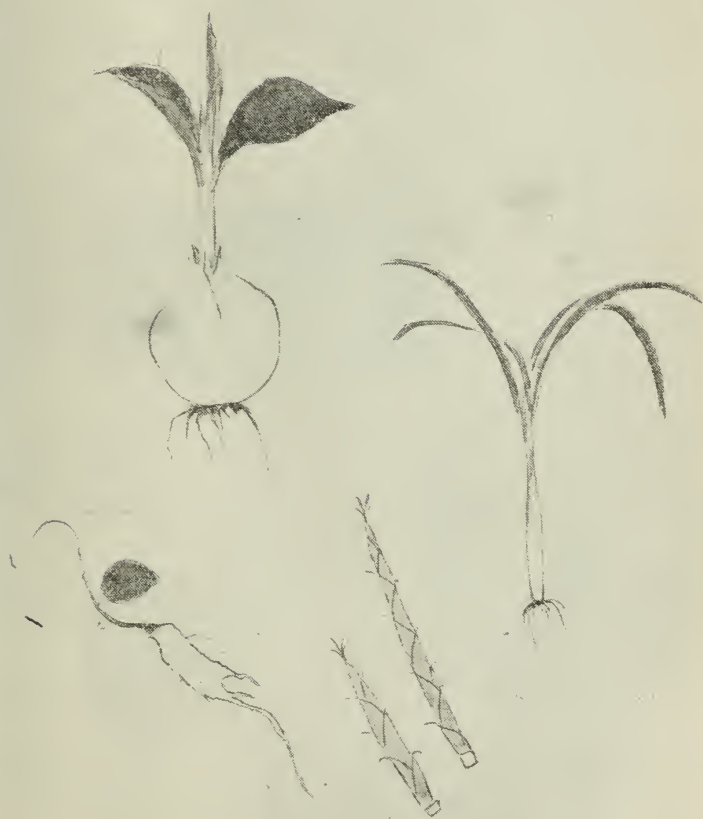
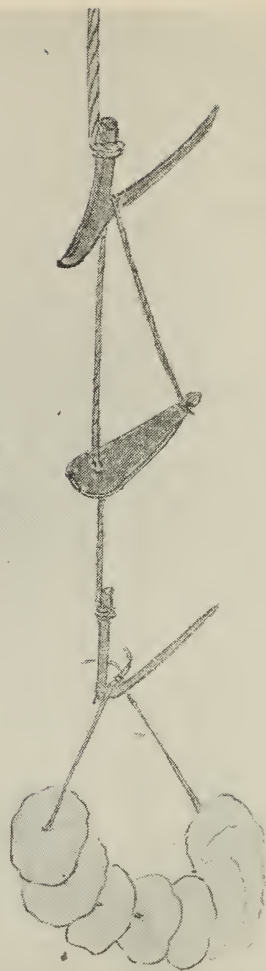
久度布

巖のこゝらたちたる處をたどる〳〵、こゝより宇多つたひにゆけと、浦人のみちをしへたり。宇多とは、なへて、崎より磯つゝきたるをもはらいひて、奥の海のところ〳〵に、いと多くそありける。小宇多、阿登呂志(あとろし)をへて久度布(くどふ)になりて、運上家のぬし厚谷、下國なといふ人々とかたらひて宿る。

色々の草根

酒飲む蝦夷

二日。雨ふり風さへ吹は、いでたゝすかたらふほどに、こゝなるコタンのアキノ婦(メノコ)ども、木皮帒(サラネフ)てふものに、牛嬭菜(イケマ)かつら、象山貝母(ルレツフ)(天註――象山貝母を、みちのおくにてツバユリ、ツンバユリ、オホバユリ、チバユリ、ウバユリ、ウバイロ。夷言にルレツフとそ。)篠箏(トペエフイ)、獨活(チマキナ)、似白笈(ヌべ)、かゝる草の根ともを、いたく採り入ておひ來けり。ふたりのメノコの名をウベレコ、シロ〳〵、又來けるオツカイふたりをカンナグ、シキシヤといへるが、ゐならびて、男は濁酒(ヤ・サケ)〳〵といひもて、運上屋なる筆者(カンビ)が前に(天註――カンピは、筆なども、紙なども、かいたるものなども、ものかく人などもいへり。)、カモ〳〵とて弦桶やうのものさしいたして酒こひはたり、提にうつし、ふたりうちむかひ居て、盞(ツフウキ)は臺ながら左に把り、のせたる鬚上(イクハシウ)を右にとり、もろ〳〵の神鬼(カモヰ)をとなへつゝ、かのイクハシウのうれして、そのみき露斗、いく度もこぼし〳〵捧ることひさしくて、鬚(レキ)おしわけ、こゝろよげにのみて、此ひとつぎのにこれる酒を、價なき寶にも、あにまさらめやとおもふならし、ゆめ、さかなもなう、さしかはして時うつりぬ。あるしシキシヤにむかひ、ことかよふわさして、それらがこと葉に、なにくれ〳〵とわがとふことをうつしてとひ、山の櫻

夷語の歌を

はいかに咲たりと聞しかば、シキシヤをさきだてて、いそへの山かげにふかくわけ入りて、かれらがものいひきいまねひて、

アキノヤタ、キモロヲシマケタ、ニイヤノニ、ノチケリアンベ、レタルヌッカラ。

アキノは蝦夷、ヤタは磯、キモロは山、ヲシマケタは物の陰、ニイヤは櫻、ノニは木をいひ、ノチケは盛りを、リアンベは近き磯の浪、レタルは白きをいひ、ヌッカラは見るといふこゝろもて、しかいはゝ、

ゑそのすむいそ山かけのさくら花さかりをなみの寄るとこそ見れ。

蝦夷人喧嘩

あたらしや蝦夷かちしまの、と、うへも聞へたりとすんして山をいつれは、日はくれたり。笹の丸屋のうちに、こゝさやくは、れいのアキノの音曲(ユウガリ)ならんと窓よりさしのそけば、いと、ませばき屋のなかに酒の器ともならへおき、ひたのみにのみて、とよのあかりをなんしたりける。いかゝしたりけん、ものあらかひをしていかりたち、チヤウカキ(吾等)、イチヤウカキ(足下)と、きいしらぬいさかひの聲いやまさりて、すまひのごとく頭(シャバ)をおさへ、耳環(インガレ)をつかみ、耳たびもちぎれ、カモ〳〵もうちやり、外器(ケマシントコ)の酒もこぼれたり。

よろこひもいひはらたつもうちさへきえそ言の葉のしられさりけり。

かくて運上家に歸る。

クドゥ出足
長の家
チャシあり
ひらたなゐ
鯡の漁場
追鯡

三日。あしたのまの雨ばれに、このクドフの蝦夷やかたをいてて、ヒカタ泊、湯の尻、レンガキウダ、小川尻、ウシジリといふ山河のへたに、アキノの長(をさな)すめり。やの前に垣ねのごとく木をゆひ、羆(チラマンデ)の頭(シャバ)の雨つゆにしらみたるを、またぶりのやうなるものに、つらぬいてゆひそへ、イナヲとりかけて神(カムヰ)とて祭る。源の山の岩たかうそばたち、人ののぼりくべうもあらぬコタンあり、そこをチャシといふ。チャシとは、戰(サントミ)のときこもり居る、それらかくにの柵、稲置とやいはんか。比樂柁寧爲(ひらたなゐ)につく。この行さきの山中は、なゝき、やき斗めくりある虎杖、みちをふたきて高う茂り、羆すむとて行かひさらにあらされば、このいそふねにのりいなんも波あらく、けふなんなだふねひとつ、うちやぶれたるなど人ごとにいひさはげは、こゝろほそう、せんすへもなう、さゝやかの家あるにこひよりてやゝ宿つきたり。あるしのいはく、世にいふせき宿と、さぞなおぼしさふらはんか、世のすぎはひとて、かゝる畑小屋のやうなる家にも住さふらふ。されど鯡の群來(くき)さふらふころは、都まさりににぎはゝしう、海はましろにしろみわたりて、筊(やす)のから、舟かひなごおし立ても、土にさしたるごとに、かたふきもさふらはす。舟は木の葉をちらしたるやうにこぎ出て、ろかぢの音に山もゆるくべう、よるひるとなう海山を人わけありき、火をたつるとて、こゝの磯より火をたかうたいて、鯡のくきたりと、ここと浦にしらせ、かしこの浦に火かたちしそなと舟をとばせ、又追鯡の漁と

なかのり

なんば賣り

七つ忌辭

人死なば

羆襲ふ

て、いつこの浦となうこき來て、野にも山にもまろやかたをおしたて、くきざるいとまには、たゝ、さかもりてふわさにうたひ、まひ、みつのつる音海山にとよませ、夜は、いもねす、みめことからのよき、なかのり見て通ひありくを、わかせとものならはしとせり。鯡の魚さき、飯かしく女ともを中にのせて漁舟の來れば、鯡場にては女を、なかのりとはいふなり。魚場(なんば)うりとて、なにくれの物あき人あり。錢も、こかねも、みな海より涌出て山をなしさふらふ。されは、そのころ七のいみ辭あり。鹿は角あるもの、鰯はこまもの、鯨はゑみす、鱒は夏もの、蛇はながいもの、きつねはいなり、熊は山の人、山のおやぢなともいひあへり。このことおかしたるものは男にても女にても、腰に大綱をつけ、あまたしてよりかけ、ひきありき、あるは海にうちはめ、あら潮のからきめをそ見せける。これをのかれんには、あまたに酒かひのませ、眞砂にぬかすりつけてうちわぶとなん。鯡とるもなかに人身まかれば、ほうりのわさとなう、かり埋めてふことをして、みな月の末、ふん月になりて、そのをこなひをなんしけるなど、かたらひをる家のしりの戸ににけあたりて、犬のけい〳〵となけば、羆や來らんといふ。屋の邊にも至るや。いらへて、近きとし、この魚家(なや)に入て、鯡の子ひとたはらくらひ、うしほのみ、ほとびたりけん、そのしゝの背さけて、しゝむらをはきて磯邊にたふれて死たり。この頃も、野がひの馬とりくらひきなとの物かたりに更て、浪の音もいとしつかに雨の

柱に薦卷く

ウシジリの温泉に

小屋を作りて入浴

ふりいづ。明なば、つとめてものしてんといへは、あるしのめ、柱にこもまいていねよ、はしらにこもまいてふせは、あさゐせさるましなひとそ。

四日。よんへよりの雨けさはれてけれと、風よからねは舟出せじ。いまた、二三日もよき汗はあらしかしといへば、この宿の人々、ウシヂリといふ山奥の温泉に行とてそのよそひせりけれは、われも、そこなるいて湯見てん、いさたまへとて、きのふ來りし大河の蝦夷か栖家のほとりを、河邊つたひに木賊原をわけ、しのゝなかみちをかいわけては路さらになう、ふし木をわたり、かつらをつかみ、この一筋のあら河を、みそち斗に渡て、そのわだなかの水いとふかきわたりに、さいだつ翁、杖は川下にたつへし、河上につきてうちたふれ、身をやなかさんと、聲たかういへり。山々の雪とけそひぬらん、あなつめたと、色をかへ身をふるはして、みちは二里に過ざるに、からくしてつきぬれは、太谷のそこをなかるゝ瀧川に、たきりまじりて涌いづる湯あり。二十ひろはかりの巖にかゝりて、落瀧つなかるゝいてゆあり。まつ、入べきところをとて、木を伐りおしたて、すがこもひきまはし、のま（天註――浦人、苫をもはらノマとはいへり。）おほひ莚しいたれば、みな衣ぬいて、ともに湯あみせりけるに、あつさ身にしみわたる湯あり。いとぬるく、すゝしきゆあり。此いはをのきしにイナヲたて、岩のはさま、木の枝にもいたくとりかけたるは、アヰノらかこゝにゆあみして、湯の神やまつるならんかし。やゝ雪のけ

ちゆくいはねに花の咲たるは、みやまの春と、

いづる湯のけふりの末にさくら花こすゑははるの色にかすみて。

翁、この湯にて見もしらぬ人の、ふときては、あかなかゝせそ。おほ人とて口は耳までひろき人の、身のたけいとたかきか、人にくゑして人に居ましりて、身の筋ぬくことあり。この山には、もはら、さるものゝすめば、大人と羆のことはかたるまじ、ゆめ〳〵としめす。めのわらは、このみねよりとんごろ（天註――どんごろとは大木を三尺はかりに伐りたるをいふ。）、大石なとまろはし落すことありと聞しなと、耳に口をさしあててさゝやく。日くれぬれば湯あみすることもあらで、木を高くつみ火のみたき捨て、なゝたり八たりの人、うちこぞりてふしぬ。火は、いよゝ鳴りみちてもへあかるは、羆の寄りこぬ、ふせぎとはしられたり。瀧なみの音にいねもつかれす、いとゞ、ふるさとのしのはれて物おもふをりしも、まを〳〵と、ながやかに軒近うなくは、姑獲鳥なりけらし。笛の聲かとたとるは、のごよひにこそあらめ。

おく山のおとろかもとの瀧まくらひゝきそへたる鵺とりのこゑ。

この夜、ものすごくあけて、

五日になりぬ。雨のふりいつれば河水いやまさんと、超山ほうしにたすけられて、きのふ渡りし河くまをめくれば、櫻ところ〳〵にありけり。

めつらしな五月のけふの花さかりいつれあやめの匂ふなるらん。

蓬草を葺く

ふたゝひヒラダナヰに至る。この泉郎ともの栖家には蓬(よごみ)、萱草をふきたるも、あやめなきことのしられ、かつみふきたる、いにしへにひとしからん。ゑもぎをよごみと、もはらいひき。萱草をわすれぐさとは、ふるくいひ傳ふなれば、

うきおもひ身にあら磯の海士やけにうれへわするゝ草もふきけり。

やどりたりしやどに、ふたゝひ宿つきたり。

うき旅のうきもこよひはわすれくさふける軒はに夢やむすばん。

人々の顔色

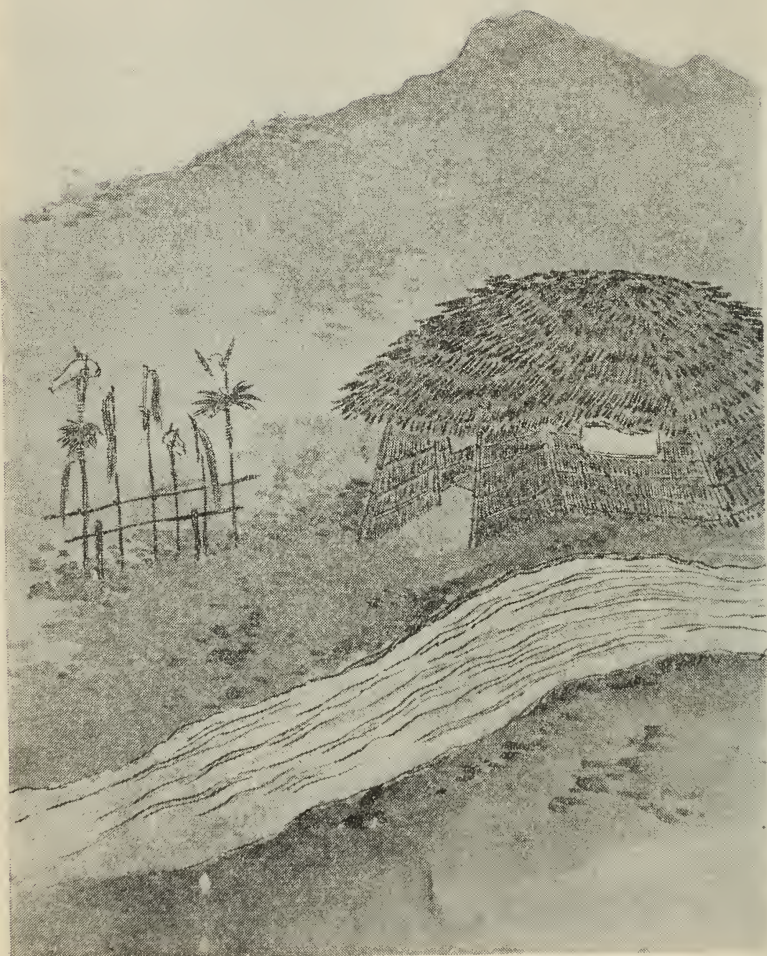
すゞのたか葉のまきさして、山菅もてゆひたるをすゝめ、十圍(ほど)兒くひねなど、かくて夜さりになりぬ。此浦は、ながれ木のみたけば、かたらふ人の顔いろは、くされたる藍のことし。こはいかにといふに、うなの寄木の火の光に、てらされたるにこそあなれ。此居ならふかしらに、じみてふ虫の、塵のやうにおちかゝりてうるさければ、ものおほひてふしたり。(天註—書はむ蠹魚(しみ)とは、そのかたちもことにして、清濁のみにあらず。)

海上に亡靈火

六日。雨ふれはあさいして、やをらおき出て、けふは六日のわすれぐさとうち戯れ雨屋の軒にたては、アキノふたり舟をさはせて、皮着たるか近く來けり。

かは衣たもとやぬれん蝦夷舟のくらきなたこくさみたれの空。

照々坊主

物貢ふ蝦夷

やがて此はまにさしよせて、くら〳〵になりて、沖のなころをかいわきてさりぬ。くれふかくなりて、いさりたくにや、うきしつみたるはといへば、つがろあぢか澤の浦人のふね、あのあたりにてやぶれ人あまたうせたれば、それらが亡靈火(もれび)ならん、なもあみたとて戶さしせり。

七日。雨は、きのふのやうにはれすふれは、わらはべ、てろ〳〵ほうづとて、紙にてかたしろをつくり、かしらより眞二ツにたちて、ひとつ〳〵に糸つけて、さかさまに木の枝にかけて此雨のはれなんことをいのり、かくて雨はれのしるしをうれは、このてろ〳〵ほうしをひとつにあはせ、またきかたちとなして、まさなごとなど奉るといへり。かゝる夷人らにましりすむものらが、つゆ、しりたるふりならねど、鯡のすなどりのため、福山のみなとより親にしたかひ來る童なれは、かゝるわさもやしりたりけん。げにやあらん雨やみたれは、いさ出たゝんと、あるしにわかれて沖べのそむに、ヲコシリもあらはれたり。

ふるほとはそことも浪に五月雨の晴てそ見ゆる夷の遠しま。

弓(グウ)をかしらにかけ、こもつゝみのおもげなるに毒箭筐(イカキフ)をそへて、おひもたるアキノの行を、さちなるあない、あらくまのおそれもあらじ。かれに行末をとへば、まづ寄木宇多、カイドロマ、イシカイドロマ、キシノワシリ、チラ〳〵、あなま、ニビシナキ、ふやげま、たきのま、タンネヒラ、ボンナイ、でけま、セキナキ、くろワシリ、まるやま、ビンノマ、ポロモキ、はたけ

なか、熊石と手ををり〳〵、シャモこと葉かよふアキノのかたりもて濱路をゆき、いはむらをわたり谷にくたり、たかねをわくれば櫻咲たり。こは、さつき山にはつ花よりも、と、ずんして行かてに、

　ざみたれの雨の晴間にみね桜かゝるもあやし花のしら雲。

熊石の浦

やち鶏

超山法師、よき船のあれは、ふなちよりゆきてんとてわかれたり。かなつゞみうちて太田まうでのすきやう者ふたり、おひたるこに、きびの國、むさしのくにと札さしたるに行つれて、セキナキの山河わたりて熊石になりぬ。磯邊に鳴神の祠あり。毗沙門天王の堂あるあたりに在る立石のすかたの、雲のわきづるに似たれは、浦の名をもて雲石といふかうへならんといふ人のあれど、蝦夷こと葉のはかせは、クマウシてふアキノの言（イタク）とそいへる。此浦の、寺島なにかしのもとに宿かる。夕さりつかた水雞の軒の梢に鳴たるを、老女のひか耳に、なにならんとかたふき聞は、かたはらにものさす女、よさりことになく谷鶏（やちにはとり）なりとて、あくびうちして更たり。

　磯波のよるのさはきにやとの戸を叩く水鷄の聲もしらすて。

浪の音かまひすしう、ふすほとなう明たり。

八日。ていき、いとよけれと、うらふれならんかしらやめは、けふも此宿に在りて、ちかとな

門昌庵
開祖峯樹

りの門昌庵といふ、寺めける庵に、常陸國多賀郡よりすめる寶山上人をとふらふ。上人ものかたりして、この庵は、福山の法幢寺の六世にあたる柏巖峯樹和尚とて、世に聞へあるすけなから、女こゝろありけるよし人のさうけんによて、山越しのつみとて、この浦になかされておはしたるをりしも建給ひて、をこなひ給ひしをいよゝさうけんいひそへて、猶つみやおもりかに、きらるへきのうてむかひしかは峯樹やすからす、われ、なき名にくもりていまこゝにきられなん。よし、いのちはめさるとも、たましゐはあめにとひ、つちにはしりて、此うらみはるけんと、りしぶをとり、さかぐりにくりて、うたれ給ふ。その頸を、福山にさらすへきとてもてまいるに、みち遠けれは江差の寺に一夜とゝまりてけるほとに、そのくびおきたるひとまより火のいてて、此寺のこりなうやけ、そのうらみしけく〳〵なりしかと、ところ〳〵のおほんいのりのしるしにて、いまはゆめなけんとか。かくて此庵を出て來るみちのへの、れいの萱草ふける屋のしりなる山梨の花にかくろひて、うくひすのこゑおもしろけれは、

鶯の歸るふるすもわすれくさわすれて花の宿に鳴らし。

山陰に、をくれたる李のなかからはちり行なん、虎杖の高垣にへたてられたり。

いたとりをあめる垣ねのひとつやにすもゝはなちる夕くれのそら。

くれて、やに入る。

九日。あしたよりふりいつれど、雨つゝみしてクマウシをたちて、ヒラタナヰといふおなし名のありける。いそやかたの小川を橋よりわたり、相泊といふいそへに川あり。雨の露はかりふりても水かさ増りて、わたらんことかたし。此春も、あら雄らのふたり、こゝになかれうせきなことかたるは、いてはのくにの、つるはぎ川にひとしかりけり。人にたすけられて、からくしてわたる。此山おくの濕泉に行人あり、歸りく人あり。ケニウチにいつれば、しばやの軒に、ゑひすめ、いたくとりかけてほしたり。なへて此磯邊の昆布は帶のごとく細ければは、ほそめとやいふらん、なかめとやいはんとひとりごとすれば、しりより來かゝる男のいはく、ひんかしのいそにはをよばねど、過來給ひしウシヂリのこなたなるヒラダナキのひろめは、もともいとよけん。それにつぎては、このケニウチにこそあらめ。ことしは鯡のこのあたりには群來さふらはで、させることなう、いまより、かゝるわさをし侍る。此あたりの鯡のさかりは、海に魚の山をなし、せに、かねは、たゞ、ふりわくものゝやうにおぼへしに、こハけかちにあひぬ。さりけれど此昆布のよければは、いそくさをくひて、いのちいきよと、あめよりのさつけにや。いつくさなき島のあはれ、おもひやるべし。相沼の浦近くラベツの小川わたり、泊川といふ磯やかたにつくに、海のうへくらかりて、とごろ〳〵と大島の

相泊の川

ケニウチ昆布の產地

漁のみの命

泊川の磯

鳴るにやと聞つゝ過れは、雨のふりくるは、いつものくせになとおもふほとに、電のひらめき神なりわたれは、家ことに桑原となふ。いよゝ雨いやまさり、沖に、杣木のやうなるものゝ波にゆられたゞよふは、水まさりて、橋のなかれ出たると人のいへり。

山河にみかさや増るひとつはし潮瀬にうかふ五月雨の空。

此苫やかたなる、杉村なにかしといふ、あまのかりやに宿かりつ。なへて鱈のあさりにとみて、家ことに木をよこたへて高うかけわたしたれば、尾ひれをつたふ五月雨の雫に、ゆきかひのみのかさ、なまくさくぬれて、けふもくれたり。夜もすから、うちもねられす、鶏のしは〳〵なけは、

かりねするくさのはつかの夢もまたむすはて明るなつの夜そうき。

かくてしらみたり。

十日。浪のちさとも雨のなこりなうはれわたれと、小川の水ふかけれは、「えいでたゝす。」むら鳥の、ちり行花の枝に囀るほとなう、はま風に吹いさなはれてけれは、童ともふりあふき見て、いなりのお山に、草ひきむすひたるなかに、かひうみたりしさくら鳥子よと、つぶてなぐ。

いろねなく花の梢のさくら鳥ちるかあらしにまかせてそゆく。

なぎたる海つらを、そこともなう見ありけば、（以下「ゑみしのさへき」に續く――編者）

ゑみしのさへき

島止

廿四冊
松前
松前

（前書に續く）泊川にて

雨屋の軒に、五日の日さしける、しほれ蘆を風の吹おとしたり。こは、萱草にことかはりしそかしこいふを、大口魚をほじしにすとて、あなゝゐのもとに、ねふり〳〵うづくまりたる女の、きゝと聞て、さうぶなければ、此草は、なにごとにもよし、よごみとて、ませふきたるといへるもおかし。

いもねすよあやめにかへてさすあしのみしかきふしの夜ころしられて。

こいへは、女、何とかいひつることよとて、わらふ。

境の權現

十一日。ちかきあたりまてもとて、日たけていづ。泊川のはま、相沼のはまやかたをへたて祠あり。此神むかし、さめ網にかゝりてひきあけたりし、黑石の、人の蹲りたるかたちせり。今は境の權現とあかめ、寬延の頃、すりをくはへたる札あり。みちもせに、女あまた蕨おひたるに、藤のしなひ折そへて家路に歸る。

藤か枝のをりにあひたるむらさきの塵のわらひの色そひてけり。

かちひき網

しりより、わらはへのはしり來て、もの見せまうさん、とく歸り來たまへと、あかあるしのいひ越したり。とく〳〵といふに、いかなるものにかとふたゝひ歸り來れは、沖より、かちひきといふことをしてあみひくなり。これ見たまへ、いまとりえたる、あさらけきさかなをまさなことにして、ものすゝめ申さんといへる。こゝろさしのまめなれは、たばんものはたひてんとて、けふも又此宿にとゝまりて、あことゝなふを見れは、此網のものにかゝりしを、岩の多けれはとて引わつらひ、やをらひきえたるいをは、そい、あぶらこ、たかのは、ゆげ、がち、じじなと、名もきいしらぬ、いろくすごものいと多く、なのりそ、ひろめのあくたのうちより、わらはとりいづ。

獲り得し魚

うら人の引手にあみのつな手なはくり返しても逢そうれしき。

泊川滞在

十二日。よんへの雨に相沼川なみたかしとて、あるしとゝめたり。いさゝかのあまはれに、ふくめの皮のつゝみうちありく、わらはへのあそひありけり。

磯による浪のつゝみもしつかにてうちをさまれる御代のたのしさ。

雨又ふりぬ。

てんなく

十三日。雨のいよゝふるに、笠もなう、あしをそらにいそく男を、なにことやありと人のとふに、わかとなりの婦が、つはりいたくやめは、てんなくのところへとて、眞砂ふみちらしてゆ

く。てんなくは、子とり姨をいふにこそ。

十四日。けふもひねもす雨ふりて、大島、ヲコシリも見へす。

　窓こしに見し海つらの山のはもなみと雲とのさみたれのそら。

くだりの風

十五日。くだりといふ風の、未申のあはひより吹て空の晴れたれと、川波高く行かひなし。

けふのはれまとて、和布、ほそめなとほしぬれは、

　五月雨のはれまもとめて海士の子かわかめかりほす浦のまさこち。

ちいさき舟に、つりせる翁かもとに近つきてのりたるに、磯山おろしはけしう吹て、舟もゆり、身もさむけれは歸りくとて、

　夏風の吹もひやかに袖さむしまた雪きへぬ遠近のやま。

よいちの風

かくてくれぬ。よいちになりたれは、あすは雨ふり海あれなん、つりすることあたはしといふ。ひねもす汗にて、夜に入て風たつを余以地とはいふなり。

くろしかべ

十六日。よんべの泉郎のうらひにたかはす、旦より雨ふりて、海の面は、たかなこらたちてあれにあれたる波のうへに、かたちは鵜のことく、鶴、くゝゐよりもいと大なるか、うかひありくを浦人にとへは、久呂斯加閇とて、始可弊てふ鳥のくすしにて侍る。斯加閇のいをそくひて、背ののんとふえにかゝりて、しぬへうことの侍れは、此くろしかべの來りて、觜もて、

黒岩の窟

もや深し

さしつゝいていやしぬ。されば醫者しかべなと、人ごとにいふといらへてき。

夷舟のゆきゝになれておとろかす沖のしほせにしかへなくなり。

此夜も、窓うつ雨の曉の聲に、夢もむすはて夜は明たり。

十七日。雨ははれれと、こゝらの山川あふれなかれて、行かひものなけれは、ひるまはかり、童をいさなひてあたり見ありくに、黒岩といふいはやあるに、圓空ほうしか作る地藏大士の像あり。眼やむ人は、よねもてこゝにまうつれば、そのしるしをうとぞ。このいはむろに、かくれ坐頭といふもの住て、こゝろなをきものには寶さつけたりしところと、はかなきものかたりともを、わらはへの集りてせり。うちむかふ磯山に、ちいさきやとの見へしかは、

世中に庵せりともしらしかし青葉なつくさしけきやまかけ。

夕つかた歸りぬ。

十八日。きのふより、風のこゝちにや身いささむく、けふはふしたり。

十九日。あたゝかさもさめてけれは、わらはやみならん、水渡りなは、いよゝおもりかならん。いましはしとて、あるしのとゝめぬ。

二十日。けふもかしらやみて、ふしたる枕かみの窓より海つらをのそめば、霧のいとふかう、遠近のさらに見わくべうもあらざめれば、翁、門をさしのそいて、この霧(もや)よ、沖なる舟をまよ

はさんと、あきれたゝすめり。霧、霞を丗夜とは、あいだ、みちのくにいへり。

霧こめて海こそ見へね朝なきに舟もやかよふ楫の音して。

つれ〳〵となかめて、浪まくらにけふもふしたり。

時鳥未だし

廿一日。雨ふり來て猶こゝちもおもりかに、いとゞものおもへり。かゝる、みちのおくがおくなる島べとて、さつきの日數かつほどふれど、いまだ誰も、薄衣にぬぎもかへなで袖いとさむく、夏草にまじるつゝじ、さわらび、青葉にまとふ藤がつらのなからはちりかゝり、磯やをかこふ垣のめぐりの卯つ木はあれど、いまた花しさかねば、ほとゝきすも、さらにきなかず。ここ國には、いとまなみ採る手あまたに田うふるころながら、此島には、さるためしもあらさなれば、

さなへとるためしあらねは時しらす四手の田長やよそに鳴らん。

大口魚つり

あしのすだれをかゝげて、こゝらの釣舟を見やるに、磯にぬれたつ娵の、あれ見たまへ、はた（二十）、みそ（三十）斗の、餌にゆげ、あかそひのいやさして、ふたもゝちひろ（二百尋）のつのおろし、大口魚のかゝるをまつこそ、あら潮のからきおもひならめ。さりけれど、なれては、めやすしときゝつなと語る。由祁、安加曾以、いをの名。いやとをゑやとも餌のことをいひ、つのとは、餌の糸、釣の緒也。

わたのはらいたらぬくまも浪幾重へたてて沖に見ゆるつりふね。

廿二日。こゝちよけなれど、よべよりの雨、をやみなういよゝふりそへて、河水いやたかければ、あるしのいへり。人の入來ていふ、けふ山中のみちにて羆にあひ、はからずもとびきて身はそこねたれど、いのちはまたし。此島にかもしか、狼、ましら、猪のたくひこそすまね、麈と羆とはいと多ければ、この羆にのみをそれて、われも人も、野山の行かひはやすからず。さりければ、ひとり、ふたりの旅人は、行つるゝ友をまちていさなひ、あるは、人をたのみ、さいたてて越ゆ。あら山中を、あかものかほに行めくる蝦夷人すら、毒氣の箭たばさむならでは、やすげなし。しゝは三寸の草かくれとて、いさゝかの短きくさむらにても、ふしかくろひて、身をひそむのしちありけるものなり。まして夏草たかう茂りあひては、しゝの出たりしとも、さきにすゝみたるか、とゝまりたるか、しぞきたるか、そこと行衞しられじ。はた、しゝに、ふとゆきもあはゞ、ゆくりなうおどろきて、いとゝたけう、あれふるまはん。かゝるをりには、氣も心もたましゐもうせなん。さりけるときは、まつこゝろをしつめ、ほぐすの火うちいで、けふり吹て、何げなう休らひ居は、しゝはにげさりぬとか。こや、もろこしの虎にひとしく、しゝも、をそれさるものををそるゝのくせあり。いかりたけりたるしゝにむかひては、とき鉾つるぎたもをよびかたかるべけれど、アヰノの、毒箭ひとすちにふ

と射ころし、あるはアキマツフとて、弓に毒矢をはぎおく。そのゆづるに糸をひきはへて、この糸に、つゆ斗ものゝさはらば、羆にても麈にても、毒箭の、さとはなれ來て身にたち、ほろびけるとなん。夷くにの山中わくるかち人は、かゝることなども、こゝろつかひすへしと語りけるほとに、夕ぐれちかつきて雨猶をやみなければ、

海山のなかめもけふはふりくれてむかふさひしきさみたれのそら。

廿三日。雨のひるよりはるれど、沖なんいさくらけれは、

五月雨のあめははれても遠方に雲となみとのかゝるしまやま。

とぞ、なかめくれたる。

廿四日。とりのかげろといふころ門をたゝいて、川水いまたふかく、かちよりは、さらに山路の往來たへたり。ふなち行さふらはゞ、いま出舟あり、いさ、のりたまはなんやといふ。こは、さちなることとて、おき出て、このほとたのもしかりつるむくひをや、いつの世にはとて、わかれてのりつ。あるしは、めこをともなひ磯邊まてたちいてて見をくり、手をあげて去ぬ。曉附夜きよう照りて、うちよる浪は雪しろかねを砕かと、車がひにかいわく。磯山のみちを行とならば相泊、蝦夷村、泡泊、折戸など、舟のうちにかぞふるまに、ひんかしのしま〳〵をひきはなるゝよこ雲の、波のうへにひきながれたるやうにかゝり、月はしろう殘りて

泊川を船にて立つ

かくろひ、夜の明たり。雲のいつこにとすんして、

　また宵にあくるならひは有明の月よりしらむ夏の海つら。

蚊柱に上る

嵐おちたり。木皮布(アツシ)の帆かけさわぎ、しほ風にふきやられて、ふねはとぶやうに、なみいやたかう、ゑひにゑひて、たぐりこゝちに、ふなそこにふしまろひて、鍵懸澤、大岩なといふ見へきところをよそに、からうして、蚊柱といふ濱につけておりぬ。鮪の宇多、鮪川といふ小

水屋の浦

川の橋わたれは、水屋の浦になりぬ。こゝちあしければ、こゝにすむ阿部七郎兵衛といふかもとに入て、ひるねのまくらとりつ。此浦の童、室茅(むろち)といふ草もてこまかた作り、鮑の貝をくつとふみてのりありくに、日もやゝ夕附ぬ。

　しほ風に磯わけころもふき返したもと涼しくかゝる夕なみ。

かくて此宿に泊りぬ。

大なる蚊

廿五日。おきづるまくらがみのさうしに、よへの蚊ふたつみつ殘りゐたるが、はきたかく、はねひろう、くろまだらに、れいよりも大なるにくらべても、猶まさりつらんか。聲聞たりしも、よんへぞはしめなるといへば、やゝのとぢ、蚊柱てふよりこちはかりにあり、されば、蚊の名たゝるところとてわらふ。かゝるすかたもて人さすに、たへがたし。蝦夷人の來かゝるにとへば、蚊虫(キヽリカムヰ)とそいへる。大口魚の乾したるをなにそことへば、エレクチとこたへ過

たり。もはら、たらつる舟の、沖もふたがるはかりつらなり、はた、糟糠てふいをもつれると
か。

あら潮のからきめみつや沖つせのなみにたゝよふ泉郎のつりふね。

磯ぶねとて、ならのひろ葉ほとなるに、車かひさしたるにのる。舟子ひとり、たゝ投足して、
ものたのしげにうたのみうたへど、舟も眼もくり〳〵となりて、宮の宇多、陰のうだなどい
ふ岸のめぐりをめぐらせば、人のかしらよりはいと大にして、まろき石に、目、はな、耳まで
こと〳〵にそなはれるか、十ひろあまり高う、そひへたてる。くろきいはほのつらに、人の
さしのぞきたるかと、をのづからなれり。こは、あやしう、おかしと見つゝいへば、舟子きい
て、まことにこの名さへヲカシナキてふ處とて、はとわらふ。トツフといふ濱に至る。トツ
フは竹といふアキノ辭にして、さゝふ、たかむらなどのありつるあたりにやあらん。舟人か
ひをとゝめて、浪しつかなる磯のわだなる處の、にぎめ、名のりその中より、うみ鼠といふも
のを、もろ手にすくひあくれば、紫のあふらながれいでて、ふなばたは、血をあやなしたるか
と染わたれは、あなきたなとてとり捨て、こは猿鮑あり、こは、いみしき藥とてもていぬ。こ
れやいにしへ、もろこし人の、山ついもと、この、さる鰒とものしたるを錦の帒よりとりいて
て、鷹の藥とそせりける。さることもやあらん、なにのくすりにかさとへば、癇病やめる人

ヲカシナキの人形石

海鼠と猿鮑

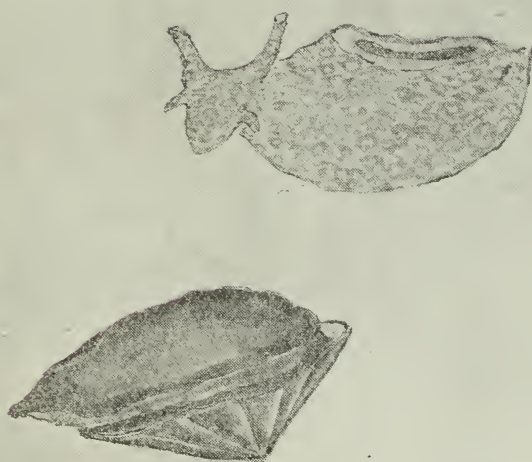
出潮入潮上潮下潮

霧に船を呼ぶ

の、みそしるにしてたうひさふらへは、すみやかにいゆとそいふめる。舟かいやり、窓石といふ石より、潮かはりしといふ。いかにしてしかしれることとふに、こたへて、磯より沖にうつを出潮といひ、沖より磯にうちよるを入しほといひ、北より南になかるゝをしもしほといひ、南より北にさすをかみしほといふ。かみしほにしもしほの入あふことあり、これをうちこみしほとて、よからぬしほとそいふなる。けふは、しもしほにて舟はやしと、われは、しほのはかせとかたり、かひとつをおし立て、れいの十府あめる菅こもを眞帆にひき、いさはせてんとて、水くむ閼氣てふものをうち叩き、「をさななじみと春ふる雪は、なんぼふつても根にならぬ。」とうたふまに、ふねとく行ご、こゝちよげなり。

みちのくのとふのすかこも涼しくも風のふきしくなつの海つら。

コモナキといふところに日高うついて、泊もとめたり。かくてくれ行空に、星ひとつのかげさへ見へず、居ならふ軒たにも見わくべうもあらぬ八重霧のたちこめて、磯へたに人あまたの聲して、つゝみとう〳〵うちならし、ふなはたをたゝき、聲のかきり叫ふは、海參あみひくとて沖にをるふねとものかへさ、こきまよひなんをよはふ。このころをしるへに、よりくとなん。かゝらんをりしもアキノのくににては、あかせし男の舟を、メノコひとり磯邊に立て呼ふを、ちか隣よりもメノコひとりいで、ふたりいててよばふに、よびつぎ〳〵て、うら〳〵

多氏にて
會泊
或漁夫の話
忌辭を犯す

のこゑ〳〵うちとよみて、二三里も呼つくことのありけり。此こゑのいとものかなしう、あはれなり。これを、べ。ウタギといふとなん。

廿六日。ひるつかたに、やどをたちいづ。山みちは遠う暑く、濱路は近う涼しといへは磯つたひしてゆき〳〵、多氏（たて）といふいそへたにふりあふき見れば、はたひろはかり高う、壁のごとくそばたてるところあり。如月のころ土しみ氷りて、小石、岩などの砕けおちて、身をくだいて死ものゝ數しらすとて、その頃は行かひもなう、いまも雨ふり風吹ときは、山路行べしと人のいへり。けふは、さるけしきもあらねはとて行かふ人あふぎもて、おちつもりたる石のなかをふみわけて、たどる〳〵會泊といふ處に來て、あき人の家に休らへば、あなあつ〳〵とて、のまてふ莚に、ものつゝみおひたるをなげおろしアッシのかたぬぎ、なげ足に、しりうたげして酒のみぬ。いつこへといへば、近きまで鯡小屋にありたりしかど、網子別（あごわかれ）して歸るとて、わがせしとせしことのみ、かたりつゝのみぬ。そのことをとへば、聞たまへよ申さん。ことしも、にゐまゐりの鯡とり、つがろちより來るか、魚壺（なつぼ）とて、とり得し鯡を、砂のうちにほりうづみおくことのさふらふ。そのすちのわさにかゝりて、ろうかとて、かりやのあるよりいでくとて、此鯡を狐やほりくらはんと、なにこゝろもなういひあやまつを、こはいみ辭おかしたり、くはや、ことをしいだしたるとて、このにゐまゐりひとりを、あと網と

乙部に至る

左箸の慣習

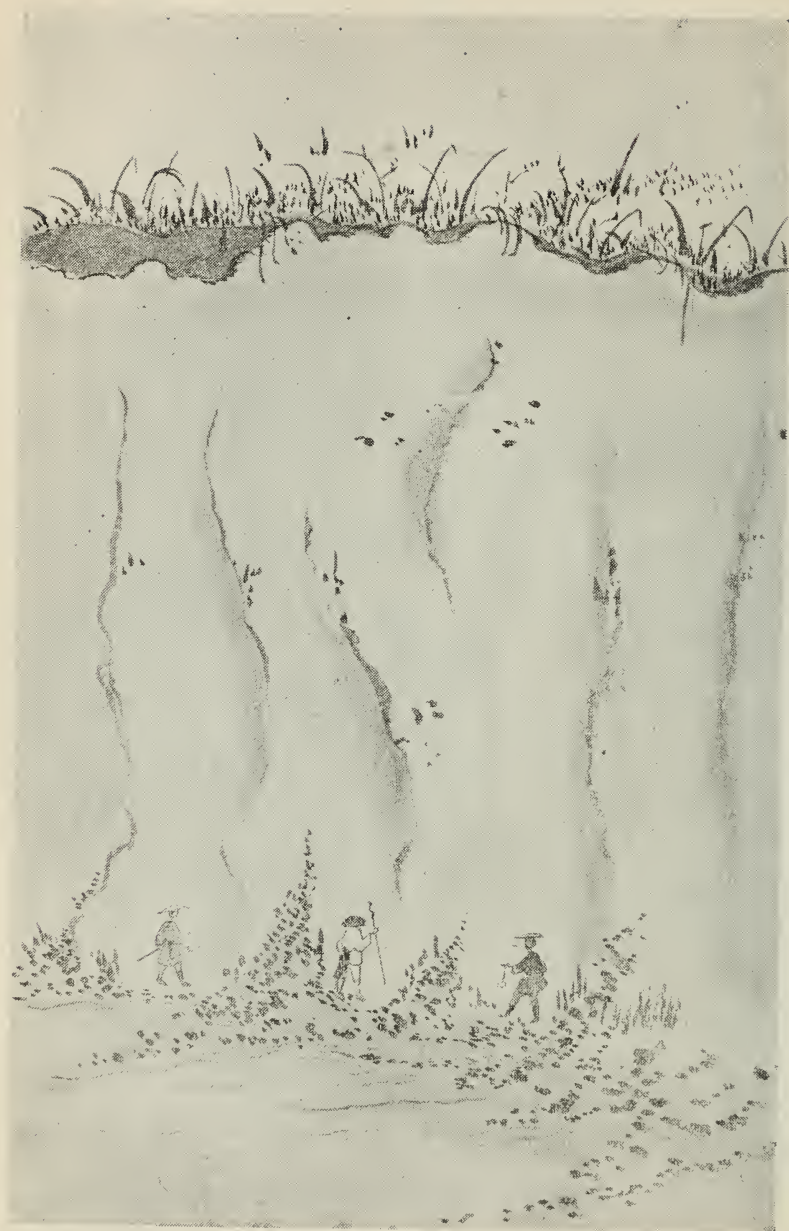
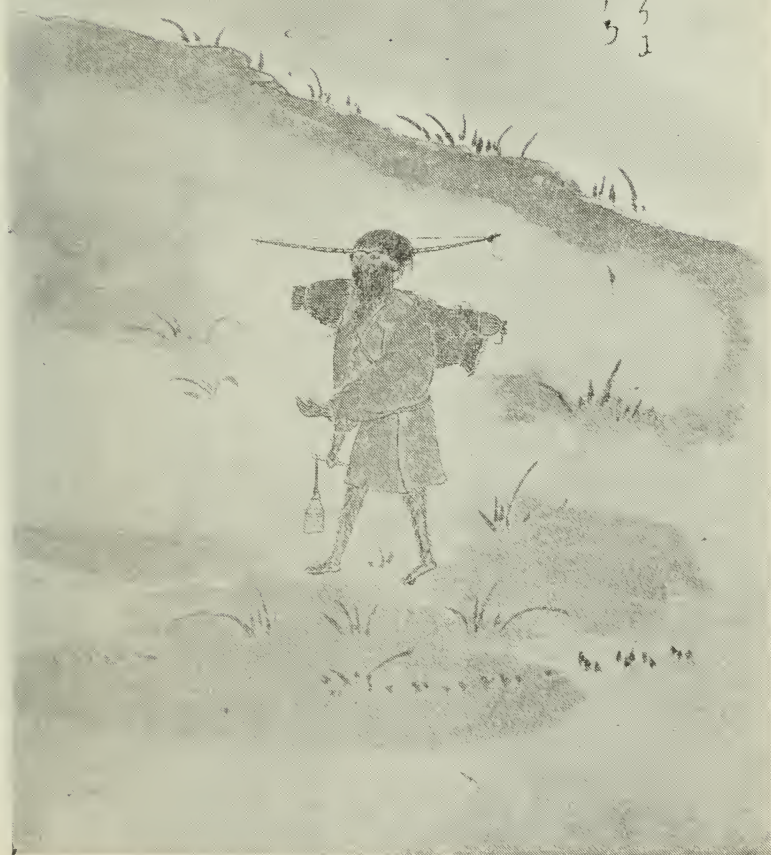
いふものにつゝみて、あら洲のうへを引ありき、潮をくみてそゝきかけ〲ねりありき、あまたにはやされてひかれ〲ありくに、氣もこゝろもなう、なく〲うちわふれど、耳にもきゝれずなげてうし、はて〲は海にうちはめられて、いのちしなぬはかりなりし。とし〲鯡場に行なれたるものすら、まゝわすれなどしては、このことをいひおかしさふらへ。又さもあらでも、海にしほふくはなにそや、山に角生ひあるものはいかに、草むらにをるものはなといひもて、このことをいひあやまたせんとては、壯夫(わかぜ)どもらがなくさみとすれば、にゐまゐりのものは、なとかはいはざらん。この鯡場ほと、にきはゝしう、たのしきことはあらねど、ことしのやうに鯡の群來さることは、もゝとせへぬる老翁(おんこ)さへしらざるよしとて、さかしろ投てあぐらよりたてば、いさなひつれて路しばし來て、綱ふねひきわたり乙部にいたる。ヲトベとは、アキノがおもねりたゝしうものいふときに、尻とそいふなること葉にして、これをひらこと葉には、ヲショロとはいふとなん。此ヲトベの津鼻といふ處に宿かりて、中垣のとに、ふるく大なる屋のあはれたるかあれは、

垣ねなるつはなましりにつみしそのすみれも見へすしける夏くさ。

鯡の子のあはせに、さんへといふものして、ものくへとすゝむ。箸は左にものしてけり。なへて、このあたりの浦人のくせとて、左箸は、ならはしのやうにおきぬ。サンへ汁、あるはマ

やばちくも

刈草色々

供養碑

クリ汁、カボシ汁とて、しな〳〵の魚汁をつねに、もはらものせり。夜くだち人さたまる頃、不如皈の二三聲名のりたり。このとし聞しもはしめなれは、猶きかまく枕をそはたてて、

ゐその海のふかき夜かけてほとときす波の千里をたちかへりなく。

夜はしらみたり。

廿七日。空かきくもりて雨もよなれは、あるし、とみのこともさふらはずは、やばちくとも、今一夜さはいねてなと。さらば、うらふれにかこつけ、よんべのはつこゑにこゝろひかれて、けふのあゆみはとゞめたり。あるじのめ、なにをかもてなさん、うはいろまゐれとて、かのトレップの根を火にむしやいてくれたり。あら雄らふたり、おひもて入來ける草の名は、くゞ、ゐぞわら、さかべ、いはすげ、たつのひげとて、みな繩になひてつかふ。たつのひけてふものは蓑ともせりけるものとか。此くさや、あさは野にたつみわ小菅」と聞へ、はた、數ならぬ三室の山の」と、いにしへ人のなかめられしも、この岩菅にやあらんかし。

ますらおよ朝露はらへいは小菅かりねの床にこよひしかまし。

あまやの軒近う、あたらしき石の碑をおびもて來てするゑたるを、八十あまりの女、杖を投捨て、眼なとのうときにや、この石をまさくりにしつゝ左右の手になでて、あなはかな、あなかなしとて聲もすゝろに、よゝとなく。いかなる人のしるしを、かくはしけるとならんといへ

五十年前の大津浪

は、目をすりいらへして、五十とせのむかし、ころは書月のもちはかり、灰のいたくふりて四方やもの空もくらがりて、晝さへともし火とりて、みの笠にて行かひをしたり。いかなることにてかあらんとおもふをりしも、たがいふとなう、いま五日あらは津浪寄せこん、あなおそろしなと口にはいへど、たゝ、うきたることのやうにのみたれも〳〵おほへたりしが、かくて十九日の夜、夕やみより益おどりにさゝめきあひて、曉月夜いと涼しう海てるころまでうかれありくをりしも、ものゝ音せり。こや、なへのふるらんとおもふほとに、ふしたる人もみなさはぎたち、とに出るほともあらて、浪高う、さとうちあぐるに、こは、つなみぞやとて足をそらになきまよひ、山にのぼり、岡にたどるほともなう、夜はあけかたになりて、すみたる家居は、なごりなう浪にいさなはれて、人もあまた死うせたるなかに、あか父の親は、砂の中にさかさまにかい埋れ、足のみさし出て身まかれり。それを、誰れをさむる人もなうなきをれは、又五日を過なば、かならず乙波といふものよりこんと、人ことにいひもてさはぎ、かくて五日の日數もへぬれば廿五日の夜、けにや、はしめにこそをされ、大波のより來けり。その五十とせのなきあとをとふらはんため、かゝる石のそとは建さふらふ。たのみつかはしし船の、けふつみ來ける。あか父のしるしぞとおもふより、むかしのうきめおもひやられて、つとむねのふたかりて、人めもしらす、なきさふらひし也。なもあみたほとけと、たな

帆柱石過ぎ

こゝろすりて杖とりて入ぬ。老らくのなけきになみたおちて、

　こやあまの袖よりも猶ぬれにけり見ぬいそとせのむかしかたりに。

けふの日もくら／＼になりぬ。

廿八日。みちしはしくれは、帆柱石といふ磯屋形あり。そのすかた、眞帆かけたるにことならじ、こと岩も群立ぬ。セモナキといふ、海士の屋とものならひたてるあたりを、子規の聲したれは戯て、

　ほとときすうなの汝路の鳴ものをきくせもないと誰れ名つけけん。

妻の湯温泉

五倫澤といふあり。いかなる人の五倫塔かとゝへは、五林てふ文字にてこそ、ものかくわらはべのいらへたり。ほとなう、妻（つま）の湯といふゆけたのもとに來けれは、休らひかてら浴せり。この西磯にのみ、ウシジリ、ヒラダナキ、ケニウチ、アシサブの澤なるイヤシナキのゆとて、いで湯あまたなれど、この湯泉は、ふたもゝとせのむかし、都万（つま）といひける女の、重き病にふして今はしぬへうとき、神のみさかにまかせて浴し病のいゆるより、つまの湯とはいひ初めたりきと、湯もりの翁か湯のそこかたらふに、時鳥のきなきとよますもおもしろく、戀しき人や入ぬらんとすんして、ゆけたの柱にかいつく。

　おのかつまのゆきつるかたやほとときす入にし山をいてかてになく。

湯の神

湯ふねは三ならひて味のしほはゆく、あぶらのごとくなめらかにながれ、落瀧の湯の源は、かた岨の草むらのなかよりわきづるに、鷄居あり、藥師ぶちを湯の神とあがめまつる。祠の中に、貞享二年かんな月と記したる札あり。こは、湯守か遠つおや助重郎か建たるとか。この曉に村雨のしてけれは、今や鳴らんと、蜀魂のまたれて明たり。

群雨はよそになりても霍公鳥まつにおもひの晴ぬあさ戸出。

あさいしてけり。

濱百合咲く

廿九日。けふも浴舍に在り。かなたは、ぬるひたれとあたゝかにめくり、こなたは、あつけなれと身の冷へたつなと、やまふとのうちもの語らふを聞つゝ、沼のめくりに玫瑰花（はまなす）の咲たるにましりて、濱百合といふ花の、こき紅にあまた咲たりしかは、

折とらは袖にこほれんいろふかみさゆり花さく野邊の夕つゆ。

日はくれたり。

齒固の餅

水無月の朔。齒かためのひもちとて、あるしのすゝめ、乃南てふものに、しほでぐさのあはせして、あしたのものいたしぬ。させるやまうもあらねば、此湯けたをいでて山路しばしゆく〳〵、ケニウチがたけの雪もなからは雲にけたれて、雨を鳴く梢の蛙のこゑ、をやみなう聞へて空くもりたり。

アシサブ河

馬蜘野

小山權現緣起

小山判官贈卷を祭る

夏衣たもと涼しくけふいくかさらす氷室の山めくりきて。

アシサブの河べたに出れば、檜の皮を綱により、岸よりきしにひきわたし、にきやうといふかづらをわがねて、つかりのことくつらね、おも木といふものをつけてつなぎならべ、うきたる板のうへを、馬も人もしと〳〵とふみ渡る。こは、水上より杣木くたせるをこゝにとゞめて、桴にくみ、海をわたして江差のみなとに至るといふ。アシサブの澤目とて河上に村々いと多く、イヤシナヰの溫泉も近かりけるよし。秋は、此河ちせに鮏なんのほりくとなん。

馬蜘野といふに來けり。馬の大さなりし蛛のありて、人とりくひし處也と、をさなきわらはのむかし物語を、老たるかち人の行つれてせり。夏草のみとりも見へす萱草の咲たる中より、水鷄の二三とひ出て、草の戶さしを叩あり。左に見へたる一村を伏木戶といふとなん。

明しとていたく鴉のたゝくらしまたふし木戶の人の栖家を。

田澤の小川渡りて、ある山陰にほぐらのありけるを、小山權現といふ神のおましませり。そのむかし、蝦夷がサントミいだしたりけるを、小山判官いみしきふるまひをなして、アキノあまたうちまけしかば、をそれをのゝき、ゆづるをはづし、とが矢ををさめ、鉾をふせて小山にしたがひて、カムヰとぞをそれける。そのたゝかひのにはに、小山のはぎまきひとつおちたりしを、こゝにをさめいはひまつりて、かくは申となん。今の世に夷人の、判官殿とても

アキノと三巴紋

はらたふとめるは、此小山にやあらん。アキノらかいま、なにくれの器に三つ鞆繪きさむ。これぞ、小山の家なるふたつ巴なるへけれど、シヤモのものかふるとて、ケマウシシントコ、造酒桶(サケカルシントコ)をはしめ、なにくれの器ともをやるに、アキノらは、巴のかたをいとになうめでたふとめばとて、いやしくも三頭の巴を彩り、にぬりてわたせば、おろかなるアキノのこゝろに、この鞆画のすかたこそまほなれとやおもふ、いまはもはら、三の巴をのみぞ、それらが調度に造(カル)しけることとはなりつらんかし。

江差に來る

泊といふ村はしより雨のふり來て、オコナヰのはま、ふたつ石などいふはまちを、あまつゝみして江差にかつ至り、結木石(づめきいし)といふところに蝦夷の館趾のありけるにも、圓空かつくれるほとけをおけり。かくてくら〳〵に正覺院につきて、やゝ空のはれたる。

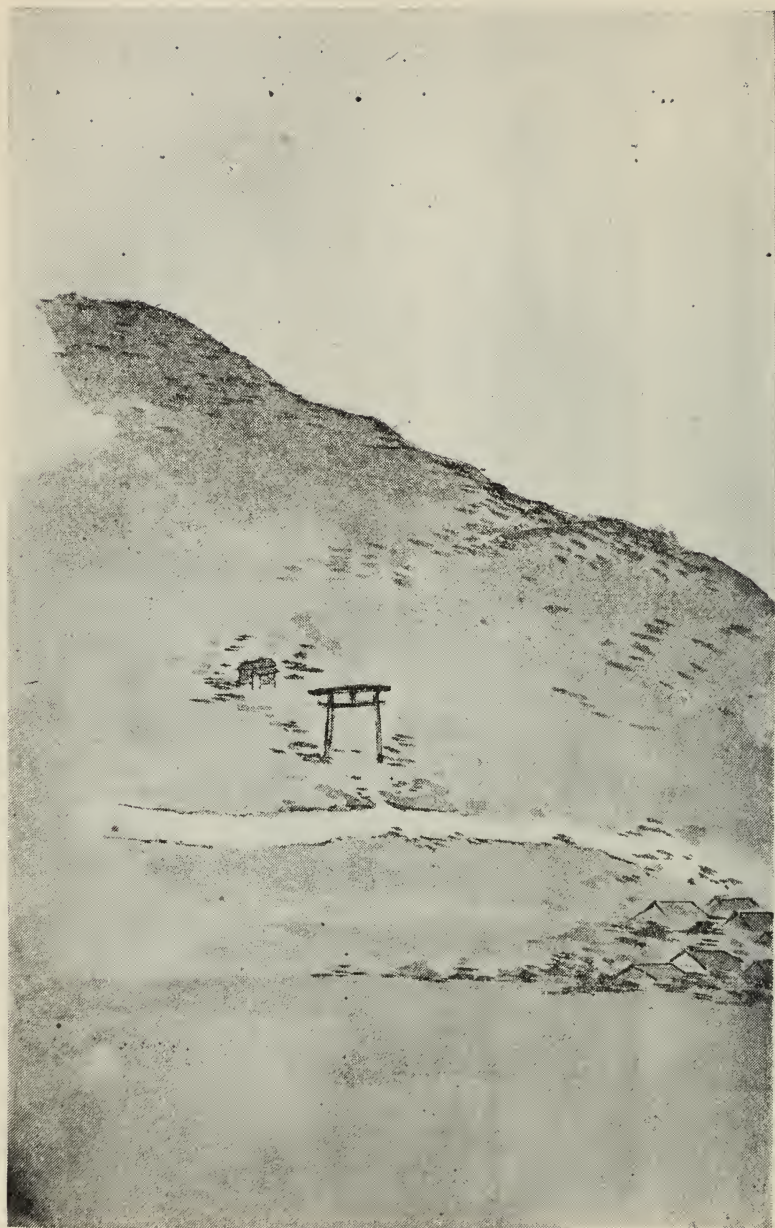
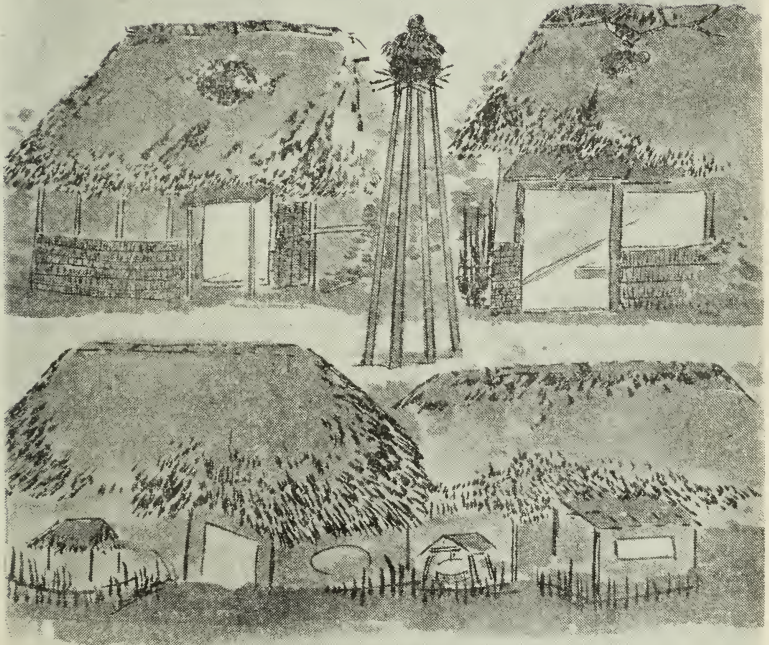
月あらは袖に宿さんたひころも雨となみとにぬれて來にけり。

雨はた、ふりにふりけり。

超山を訪ふ

二日。雨ばれに、觀音堂とて、れいの木を積てはしたてめけるところをよちて、あみだほとけをとなふ寺にとひて、友なひたりし超山ほつしにあへり。こはいかに、久しかりつるなと、まつ、ともに、つゆことなきをよろこほひてかたらひ、あるしの上人にまみへて、ひろひさしにむしろしいて、くれちかき海つらをうち見やるに、ちいさき岩に浪のうち越るを與志

にながき 山手

鼠食ふ犬

島とて、さゝやかのやうに見ゆれど、春は海狗なんいと多くかい上るところ、あなたはケニウチがたけなどいへる。その麓のあたりとおぼしくて、けふりのほそうむすひたつを、今や鮏の群來ぬらんかしと戯れり。こは、くづやきてふ、あぐた火のけふりなり。

　すくもたくけふりのすゑも治れるかせにしたかふうらのゆふなき。

くれてこの堂をいづ。

三日。正覺院の坂をくたれば、にながきといふものに、つゝみなさとりかけ山手持たる男、「まちは西まち盛りのつばな、沖をなかむる山のうへ。」といふ一ふしをうたふ。荷鍵はおふこ、やまでは釣の具、西も津鼻もみな町の名、山の上は、うかれめどものすめるところなれば、わきてにきはゝしかりけれは、かくもいひつらんかし。坂をなから斗のほりて扶手にかゝりて、沖べゆくあまたの船の捞過るを見れば、大船小舟のみち〳〵は、さらに、ちまたのやうに、いくすちもかいけちもせて、

　四の海治る波のうへまてもかゝるみちある御代のかしこさ。

おなし寺に夕つきて歸る。

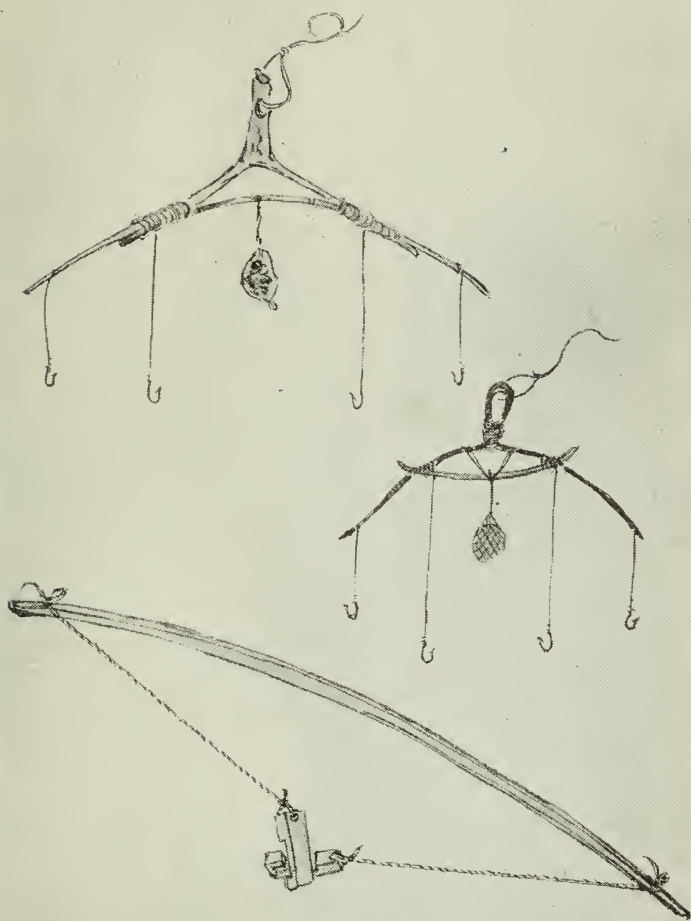
四日。あけ行空に時鳥の百千反なけど、閑靜とて、つゝみ、かねうちましへたる、朝ごとののりにまぎれてうせぬ。けふなんこゝをたちまからんと、ちか隣の法華寺に至りしか〳〵と

いへば、いまひと日二日はと、日正上人せちにとゞめてけり。」ある逸物の白犬、鼠かりしつるを、飛かゝりてひしくと、みなかみころしてのちは、なごりなうくひぬ。鼠とる犬は世に多けれど、おほかたはかみすてなどすれど、かく、ひたくひにくひしを見しは、きのふはじめなりきとかたれば上人、そのことにはよらざれど、世にめつらしきことなんありし。この江差の茂志利といふ處の工の家に、けうの猫あり、この雌猫四五の子を生り。棟の上より鼠の、すこぼれして落かゝりたるを、爪にかいよせて、つとくはへしかば、むげにくらひたりけることよとおもふに、さはなくて、わかうめる子のなかにうちならべて、をのが乳をふゝめ、やしなひたてけるは、又たぐふかたもなう、あやしくもめつらしきこととて、人こそりて日にく來あつまりて、見ものとはしたりけり。かくて日は十日もへぬるほどに、この猫のとに出たるいさゝかのま、隣の雄猫のふと來て、やゝ眼あきたる斗の鼠を、小猫の中よりくひもて去ぬ。人追つれど、かひなうせき。母猫の歸り來て、この鼠のあらざりけるを尋ねまよひて、ねうくと鳴めぐり、をのが子にすら乳もさらにあたへずして、たゞなきになきしことありし。手を折て三十とせのむかし、屋は工の家にて、名は何とやらんわすれたりきと聞へしかは、ものもてまゐる翁ひとり、此ものかたりをかたふき聞て、その工の名は長四郎とか申たりといへり。世に、たくひなきことにこそあなれ。上人前栽に友なひて、これ見

小嶋草

江差を立つ

路の莖を吹鳴らす

五勝手

てよ、この草は小島より採り植たり。さりければ人みな小嶋草といひ岩防風といひ、あるは碧玉草なとそいふめる。その花は、をだまきといふ草につゆことならす、たゞ花のいろ瑠璃にして、葉の色も、こきもへぎなり。ことくにゝ見ることもまれなるものにて、

夏草の露もみとりの玉かつらかゝることなる花をこそ見れ。

けふもくれはてぬ。

五日。おなし寺にけふもありて、とにいづ。ちかとなりの寺に、ひと夏こもるほうしにや、蟬聲に經よむにあはせて、日くらしの鳴なる林の中をわけ行、老たる、わかき、かしらをふせて、あなたふと、なもあみたほとけと。

日くらしのそれかあらぬか山寺にたへす唱ふるそめかみのこゑ。

六日。朝霧ふかく、御寺の軒の梢も見へすたちこめられて、雨なとのやうに袖かつぬれたれと、ひるよりははれたれは法花寺をいつるに、寺にあるあげまきに、衣つゝみなとをもたせて、みちあないさす。ゆく／＼寶螺吹ならす聲の聞へたるは、山伏のをこなひならんとおもふほとに、そのめぐり、むき、なゝきある山ふゝきのくきを、もと末きりて、童の、ふたりして吹ありくなりけり。こは、アシサブの澤より採りつへけんかし。小島、ヲコシリのは、たけ、いつさかにたり、みさか、よさかに生るは短なりと、その童らの話りもて五勝手に至りて、あ

北村の館址

多門天王堂

若狹より流來る

チコナヰ越

けまきに別たり。海邊につとさし出たる澤(マヽ)あるに、燕子花のいと多く咲たるなかに、のひるの花の盛なるは、こき、うすき、むらさきの色をこきませて、めもあやなるを見つゝ、こは、みちもなきかた也。いかゝせんとわけたゝすみて、

まよはすはそこともしらしかきつはたへたても波の近きいそわに。

かいわけてメナの村にいづ。こゝなんむかしは、勝山の花見が館より此處に閑居の館をいとなみて、そのころすませ給ふたるむかしかたりをせり。本館より北にあたればとて、今も北村とはいへり。上の國の天河にくらぶれは、鮭ののぼりくもいとすくなけれど、魚なんよけん。大なる鳥居たてるは多門天王の堂なり。こは、いにしへ島の司、若狹の國をたちしそき給ふたるをしたひて、からうづに入て海にうかひ、浪にしたがひ、小川のへたにつきおましましき。過來つる古櫃といふ小河は、そのゆへにて侍るといへと、わがとらは、ひと文字もしらぬいなかうとなれば、ゆへあらんことは、いかてかしりも侍らしかしとて、杣人ならん、山路に入ぬ。此すちよりも、上の國よりもトカフといふ山里にかゝりて、あら山なかをはるゝと行みちあり、浦人ら、なへてチコナヰ越へといふ。この山越へして來るすきやう者、佛法僧の聲ひるさへ聞し、いとものすこき山中にて、鬼熊のあれわたれは、人多からずは、ゆめゝゆくまじきみちなり。さらばとて、かねうちならし、太田まうですとていそき

天河に洲寄る　夷人の騷擾

たり。ひんかしの磯キコナヰの浦に行へきみちなれば、しかいふべかりつるを、したゞみてチコナヰとはいふなり。キコナヰはそのいにしへ、柵養の蝦夷と聞へたりしところにてやあらんか。かくて、つなひきわたる天河に來けり。この河のながれ洲に、いよゝみなとふたがれりとおもふに、はいまのつかひとおぼしくて、馬とくはせてうち過る。こや、ひんかしの遠島、クナシリのほとりの蝦夷人、いかなるすぢにやあらん、もゝあまりのシヤモを、鉾してつき毒箭ゐたてて、なか〳〵のさはぎ也と、浦〳〵につげわたる、その、えたちのものとのゝしりけり。この天の河のうらひ、まさにしられてけるかな。猶弓弦たかく張り、とが箭つまよりて山にかくろひチヤシに集るなと、もはら人ことにいひさはけば、こゝろをちゐず上

勝山の上國寺にて

國寺にとふらひ、あるしの上人にまみへて、此ことかたりてくれたり。

七日。季豐のぬしよりのふみあり。さつきのはしめつかたに、かいしたゝめられたる、

帰るさを待こそわふれ五月雨もいとはていそけよしぬるゝとも。

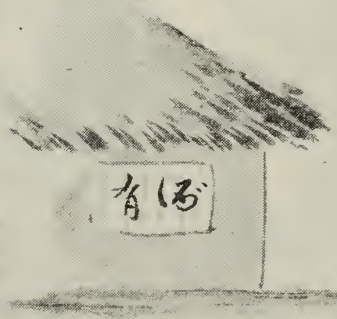
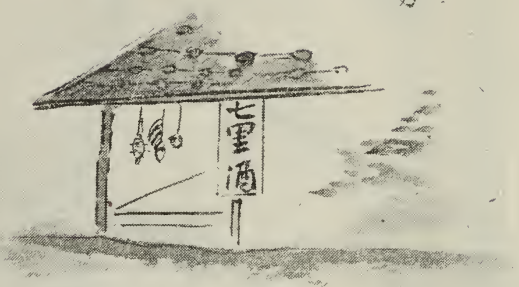
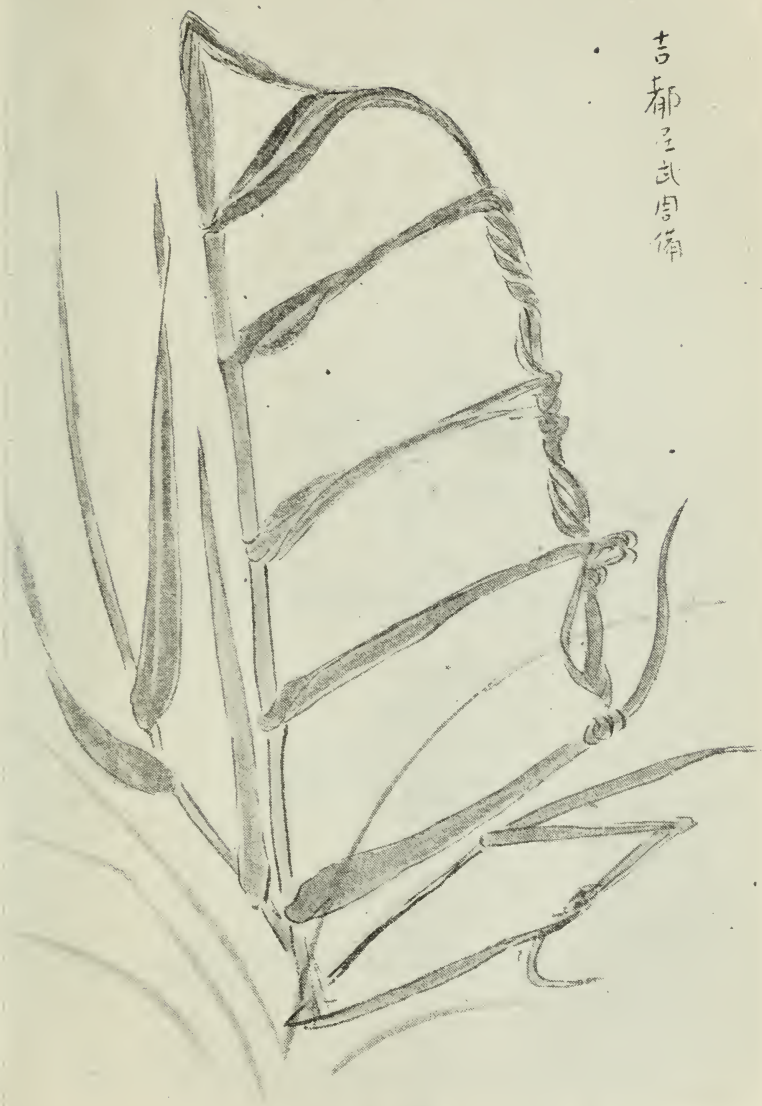
をくれたりし、ふみの返りことかく。

五月雨ははれても人をみな月の空さへたひの袖はかはかし。

七里酒の辨

門の外になみたつ家居の、さうしに書し七里酒てふものは、いかなる酒をかいふとその宿のぬしにとへば、うちゑみて、この島に稻田なく、よねはこと國より渡りて乏しければ、濁酒造

七里酒

狐結び

れることを、いみしう止め給ふ島ののりなれば、この濁り酒といふことをひめかくして、しか七里酒てふことは、二里五里の酒なるこゝろを、人によみとかせてうり、あるは、酒といふ文字をにごりして、人にしらせさふらふなり、とてわらふ。屋のわらは、これ見たまへ、きつねむすびをとて、あしの葉の葉末、かたよれにむすびたるをもて來けり。こや、なにの料に、狐の結つらんかし。「夏草をむすふしるしのなかりせはいかて行まし山里の路、といふこゝろには似す、人まごはせる、れいのくせならんとて、はとわらふ。あるし、これもて旅のこゝろはへよみねなと、せちに、

　　ふる里に在りとし見しも夏衣きつねむすひし夢のはかなさ。

寺にかへりいぬ。

魚釣り

八日。磯邊見ありけは、ちこおひたる、うなひめ三四人磯の岩にたちて、したゝみをくだいて餌として、しじ、はちがら、はくごくてふいをゝつりぬ。このはくとくの名の、ことに聞へしかば、れいのよしなしことを、

　　分來つるみちもいくはくとく行てふるさと人にかく話らなん。

雨もよにて、けふもくれたり。

九日。曉より雨風はけしう、旦の空くらうして海あれたり。

老鶯

十日。いやふる雨にぬれて鶯の鳴たるに、頓阿彌陀佛の歌に深谷夏聞鶯といふことを、「春たにもはるはよそなるたにかけのしける木のまにうくひすのなく、なとすんじて、

またふるすいてぬおもひに夏ふかき谷の戸さしてうくひすのなく。

時化ありし

十一日。いさゝかのあまはれに、沖のかたを見やる。磯邊に海士のとひよりて、このほとのしけよ、八日は、船の、そこゝにてうせたり。此年はいかなるとしか、舟いくつも破れたるなとかたる。そのうせにし友ふねならん、遠う波のあはひに見へたりしかは、

おくの海しつけきまゝにこき過しふなみちしるくのこるゆふなき。

朝地震と天候

十二日。あさとくなへふりたるは、雨にや、風にやとうらふほと、超山法師來けりとつく。いつこよりかとゝへば、六日のあした江差の港を舟出して浪風にへたてられ、この崎ひとつあなた、シネゴといふ崎に丸小屋つくりて、舟子らと友に磯枕して、けふまてそこに在しとて、こよひはこゝにやとれり。

十三日。晝より晴て超山法師はいにき。われはこゝちよからねは、えいてたゝす、けふもくれたり。

大風來るか

十三(マヽ)日。山背の風あしたより吹て雨のふり來て、つゆはれ行けちめもなう夕くれて、河水あふれくなと人々さはきわたり、海つらより、あたゝかなる風吹來てけり。こは、風いたく吹

天下泰平

なん。

十四日。あしたはれて又ふりいつる。小夜中にめさめて、

見しほとのおもひはよそにさそはるゝゆめちすゝしきゆふたちのそら。

十五日。雨はれに、とに出て見れは、ふたがれたる天河（てんが）のなかれすも、浪のうちいざなへり。こや、集たる蝦夷人も、かくみをといて小弓ふしなひくならんと、此小河のうらとはれて、「てんかたいへい、こくかあむせん」といふことを一くさのかしらにおいて、十あまり四の和歌を、こゝにいはふ譽田別尊のひろ前に、松逕と友に奉る。

「春」天　照りそむる春の日影もけさよりは霞ににほふそらの長閑さ　松逕

てらす日の影も長閑に八幡山みやゐは春となひくゆふして　秀雄

武　梅花さきやらぬまもうくひすのこゑよりまつやにほひそむらん　松逕

むら／＼と消ぬるを花とみやまちの雪のこすゑにうくひすのなく　秀雄

佉　霞つる春のなかめやいかならん浪速わたりの月のおほろ夜　松逕

歸るさもわすれて花の木のもとをさしてそむかふ夕月のかけ　秀雄

「夏」多　誰れも又おもひ入らめやおく山の春におくれし花をたつねて　松逕

たかかたの空に鳴らんほとときすこの里すくる夜半のむらさめ　秀雄

委　いまも尙花の面影さりやらて又なつやまにかゝるしら雲　松　逕
　磯ちかく波の音きく旅まくらすゝしき夢をむすふなつの夜　秀　雄
「秋」弊　隔ともちりとやそこに匂ふらん霧のまかきのしらきくの花　松　逕
　へたてなきなかもしられて銀河ふかきちきりの名になかれたる　秀　雄
以　いかはかり露けかるらん戀わひて鹿たつ夜半のをのゝあさちふ　松　逕
　出るよりくまなき影のかくはかりあはれいくよのあきの夜の月　秀　雄
胡　このゆふへ荻の葉たに入たゝて袖にまつふく秋のはつかせ　松　逕
　衣うつ音には夢もむすはぬをなにさそふらんのきの松かせ　秀　雄
「冬」久　草の葉は霜かれにけり淺茅原面影にのみ秋をのこして　松　逕
　吳竹の夜のまの雪やふかからん今朝しも軒のした折れのこゑ　秀　雄
可　影やとすつゆのくさ葉におきかへし霜の上とふ冬のよの月　松　逕
　神かきに正木のかつらくり返しなかき夜かけてうたふみやつこ　秀　雄
「戀」安　あかさりし今朝のわかれの袖の香を又逢までの形見とはせむ　松　逕
　あさからん人のこゝろとおもひ河わたりもあへす袖ぬれにけり　秀　雄
武　むすひつるかひもあらしな山井のあさき契りと今朝はなれゝは　松　逕

むすひても水のこゝろよ飛鳥川きのふにかはる契なるらむ　秀雄

「神祇」世　蟬の聲のすゝしき杜のなつ木立しむる宮居の神そふりぬる　松逕

瀬を清みみたらし河にすむ月はちりにましはるひかりとや見ん　秀雄

「祝言」武　昔より諫のつゝみ苔むしてをさまる御代と四方にしるらし　松逕

むかひ見ん千代万代の末までもかはらぬ御代にたくふまつか枝　秀雄

舊跡尋ねて

雨のなごりなう晴たれは、いて此あたりのふるあとをも見てん、あふぎ見るかつやまにものほりてん、けふは、さちに人のまうづる日なれは、八幡のかんやしろにもまうてまく、あけまきをたつさへ、おないがてら露はらはせて、おほくらの祠の右より、寺のしりなる、たかくさの中をかいわくるみちを、やゝたどれば、これは何かしどのゝ館、家居のあと、これはたれさのゝすみかのあとゝて、草に埋れたるを、かいわけてをしゆ。やをらみまへにぬかつきて、

石清水うつさぬ里はなかりけりこは世にふかきめくみなるらん。

醫王山頭陀寺跡

花見か館のあとはあなたなとかたりもて、醫王山の嶺にのほれは、さゝやかの鳥居あり。ちいさき祠の中にある石のひさこかたの面に、三のみかたしろあり。そか中は藥師ふち、左に、みぐし十あまりひとつのぼさち、右には、ほこつるぎをもたまへる地藏尊を、ひとつにつくりそへて、この、みつのほとけのあはひに、醫王山頭陀寺、永錄七年三月」とのみ、けちのこ

りたり。むかしの寺あとならんことをしられ、花見か館の榮へたる、いにしへを偲ぶ。こゝを離て、まはにのかた岨の見へたる處あり。水無月のころてりつゝいて、たなつものかれゆき、あるは山河の水あせ流れ、杣木伐くだすちからなきときは、この丹土、いさゝかとりて壺にをさめ、雨なん此山にいのれは、まさしうふりくとなん。かくて、ふりにふりくるしるしをえて、さりければ晴れを乞んには、きよげなる、こと山の土を、かのまはにゝませて、これに鹿の片角をそへてさゝげ奉る。このつちを、いたく神のおしみ給ふなど、さかしきわらへのなにくれと語り、此筋は原口に分くだるなどをしへ、こたひは、ひんかしなるみちをいとこく、かの寺の軒はさしてくだる。

雨乞の祈、雨霽の祈

十六日。よんべよりの雨いよゝふりまさりて、ふりくらしたりけり。

十七日。きのふのごとに雨ふりて、ひねらす、はれまさらになう。こは、はたつものゝむなしう、こゝくにもかゝらば、いな葉くちはてなんと、寄る人みななきぬ。

十八日。きのふのことし。けふは、そりのあれは空はれなんと、泉郎のきていへり。ソリとは、神のなり頻るかごとに、かう／＼と波の音聞へたるをいふとなん。

そりの音

十九日。そりのうらひまさしう、けふは晴れたり。いさ出たゝんといへは、みちのぬかりかはきて、あすなんいでたちねなど、あがせし日記を見つゝ、あるしの上人。

上國寺出立

キノコの浦

月花の光やそはんたまほこのみちの行手にみかくことの葉。

とそありける返し。

光ある言の葉草を玉ほこのみち行くうさのなくさめにせん。

二十日。けふは此寺を立出なん。上人、いまた四五日もとゝめまほしけれと、なりたるかたに、いそきおはしまさむこゝろとみならんとおもへは、けふなん手をわかちさふらふなり。いつのなこりもおなしなと、ともにいひもて、とにいつれば、近きまて送りせんとて、松逕、わらはに、ひがさなともたせて、かたりもつきず。大間といふ山中になりぬ。こゝの別といへば、いましば〳〵とて原宇多もすぎて、安在(あんさい)の濱に休らひて、童、つとにとて石子拾ふ。別て松逕は、童をともなひ山路に入られたり。かくて蓬は林としげり、虎杖は森と生ひ立る濱邊の野らを行ほど、人あまたうち過るなかにいふ。そこは福山にて見し人なるか、こはいかゝはせん、あやこの方のせうそこありしかとも、あしとき馬にたぐへたる器のうちにふかくつゝみて、つけそへて過たれは、せんすへもあらじかし。よきにけいしてたうはれとて別たり。しはしとてほとへたれは、ことなしとやとはせ給ふならん、あかむらいをと、ひとりこちて、キノコの浦にしはしとて休らへは、磯やかたのをさとおぼしくて、いぶせくとも、こよひはわかはにふにあかしさふらへ。あすは福山へ行舟あり。かちよりは、山河の水ふかく、

わづらひやあらんと、ねもごろにいひて、きよきむしろなどしかせける。こゝろさしのいと うれしければ、かたらひてやゝくれたり。夜はまた、ありあけの月窓にさし入るころ人の起い づるけはひして、舟子ならん、浪うち聲あららかに呼ありく。やをら、ゐならびて灯とり、も のくひたり。

廿一日。風のこゝちしつれど、且ひらきの海見んことの、猶こそおもしろからめとのりぬ。

船路して

ひんかしの磯山の、しらくと、月さへ殘りてあく。

朝またきのこれる月の船まても友に追手の風の涼しさ。

山かげの草の中に、苫ふける家の五六斗見へたるをとへば、鷲の濱といらへたり。こは、夏 に老たる名なりけるよなと、うち戯れて近つけは、

拾はすは浪や折らんうくひすの栖家もしるき梅のはな貝。

ある難船談

潮吹のなだも搒過れば、木曾山中といふ處の沖邊になりぬ。此磯の巖ともは、こゝろを盡 し、たくみならべ立たるやうにいとおかしく、舟のはやきをねたしとおもふをりしも、舟子 のうちこぞりて話るを聞ば、過つるころ、此沖中に大船の行なるしりについて、鬪合といふ 小舟のこき行ほとに、海いたくあれて、このづあひぶね、大浪ふたつみつかづきたれば、ふな ゝかはしほあかにあふれ、舟うちかたふき、こゝらのりたる人は、海におぼれ波にいさなは

遭難の出家を弔ふ

我も難風に會ふ

れてありくを、大船(ベンサイ)かぢを止めてともつなくりながし、かい〳〵しうあせれば、みなこの綱をいのちとすがりしかど、手のちからなう浪にうち離れて、男女あまた、浪のしたにうせたり。むくろはしらず、日をへて、さしくし、すが笠なとにまじりて、袈裟、念珠のたぐひを、浪の磯邊にうち寄せたるといふ。こは、此ころ聞しにたかはす、近きとし福山に來ける、むさしのくにのなにかしといふすけにて、まみへたる人なれは、いふべうもあらぬかなしさに、おもひつゝけたる。

むさし野のつゆとも消へておくの海の泡となりゆく人のはかなさ。

此すけ江差に行とて、川水ふかければ、ふなたよりもとめて、あまたの人と友にのりて、海なかに命をはりたるこそかなしけれ。かくとかいて、海にはめたり。その綱にかゝりて、こはうれしとおもふこゝろいさゝかありて、波にいさなはれたるそのおもひ、いかならんと、しらぬ人のうへまておもひやられて、すゝろになみたほろ〳〵と、身のほともおそろしくて、

棧をふみてし木曾のおなし名や渡る小舟のうへそあやうき。

いととふひにゑひて、行そらもおぼへぬに、山おろしの風海に吹入て柱かたふき、帆あしはたか浪にひたして、舟子らたちさはき、いそき帆をくだしてんとて帆繩ときやれど、蟬とい

ふものゝしぶくして、とみにも帆のおりこねば、ほばしらうち叩て、からうして、ほのやゝくだりくを、とくおしたゝみて、命いきたるおもひはしたり。かくてはあるへきにあらねは、

獨り上陸

舟つけさせ、なにといふ處ならんわれひとりおりて、いまだきしのながるゝおもひして、たゝ舟にあるこゝちすれば、何くれとり入たる袋にひちつき、しはしはふしたるとおもふ枕かみを、馬のあし音たかうふみとゞろかすにめさめたれは、馬よりおりて、その人のわれにいふ。そこは、いつこへ行人のあゆみつかれたるか、又こゝちあしくてやなと、まめやかにとふに、たゝ、ふなゑひ人にてさふらふか、かしらやみ、あゆみもすゝみさふらはす。しはしとて、この磯に草枕はしたるといへば、さあらは、あなたの人里まて此馬にのせて送り申さん。いさとくのりねと、調度とりつけたるは、情ふかかりける人なればと、うちのり、チキサコの

チキサコ浦

浦に來て、とまりたるやのあれば入て、ひる寐の枕して、夕くれ近けれは、ふたゝひとまりぬ。白雨ひとしきりしてこゝちも涼しけれと、洋倘くらし。

一とをり磯なみはれて夕たちのまた雲さらぬ沖の遠しま。

またもふりこん、空けしきたちぬ。

邂逅

廿二日。よんべよりの雨けふもふれは、山路は露ふかからんとて、あるしのとゝめければ出たゝず。くらき窓の中より磯べたを見やれは、此ほとやふれし舟の具、うち寄せたるをふみ

原口の浦迄
蛭子と稲荷
じり降る やばち
大魚釣り

したき、なに拾ふならんこの女入來て、泊たまひしか、久しうありてまみへさふらひしそと、おもねるは、たそゞとおもへば、卯月のころ休らひし家の、をさめなり。あか栖家をはしめ、その月の四日になん、ハネサシは、ちりひとつ殘らずみな灰となりて、身のみそこなはでいでのがれ、ゆかりなれば、この宿にはさふらふなりとかたる。

廿三日。ほの〴〵と明て、日の、みさかばかり波を離るゝころ、こゝをたちづれば、セタガヱリ、堂ヶ澤、ヒコシロ、鍵懸(かんかけ)、おんこの木、にのうだなとの山なかを、わけのぼり分くだり、海つらは、いさゝかいそにわけいつれば、撫子あまた折ちらしたるは、

　みちのへに捨るはいかに生ひたてし誰かなてしこの花よこの花。

神のほぐらあり、ゑみすの神にておましませり。なへて此浦は、かゝるおほん神と、いなりの神とをのみまつり奉るをならはしのやうにして、こと神は多く見奉らざる也けり。ぬさとりたゝすむほとに雨のふりくれば、この山みちをたどる〳〵、ひとり越なんこともうければ、原口(はらくち)の浦屋形に來てある軒に雨やとりしたるを、霧雨(じり)のふりて、やばちくもいかれまじ。やとほしくは泊りさふらへと、藤左衛門といふ翁の、さしのぞいていへば入たり。此翁、大鍵のごとなる鈎をとりいでて、これに十餘二筋の縷をつけ、その糸のうれは一つかにつかね、こと綱をゆひそふるとなん。こは、いかなる魚や釣ならんととへは、蝦夷人の名にいふ

ソキマスケとて、そのたけ、むさか、なゝさかにこへたる大魚てふものを、いか、そひ、あぶらこなとの魚ひとつをさして、つりえては、はなりうちして、その鱗なごを、もはら鍬もてとりさらふなとかたるは、こと國にいふ石なぎてふ魚にことならすや。人さたまるころ、海の上に、稲妻のさとはしるやうに、波のあはひに火の見へたるはといへば、こは、しほひかりにこそと、あるじのめ、戸さしてふしぬ。

潮光り

廿四日。小雨きのふのことにふれば、えしも出たゝす。磯やかたの長とひ來て、この比三河の國寶飯郡牛窪村のすきやう者、名は誰れとやらん、としはよそまりの人の、わたびうとのことならん、いつこ〳〵とあそのみしたひ來りしかと、めくりもあはでなと話るは、上の國の寺に、それかしるしの札のこしてける、喜八とかいふにてやあらむ。あがくにの名さへ聞さへゆかしきに、まいて、わか親ますかたのちかとなりの里なるをと、いよゝ戀しう、ふたゝひ袖はぬれたり。

三河人の噂を聞く

かくはかりたもとに雨やふるさとの人はいつこをぬれたとるらん。

空はれたれは、日たけてやとりをいつ。山路をゆく〳〵雨のふりぬれは、ぬれ〳〵てエラキマチにつく。（天註――エラキマチの名、いまエラマチといふ。）福山なる寺澤なにかし、鶻とるわさにたつさはりて、この旅家のありけるにとひて、この夜明たり。

エラマチ

泉龍院にて

廿五日。けふも雨ふりて、いづべう空にあらねはとてかたらふをりしも、文龍せじとひおはして、いさ、あか寺にともなはん、魚はあらざれど、しぶ茶もて、よきこんぶ、いり豆、雑飯（かてめし）ありなと、戯れてさそへり。

廿六日。この寺の軒近う、柴垣にゆひませたるそとはども、なからは苔むし折れかたふきたり。

山寺のめくりのかきのふるそとはくちてものこる水くきのあと。

いとあはれに聞へたるとて文龍せし、あか木の如意にかいつけて、すんしかへしてけり。

廿七日。けふも雨もよの空なり。いたはりある身のこゝろあれなと、あるしのせしのせちにとゞめられければ、けふもおなし寺にありて日はくれたり。

鷹の倉に鷹の子を捕る

廿八日。ひたけてこゝを馬にて出たつ。いくほどなう清邊（きよべ）に至る。このほとりの山ふかく碁盤といふ處にて、つねにやく炭竈の煙いくむすびたち、空さへくらく、赤神の烏帽子嶽とやらんにて、鷹の倉とて、かまはやぶさのすむ、その、ちひろの岩のつらより人を籠にのせてつりさげ、たかの子をとりえては、めぬき、こつか、こがたなやうのものを、巣のうちにのこし歸る。ゆめさることもなければ、鷲、鵰なとにとられたるとやおもふ、こん年は、こと處にすづくるなと、馬ひきのいふ。そのあたりも、あま雲きほひかゝりて見へす。風のいやまし

てけるにや、かしらやめば、馬よりおりてつちにふしたるまくらに、

時もいまさかりしられて草むらにあさおくつゆもひるかほの花。

ツマナキの小河わたりてサツマキにいたりて、こゝち猶よからねば、やに入て、むねくるし、しはしはこゝに休らはせてとあるしにいへば、いとやすし、こうしもさふらはゞ一夜いねてなと、なさけ〳〵しう聞へしかは、うれしう、ものさらにすゝまでふしつ。

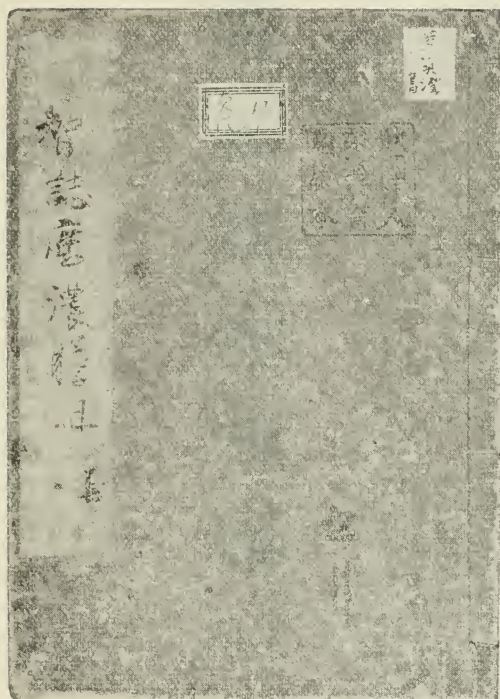
廿九日。けふも風おもりかに雨さへふれば、いふせきやごにものおもひて、ふしくらしたり。

三十日。身にあせして、こゝちつゆよけなれば、野山のみちはる〳〵とたどりて、エケフにひるつきて下國の門に音なひて、なにくれと、つもるものかたりに日はかつくれたり。

サツマキ

エケフ歸著

智誌磨濃膽岨

春

寛政四年壬子のむつきより
やよひのすゑまてを記す。

北海道福山にて新年の佳例

おほ館山の麓、こたて阪のこなたに、北埜をうつしまつるかんやしろの杜のした庵に在て、亀玉の年かきふれは、寛政四とせ壬子、武都比月の朔にそなりぬ。旅やかたなから門にいつ葉の小松をたて、しりくへ縄引はへて、ひろめの四手をかけて、このくにふりをならひぬ。わかんみむすひの神、くなとの神、わたの神、みけつの神、なへて朝夕つねにをろかみ奉らぬ神にもいやし奉れば、亥子のあはひをはしめ注連引わたし、例のものさゝけ、榊葉なけれは、雪のなか垣より正木といふ青葉を折てゆふとりかけ、齢薬といへるをみきにかもし、いはひへにうつして神に奉れは、朝日ほの〴〵とさしのほり雪のやま〳〵うち霞むやうにて、うなの上猶おかし。

蝦夷の栖島やまかけの初日かけ光にもれず春は來にけり。

七の御社に

近き神の瑞籬をはしめ七の御社に、もち飯奉るとて、まつ神明のいはくらに、

神路山内外の宮のはつ日かけ玉串の葉の猶光そふ。

八幡のかんやしろに、

長閑しなけふ吹初る春風に靡やはたの神のしらゆふ。

熊野の宮に、

神もさそたのしからなん三熊野や花もて祭る春の來ぬれは。

八船豐受姫の神垣に、

いなり山年はきのふに杉の葉の霞や春のしるしなるらん。

羽黒の神のひろ前に、

春來ぬとけふ鶯の羽くろ山うつす宮居に出てなかなん。

淺間の神のみまへに、

來る春の光に解て今朝よりは雪も淺間の神のひろまへ。

馬形の神のおきつきに、

ねきことを雪間の草のはつかにもうけ引たまへ駒形の神。

文道太祖廟をうつし奉る玉籬に、

春來ぬとあくる一夜の松の葉に千代も恵の色やそふらし。

松前廣長のぬしの雞の形かいて、こを板戸の上におして、あしのなはひけとて贈られける。

鷄の繪を

齢薬の歌

其かけの繪をものし、端出之繩をかけ、（荊楚歳時記曰、正月一日貼畫鷄戸上懸葦索於其上挿符于旁百鬼畏之）符を桃木の枝にはさみて、

かけの尾の長きためしや春ことにひくしめ繩のするもしられす。

屠酥みきに齢久數利ませて、文子の御許、竹子君のおほんもとに奉らはやとて、人にたくへてこの歌をそふ。

いく薬なめてよはひをちよ万八十の老もこまかへりなん。

文子

返し聞へ給ふ。

初春の薬のみきをけふなめてたもつ齢や久かるらむ。

梅初花

二日。文子のおほんもとより、梅花給はりける枝に引むすひて聞へ給ふ歌に、

春告てけふ咲梅に鶯のもゝよろこひの聲をこそまて。

かくなんありける返し。

鶯のもゝよろこひにけふなかん言の葉匂ふ梅の初花。

又ひとりあふきて、「春風春水一時來といふことを、

時のまに氷は解つ風渡る水の心もあら玉の春。

初春祝。

さほ姫の袖こそ匂へ初春の霞の衣ちよやかさねん。

三日。北山の埜なる、うちとの神のみやしろのをかみとのに、おもふかきりうちつとひて、例のことに歌つくり奉れり。「初春山といふことを、

かみち山春の光そあらたまる眞榊の葉の常盤かきはに。

題さくり得て「春到氷解。

五鈴川春を汀のうす氷とくるや神のこゝろなるらん。

社頭子日。

神垣にけふ引うへて阪木葉ちよを小松の友とさかへん。

竹籬聞鶯。

山里のめくりの竹の間垣をも春はへたてぬ鶯の聲。

とは、いたくしみ氷て冴れと、此ひろ前は、山ふところにしてあたゝかさにやありけん、蜘蛛のゐなかうひきたりて、鈴のをのうへより火桶の上におちかゝりたるを、こは春をおほゆるなと人の興しけれは、

蜘蛛垂る

さゝかにの糸をみむろに引鈴のをのれ春しるためしなるらし。

四日。のとかに、朝とく鳥のさへつるを、こは、鶯の谷の戸いつるにやと聞つゝをれは、百敷にすみかさためよとよめる鳥の來ゐるなれは、ほゐなけれと、おかしうひとりこちたり。

蝦夷の皮衣

鶯のもゝよろこひの聲ならて春のひたきの鳴ものとけし。

くれ行ころアキノふたり、かの裘きて、むつかたりしつゝ太雪ふみしたき行を、

ゐそのきる鹿のかは衣の星までも朧に霞む夕月のかけ。

万歳樂

五日。例のことゝて、かんつかさいやしありき、年ことの、ふみだもてわたりぬ。このとしはしめて、あかくにふりをうつして、澤田といふわさおきのたみ、万歳樂のわさせり。午の時はかり、つゝみうちよそひたち、にしきの袷にほくゐきやうをつゝみ、扇子と五葉、ゆつる葉をもて御城にのほり、万才うたふ。いまた見ぬことゝて、たかきいやしき、わらはへ入まじりて、こゝを見さはく。季豊のぬしより、ことし聞へたる歌あらは、見へきよしのふみ來けるを見つゝ行は、するつかたに歌あり。

言の葉の花の匂ひやそひぬらん人のこゝろも春の來ぬれは。

返し。

ことの葉もいつをまちてか匂はなん來る春もまた淺き心は。

六日。子の日なれは、

うちむれて小松やひかんかへるさはあすの爲とてわかなつむらし。

うちそめ

七日。うちそめとて、八幡のみやしろに神樂ありけり、つゝみうちけるゆへにてやあらん。

わかなのためしはなかりけり。俊子の館よりふみ來たるを見れは、

契おきし人さへとはて言の葉の花も匂はぬ宿のあけくれ。

返し。

春風のたよりに告てめつらしな咲ぬに匂ふ花の言の葉。

鹽につけたゝらかしたる多加奈も、去年のわかなにこそあらめと、粥にしてなめたるもおかしう、ひとりほゝゑみたり。夕附行ころ、ちかとなりの赤石吉滿のやにいたれは、加藤壽の画かきたる、山に朝日のさしのほるかたあるに、あるし、歌よみてとあれは、

又たくひ波のすかたにとる筆の日かけも匂ふ遠の山のは。

この夜氏家の館に在て「霞中子日。

遠近に人や引らんひめ小松霞むひろ野の末そしられぬ。

江霞隔浦。

浪速かた入江の蘆のめもはるに霞のみをやみつの浦松。

霞隔村。

立ならふ宿こそ見へね夕煙霞になひく遠の一村。

八日。けふは穀日なれは、うかのみたまのかんやしろに集ひて法樂してんとて、「初春霞。

鹽たかなの粥な

春のたつしるしの杉の色こめて霞のうちに三のみやしろ。
題さくり得て「鶯知春。
はる來ぬとけふ鶯のはつ聲に霞むいなりの山の杉村。
惜落花。
杉の葉のちらぬ梢にならひてもいなりの山の花そうつろふ。
互惜別戀。
うき別名殘の袖をひく人も思ひはおなし思ひなるらん。
九日。うなのうへ晴て、澳の遠しま雪しろうはる〳〵と見やられて、
おくの海つかろのいそはそこともいさ白雲の霞む遠山。
十日。かすみの歌三首を詠る。「海邊霞。
あまの子かいそなつむらんはまつゝら來る袖霞むうらの遠近。
浦霞隔松。
浦風の吹かよはすはやへかすみなひくにしらし松の一むら。
孤嶋霞。
みつ潮も浪もへたてぬ離島霞にしつむ曙のそら。

十一日。八幡の御社にまうて奉りて、おもふかきり集て、をかみとのにわらふたしいてぬかつきて、「初春水といふことを、まつ奉りぬ。

氷ゐし心はとけつ石清水うつすみまへの今朝の春風。

題さくり、かうかへて五首をさゝく。「霞春衣。

春のきる霞の衣また薄み浦の遠しま風冴るなり。

わたつ海の春の衣よめつらしな霞みつるかの浦の初しほ。

柳似煙。

遠方のあさけ夕けの外に又なひくや里の柳なるらむ。

春風に柳の木のめ打けふり一むらなひく川のへのさと。

松上藤。

春來れは花のふち浪色かけてみとりも匂ふ庭の松か枝。

常盤なる松のはやまも紫の色にはへある花の藤なみ。

寄車戀。

人もさははけしき峯のしは車しはしも止ぬこゝろなりけり。

わかれよりいく度折て手くるまのめくり寄るへき日そかそへぬる。

大島焼けたらん

旅宿夢。

草枕むすひし夢の覺て又現にたとる故郷のそら。

海山のひるのなかめをくさ枕むすひもあかぬ夢の樂しさ。

十二日。夜のまに大嶋や焼たらん、炭いたくふりて、しら雪みな眞黑にそみたり。

十三日。夕より雪いやたかうふりて、ゆきかいさらにたへて、なかなかの太雪なりけり。此夜あや子御館に在て、日待のいもゐし給ふとて、夜とゝもに歌よみ集ふ。「春雲。

咲頃はまた遠山の花といままかひもはてよ嶺の白雲。

わたの原なみちはるかにたち渡る一むら雲の霞む明ほの。

春浦。

櫻貝ひろふ袂の色までもなひく霞の浦の朝あけ。

旅人もそことも心をうつせ貝春になるみの浦の長閑さ。

春草。

しけりあひて夏もたとらんふみ分てまよふ雪まにもゆるわか草。

おもふとち雪間の草のはつかにも春の色見る野邊のたのしさ。

春獸。

もへ初る眞葛かはらの恨あれやつまこふ猫の聲頻なり。
菫つみ野山を分て櫻かりふすゐの床や人にしられん。

春床といふことを、
おもひやり花にたどらぬ山ぞなき春の夜床の夢も現も。
かりくらし櫻かざすとみし夢をつれなく床の山かせそふく。

十四日。馬形明神に奉る和歌、「初春風。
こまかたのみやゐのさかにひく注連のしらゆふなひく今朝の春かせ。

御祝ひ棒

夕附行ころ例のことに、ごいはひ棒とて粥杖手毎にさゝけて、門の前にむれふたかり、たゝすみて、「さしにいちごのこいはひ、さんざいはふてさんざ。」と、まち〳〵、海へたまでも童の聲みち〳〵てけるに、
咲梅の花のかゆの木ふりかざし磯邊の波の打とよむ聲。

粥杖を屋根に

十五日。また、とはくらきに、わらはへ起出て、ごいはひうたふか、谷陰の里に聞へたり。あけたては、てうしたるこのかゆの木に、みわすへ、みきそゝぎかけて、家のうへに投あげてけるとか。　「熊野のみやしろに奉ける初春の浦といふことを、
みくまのゝ浦のはまゆふ打なびき百重に霞む春は來にけり。

雪深く積る

十六日。羽黒のかん社に奉る「初春松。

月の山近き宮居の玉松に春の光のあらはれにけり。

十七日。淺間のみやしろに法樂の和歌「初春祝。

下解る雪はあさまの松の葉にちよの色みるけさのはつ春。

廿三日。このほと風のやまうにふして、けふこゝちよければ文子の御館にいたる。日のほのかにてれゝと雪いやふりて、行かふ人も、たゆはかりつもりき。夜くたちては尙ふり增りて、尋に過ればにや、軒にひとしうなか〳〵の太雪、かく一夜のほとにふりかさなれるは、こゝのならはしとて、人々、しかすかにおとろきたるけしき露はかりもなう、ふかしなといひもて入ぬ。此夜よみたる歌あり、のす。「河上霞。

行舟の行衞ほのかに見へてこく霞の淀や春の川なみ。

長閑なるいろになかれて大井川霞の水尾にくたす筏士。

折梅花。

見ぬ人のつとにと手折梅花さのみなをひそ春の山かせ。

ゆく方にぬふてふ邊のきても見よ手折てかさす梅の花かさ。

柳靡風。

長き日の例もしるく吹通ふ庭の柳の木のめ春かせ。
春雨にむすふみとりもふきときて風のまかすする青柳の糸。

寄榊戀。
榊葉にいのるしるしをみしめ繩かけてかはらぬ中そ久しき。
根こしたるためしをよそに榊葉のひけとなひかぬ人のつれなさ。

廿六日。法幢寺にいたれは、軒にいやたかき松のみそあらはれて、なにくれの梢いろもなけれは、なかめたり。

法幢寺にて

雪にけふ尾の上の松は埋ても軒にちよふるいろはかくれぬ。

廿七日。雪けぬる音して、軒のいさ水たへすかゝりぬ。けふのまとゐして「水邊殘雪といふことを、

行水の泡ともけなん河岸の草のはつかに殘るしら雪。
澤水にゑくな摘にしあとしるく見へて岸邊の雪そのこれる。

霞中餘寒。
冴かへり羽風を寒み鶯にうすき霞の衣鹿背山。
淸見かたふしのねおろし袖冴て霞の衣浦風そふく。

山居餘寒。
眞柴たく煙は空に霞ても去年のまゝなる雪のした庵。
嶺さへて折たく柴の夕けふり栞の里にかすむとや見ん。
野亭夕梅。
見るまゝに野中にくれぬ住やたれ一夜宿かせ梅の下庵。
咲梅の色こそたとれ夕まくれ匂ふ野守か宿はまとはし。
多年愛梅。
としことに增る色香に梅花あかてめてこし春やいくはる。
行するゑの春もかはらて咲やこの花の下風宿にふかなん。
寄靍祝といへることを、
此宿に齡ゆつるのひなまてもむれて砌にあそふたのしさ。
廿九日。むつきもけふに暮たり。
二月一日。品川なにかしか四十の賀に、「寄竹祝といふことをよみておくる。

呉竹の齢をゆつれこの宿のあるしをちよの友と契て。

風の情を袖にしるかなとひとりこちて、ふた尋に餘る雪の軒端の窓に、いまた冬こもりのこゝちさらすして、

いつの日か花のなにおふ梅見月ゆきいや高し窓のふる枝に。

ひるより雨ふり出ぬ。こは、此年はしめてふりぬるならん、去年の師走のはしめつかたふりてけれは、尙めつらしき春雨と人毎によろこひ、おもひなきたもともみなぬらしつれと、もへ初る草の色たに見ることのかたけれは、かい附ぬ。

ふり初る雨の惠もしら雪の下にかくろふはるのわかくさ。

こゝらのみゆきも雨にとけて、なかははけち行たるに、

春雨のくゝる雫にとく〳〵と雪よりつたふ軒のたま水。

夜の間に風おこり、雨は尙をやますふりてあけたり。

二日。夜邊より泊川の磯やに在て、雨つゝみして歸來とてよめる。

浪にけちて雪こそなけれふる雨に磯のわか草けふやもへなん。

夕より文子の御館にとひ奉れは、「夜春雨といふことをなと聞へ給ふに、

あけは又濡てうるほふいろやみん庭の草木のこのめ春雨。

あるしの君。
よひの間は降ともしらてねやのとに更て音聞軒の春雨。
三日。あしたより冴かへり、夕附行空に雪いたくふり來ぬ。この朔の日より、月浦山のかたはらに五百の阿羅漢をいとなみ建るか、まつ二百五十體の尊者の木像の、をのうちのまゝなからゑりたてゝ、假小屋にとはりをひきまはし中供養といふことをして、願主僧卽心はしめ僧侶あまたゐならひて、大般若はらみたの聲のかきりうちあけ、くりかへしとなふること、けふより、もはらそせりける。此卽心といふは、いてはの國村山郡最上川の邊、宮崎といふ邑の俚民にて高橋喜介といひて、さかんなるころ浪華にやしなはれて、あきなひのためにこかねあまた空しうなして、おやのやにふたゝひえかへることあらて此島に渡り、安きわさもかなとおもふ心ありて、二とせ三とせ蝦夷のかりたる鹿の肉をものにかへて、しゝうりとなりて世中やはしき頃、つとめてくるゝまて野山のみちいとなみありくに、雪のたへまなう頻て路はそことわきかたかりけれは、かゝる晴間をまつにはと雪ふみならし、大雪の積たる中にふしぬ。こは雪の多かる里のならひなれは、かくはしたりけるとなん。二日三日、ふとくろの人參なめつ命をのふに、死たるむくろとやおもひけん犬のうかゝひありき、からすの集て、笠の上より背もてさしつゝきぬるに、こをおひやらん聲も仄に聞へしかは、蝦夷人の行

五百羅漢の中供養

願主卽心

俗名高橋喜介

かとゝまりて、雪かいわけてたすけつれと、息のみかよへと、たゝ、なよ〳〵としておきもあからねは、弓さし出し、是を力に起よとやいふに、とりすかれと、腰の骨しみかゝまり、あたゝかなる處はむねと掌はかりにありて、いくへき人ともおほへねは、蝦夷も力なうさりて、近き磯山さとに行てしか〳〵のこととかたれは、里人あつまり來、誰ならんか、いのちもあらは、つれいきてんと苫むしろ持來て、たこしのこときもの造り、手とり足とり引上れば、こは見し人也、あなあさましのわさやとて家にいさなひ、火にあたゝめ、こゝちいかゝなと、ねもころにしけれは、からくしてよみかへりぬ。かゝる世中のさまとおもひとりて、髮をきり法師となり、すきやうおこたらす、春は西の磯の鯡のすなとりの場をめくり、夏は、ひんかしの浦〳〵にかる昆布の小屋にものこひて、五百のあらかんを建立してんと、こゝろにおこたらすほりし、あけくれと此ことにのみたつさはれと、俗性しられ、近きすけとおとしめ、たうとみもふかからねは、世にあらし、むかし死たらましかはと、ある山かけに入て、おのはしめをたちてたをれぬ。そをも人にたすけられて、ふたゝひいきぬ。それより見聞人々、たくひなき道心者也となみたおとして、阿羅漢尊一體三體となりて、やをら半にみちたりけれは、けふのくやうはあるなり。此たうとさにあひてんと、錢、よね、炭、たき木と手向て、まめやかにぬかつくを見て、

修行只管に

法の師の心の月の光よりあらはれにけりいをのあらかん。

此僧侶、むかしのをこなる心を、此すきやうにももちゐてけるならん、あら山中にのみまろ
（マヽ）
ねしてをこなふ。其ころならむ、たたう紙に書捨たりしといふ歌に、
（マヽ）

といふ二首ありと人かたりぬ。雄元をたつことは、ひとつの罪に佛の說給ふなれと、此卽心
におゐては心身みな羅漢にくゐして、そみかくたさなれは、おかしにはあらしかし。此夕、
例の日なれは文子の御館におもふとちいたりて、かねて聞へたる題「梅花厭雨。

鶯の羽風に拂ふ春雨のふるえの梅の露もしつくも。

依風知梅。

誰宿の匂ひならまし梅花かせをしるへにいさたつねてん。

題さくりて「晩鶯入霞。

梅やさく霞の衣くれふかくぬふてふ鳥のこゑ聞ゆ也。

（マヽ）鶯のねくらにかへる夕は河霞のみをに聲しつむなり。

梅香夜多。

木の本もそこと尋てよるふかく闇にまとはぬ苑の梅かゝ。
見し色も俤にして有明の月より匂ふ風の梅か香。

折蕨遇友。

人もかくおなしおもひを野邊に出てわらひ折にと友も來にけり。
初わらひをり〳〵あはぬ友も來てよむ言の葉や家つとにせん。

寄薄增戀。

わすられす思ひ增穗の花薄なひかぬ風のよすかなからも。
しの薄ほにあらはれて此頃は草の袂の露そひかたき。

五日。あしたより空晴て長閑し。大洞山の僧侶五嶽隱了せし、こたひ都にのほり轉衣し給んのこゝろほりして、けふなんふな出してむとてわかれになれは、おもふことかい付て、めくりあはんする忍を契て、

隱了禪師を送る

法の師の衣のうらの玉くしけふたゝひてらす光をや見ん。
紫の袖やなひかんみやこちは柳櫻のこのめはる風。

けふ集ひして　「松上霞。

松か枝に霞の衣香久山や春もほすてふ色をこそ見れ。

海邊霞。
行舟の行衞もしらすはや人の薩摩の迫門の霞む曙。
水鄕霞。
山本の梢もそれと水瀨河霞の淀に春風そふく。
雨中鶯。
あめもけふふるの山邊に羽ぬれて花をやいとふ鶯の聲。
關路鶯。
守人もいま起出ん鶯の關の名なのる明方のこゑ。
田家鶯。
夕まくれねくらやもとむ吳竹のふしみの田井に來鳴鶯。
山家梅。
咲梅のをり〳〵とへは春ことに馴てそ語る志賀の山里。
梅薰袖。
たひ人のさすかはおらて歸る山さらても匂ふ袖の梅かゝ。
旅宿梅。

見るまゝにくれて旅ねを菅原や伏見の里の梅の下かけ。

行路柳。

青柳のみとりの色にうちなひきさほち霞て春風そふく。

橋邊柳。

たへすたゝみとりの糸をくりかへし春風渡る青柳のはし。

故郷柳。

くりかへしむかしの色をみよしのゝ立のゝ淀の青柳のいと。

春山月。

見るかけのあかてそむかふ鏡山霞にうつる春夜の月。

春曉月。

また霞む月の色としみよしのゝ芳野の里の明方の空。

春月幽。

はまゆふのいくへか霞む月かけのよるかけてみるわかの浦なみ。

六日。辨財天の祠ある嶋に灯とるはいかにと見れは、こは龍燈といへるものにこそ侍れと、磯邊の家より出て、みなひたに、たなこゝろをすりて拜む。ほとなく火けちたれと、星のか

龍燈降る

ゝやくを、それかあらぬかと迷ふ。ほのかにふたゝひ見へたるを、

浪の上にたつのみや人ともす火の仄に霞む春の明ほの。

七日。けふは初午なれは、いなり山にまうてぬ。みかくらやかてはしまりぬ。かんぬし、はふり聲をあけてうたひ、まつ、ひとりすゝみつゝみうちて、「青陽のものゆへ囀る鶯の心風韻にして、林のなかより吹出す風を琅玕の玉と聞給ふなり、あなおもしろや。」とうたふを聞て

春は來ぬ峯の林の鶯をあなおもしろと神や聞らん。

又、「野邊のみとり、山櫻の梢をならさぬ枝までも、みな垂跡と、めをさまし給ふ。」とうたふに、

あとたるゝ神のいたらぬくまそなきすそのゝ櫻みねの白雲。

「青にきて、たくさの枝にとりかけて、」とうたふに、

いなり山御垣の杉の青にきてちらぬ手くさの枝そ久しき。

此夕文子の御館にいたれは、廣英のぬし、此ほとみやこより歸り來けるか、一手と、あるしの君の聞へ給へは、いなみかたく羽衣といふ曲をひきけるに、

たのしさよ天の羽衣まれに來て聞もたへなる宿のつまこと。

九日。下國季豊の館にあつまりて「水郷朝霞。

へたてなく匂ふ朝日の色ふかき霞よりたつ與謝の浦波。
あさまたきこき行舟も飛鳥も霞色とる志賀の海つら。

田家春雨。

軒近き田面の雪のまつとけて苗代いそく春雨の空。
降つたふ軒端の木のめ春雨に門田のわかなもへ初にけり。

浦邊春月。

めつらしな叉見んこともかたし貝拾ふ二見の春夜の月。
長閑なる春の夜床の浦風にかすめる月をはこふさゝ波。

契違約戀。

うつり行ならひもうしや色見へぬ人の心の花の契は。
かならすといひし契も僞のためしに更るひとりねそうき。

隔遠路戀。

行ふねの行衞も浪の末遠く立別にし人をこそおもへ。
おもひ寐に見へしか夢のたゝちにも覺てちさとをへたつ俤。

邂近逢戀。

契おきし言葉の露のたまさかにかゝる情を袖にこそしれ。
わすられし中と山田のひたすらにおもひしほとに逢そ嬉しき。

山家流水。
誰里に淵とやよとむかくれかの軒はをめくる山の下水。
谷水にすます心の末とめてとはなん人も淸きをそしる。

十三日。　窓前鶯。
雪螢ためしおもへと窓近く朝ゐいさめて鶯の鳴。

寄蛙戀。
あふことはなみのいつこに水隱て鳴や蛙もおなし思に。

十八日。　竹林鶯。
時しらぬ竹のはやしのおくまても春としなひく鶯の聲。

水邊梅。
行水の岸邊のなみの紅に匂ふこそめの梅盛なる。

寄貝戀。
逢事も浪のかけたる簾貝いつか人目のひまもとめてん。

廿一日。文子御方、季豐ぬし、敬武ぬし、椎飯亭に集ひて歌よみし給ふ。まつ人々とゝもに

社頭梅。

神垣の一夜の松のはつかにも咲初しより匂ふ梅か枝。

題さくりて、　遠山春月。

長閑しな遠山まゆのほのかにも見へてそ霞む春夜の月。

おほろなる影あらはれて春夜の月にまつしる遠の山松。

花下送日。

芳野山おくある色にわけくれてあかなくけふも花の下ふし。

言の葉の色香もそひてきのふけふ花に圓居の友そ多かる。

蛙聲幽。

山かけにかくろふ田井にすむ蛙そこはかさなく夕くれの聲。

蘋も浪も寄る瀨にみかくれてめかる蛙の聲仄なる。

澤杜若。

澤の邊の花のかほよの俤をうつせる水やかゝみなるらん。

かきつはた咲るこひちのそこまてもこき紫の深き澤水。

藤埋松。
こことはにかけてやみなん松か枝のいろさへ匂ふ花の藤なみ。
ふちなみのかゝれる松のふかみとりこき紫の色にあせ行。
互忍戀。
世の人めおなし心にしのふ山ふかきおもひのおくもしられす。
人もかくしのふの草の露斗もれぬや深き根さしなるらん。
難忘戀。
うけひかぬ戀の例をみそき川いくせの浪のかけてわすれぬ。
一めみし人はたれともしら糸の染てみたるゝ身をいかゝせん。
旅宿山風。
とりかねを聞ぬ山路の旅ねにも夢はあらしのさそふつれなさ。
旅寐する夜半の枕の山かせに夢もむすはぬ曉のそら。
廿二日。あらかんの供養けふにをはりぬ。
廿三日。季豊のぬしにとふらはれて、「矢路柳繁といふことを、おなしむしろに、
春風の吹もわけすはありとたにしらし柳の茂るかけ道。

青柳の糸うちたれて來る人の行方まとふ川そひの道。

鶯鳴き遊る

廿四日。あしたより空冴て、ひるより雪ふり來けり。この頃けちたる野邊の、ましろにつもりぬ。たかきあしたふみて、からくしてすま子の館にいたれは、こにかふ鶯の聲おかし、聞てなとあれと、さらになかさりけれは、

聞人の心も春もあさきとやうとみて鳴ぬ宿のうくひす。

あるし、外よりのこをもていたり其鳥のかけうつし見すれは、やをら一聲さへつるに、

言の葉の色しあらねは鶯の心の花をそふる一こゑ。

廿五日。けふ彼岸にいたるの日なから、いたく冴へぬるなとかいて季豊のもとより、

解初しかのきしなみの立かへり氷るも寒き山河の水。

返し。

かの岸にいたらぬ春や山河の浪も氷てよるの寒けさ。

淡雪ふりて

廿六日。此ころけちたる庭に、よへより太雪のふりて、やゝもへ出しわか草の色も、なか〳〵におかしき梢の花と見てんと、こゝろやりに窓おし明てむかへは、文子御方よりふみ來けり。

ちらぬ間に人もとへかし花おそき庭の梢につもるあは雪。

といふ歌の御返し。

あは雪はけなはけなゝんいつまでもちらぬこと葉の花を見てまし。

けふの兼題とて三首をよみる。「樵路春草。

雪の中に山賤かよるしはくも通路しるく萌るわかくさ。

遠山春月。

をちかたにおほふ霞の衣手の山のはもれぬ春夜の月。

寄塵戀。

別にし夜半より床にゐるちりも拂はし人の形見とおもへは。

題さくりて「行路聞鶯。

つかれしをかことになして旅ねせん鶯來鳴路のへの宿。

おもふ友待てや聞ん鶯の人くと告る山のかけみち。

山路殘雪。

春といへとまた麻衣の袖寒く雪ふみ分て木曾の山道。

はる來れと日數いくかもあらち山また雪わけて越のたひ人。

梅間雪。

咲ならふ花のけちめも見へわかて雪より匂ふそのゝ梅か枝。

日にそひてけなくは雪を梅か枝の花もひとつにはるふかく見ん。

寄山祈戀。

末かけしちきりを神にいのらなんわか中山の松をためしに。

はつせ山はけしかりける例にはいのらぬものを人のつれなさ。

寄岸戀。

河きしにしからむ竹の夜をかれてあはぬ此身の朽んとやする。

しつめとや身は逢事もかたきしに寄るせのなみの音斗して。

雨中緑竹。

軒つたふ雨のふるやのしのふよりみとりはふかし庭のくれ竹。

糸水のかゝる小枝のふしなひきぬれて色そふ軒のくれ竹。

廿七日。あしたより、うはそくの貝ふきてけるは、辨財天を、去年より彩奉りて阿吽寺にをさめ奉りたるか、此巳のとき斗其島にもり奉るとて、幡いろ〳〵おしたて、みこしにて送り奉る。

廿八日。五首をよめる。　「梅香入閨。

木のもとにぬるよと見しは夢なれや覺る枕の風の梅かゝ。
翠柳誰家。
青柳のみどりもふかく植なしてあるしゆかしき河の邊の宿。
關路春月。
浪遠くあはち嶋やま霞む夜の月になかめをすまのせきもり。
寄歸雁戀。
うはの空に春行雁を見てもしれわすれぬ秋の契ある世と。
河水久澄。
松の葉のちりたにすへす世々ふかく露もにごらぬ山川の水。
當坐の題とりて「夕歸雁。
夕まぐれ宿もさだめすみねいくへ越路やいそぐ雁の一行。
春霞みちやまどふと夕月夜まちえて空に雁の行らん。
遙見春駒。
いはへすはそこともしらし春霞たちのゝ駒のあさる遠方。
浪速かたつのぐむあしのめもはるに見へて汀にあさる春こま。

燒野雉子。

秋ならてつはさ露けく子をおもふきゝす鳴也荻のやけ原。

賴むかけあらぬ薄のやけ原にほにあらはれてきゝす鳴也。

行路雲雀。

ゆきかひの人間をやまつはる〳〵とあかる雲雀の聲の落こぬ。

夕ひはりおつるひろ野の末遠み行衞もしらす迷ふたひ人。

寄芝戀。

行末のいかにまとはんみち芝のふみ初しよりしけるおもひは。

わけしより袖かつぬれて路しはの露わすられす人のおもかけ。

雨中待友。

ふりつたふ軒の玉水とく〳〵と友そまたるゝ夕くれの空。

雨の夜にぬれて物おもふふる里をかたりなくさむいさ友もかな。

潤二月朔のあけたつ空に、雨の露はかりふりてさむけれは、

棹ひめの霞の衣袖寒しけふ如月をいや重ねても。

二日。あしたより晴たり。季豊のぬしとふらひ來まして、いさ、れいのと題かいつけて、とくく〳〵と聞へしかは、まつ、　春のあしたといふことを、

たちなひく朝けの烟いくむすひかすめる里やにきはひぬらん。

大空をおほふ霞の袖もれて匂ふ朝日のいつる山のは。

山春雨。

谷川の水や增らん春雨のやます降けつみねのしら雪。

日にそひてめくまん色を三芳野の山の櫻のこのめ春雨。

河春雨。

絶葉のにしきなかれしたつた河春は綾をる雨のしつけさ。

大井河花の雫の袖ならんぬれてを雨にくたす筏し。

野遊。

樂しさよ野邊の芝生にくりかへし空にもあそふ糸竹の聲。

春の宿は霞のそことおもふとちくるゝ野原に鶯のなく。

待花。

まつ人の心の色はほころひて花はまた見ぬ山のした庵。

春あさみ花のしら雲またとけぬ雪に心のまよふ山ふみ。

初花。

みよし野の奥ある色やならひけんなへては咲ぬ花の一本。

紅に見へしは雪とけふさけと殘るつほみの色そ多かる。

河内國二宮に奉る歌

三日。けふの集ひなし。ひるより雨しく〳〵とふりぬ。かうちの國二宮法樂の和歌とて、人のいへるによめる。　毎山有春。

寄るなみの色に霞て春ふかく連る山やいくへなるらん。

早蕨。

麓にはまた萌なくに春の日のをりにあひたるみねのさわらひ。

戀。

こひちよりつもらん末のおもひとはまつ知られぬる戀の山口。

雨のつれ〳〵に「林下春雨といふことを、

春雨の古枝の花や惠かと濡てそ分る杜の下路。

晴行まゝに「春山といへることをなかめたり。

花の色霞の色にみよしのゝ山のしら雲うつろひにけり。

五日。夜更行空に霙ふりぬ。

六日。夜邊雪のいたく降たるけにやあらん、遠近の山みなしろう、ふたゝひ冬を見きと人あきれたるに、おもひしことをひとりこちぬ。

咲頃はまた遠山のみね麓花と見よとや雪のふるらし。

此日文子の御館に集ひて十首の題を得て「曉天春月。

あけくらの光しられて春夜の月は朧に猶かすむらん。

夜をのこす影は小倉の山のはにいま入あやの月そかすめる。

河春月。

岸浪のそこともしらぬ音はして月は朧によるの川隈。

かけふかく月をうつして行水に霞なかるゝ春の川波。

遠村春曙。

遠方の里のなかめも春ならん槇の外山の明ほのゝ空。

海士の子もいま起出ん遠かたの磯やの窓のあけ方の空。

野春雨。

宮城野の木の下くらし春雨の古枝の萩やけふめくむらん。
春雨の惠しられてむさしのゝ草はみなからもへ初にけり。

社頭春雨。

ときわなるかけもますかに春雨のふるの神杉濡て色こき。
榊葉につゆのしら玉かけそへむ神の御室の春雨の空。

戸外春雨。

花の香はいつ吹いれん朝戸明る袖また寒き軒の春風。
青柳の糸くり返し長き日を柴の網戸に春風そふく。

すたれをへたてたる戀。

庭の面に消せぬ雪の山もかなこすをかゝけん人を見てまし。
ひまとめて又いつか見ん玉簾かけてわすれぬ人の俤。

はしめはおもはて後におもふ戀。

もへ初しときははつかの思草茂れる袖や露に朽なん。
萍草のうきといとひし水ふかくさそはれてなと人の戀しき。

名所杣。

分初し誰かをのゝえや年をへて朽木の杣の谷の埋木。

淋しさは正木のつなやたのむらん暮て泉の杣木引也。

浪洗石苔。

苺衣あらふ岸邊のなみたかく岩ほにかゝる山河の水。

さゝれ石の幾世かへつる苔衣きし邊の浪のかけて久しき。

まだ冬心地

七日。あさ霜冷く、西たば風といふか吹來ていと寒く、梅さくらをはしめ、木々のこすゑもいさしろうなひきたるを見るに、いまた、冬のこゝちいさゝかも離す。窓のもとに在て記しぬ。

春もまた朝霜ふかし花の枝はいつを惠て咲んとすらん。

祖英師の死

いてはの國最上川の邊なる祖英といふ老上人の、此松前のひんかしの磯、あらやといふところに、としころすみて庵さらす、ほくゑ經のみすして、二日の明かた、たんさかうしやうして身まかりけるとなん。此せしに、をり〳〵かたらひてけることなとおもへは、なみたこほれて、

すましてし心の月のあきらけくよもつたとらす人の行らん。

八日。かうちの二宮御法樂の題にてよめる。「樵路躑躅「思不言志「海路。

躑躅さく小阪にしはし休らひて手折や唄ふ遠の柴人。
人しらすこひちはむねに陸奥のいはて忍のやまんとやする。
海原や道ある御世はしほかなふ浪にまかする船のしつけさ。
磯館の賤子、うちとの神にまうて奉らんのこゝろほりして、とし頃のねかひ汐瀬にみちてけるとて、五瀬の國にと舟出しける。うまのはなむけして、
あさな夕袖やぬらさむふみもまたならはぬ旅の道芝の露。
別路に萌る蕨も手を折てこゝにかへさの日をまたれぬる。
あかふる郷に、ふみあつらへてんとてかい入ぬ。
人とはゝつかろのおくの道遠みえそかへらぬとことつてゝまし。
十日。たよりあらは、ふみ給りてなと賤子のかいのこしけるに、さちなる舟の其方に行は、しはし休らふ旅館まていひやる。

伊勢詣の人に

五十鈴川きよき汀にぬさとりて祓ふ心やいかにすむらん。
神路山玉くしの葉の露茂き惠を袖にぬれてうくらん。
十二日。あやこの御方より、「あし分小舟さはることあれは、あすの集ひ、けふにおもひさためて」なと聞へ給ふ、御ふみ給はりしかは、

もへぬ間に岸邊こき出ん難波かた蘆分をふねさはり渚に。

ある山賤のめの、つと、てつみてける、みつ葉てふ菜をかたまにもりて、文子の御館にまいらするとき、

こやおくるわかなもとみもつみそへて三葉よつはつ殿榮へなん。

午はかり、かの館の圓居に、「八重櫻。

立渡るたかねの雲も八重櫻同し梢の色に匂へる。

遠方にかさなる山の八重櫻盛を殘る雪とやは見む。

雨中待花。

晴やらぬなかめも嬉しきのふけふ濡て梢の花やさかなん。

春雨の軒のいと水くり返し庭の櫻の惠むとやまつ。

山寒花遲。

やまかけの雪も氷もまた深く冴や解ぬ花のしたひも。

咲花のいろとしみねの雪にまたさへて埜の木々もめくます。

霞中尋花。

心なく外山の霞はれやらて咲や尾上の花そしられぬ。

あはれ今花のしら雲ゐる方は霞む山路のいつこなるらん。

花半開。

日をへなは盛をやみんたのしさも半に匂ふ花の一本。日数へて(マヽ)

下津枝はきのふに咲て山櫻また末遠き春そしらるゝ。

山花未遍。

筑波山このもかのもに色ふかくかゝれとうすき花のしら雲。

芳の山おくある色の見へ初て麓にかゝる花のしら雲。

庭花盛久。

よそめには消せぬ雪の色と見むちらて日をふる庭の櫻を。

誰うへてむかしもかくやなかめけん庭の老木の花そ久しき。

朝見花。

あさ露の風にこほるゝ色までも袂に匂ふ花のした庵。

乙女子かよそふつま戸の朝かゝみむかふにあかし花をうつして。

遠近見花。

山かせのたへすしふけど遠近にさそはぬ雲や櫻なるらん。

とやまにはいろもわかれて遠方の高ねの花や雲とたどらむ。

十三日。うなの上うら〳〵と長閑に見やらるれど、海越のやまは岩城山をはじめ、雪いとしろ〳〵と殘りけるを、

海越望山

都可呂路や外かはま風また冴へてかすむ高根に雪のつもれる。

十四日。きのふのことに晴たり。人來りて、いざ霞る野邊見にいきてんといさなはれて、季豐のぬし、をさなきうなひめなど、あまたぐしてかたらひ、深きやま〳〵谷かげに、雲雀の鳴たりけるをおかしなど聞つゝ、季豐のいへり。

春淺き野邊に

うちむれて行〳〵野邊の末遠みあかる雲雀の聲もはるけさ。

となんありけるを聞て、われもおなじう。

山かけにまた容遠く鳴雲雀あかるに谷のふかさをぞしる。

ふりあふくたかねより北川時房の、老の身のほけ〳〵しう、あゆみとくもまかせしど、あら駒にむちして、おなしむしろに遊ひてんと、たゞちに來つきぬ。みちもさりあへず、やま賤の女あまた行か、岡の邊のやけはらに、みたりよたり柴とり集め、ねりそにゆひつかね休らひかたらふか、腰の火うちとりいたし、ほくすに火うちて、去年より馬のまりおけるふるくその、雪霜にしみくちて日にてりかはらかなるをひろひ、萩薄の枯殘りたるを折そへて吹立

れは、時の間にけふりたかうのほり、めら〳〵ともゆる。多くさしくへて、これにまとゐて、ものくふに、いさ、そのたき火にしはし便船申さんと時房戲をいへるに、山賤ほゝゑみつゝ、さすなへに酒あたゝめて、去年見たる、いと瀧といふおもしろき處ちかうのそんて、季豐のいはく、

絲瀧を望む

岩間より落來る瀧のしら糸を吹なみたしそ谷のした風。

時房の翁、ひかめなから、むかしみしおほへありとて、

雪消の山口しるくくり出す流も細き瀧のしらいと。

と聞へしかは、おなしうおもひつゝけたり。

岩かねにかゝるなかめの又たくひあらしのむすふ瀧のしら糸。

かたくり花こだす

あなきたな、けかれたる火にものしてやはと、みなけちやり、うち出て附竹にうつし湯わかして、かれゐけひらきをるに女のわらは、これ、かたくりのはな見たまへと、こたすといふものにつみ入て來けり。

樂しさよかゝるまとゐにあふことはかたこ花咲春の山かけ。

時房のむまこ世武子、いまたをさなきか、人のもたる筆しはしかしたまへとて、かい捨たるを見れは、

玉子が池の傳説

醫師玄伯と妻玉子

なゝあれ

梅櫻桃花

山のおくつたひて見れは瀧もある流るゝ瀧を糸たきといふ。

柴人の來て、芝生にゐならひたるにましりて人々の云、この山のあなたならん玉子か池といふあり。いつならん玄伯といふくすしの、とし老たるありて、あかめ玉子とて年のやう〳〵老行をいとひ、めしつかふ女の、みめことからよきにこゝろうつり、しのひ〳〵ものいふことのあらはれても、此玉女、露ねたきこゝろももたて、あけくれ、あねよ〳〵貴き人のとしたかきめをなゝといひ、貴き賤しき、なへて年わかきめをあれといへりと、よひむつひつれと、こゝろに、ものやおもひたりけむ、たましゐかけのことく通ひ、玉子おく山に在て、つちをうかち池をほりぬ。柴人見あやしみて、山にてしか〳〵のことありつるはいかに、何の料ならんとさへは、けんはく、いな、さること侍らし、家をさらす、朝夕ありきといらふ。さあらは狐狸のしたるわさにこそあめれとさためつれと、山賤らは、此女にたひ〳〵逢ことあれは、人毎にいひあさみぬ。ほとなう此嫗身まかりて、おく山の其池にたましゐやとゝめけん。今も任けるならん、池の邊に、衣ほしたることありきなと語るを聞つゝ、をさなき女童おひやかされて、いさ歸らんと〳〵と、おちて家路にいそけは、夕くれちかうなりて家に歸りつきぬ。

十六日。下國季盈のやに、浪速紅梅、奥州南殿の櫻、緋桃、なにくれと、とく盛なるか、さゝやかの枝をましへ、おもしろかりけれは、

梅さくらいろこきませてみちとせの春しるもゝの花咲にけり。

十七日。雨ふり、夕の月猶かすみたり。けふ文子の御館に、季豊、敬武、俊子なと集ひて當座せり。「花未飽。

咲しより花にめかれぬしはしたに見ては心の色うつるまて。

麓より咲みよし野のおくふかく分れと花にあく時のなき。

對花思昔。

むかし誰こゝになかめし言の葉の色さへ忍ふ花のしたかけ。

咲にほふ花にむかしの春とはんけふにも増るいろしありやと。

近花。

しら雲にまかはぬ色を軒ちかく植て砌の花咲にけり。

おもふさち軒端の花にとひてましゝらぬ太山の花はさくとも。

月映花。

かすむ夜の月の色とし嶺ふもと花も朧の影ふかき空。

春夜の月にうつりて照もせす曇もはてぬ花の木のもと。

雨催花。

ふり來なは雫にぬれて花みんと木のもとさらぬ雨もよの空。
雨ふらはいさ立ぬれて花の枝をつたふ雫に袖や匂はん。

花帶露。

人しらす夜のまに雨や過ぬらん色そふ花の露そ多かる。
群鳥の求食羽風に咲花の露なこほしそちらまくもおし。

分花入山。

みねの雲埜の雪の色わきて入るかたふかくみよしのゝ山。
咲つゝく花の中行柴人のいろ〳〵衣そてやにほはん。

花勝前年。

くり返し花や見てまし去年よりも正木のかつら長き盛を。
行末の榮しられて梅花去年見しよりも色の増れは。

初鯡

文子のおほん館のまさなことに、あさらけき鯡のいをし給ふは、十二日の夜セタナキといふ西の蝦夷國にて群來たるを、其邊より、くにの守に奉りたるを、わかち給はりしなとかたり給ふ。こは、じかんのあきたるころほひに、初にしの、くきたるならん。ことしは、おほくら

豐漁ならん

鯡（天註――おほくら鯡のこと、太田山の記行に精しうのせたり。）も、ふたつみつあかりぬ。此、むとせ七させ聞かさりつることを

時寒

きけは、すなとりも多からんと人毎によろこひたり。寒あけて、みそかになるを餘寒とさため、餘寒過て三十日を時寒とて、この時寒をへて鯡の群來るとそ、漁人のいひける。

十八日。宵うち過るころならん雨そほふりけるに、かゝみのみねならんたへまつ多く見へたるは、わかきはらからの男、樵とらんと山に入しかと、行衛さらにしれされは、尋ねもとめわけ入る人とそ、見し人かたりぬ。

冬蘇る

十九日。宵よりの雨をやみ霙ふり、又雪となり更行まゝに、いやつもるにやと、寒き窓を開きともしひてらせは、雪いとふかし。

花をまつ衣きさらき重ねてもまた空寒く泡雪のふる。

二十日。あさ戸明れは、軒をはしめ遠近のやね、木立、みなましろに雪ふりて、ふたゝひ冬の來りしなと、ほたさしくへてかたらふ窓に見やれは、又ふり來けるに、おかしうひとりこたれて、

きさらきの雪は衣にみちのくのおくの山かけいや寒くして。

季豐のぬしのもとよりとて、ふみ來けり。

見るに猶さかなん花を松杉の枝にも葉にも積る泡雪。

まつ花の俤と見て淡雪のきゆるをちると嘸おしむらん。

といふ歌よみて聞へたるに返し。

人もかく花とや迷ふ松杉の梢に雪のふると見なから。

あは雪のけぬるを散とおしむやと匂ふ心の花そ嬉しき。

晝になりて霰降來たるころ、文子のおほんもとへ、ふみにかい入て、

春はまた嵐を寒み花はいつ咲てとはれん雪の山かけ。

花はいつ袖にみたるゝいろやみんあられを誘ふ春の山かせ。

かうちの國二の宮の法樂の題に、「杜新樹。

花のかのまた殘るかにわか葉さすみとりも薄き衣手の森。

薄暮雲。

しら雲のかゝるたかね宿しめて住や夕けの煙たつ也。

旅曉。

くさ枕かりねの露の起出て行袖ぬらす曉の空。

廿三日。かうちの國二の宮法樂。「樗。

治れる御世にあふちの花盛露もちらさぬ風の閑けさ。

木の本に寄れは袂のかつぬれぬ雨にあふちの露の涼しさ。

氷室。

氷室山みねに過行雲までもよそめ涼しき水無月の空。

麓より秋をおほへてひむろ山分れは冬を嶺の涼しさ。

岡篠。

たへすたゝ風のゆきゝの岡の邊に茂る小笹の露もたまらす。

わけ濡て誰通ひけん見わたしの岡に露けき篠の中路。

廿六日。文子の御館にて當坐、花の歌十首。「岡花。

櫻花匂ふかきりはうち集ひふみてならしの岡のかけ草。

來る人の花の言の葉匂ふまて咲て岡邊の宿そとはるゝ。

林花。

雲とのみ峯の林の櫻花折て家路に歸る柴人。

人しらぬふかき林のおくまても春はとはるゝ花の下いほ。

關花。

守人や心ゆるさんあふ阪の關のとやまの花のさかりは。

行かひは見るにとゝめて關守のまかせぬ風や花にいさはん。

花影寫水。

匂ひさへ木の下深き川水に心やうつす花のいろくす。

またちらぬ色そなかるゝ芳野河栙の櫻かけをうつして。

河邊花。

下つ枝は棹にさはらん心して花にはくたせ春のいかたし。

しら浪の色とし見へて行水の岸邊にたてる花の一もと。

海邊花。

なれも又樂しかるらん花の咲磯山陰にかもめ群居て。

磯近く網の泛なはくりかへし花にひかるゝ春の海士人。

汀花。

海士人は心なきさの花の色うつるもしらすよそに見るらん。

岸による浪もひとつに又たくひ渚の櫻色のえならぬ。

泊花。

岸に咲花にうかれて舟人の泊る湊を漕も離す。

磯山に波のよるみしいろよりも增る泊の花のあけほの。

都花。

都人花の莚に圓居して詞のいろやそへて見るらむ。

くり返し柳の糸の長き日を都や花のにしきをるらん。

古寺花。

花の枝にいろも匂ひもこもりくの泊瀬の櫻けふさかりなる。

心あれや軒はににほふ花の枝をおらて手向る春の山寺。

樒つむ袖や匂はん法の師の曉起の花のしたつゆ。

小廿九日。河内の二宮法樂の題にて三首をよめる。「薄風「寄露戀「橋。

靜なる風の行衞をみちの邊に吹としられてなひく小薄。

風そよくをはなを分て行袖に濡ぬ浪よる野邊の中路。

たへすたゝぬれて袂におく露の身はきへかへりものをこそおもへ。

身は終に消やはてなん見しよりも露忘られす物思ひして。

のかれ住人やかけけんあと見へてまた世を渡る谷の柴はし。

世に出てつかへし人やわたしけむ朽て小橋の殘る山かけ。

文子の御館にて當座和歌二十首、花をよめる。「水郷花。

咲花のいつもなかれて行水に心やうつす河つらのさと。

鹽屋花。

月ならて曇るとやみんしほかまの煙に霞む花の一本。

草庵花。

櫻咲萱か軒端にみよし野の花は盛さ先しられぬる。

山家花。

花見んとおもひ入にし山かけの軒はの櫻さき初にけり。

田家花。

せき入るなはしろ水もいろふかくうつる門田の花咲にけり。

閑居花。

軒近く花しさかすは猶ふかく身をおく山の春にのかれん。（のかくれ家（マヽ））

隣家花。

とひむつふ心しりてや中垣を越て隣の花そ匂へる。

園中花。

さけはちり散れはあとより咲つきて移色見ぬ春の花その。

庭上花。

峯の雲麓の雪とたゝるまに軒はの櫻咲初にけり。

折花。

人もかく折てかさしのあとしるくまたちり初ぬ花そこほるゝ。

花交松。

ときはなる松のはやまに咲ましる花にもちらぬ色をこそ見れ。

杉間花。

櫻花咲ていくかを杉の葉の色にかくれて三輪の山本。

竹間花。

咲花にさはらはちらん春風の吹なゝひけそのゝくれ竹。（はの枝に(マヽ)）

花間鶯。

盛なるいろ音を四方に匂はせて花より花にうつるうくひす。

花處々。

筑波峯の盛やいかにかゝるらんこのもかのもの花の白雲。

依花待人。

誰方の盛に心うつりてや契し人の花にさひ來ぬ。

花留人。

柴人も心ありてや行やらてしはしたゝすむ花のしたみち。

花留行客。

この宿の外面の花にうち集ひゆかて休ふ人そ多かる。

花下逢友。

しる知らぬ年に稀なる人も來てかたるは樂し花のしたかけ。

花忘老。

かくてこそちとせをもへめ老の阪身のくるしさも花にわすれて。

頭插花。

見し花のちらまくもおし折かへるかさしの枝に春風そ吹。

手向花。

咲しより神も樂しとみしめ繩かけて手向の花のしらゆふ。

花麻。

神垣にちらぬためしを祈るさへ花にはいとふぬさの追風。

花鏡。
　きのふよりけふはいろかのますかゝみうつるも深き花の下みち。
花爲久友。
　いく春も花はちとせの友垣と植て契し宿そ久しき。

やよひ朔のあした、はしめて鶯の溪の戸いつるは、こにすまぬ初音のめつらしう聞つゝをれは、北川菅子の來て、
　花も木もしほみてあれと鶯の聲斗にて梅もひらかす。
とかいつけぬ。其こゝろも、をさなきうなひの歌なからおかしけれは、かたはらのさうしにおして、すしつゝ人のわらふに猶鶯の鳴は、
　たをやめの言葉の花やめつるらん猶軒さらぬ鶯の聲。
二日。あしたの間雨ふり、ひるの空晴たり。
三日。けふのためしの歌とて、
　限なき御世はちよともいは波にまかせてめくる花のさかつき。

ひかたの風
しまきの風

四日。夜半より、ひかた（申酉のあはひよりおこる）あららかに、雨ませにふいて、いさゝかのをやみもなう、朝戸けしき斗明れは、西の窓の中より、しまきいとつよく侍ると音信ぬ。「浪のよるいらこか崎を渡る舟はやこきわたせしまきもぞしる。」此歌は源國信のうしの歌也。しまきとは凡の國にて、時のまに、とくはけしう吹來る、はやちのやうなるをいへり。又志摩の國のはま風をいふといへるは、この歌のこゝろなとよりもいふか。又島根吹風、嶋山おろしなとをも、ところなるをいふ也。伊良虞かさきは志摩の國といへと、三河國に在れは、かゝることすしつゝ、いとゝ、國の空いかならんとひとりこたれて、

朝戸明るま袖も濡てふる郷をかゝるしまきに思ひ出にけり。

難船救はんとて

こゝらの泊ふね浪にはなたれ、破るへうたゝよひ、岩にくたかん、あな、たへかたとたちゐさはきて、この舳つな、あなる巖のつらにかけなは、もゝのこかねいたさん。はや誰にても、つなきてあれとよはふに、小舟にのりたる男、われ命にかへて、かねまうけしてんと、衣ぬきやり、あら波にとひ入、綱ひきやりてけるに、たゝちに、しきなみいや重りて、うなの底にいりき。あな、いかゝせんと見れとかひなう、うたかたの泡と消ぬるにやあらん。ふねあまたしてこきめくり、たつねても、なかりけるとか。

一元の三年忌に

五日。よした一元の、三とせになりけるたままつりしけるとて、其をこなひあれは、なきた

まのあるしのめこのもとに、よみてつかはし侍る。

折袖をいかにぬらさんあるしなく花をちとせの春の手向に。

六日。かうちの二宮法樂の題にて、冬歌三首。「秋夕「河朝霧「深夜戀。

秋風のさそふともなく草の露袖にしほるゝ夕くれのそら。

とる棹の音斗して朝またき霧の中行淀の川をさ。

ひとりのみ寐よとのかねて契らすは恨て夜半の袖はぬらさし。

ふみの來たるを見れは、此はなにそふと書て、

まつ人の心をしはしなくさめてまたきにおくる花のひとえた。

とありて、いまた咲ぬ櫻贈られしかは返し。

あすは猶咲いろそへん言の葉の匂も深き花の一枝。

文子の御館に集ひて花の當座せり、二十首。「寄琴花。

こゝろあれや詞に通ふ風もなみ琴のをのへの玉のさかりは。

寄枕花。

見し夢の枕の山の花盛覺てかひある春の木のもと。

寄筏花。

いかはかり咲花見きとこふひまも浪の早瀬に下る筏士。

寄花燈。

こゝろある宿やそむけぬ燈の光に見ゆる花のひともと。

寄花夢。

さめて又おもひあはせん花もかな夢路にわくとみよしのゝ山。

花莚。

花にあかぬなかめをいまや菅むしろしきしのはるゝ太芳野のやま。

花便。

人もいま馬におくらしくらま山花は盛と告てかたれは。

花鐘。

咲花にうかれやすらん心ありていとふかをそき入逢のかね。

花軒稀。

みねの雲麓の雪と春風の吹のこしたる花の一本。

朝惜花。

こゝろあらはめてこし花のこのねぬる朝けの風やよきてふかなん。

夕惜花。
　櫻かり夕は増る花の色にいさはれてふく春の山かせ。
旅行花。
　こよひ又いつこの花に行くれむ山路めかれぬ春のたひ人。
心有花。
　しら雲のかさなる色も咲さ見て花にたさらぬ山のはそなき。
花樹如垣。
　色に香にこゝろとゝめて咲しより引人多き花のそてかき。
花有遲速。
　また冴へて雪のけぬるもおそくとく花の色見る春の山かけ。
花非一樹。
　山風のふきもさそはす此ころは四方に重る花の白雲。
花時心不靜。
　しつかなるおもひこそせね花にのみちりて心のこゝにあらねは。
寄花神祇。

みしめ繩かけて幾春神も嘸花に科戶の風やいとはん。

寄花釋敎。

すましてし心も花にそめ紙の聲やたゆまん春の山寺。

花契千年。

としことに猶色そへて櫻花かくてやちよの春をちきらん。

七日。文子の御方より、人のつとて折贈りたる花をわかちて、又わかかたに給ふとてふみあり。おくに、

ことかたの盛もとめて贈也庭にはまたき梅もさくらも。

といふ歌に、梅櫻のあへかなる枝ともなれは、こを見つゝ、

梅さくら言葉の色も折そへて花なき宿に匂ふ嬉しさ。

八日。例の日也。河内の法樂の和歌、冬歌三首。「初冬。

ふゆの來るしるしを嶺の松ひと木殘る色さへ時雨初ぬる。

月照網代。

月冴る宇治の川波寄る氷魚も顯れ渡るせゝのあしろ木。

屋上聞霰。

冴るよはいねもつかれぬ手枕に夢はあられの降り頻也。

當坐廿五首。「野遊。

なかき日をむれてくるゝもしらま弓心ひくまの野邊の樂しさ。

春日鷹狩。

木のもとはいとへたか人たはなさは羽風に花のちりなんもおし。

遊絲。

長閑さよ春のいとゆふくりかへし心も空に遊ふたのしさ。

遲日。

袖の露ひるにあふきておき出しをきのふにたとる春の日長さ。

桃花曝錦。

仙人の栖家や桃の花かつらかけて錦をさらすひとむら。

梨花。

咲にけりこや春ふかくなる梨のちるさこそ見れおふの浦なみ。

簾外燕。

つはくらめあしのすたれのひまとめて浪速の春やかけて忘れぬ。

野亭菫。

人も嘸な野をなつかしみすくれ（マヽ）草つまて軒はにめくる一家。

夕蛙。

山吹の色こそ見へね川岸に咲と蛙のくれふかき聲。

雨後苗代。

（マヽ）雨もいま春の山田にぬれてみとりのもゆるなはしろ。

河邊苗代。

やま川の水せき入てなはしろのいともも浪に袖やぬらさん。

躑躅夾路。

行袖に露やこほれんつゝちはら仄につゝく野邊の中路。

水邊躑躅。

やま川の岸に咲さもしらつゝし盛は波の色にまかひて。

橋杜若。

やつはしのくもてあやうくかきつはた見るにたゝすむ人そ多かる。

杜若繞石。

かきつはた盛のいろにいはかねをめくれる水もありとしられす。

欵冬(マヽ)露繁。

あさな夕風のちらさて其まゝに露も八重なる山吹の花。

折欵冬(マヽ)。

あかす猶つとに手折ていひしらぬいろをこそ見れ山吹の花。

瀧下欵冬(マヽ)。

たきなみの色もこかねの玉ちるさ見へてきし邊に咲る山吹。

隣家欵冬(マヽ)。

垣の外のあるしをとへとありそともこたへぬ色にさけるやまふき。

里欵冬(マヽ)。

一枝はつとにもこはめ遠方の里の垣のやまふきの花。

藤花始綻。

春もやゝふかき山路の藤かつら綻かゝる色を社見れ。

岡藤。

ふちの花盛をめてゝ行かひのふみこそならせ岡のかけくさ。

路藤。

行人の路さまたけに藤かつらかゝる盛の色やめつらん。

扉藤。

人しらぬ草のとほそのすみかまてかゝるやとはん花の藤波。

社頭藤。

ちとせへて花開まてと藤なみをかけて宮居の松の木高き。

九日。夜邊の雨餘波なう晴て、あま神のみまへの梅櫻、けふにひもとけておかしけれは、

あま神の花

めつらしと神もみや居の軒近く花のにしきのかけてかしこき。

十日。阿吽寺の櫻さかりなるを朝とく見つゝをれは、なにくれの梢より鶯のうつり來て、此花の枝にあかす鳴を、尚おかしと見やりてなかめもいや增るに、老たる女のすゝすりなから、あはれ一枝をとひたにいへは、ほくゑきやうよむほうしのかへり見て、いまた佛にも奉らぬ花を、いかてかおらん、心なしと、さらにゆるすけしきもなけれは、とうめは、ぬかのみつき、せになけて去りぬ。いよゝ鶯のおもしろうさへつるに、

阿吽寺の花

あか棚におらて手向る花の枝になれもみのりを唱ふ鶯。

十一日。神の御前の花を、人の折こゝをりく〳〵にやありけん、ぬすみたる枝のこなたかなた

花盗人に

に見へしかは、いかゝはせんと、板にかいて此花のもとに立たる歌。

神も嘸おしむ心のいちしるくみへて注連ゆふはなの一もと。

ある人の、はるかなる島つ蝦蛦人のつとて、大なる鰒の珠をくれたり。「大海の水底てらすあはひたま尋てとらん風な吹こそ。」といふ歌あり。淸らなるとめつれは、さなるにや、多かる中にも、かゝる光さやかなるは世にまれなりなと、水のなかるゝことに、「こかねをもいひけつ口の玉みかきなして、ふたゝひとて行に、

ゑその海の鮑の貝のたまさかにもとめし人のつとそ嬉しき。

といふ歌よみしをやれは、此たまこそとて、よみもをはらすもていにけり。

十二日。北川すが子、あかいろはのもとより此花まいりつると、紅梅枝にむすひたるを見れは、

宿に咲そのゝ梅か枝けふ折て君に見せはや花ちらぬまに。

といふは鄧美子の歌也。此返しに、

ことの葉もちらさてやみん梅花盛を贈るけふの嬉しさ。

十三日。かうちの國二宮法樂の和歌も、けふの二首にをはりぬ。「神樂「巖苔。

梓弓眞弓槻弓うち集ひうたふ庭燎の本末のこゑ。

さゝれ石のむかしをかけてうこきなき巖の苺やいくへなるらん。

落花の當坐の歌。　「花易散。

咲しよりしつこゝろなき色見せていとはや花のちり行はおし。

纔見落花。

山櫻盛もあるにちり初る花のいとくちかけてとゝめよ。

落花風。

吹さそふそれたにあるをちり積る花も嵐のまかせてそふく。

落花隨風。

木の本にちらは恨もあらしふく庭の櫻の色もさゝめす。

夕落花。

入逢のかねの音せぬ山おくも花は夕をしりてちるらむ。

雨後落花。

うつるやといとひし雨は餘波なく晴てちり行花のつれなさ。

山落花。

なにしおはゝかけもとゝめよかつらきの山のかひなく花のちり行。

落花滿谷。

　末こめて太山かくれの色も見んちりて櫻に埋む谷水。

橋下落花。

　花の浪よるとはいかに契けんちりし（うつろひかゝる（マヽ））をふみて久米の岩橋。

隣家落花。

　なか垣のあなたに見しをちる頃はあるしへたてぬ庭の春風。

落花薫衣。

　ちる花はまた麻衣の袖の上に匂ひはふかく木曾の山人。

山寺落花。

　みほとけの手向の阿伽にくみませてちる花むすふ山河の水。

名所落花。

　をさまれる御世はちとせの山風にまかせて誘ふ花のしつけさ。

ビクニの辨財天社

十四日。この松前の西なる、遠つゑみしのすむシヤクコタン（天註 夏處（シヤクコタン）俚俗シヤ夏のみ漁すれは、しかいへり。）コタンといふ。シヤクとは夏の事なり、又姉のことなともいへり。此洲より斑竹ないたす、産也のあなた、フルヒラのこなたに、ビクニといふ處あるに、此福山の磯やのあるし松山なにかしといふ民、みつきのことにたつさはりて、としころ、その蝦

蛺の居るところに春ゆき秋かへり來てすむか、そこにあかめまつる辨財天女の祠あるにまうてて、やまとしたかきねかひは、うなはらの潮とともにみちたれは、尙あふきいたゝきて、もの奉るにそへて歌よみてとあれは、よめる。

四の緒のしらへや通ふゑその海の波と風との聲の靜けさ。

櫻花と鯡漁

西館に行とて湯殿澤（むかしは、いてゆありしといへり）よりのそめは、專念寺坂本の櫻咲ぬ。やをら其もとに至れは、たか杖つきたてて、をさめひとりたゝすみて、あな咲たりな此花と。阿吽寺の櫻さけは、はや鯡のいをくき侍らしと、花にうれへて登るに、

よるなみの色としさけは花の枝にかけてあひきのためしにやひく。

さくら子

上のくにのはまなる上國寺の櫻も、此ためしにいへり。わらはのふたりあふきて、さくらごはいかに。いまた花もちらて、いかてか實のむすふことあらん。さらははや花のちれかし、さくら子とらんにと、花のゑとをうち叩て過るを聞て、

これも又（マヽ）

なよべ山に登る

十五日。夜あけなんといふ頃郭公の鳴を、こはいか、珍らしとおき出て、

花をこそまつにひもとけきかはやとおもひもかけぬ山時鳥。

北川ときふさの翁にいさなはれて、をよべ山わけてんと、おくふかう入る。ひろ野のなかに

どんぐい

うばいろ

菫つみ蕨折て群るに、

すみれつむ野邊のおどろのしたわらびをりしりかほにけふ萌にけり。

岸に大なる桂の生ふるを桂池と人のいへは、

咲花の色をうつして池水に秋はかつらのかけやすまなん。

秋はかりふにやあらん、篭ふける、はたつもりか家あるにとへは、どんぐいとて、大なるいたとりのかれくきもて火吹たて、湯わかしてくれたり。いつこより來るにやととへは、加賀國何かしといふところなるか、かゝる、ふもりとなりつるなとかたるに、

山かけの野邊の篭やのかり枕おきふし袖に露やこほれん。

蒼鷺の、はるかにとひ行をあふきて、

大空の色もひとつにみとり鷺の翼にかゝる春の糸ゆふ。

山谷のあはひより、ぜんまい、あざみ、あかはげ（とりのあしに似たり）だいすなど草つむなかに、うばいろといふ草、根こして來けり。この根を燒てくらふもの也。同しみちのおくなから、仙臺にて此草をつんばいろといひ、こゝにてうばいろといへと、つまゆり、うばゆり也、又大葉百合ともいへり。其根は凡百合に似て、葉ことなり。科野路の山里にて、百合ほる翁に何わさすととへは、よろほり也といひしにひとしかりき。この山澤は、やませり、をむなかつら、すまろ

くさ（此洲にて松かさといひて莖葉みなにてたうひぬ）うたかくさもありとか。かへるさは、くれ近附に、山賤あまた、つゝし、蕨折もて川越るを見やりて、

家つとにつゝしさわらひ折そへて夕河わたり歸るしは人。

十六日。文子の御館にけふの集ひある。「遠山花。

白雲とまかひもはてよ見るほとも遠めおほめく山の櫻は。

寄花戀。

櫻花ふもと斗の色見せて人の心のおくそしられぬ。

當坐の歌、「若木梅。

ことしよりひもとく梅のはつ花に出て春とへ谷の鶯。

うへしより手を折まちて咲やこの花もかひある春に逢らし。

隣家李。

雪をつむ窓とこそ見れ李咲のきはは近き宿の隣に。

立ならふ隣も見へす咲つゝく李かくれにことゝひはして。

折欵冬（マヽ）。

誰か宿のかきねの色とゝひよれといはぬかさしの山吹の花。

芳野河きしの山吹をるかけの見へておしとや蛙鳴らし。

寄硯戀。

おもへとも人は硯の水淺き心のほとそくみてしらるゝ。

かきなかすおもひならねは見る石の水に袂の朽んとやする。

寄弓戀。

梓弓いかになしてかみちのおくのえそ引とめんきぬ〳〵の袖。

いか斗かけておもふとしらま弓ひけとよりこぬ人のつれなさ。

野亭嵐。

來る人はあらしにとほそ叩らし遠き野末にたてる一家。

たひ人のみちもあらしに袖寒くくれて野守か宿やとはれん。

橋行客。

ふる里をおもひ渡るや袖ぬれて濱名の橋にかゝるたひ人。

旅人のふみとゝろきの橋の音たへすゆきゝの道そにきはふ。

暮村竹。

くるゝより竹のはやまの下かけに住里しるく見ゆる灯。

竹のおくにうき世隔る山さともタはしるきまさのともし火。

タくれ近きころ、はしゐして、うちものかたらひつゝ庭の花を見て、盃とることたけなはにして、

おもふとちよるの圓居の花みんと軒にいさよふ月をこそまて。

といふことをいへは、あるしの君さへ（マヽ）あす聞へ給ふ。

月まろといひてし人をとゝめてや花にいさよふかけのほのめく。

しらとりよしたけ。

くれて尚なかめそあかぬ此宿の花にいさよふ月そ匂へる。

しもくにするゑとよ。

影そはゝ色をもめてん花の枝にまたれて出るいさよいの月。

夜くたち行ころ、犬のあまたたひ、たかく鳴に、

さよふかく犬のとかむる聲す也月と花とに人やたゝすむ。

文子の聞へ給ふ。

犬の聲よし頻ともいとはしな宿の花見よ月の入まて。

いて、其しら浪にかはりてと、するゑとよの云、

月かけをしるへに花を手折まもあらて門守犬のとかむる。

歸りなんとするに、あるしの君。

心とくなと歸るらん花のもとに月まつことをいつはりにして。

此かへし、つかうまつらてはあらしかしと、

月花のあかぬなかめにこや歸る宿の櫻のかけはいかにと。

十七日。夜邊より雨、をやみなうふりぬ。けふ不退院の梅さくら盛なるを見にいきてんと、季豐のぬし、敬武、一貫にいさなはれて其寺につきて、こゝら梅の白紅にいろをましへたるか、そほふる雨にぬれたれはおもふ。

雨に宿るこそめの梅の花笠につはさやぬれん春のうくひす。

とく〳〵と落る玉水の、風にしふかれて、なみゐる袖のぬれたるに、かうかへつ。

軒ちかくめつるたもとの匂ふかに雨吹いるゝ花のした風。

四阿のありけるしたつかたに花のありけれは、

あつまやの雨下の軒はにたちぬるゝ花やうつらん春雨の空。

一元のつかに花手向るとて、

苔の下にあはれとも見よ雨にけふぬれてそ手折花の一枝。

不退院の花

翠柳亭の櫻

十八日。巳の時斗に雨晴たり。小林なにかしのすゝめる翠柳亭の花見に至れは、大なる櫻の、庭もせに咲みちたるに、

咲て日をふる枝の櫻けふ幾日砌に匂ふ花のえならぬ。

青柳の糸くりかけよ櫻花ちらて日数をとゝめてやみん。

翠なる柳の糸のくりかへし宿の詠のあかれやはする。

くれて花の下路を行とて、

夕やみはみちたと〳〵し月まちて家路歸らん花の下かけ。

梅の盛なる宿に笛吹けれは、

おもしろしたか笛の音そ梅か枝の花ちるへくと吹なすさみそ。

紅筆草

十九日。かんわさあれは、七面かたけにまうてんとて人々の行にいさなはれて、野みちを行は、童、芝生のうへに居ならひて菫つみ、紅筆といふ草をつみたるを見つゝ、

うつすとも盡し霞の匂ふへにふても及はぬなかめ也けり。

又戯れたる歌を、

へに筆もくろむ斗に菫草つむのゝ末や霞かくらん。

春風に花はくちひるうこかせて紅ふくむ草のへにふて。

胡燕群飛

櫻咲たるかたに胡鷰あまた集るを見やりて、あのつはくらめ出れは、雨のふりくといへり。うへ、むかしよりあま鳥といふにやと、ひとりこたれて、

羽風さへ花にいとふをあま鳥の雨な誘ひそうつろひやせん。

七面嶽頂上

幡さしたるいたゝきに人のむれり、其あたり寶倉さ人のゆひさしぬ。去年まうてたるところなれは、猶めつらしうふりあふきて、

八重霞七の面の神垣はそことも見へす立わたりぬる。

やかて御前になれは、見たる四阿なともたをれふして、いたしきのみのこりぬ。人々こゝにまとゐ、かしこに集りて酒のみ歌うたひ、とうとこりんそやと夕くれてかへりぬ。家に歸れは文ありけるを見れは、ある寺の花見にまかりてとひしかと、たかひしかは、あるしの大とこにかはり侍りてと聞へ給ひて、文子の御歌あり。

人もとへわきてしけふは盛なる匂を告よ花の下かせ。

此ことの御返し。

盛なる花の匂をふきもこて方たかひたる風のつれなさ。

二十日。きのふの御つとゝて、情ふかき櫻にむすひて、

見せはやと折こし花をみちのへの風にしられて色そうつろふ。

となん、あや子の御方のよみて給ふたるに、

うつるとも見へし詞の色そへてなかめいやます花の一枝。

きのふ山路のいと寒かりしとき人に衣かりきて、けふなんそのもとへ返しやるとて、

花の山わけきし人の衣とてかりたる袖も匂ひこそすれ。

といひやれは返しあり。

花の山わけけし衣のかひありて人の詞の色もこそ見れ。

さくら鳥

ある宿の花に櫻鳥（椋鳥をいふ）いたく群たるに、

おのか名の櫻の枝はつたふとも心してふめ春のむら鳥。

花見に出て

季豊のぬし、敬武なと、いさ櫻かりしてんとともに出て、そこゝと見ありき松岡亭にいたり、あるし信武の軒端よりはしめ山うちめくりて、みね埜の櫻盛なるを見つゝ、此しら鳥のやの遠つおやより、みたままつるほくらのかたはらに、むしろしいて川水にのそみて、遠きも近きもみな梅、さくら、桃、すもゝ枝をましへ、世にたくひなく、こと國に見もしらぬためしと、なかめいやまさりて、

又たくひ浪と雲との色見せて磯輪の山の花咲にけり。

遠かたに一村ありける花を、

白雲のたへすもいつる山里と見へしは軒の櫻なりけり。

谷かけより、びらかといふ、紫陽花に似たゝ花折もて人の出來るに、

　遠近の花に心ものひらかに山路やわけん春の柴人。

山鳩の鳴けるを、いかゝこれをも聞ゝらすやはと人のいへりけるに、

　山櫻さかりを見よとゐる鳩のなれも友よふ聲聞ゆ也。

淸らかに、谷河のとよみなかるゝにおりたちて、

　かけ淸く太山かくれの花はまたちらてなかるゝ春の川水。

人々の歌多く聞へつれと、みな、かいもらしたり。

廿一日。高埜大師の御影供をこなはれけれは、阿吽寺にまうてて、きのふけふ咲出たる櫻を見つゝよみて、みまへにぬかつきて奉る。

　かしこしなその曉の月の色に花も光をうつしてやさく。

　咲にほふ花のえならす今も世に入にし月の影あふく也。

ある人、羅離流連路を一首の頭におきて、花の歌五首をよめといへるにこたへて、

　亂山にむらかる雲や櫻花遠のたかねのさかりなるらん。

　隣家なきめくりの垣に植なしていろなる雲のかゝる一家。

類年のなかめはあれと此春の色香は花に増るとそ見る。
例の又花見かてらと人もいはんちりてとはまし春の山里。
樓閣の見へすかゝれる白雲や櫻咲らん遠の山さと。

かきね櫻

かきね櫻といふが、宿てふ宿に盛なれは、
誰やともめくりにかこふ花の名の垣根櫻の隣へたてす。
氏家俊子の館より、日頃とはぬことのねたしなと聞へて、
櫻花咲初しより盛まて明くれとはぬ人をこそまて。
といふふみあれは、返し。
おもひやれ花見かてらのためしあれは盛をとはぬ心つらさを。
青山さち子の宿に、くれ行ころ花見にいきたりしかは、こゝらの櫻に雀の多く集を見つゝ、
花の枝にねくらなとひそむら雀夕日かけろふ色やちらなん。
廿二日。うちゐ千枝子の、尻内の湯あみに行てけるか、其あたりの山中に櫻いと多しなと聞へしかは、
植おきし宿の櫻を人も嘸おもひ出湯の花にしのはん。

桑さけ

ちかとなりの新井田なにかしの家に、桑さけすゝめられけれと、のまて、とくかへらんとい

遠與閉まで

はなれ山

ふに、いかゝとあるしのいへれは、

たのしさよ春の盞おなしくはさける盛の花にとらなん。

ひるうち過るころ、遠與閉のはまやかたに在る、ひろなか（廣英の父なり）のぬしの、なりとのにいさなはれて、廣英、敬武のぬしなとかたらひつゝ行に、あまのやならん、はへ縄とて、ひきはへる縄ならん、つりの糸を花の枝にいとなかうかけてほしたるに、

咲花におしとしめ引心をやあまのたく縄かくと見すらん。

やをら碧柳岡につきて枕流亭にあそひて、

露もいまひるまになりぬあをやきの岡邊の宿に春風そふく。

清江漁父といふことを、かいつけたるを、

なかれ江の清きなみ間にあさりして花をみきはにふねやとゝめん。

むかつ尾を離山とて、鷹とるやたて、居木（ゐき）なといふものを立りけるとか、いとおかしきところと見やりつゝ、

はしたかのすめるをのへのならしはのしはしも捨ぬなかめ也けり。

こなたによこたへる尾を松か碕といへは、

里の花松のはやまの夕日かけなひく霞も色わきてたつ。

あるし廣英のいはく、

咲花もあたにちらんと思ひしを見はやす人の宿にうれしき。

と、なかめられける返し。

盛なる花もあるしのことの葉もいろそひ匂ふ宿のたのしさ。

夕日のおかしくてれるに花のちれは、

春風の吹あをやきの岡のへにちる花なひく宿の夕くれ。

友等亭（廣英の家なり）にかへり來て、ふたゝひ花のもとにむしろしいてをりて、かへさには一枝かさしてなといへるに、

折るもおし家つとにせん袖の上に風吹こほせ花の夕つゆ。

うれのみ咲て、いまた發ぬ花の木あれは、

あすも見ん人の爲とや下つ枝は咲ぬに花の心をもしれ。

廿三日。北川菅子、おなし家なる陸子、梅と松とを天神のかん社に奉るとて、菅子、梅の枝に附たるは、

ちよかけてあはれみたまへ神の前にけふうへ初る梅の一もと。

いはけなき、うなひのこゝろはへもおかしけれは、

けふうへてちとせの春を松梅の花もみかきに人やあふかん。

文子御館に、けふはものしてけれは、「春門といふことを、

いつこよりさしてとはましふむもおし門にちりしく花のしら雪。

ちる花の雪とつもれと門もまたはらはぬ人や心ありけん。

春鳥。

咲かけはよきてつゆはめ羽風にも花やちらさん春のむら鳥。

ふる雪を翅に拂ふおもひして花ちる里に鶯のなく。

春戀。

おもふこと人にはそれといはつゝし袖のなみたの色そとも見よ。

わか方にそれとより來ぬ色そうき花のふち浪かけておもへと。

題さくり得て「窓下梅。

おこたらす見よとや雪の色に咲花をまなひの窓の梅か枝。

窓の中も紅深き梅花あさな夕日の色を殘して。

路早蕨。

行人の折盡しても夜のほとに萌て絕せぬみちのさはらひ。

初わらひ萌るとはしれ家つとに折こほしたる山の下みち。

春雨晴。

雨は今はるの山路の櫻かり花に宿りし人も出來て。

春雨のはれまやわけしさく花の雫に濡ぬ衣手そなき。

菫栄露。

このまゝにはらはてゆかん一夜ねし野邊の菫の露のたもとを。

むらさきの色にやそめんすみれ草つみいるゝ袖露もこほれて。

寄椿戀。

あふことはかた山椿咲いろも葉かくれて見るわかなかそうき。

人はなとつらく椿行末の春を契に花はさけとも。

寄杉戀。

はつせ川ふかき惠に契らなん二本杉のひとつ心に。

いつの世に祈るしるしをみわの山人はつれなく杉の村立。

寄楸戀。

濱楸しほたれまさるたもとともしらてそ立る人のつれなさ。

うきおもひつもりの浦のはま楸たつ名くるしき妹とわか中。

社頭松。

嫩より神やうへけん幾ちとせふりてみかきの松の木たかき。

岩かねにふとしき立る宮柱うこきなき世のしるしなるらん。

花の數々

廿四日。青山さち子のもとよりとて、椿、もゝ、山吹、さくらおりて贈けるに、此かへりことにそへて、

玉つはきもゝ山ふきに櫻花をりにあひたるけふの樂しさ。

大箭櫃へ

廿五日。平與邊川のみなかみに、大箭櫃（百軒谷櫃ともいへり。ひつとは瀧壺をいへり）やといふ處の瀧ありけるよし、かねて山賤のかたらへは見まほしく、友かき、みたりよたりに契て、にはとり鳴頃よりとに出るとて、

明るやと扉いつれは軒近き月と花との影も夜ふかし。

家のめくりに櫻いと多きやの、垣のとまていたくちりつもり、梢よりも花の雪のことにちれは、あふきつゝ過かて、

こするより風にちらすは有明のかけとのみ見ん花のしら雪。

ほの／＼と朝ひらけ行空のおかしう遠與邊川となりて、朝嵐寒く吹來れは、

かち人のあさ河わたる袂まて花の香深く山かせそふく。

山河に月のうつりたるを、

行河のあらせの波の花の色も殘れる月に匂ふ曙。

遠與邊の李

遠與邊につきぬ。この村のそのは李のみひし〳〵と茂りたれは、雪と雲とを分行おもひに、

めつらしな月雪花のみちのへに李の梢明るをちこち。

咲匂ふ李の林風おちて遠つ高根に晴るよこ雲。

櫻のもとにたゝすみて月の殘たるを見て、

たのしさはいつらはたくひなかそらの月と花との霞む明ほの。

桂池

村出離れは桂池あり、はた桂ふけともいふ。

また殘る月の桂の池水に深き朧の色をこそ見れ。

ひんかしに文菅澤といふ名の聞へたれは、

夏近き澤のあやすけ露ふかくなびくも涼し今朝のあさ風。

澤々峯々

ぶす澤（毒ある澤といふは、附子多くあれはなり）鼠澤、ほらばみ澤、たね子といふ澤には、たねといふ女死たるものかたりあり。あないおしへて、左に大清水、小清水、松長根、池の臺あり。大なる巖のあなたにはひろき池ありて、やひろのおろちのすむといふ。へうふ岩、松倉がたけ、川わたれは、むか

ふたかねをたつの口といふは、岩いたゝきに二三ならひたるか、龍の噚のようなれは、しか名にいふとそ。梺の澤を財木といふ。立石といふ岨ひらに櫻のさきたれは、

咲にけり花の梢もたて石の苔の衣の色うつるまて。

六人淵
日かけ淵

左に六人淵といふは、いにしへ杣人六人、五月雨のたか水に木きり、そまくたしをして、おのれらもなかれうせたるゆへ、此名こゝにありけるとなん。右に日かけ淵とて、はたひろあまり高き、ひろさいくはくあらん、加閉のごとき巖にかつらかゝり、紫躑躅多き中に紅も仄に見へておもしろき處と、人々行もはてす休らへは、

むらさきのあけうはふまて咲つゝし日かけ色わく山のしたみち。

周防

どうけ澤峠澤にやの卯辰にあたり周防堂といふあり、周防殿にや、むかし相原周防守とかや住給ふてける、ふる館のあと見へたり。むさといふところに來けり。武左とはおや澤をいひ、此

むさ

澤より、もろ〳〵の澤水わかるゝをむさとて、みちのおくの、杣山賤のいひはやす名なり。山畑のふもる小家ありて、めこおほくすめり。かゝるやまちのすまゐ、世中の、とにあるおもひやしけんと門に入れは、ひきとにやありけん、三絃のいとふるひたるをかけて、たれたれにてあれな、一手ひきてなくさめたまへと、ひたにあるしのいへるに、さるわさの人はあらしと、

糸竹のえやはとるへきたれもみな山路の花に心ひかれて。

いさとて出來るに、ふりあふくたかねに、いはつゝし盛なるを柴人たゝすみつゝ行を、

山たかみをりもをよはて咲つゝし見るをつとゝや人のたゝすむ。

雪消殘る

いとやまふかうわけ入たるにや、谷かけはまた雪の消のこりけると、あない、のそみていふ。けにやあらん、萌いつる草もみしかく、さむけれと、このもかのものつゝし咲いて、左にいと黒きはにの山あるは、やけてけるならんか。そか尾上に、もとつ枝は、くろみたる櫻、うれのみ花のとをゝに咲たるを、あなる花の殘りしをなと見やりて、

このめいまはるのやま人心ありてやきのこしけん花の一もと。

大箭櫃

五の瀧あり

ひねもす、おなし流を八十あまりさかのほり、みちは小阪、そはひらをよちて、やをらおほやびつのもとに至り、かれこひらき虎杖のひろ葉にもの盛わかちて、岩の上、草のうへにみたれ居て、しはし休らひつゝ、いてとて、あないをさきたゝせ、かつらをたくり木の根をよち、岩つらにあし手たすけられて一の瀧を見き。又水をわたり岸をつたひ、ふちにのそみて二の瀧を見つ。三の瀧をは、むかふ高岸にうつりて、からうして、ちひろの溪そこに、くたしう見うかゝひぬ。なへて瀧の數五つありて、こゝらのいかつちなるかことにひゝき、山谷のとよみ、いふもさらなり。たゝ、あめに雲ふむおもひして見る空もおほへねは、みな、かへりね

とてくたるに、

ふちとなり瀬となかれ出て行水のこをみな上に落るたきなみ。

かへさにはとく、小膀といふこさはの岸、路のかたはらにある岩うちやふりて貝石とり、山つとにそすとて、みな袖に入て夕くれ近う家につく。福山より百軒谷櫃に三里行とか。

廿六日。こじやくの花眞白に咲たる小阪に、郭公の鳴夕くれ、おかしく過かてに、

こと草の盛を籬の卯の花と空めに迷ふ山ほとゝきす。

廿七日。けふの集に、「春風夜芳。

春風の花の香吹は夕やみもそことたさらてよるの木のもと。

寄花忍戀。

色も香も霞の袖にしのふ山包て花を人にしられし。

松樹春久。

曳うへしちよのむかしの子の日をもおもへは久し庭の松か枝。

題とり得て「阪暮春。

夏はあす木曾の御阪の小笹原とゝめよわきて春やこゆらん。

ちり殘るかた枝は花の風なれや春と夏との行相のさか。

貝石

こじやく花

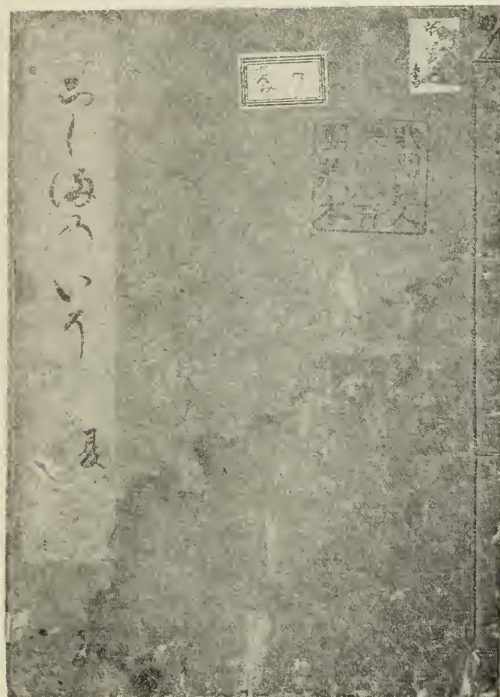
廿九日。あき人のをさ道孝のもとより、海棠の花盛なるを折て其枝に、

咲初て色香もうすき花なから君か爲にと手折一枝。

といふ歌むすひたりける返し。

見せはやと手折こゝろの色もかも情もこもる花のひとえた。

ちしまのいそ

夏

寛政四年松前福山にて夏來にけり

四月朔。雨ふり風起りてこゝらの櫻ちり、かひ曇り、みちまかふかにふきもて渡れと、いにし春の色は餘波なう、夏は來つると見やられて、

ちり殘る梢の花の色も香も夏來にけりと誘ふ山風。

二日。雨風頻て杜はやしのこすゑ吹おり、あるはたふれてふしぬ。

わか葉さす梢や風の折そへんあまつ乙女の花のかさしに。

三日。例の日なれは「首夏風。

ぬきかふるたもとに通ふいとはれてきのふは吹し花の下かせ。

谷餘花。

世にしらぬ春をこそ見れ青葉さす太谷かくれの花の一本。

寄水雞戀。

よかれして人は梢の水鷄そとおもひ捨てもあくる閨の戸。

風のこゝちにふして、けふの集ひはおこたりぬ。

四日。かん司敬武とふらひ來ていはく、とく起出て朝神樂奉るころ、郭公いたく鳴つるか聞しかなといへれと、ちかとなりの杜なから、中垣のへたてけることのつれなしと、

　百千返神の御籬におのか名の四手の田長やかけて鳴らん。

五日。　待郭公といふことを、

　郭公なかはなかなん鳴すともつらきならひに幾夜またまし。

櫻草

六日。文子の御もとより、すへものゝはちに櫻草植て、其もとにいろ〳〵の小貝しいて給りしかは、

　根にかへる色をとゝめてこや櫻くさのかひある色をこそ見れ。

故城主五十年忌

七日。あけなは、邦廣君の五十年にあたり給ふの日なりけりとて、大洞山法幢寺に僧侶あまた集り其まうけして、のりの御わさ行ひ給ふけるに、ある人、「夏懷舊といふことをよみてと聞へしかは、

　けふにあへる今も其世の風薫る昔を忍ふ袖や露けき。

灌佛會

八日。雨はきのふより、をやみなうふりぬ。きのふけふ、いさり、山賤、くゞつ、もゝやから、みなよききぬきせし、うるしぬりたる木のくつ、あしたふむことなかれと、いみしう、のりを

行ひ給へは、あれますさかふちにまうする男女、ことそきて、ほこりかなるふりあらしかし。ひるよりは雨晴間かち也けれは、いよゝ人まうてたり。この日の題に、「新樹妨月。

　軒近く花にいとひし風もかなふかは葉分の月やもりこん。

卯花如月。

　こやいつる月とし見れと袖の上にうつらぬ影や庭の卯の花。

寄月初戀。

　いつの世におもひはるけん夕月の入初しよりくもるこゝろを。

九日。小雨そほふるに、

　ほとゝきすまつにかたらへわれも又ぬれて露けき草の庵を。

水鶏鳴く

十日。とふらひ來へき人のあれは、まちにまちてけれと、くれ行まて音なひもなう、たゝ鶏のみそ鳴たりけるに、

　なれもかく世のそらことをならひてや叩水鶏の人來〳〵と。

十一日。郭公の二聲三こゑ鳴すてゝ行を、

　誰里のためとやいそくうはの空に心とゝめぬ山ほとゝきす。

夏の砧

十二日。衣うつ音頻てけれは、ある人の云、「夏も砧の軒近くきく。」といへるに、「夜とゝ

もに叩水鷄の音ならて」といへは、人々みなわらふ。

十三日。三首を詠る。「遠尋郭公。

郭公一聲もかなみち遠く山分衣尋ね來にけり。

對水待月。

かけくらき淀の川波しるへなくこきて月まつ舟の涼しさ。

寄木厭戀。

いとはれて身はなかれ木のうきしつみよるへも浪にくちやはてなん。

題さくりて、「早夏水。

おしみつる春は早瀬の浪遠くなかれてむすふ水の涼しさ。

たれも今朝身にぬきかへてきぬ川の流涼しく夏は來にけり。

山家更衣。

夏は來ぬまたすむ山もあさ衣かふる袂や世にならふらん。

けふといへは月日をわかぬ山里もおしとやかへん花染のそて。

山餘花。

なこりなくきのふに春は紅のうす花櫻殘る山のは。

やまふかくかくろふ春の色見せて青葉にましる花のしら雲。

卯花盛。

月と見へ雪とまかひてけふ幾日盛日をふる庭の卯花。

雛なる卯花月夜さかりにはいつやとまよふ庭の夕やみ。

寄葵戀。

二葉よりおもふ心よあふひ草かけてわすれぬ契也けり。

露はかり情あらはと神山にあふひてふ名やかけて頼まん。

寄瞿麥戀。

見るたひになけの情も撫子の露わすられぬ人の面影。

つれなしな身はひとりぬる床夏のおきふし袖に露そこほるゝ。

深山泉。

おく山の庵にむすふと人しらし岩井の清水すます心を。

すむほとは水の心にまかせなんひとり太山の奥のかくれ家。

十四日。盛なる藤を折て人の行けるを見やりて、

手折もて花の藤浪たか方におもひよるらんつとのひと枝。

十五日。空くもりて雨もよに見へしかは、

雨にいまつはさしほれんふらぬ間に出てことゝへ山不如歸。

やはたのかん社にまうてたいまつれは、高やかなる杉のうれに藤の咲たるを見て、

かしこしと誰もあふきてみやしろの杉の立枝にかゝる藤浪。

十六日。海渡山の藤見にまかりて、

わたつ海の名におふ寺の春見よと軒端にかゝる花のふち波。

十七日。雨ふるにおもひつゝきたり。

あめに今ぬれて鳴らん郭公思ひこそやれふる里のそら。

十八日。けふもをやみなう雨ふりぬ。「谷鶯迷新樹。

谷かけの深き青葉にかくろひて歸さや迷ふ鶯の聲。

卯花誰垣根。

うの花の垣ねの雪に埋れて夕隔ぬやとやたかやと。

寄常盤木戀。

春秋もつれなき色のかけ茂る逢ときは木やいつとたのまん。

十九日。北川時房の翁湯あみに行けるを、近きさかひまて送りてんとて朝とく出たつ。根

安良屋まで

杜の磯や近く水の清らかになかるゝを見れは、末は草むらにかくれぬ。

　夏草のしけきねもりて行水の音をしるへにいさむすひてん。

祖雄を弔ふ

行く〳〵て大澤の村も過て安良屋になりて、いさ、此ところをさかひに、わかれなむとさためて、かなたこなたになりぬ。祖雄せしの住てける庵に尋ねいたれは、草いやたかう、あれはてゝける杜にかいつく。

　すみ捨て人は此世に夏草の露けき庭をわけて來にけり。

庭のくまなるところに、まさこかい集て、こたかくつかね、さしたる卒塔婆に英岳祖雄和尚と書たるに、其人埋しとはしりぬ。此せしは、いてはの國最上川の邊に生れたるか、國てふくにすきやうして此松前に渡りて年頃すめるに、此みとせはかりなりむつひ、此春より病ゆくりなう起り、こゝに命しにたるこそ、すくせならめと、そとはのうらに歌記したり。

　夏はかくみしかき夢の世のほとゝ覺てや苔の下にしるらん。

ほそめ刈り

ひんかしの遠つ海邊には、いまや、ひろめかりあくるころなから、こゝにはほそめ、もはらかりとる。磯邊の小舟こきならひたるに、日は、やをら海よりのほりたり。

　なみ遠く行ほそめてやあかねさす光に舟も出る島かけ。

磯に咲く花

はまなす、さゆり、はまゆり、山うつき咲ましりたる、おかしき磯輪の、野はらつたひに歸り

牡丹花

ぬ。

　夏野の草ふみしたき分くれはさゆりはま百合露そこほるゝ。

二十日。俊子のやより牡丹にそへて、

　一枝をあはれども見よいろも香もはつかに花の咲初にけり。

とありける返し。

　ひとえたにかゝる情もふか見草こと葉の花の色もこもりて。

又椎飯亭の軒のあたりや鳴けん、こゝよりのそめは、そなたの木々茂りたる中に郭公の聞へつるはいかになど、かいつめて、

　言の葉のしけれる宿を子規しるへしてなく初音なるらし。

返し。

　初聲に恥て詞も夏木立しけきは嬉し山ほとゝきす。

廿一日。集ひありて文子の御もとにいたりて、題さくりて、「杜間郭公。

　一聲は杜の木の間の不如歸しけき青葉に方そわかれぬ。

　かけしけきしの田の森の時鳥ちえに別て聲聞ゆ也。

雨中早苗。

さなへとる袖のこひちも雨にけふ濡てやそゝく小田の乙女子。
うへ渡す早苗もみへす水越て千町の田面雨のをやまぬ。

曳菖蒲。

こと草にあやめも別ぬ沼なから香を尋てや人の引らん。
あやめ草朝な夕露ひきこほす人の袂や濡て匂はん。

旅宿菖蒲。

あやめくさ露もひとつにかりしきてこよひ旅ねの袖の涼しさ。
菖蒲草まくらにむすふ旅人のたとる夢路の袖も匂はん。

隣家盧橘。

なか垣にへたつ隣のむかしまてしのへと匂ふ雨のたち花。
植おきし軒ははいかに匂ふらん忍ふ昔も近きとなりに。

寄筌戀。

あふことは波の泛繩いつの世に寄りて恨を人にかたらむ。
人もしれ海士の筌なはうきてのみゆたのたゆたにもの思ふとは。

岸忘草。

あけまきか苅てふことはかた岸にわするゝ草の茂あひぬる。
わすれ草露や積てきしたかく淵としよとむ山川の水。

澤菅。
澤の邊におなし水草のしけりあひていさしら菅のなひくともなし。
かる人のあらてそなひく九の澤邊の眞菅鶴やふむらん。

砌竹。
末ちとせ齡もたかくなからへて友と砌の竹に契らむ。
けふ植る庭の呉竹いく世へてしけき林のかけとたのまん。

廿二日。しら鳥よしたけのやにとふらへは、いとかくはしき匂ひのしけるは、ほゝの木の花盛なれは也。

朴木花

行袖の濡てそ匂ふ此宿の朴木かしは花の雫に。

雨は晴て又ふりぬ。

廿三日。けふの歌とてよめる。「馬上聞郭公。
駒しはしとゝめてもかな鳴方に心ひかるゝ山ほとゝきす。

隔物不逢戀。

稀にたに逢てふことはなか垣のあなたに人の聲はすれとも。

行舟夜已深。

ゆくふねの行衞もしらすこき出て更渡ぬる淀の川長。

けふの集ひなし。

廿四日。雨のふりくれたる空に、櫻鳥、林のうつほ木にすくひて、ひな、ひたに鳴は、たへす、つゆはみたるものもてはこふ聲のしけれは、

子を思ふ心ちらさて櫻鳥ぬれてはくくむ聲あはれなり。

廿五日。わらはあまた天滿神にまうてゝ、鈴ひき、かしこまりてけるを見つゝ、

あさか山禁をたとるうなひ子かみねにもかなさ頼む神垣。

廿六日。ことなし。

廿七日。北川ときふさの翁溫泉に在れは、とふらふ人あまた行といふにあつらへて、

ほとゝきす鳴て太山を出つる湯のあたりやわきて樂しかるらん。

廿八日。兼題三首をよめる。「風前郭公。

吹風の誘ひもきしかほとゝきす雲のいつこの夜半の一聲。

雨中郭公。

あめにけふぬるもいとはて時鳥ふり出て鳴聲のをやまぬ。

寄里待戀。

世の人め稀なる中もあふことは片山里にまつかひそなき。

まさゐして十首の題を得き。「橘薫簷。

見し夢も風の誘ひてむかしさへ遠く軒はに匂ふたち花。

誰うへてちとせの後もかくはかりむかししのはん軒のたち花。

初五月雨。

日にそひて長きをやみん五月雨にけふかけ初る軒の糸水。

五月雨のけふをはしめに日をふらは岸邊の柳浪や越なん。

曙水鷄。

あまの戸はいとはや四方に明なから叩水鷄の聲殘るなり。

天のとは明てもたゝく鷄こそ梢をくらき軒はなるらめ。

夏月涼。

風またてむかふ圓居に誰袖も涼しく更る夏夜の月。

涼しさとかけめつる間も夏の夜の明ていつこに有明の月。

朝瞿麥。
あさ露のおき出て見れは床夏に眠る胡蝶の夢殘(や(マヽ))すらし。(む(マヽ))
床夏の花のいろ〳〵朝露にねたるまゝなる庭の凉しさ。
寄花變戀。
唉はとく移ふ花にならひてや頼む契の色かはるらん。
いろふかく思ひ初てもうつり行人の心の花そつれなき。
寄柏木戀。
露時雨ぬるともしらて柏木のつれなき色を人の見すらん。
としさむきつま木のをのゝこりもせてつれなき人を峯のかしは木。
山家瀧。
やま里は岩根の瀧のしらいとを結ふ庵の軒に見るらし。
身ひとつを隱す太山に聞なれて心を洗ふ庭の瀧なみ。
田家人稀。
しつけしな山田の引板の音信て軒にとひ來る人そ稀なる。
とへかしなやま田の庵のいなむしろしきて苫もる月も見なまし。

寄民祝。

軒ついきけふりにきはふ民の家は年毎に猶たてやそふらん。

畔ゆつるかしこき御代にすむ民の盡ぬみつきや彌まさるらん。

廿九日。卯月もけふにくれたり。ほとゝきすきかて日數へぬれは、おもひつゝけたり。

時鳥しのひなはてそあすは又おのか早月の名にや立らん。

五月朔。さつきこは鳴もふりなんと、まちまたれて、むなしき空のみあふきつゝ、

ほとゝきす情も夏のなか空やおのか早月のけふは來ぬれと。

二日。山背の風はけしきに、しろおしの聲とよみ、空もとゝろになる神にまかひて、くれ行ころまて、このことゝめもやらす集ふに、

雲に浪よるかけてこはしろおしの糸引童むれて居にけり。

しろおし

三日。亥のときはかりにや時鳥の鳴行たるに、

郭公なきていつこにまた深き淀の渡やおもひ出らん。

四日。夜邊時鳥聞へ侍りしとけいし侍れは、文子の方とりあへすよみ給ふ歌に、

里わくやおのかさつきもよそにのみかたらふときく山ほとゝきす。

とありしかは、返しつかうまつる。

ほとゝきすふたゝひ名のるおもひしてめつらしときく人のことの葉。

夕くれ近く、めのわらは、あやめわかねて、おもふことやねんしけん、「かなははかけよ笹かにの糸。」とて、ふきたる軒の菖蒲にさしそへたり。

五日。けふのためしの歌つくりぬ。

あやめ草ちとせをかけて軒はふく家の風さへ匂斗に。

文子の御館に、ゆふくれはつるまで在れは、水鶏の軒ちかつきてなくに、

のきにふくあやめのかつらくれかけて叩くゐなも聲匂ふかに。

六日。むら雨、あしたの間したりけれは、

袖ぬれてまちもこそすれほとゝきす此村雨やよそに見るへき。

なへて萱草ふきたるも、けふの風に吹やられておとし、かけまさるいと水、をやみなき雨に、いよゝほとゝきすのしのはれて、ひとりこちたり。

軒つゝきあやめにかへし草の名の忘れてとはぬ山ほとゝきす。

七日。月の明なるに水鶏音信けれは、

それそとはおしてもしるし軒近く鵑は卯月のした庵。

八日。「河五月雨。

さらぬたに岩波たかき芳野河はやくも過る五月雨の空。

連峯照射。

ともしさすかけにおしかのみねつゝきよるの思ひの消へんとやする。

寄帶契戀。

草の葉の露の下おひ末かけてむすふ契を風にちらすな。

遠村早苗。

ゐる鷺のそれかあらぬか里遠くむれる小笠やさなへ採らん。

里近き小田にやいそく遠方の千町の末に早苗とる也。

瀧五月雨。

水かはてうしやひかまし五月雨のふるき例に濁る瀧なみ。

鈴鹿河ふる五月雨にけふいくか八十瀬の瀧や淵となるらん。

寺邊水鷄。

樒つむ頃とや寺の軒ちかく叩くゐなのおとろかすらん。

をこなひに夜ふかく明る寺の戸をいかに水鷄の叩なるらん。

外山夏月。

涼しさとまさゐにあかてめつるまて夏の外山にしらむ月かけ。

いましはしかけさしとめよ夏の月おしむとやまの明方の空。

河邊夏草。

河なみのよるこそ見へね音はかゝりもれて岸邊を隔つ夏草。

夏草の茂るにそことみへわかてした行河の音そ涼しき。

照射欲明。

ともす火も明方近き山の端やさつおの眞弓いるほともなく。

五月山ともすほくしのくらきこそ明方しるき光なるらめ。

旅宿聞笛。

草ふしの夢もむすはし吹笛の聲にまちかき里の野原に。

ふゑ竹のねもせてたれか吹ほとは草の枕の夢もむすはす。

行路見戀。

ゆきかひのしけき人めの中垣を隔ておもふことそ通はぬ。

みちのへの草のはつかに行すりの袖の人香をえこそ忘れね。

寄塵神祇。

すみよしの神やもるらん世々の塵積て高きやまと言の葉。

神路山わくる麓のちりひちももらさてましる光をやみん。

西海岸の津浪

九日。この頃鯡のあひきにわたりたる海士人ら、蝦夷のをる島より歸る舟人なと語るを聞は、四月廿四日、西蝦夷のヲシヨロ、タカシマ、オカムヰ、シヤコタン、ビクニ、フルビラなといへる處になへふりて、潮ひて、なたも磯のことくに石あらはれ、歩わたりして、そひ、あふらこ、なにくれの魚、又かひつ物は、しゆり、あはひ、のなとは、石砂のことく、わらし童子をいふまて拾ひをるに、時の間におほ汝起り高浪みたひより來て、蝦夷(アキノ)、和人(シヤモ)、いくはくの人波におほれ、磯やかたは、みなひき波にとられて、からくして山にかけのほり、岨にたつ木の枝をたつきにたくり寄せてをり、高き巖の末には、したゝみのことくすかりて命いきたるものもありき。吾等かしこくも、むかし五十二年前なるつなみに、澳なるふねはことなかりしと、ふるき翁のつねにをしへたるをまもりて、こたひ、なへし、磯の干たるを見て、こは津浪のより來ならん、いで眞沖にこき出よ、たれも〳〵といへと耳にも聞入さるものは、みなこの磯にふねよせてしつみたり。わかふねは、あせと汝とにぬれて遠おきにいかりかけて、此わさは

五十二年前にも津浪

不盡釜の文

松前公所藏しのぶと云ふ釜

賴朝富士の狩に携行す

ひをのかりぬるは、あめのたすけにや。又、あかおやのをしへを、そむかさりけるにこそあなれと、いきもつきあへす、なか〳〵とかくいひて去ぬ。

十日。あや子御方かい給ふ、不盡釜のふみを見れは、「いつの頃にやあらん、此日の本に茶をこのみ、もはら世中にもてあそふことの始りて、いまも人々これをたのしみ、道のひとつともて渡り、むつましき友かきの圓居はさらにして、君も臣もへたてなく身をあはしたるましらひとなん、人の語りき。此みちのおくの松前、蝦夷のちしまをまつりこち給ふける道廣のうし、いと〳〵こたいの釜をもたまへり。そのむかしは、しのふの郡より出てたるにてやあらんか、しのふてふ名そありける。こを得たまへりけるはしめは、此國をしり給ひ初し遠つみおやより、よゝにあたる季廣のきみより、くれ竹の世々につたへて、みくらにをさめ、又なきたからとそおもほしける。さてもこの釜は、そのかみ右大將賴朝の卿ふしのみかりし給ひしとき、狩場にすへてもてあそひ給へりけるとなん。其頃ほひよりほしうつり世々ふりて、ことし、くわんせいよつのとし、子の春にかそふれは、もゝとせを六ツかさねたる年月とそ聞ゆる。さるありかたきてうとを今も傳へておましますは、國たいらかに、のりたゝしう、火のわさはひ露おこることのあらさめれはなり。いま道廣のうしは、おゝしう、弓箭とり馬のり給ふわさはさらにもいはす、ふみまなひの道にもこゝろふかうおはしけれは、たて

て茶を好き給ふとはなけれと、おほくの家をさ、其下つかさにさへ隔なからんこゝろにや、折ふしにもてあそひ給へりける。このむつきのなかは近きころ、おまへにまうてけれは、いにしへ今の物語聞へ給ふをりすから、ひとつのからうつとう出させ、ふたおし明給ひて、是見てよ、かゝる久しきほとの器ある也。これに歌よみ、ふみかきくはへてなとせちにのたまへは、いなふねのいなみかたく、しそきてのちに、かしこまりをけいすとて、

うこきなきみちのく山に今も咲こかねに増る寶なるらん。

何こともいにしへのさまにのとけく、くにを治めたまへは、ふるき世のまゝに物つたへ給ひて、おほくのみやの、おほん手ふれさせ給ひしことなとおもほしけるこそ、むかし、おやをはぐゝむほたしとて、うめる子をすてうしなはんとて、こかねのかまをほりえしためしありけるとやらん。こや、もろこし人にもきやうのこゝろはまさり給ふなりけめ。

つたへてし世々のみおやにつかへますこゝろや國のをしへなるらん。

この、しのふのかまなん狩場にもたまへりけるゆへ、ふしのみかりの釜とも、のちによはせ給ひけるとか。さゝら浪に松のかたをうきほりにしたりけれは、

みかり場のよそひはさそと六百とせのむかしを今にみほの浦まつ。

くちす猶いく世つたへん三穂の浦のなみ〳〵ならぬ家のたからを。

松に寄て殿をいはひ奉る。

春毎にみとりたちそふ松枝のちとせを君か有數にせん。」

とそありけることのめてたしと、くりかへし見つゝをはりて、あや子のおほんもとにかへし奉らはやとて、

ふしといふ釜にたくへて言の葉のいや高き名を世にあふくらん。

富士釜箱書

富士釜の高六寸七分、口三寸八分。釜入たる函のふたに、「羽州庄内之郡司土佐林入道靜林上洛之時　公方義晴卿贈御茶釜　右釜者建久四年夏　賴朝卿富士山之狩倉御釜之由信夫之釜是也」とかい附たり。此島なるおほんつかさ季廣公と、いてはの靜林入道となかむつひたまひたるゆへ、世にめてたきたからなから贈り給ひたるとなん聞へたり。

松前郎忠の發明石輪發火

十一日。松前郎忠の家にいたれは、あるし、このころたくみて、かなたくみに作らせてける霹靂萬勝石輪發火といふさゝやかの函より、火のいつることすみやかに、そのしちのたへなる、世の人の及ところにあらす。こをくにのかみに奉れは、いみしうほめ給ひたるとか。そのもとは諸葛武侯の製したる鋼輪發火にならひて、大にことなる機巧なり。のりたゞの製られたる機巧のたくひ三十六品ありける中に、此うつは石輪發火を長とやいはんと、見る人ことにあきれたり。

十二日。卯花の盛なるに雨いたくふれは、

五月雨にぬれてうつろふうつき垣なと郭公聲へたつらん。

十三日。兼題の歌「薄暮水鷄。

水上夏月。

關路聞鷄。

十四日。ちかきとなりの保壽のやに在て、月の海つらよりさしのほり、しはし木の間に休らふかけを、おもふさち居ならひて見る〳〵、

風の音は浪にゆつりて松か枝にしつけく宿る月の涼しさ。

しもくにするゑ(マヽ)のぬし。

おもふくま波路はるかに見る月の松の木の間の影のすゝしさ。

あるしのいろはなりける刀自金河の句に、

須磨もかくあらんか涼し浪の月。

十五日。花山院の姫君此城に入たまひて、ほとなう身まかり給ふ。ことし十七年にあたらせ給ふとて、人々「對橋問昔といふことを題にてとふらひ奉れは、われも、このこと聞へよと文子の御方より聞へ給へは、けいす。

俤もありとし匂ふ橋にとへはむかしをこたへやはする。

十六日。文子の御館にて當坐の和歌。「對月待秋。

明やすき月の餘波に海士衣うらみて秋を松か浦しま。

めかれせす月のむしろにおもふとち寄て秋まつ袖の涼しさ。

瞿麥露滋。

露しけき夏野の草のなかに又おくいろ深き撫子の花。

此あさけおもけに花の露見へてまた風過ぬ庭のなてしこ。

河邊夏草。

おりたちてむすはん方も夏草に隔て過る山河のみつ。

ふみわけて渡はしるき河のへに一村それとなひく夏くさ。

螢照草中。

ありとたにしられぬ草のなか垣を夕は見せてほたる飛也。

しけりあふ蓬かもとの露までも集く螢の光にぞ見る。

寄鷺戀。

逢こともも波寄る岸にたつ鷺やつらきみの毛の濡てきにけり。

契ある水の心も淺澤といさしら鷺のしらぬはかなさ。

太刀。

武士の治したちのつかのまもえやは忘れん御世の惠を。

治れる人の心につるきたちぬかて年ふる御代のかしこさ。

十七日。雨のいやふるに、西館に行とて專念寺の門を過るに、紫の花いたく散たるは何の花ならんとあふげと、そのかゝりたるこそ見へね、今まで藤の咲殘りたるなりけりとおどろかれてたゝすめは、又風にさとちりかゝれは、

さみたれの雨にあふちの雫かとよれはたもとにかゝる藤なみ。

十八日。　隣家瞿麥。

寄橋戀。

水邊草。
十九日。

牧の冬かれ

南部
廿七冊
南部

寛政四のとし、かんな月のはしめ、ちしまのなごりより書つきて、おく野の牧を見めぐり宇曾利山にのぼり、田鍋の市に冬籠して此縣にとしくるゝまてを記して、はへなきことの葉の見ところなけれは、

末起の冬かれと名つく。

十月一日
北海道にて

追手の風日毎にふけと、おもふかたに行へきよしかね契たる舟をさ、世わたるわさにのみなにくれとたつさはり、あまのたく繩なかき日數を心ひかれて、またこの嶋に在れは、さちなることよ、なかつきの月の餘波もともに見なん、あはれおかしきむしろになと人々のかたらひになくさみ、山路の菊のかんはしきみちを高によちのほり、岡邊の薄のうちまねく夕くれは、いとゝ歸らん空もおほへす。露けき袖をしほり、野原の鹿のあとを尋ねてはしらぬ林にまよひくれ、みねの栬の千入、はつしほ、そめましりたる梢にむかへは、あかぬにしきとたちさらんこゝちもおほへす。おしめとも、みしかきひかけのくれやすく、日數あまたにかき積て、袖吹きなつさひたる秋風もきのふにさそひて、けふは、こからしの名にふきかへて、梢さひしきかんな月のはつ空、けふは朔にそなりぬ。あさ汗によき風吹て、まつまへなにかしの

城主の船出

君、ふなよそひして出たちおはしまし給ふ。ふな子とも、ろほうしとり、さゝらなみかいならして、「きさらきやんまの楠木を、ふねにつくりて今おろす、柱しろかね、せみこかね、あ

ややにしきの帆をあけて。」と、聲のかきりうたふか潮路はる〳〵と聞へわたり、おほんふなしるしの澳津風にふかれて、ほとなう遠さかり行を、見送り奉る貴きいやしき磯へたにみちて、人ことによろこほひさりき。沖の方にむかひて此君をほき奉る。

吹風も浪路やすけん君かゆく沖にみふねのかちのしつけさ。

二日。やまかたつきたる館に行とて小河のあるに、橋よりはしめ、木葉ちりつもりうかひなかるゝに、

冬來ぬといはまの水の行なやみおち葉に音のよとむ山河。

三日。夕附行ころ時雨ふりはれたるに、

むらしくれよそになり行雲間より爪にもれて三日の月かけ。

四日。あした雨ふるに、ゑみしひとり裘きたるか、そほぬれて行を、

夷人も物おもふらしうちしくれ熊のかは衣濡てきにけり。

北川時房の翁、とをつ蝦夷の居るくににまかりて、いまた歸り侍らさるをまちて、

神な月殘る山路の菊か枝を折てかへさのつとにまたなん。

五日。あさ戸明れは、つゝゐにうすらひのゐて空さへ渡り、小雪ふりきけり。こは、初雪なめりとめつれは晴たり。

初雪降る

みちのくの夷かちしまの神奈月きのふの時雨今朝のはつ雪。

六日。あしたのま雨ふり、ひる晴たり。この頃もはら人の語りてけるは、きの國のふな人あまた、卯のとしはかりに浪にはなたれ風にふかれて、十とせのほと海にたゝよひありきて、加武左都柯といふ、あらゑみしのとをつ洲につきたるか、あるは死うせ、あるはやまうととなりて、ふし殘りたるをはいさなひて、こたひ可無散都加の人四十あまりして、ひんかし蝦夷のくに枳爲太都婦といふところに來りて、くにのかみに、みつき物奉るとやらんうたへ奉ることありとやらん聞へたり。むかしより、かゝるためしおほへさることなれは、よきことにやあらん、又、あしかりけることにやなと人のいふに、　可武左都加と句の頭におきて、

かしこしとむくつけきくにのさかひまて盡せぬ御代をかくあふくらし。

よき日なりとて、ふなをさの告來れは、寛政四とせの冬かんな月の七日、松前、ふく山のひんかし泊川のいそやかた、さゝ木信英かやの軒近くふねつなきたるに、のりなんとほりしたるにあるし、のふひて。

杉の葉に霜おくけさのわかれかな。

かゝる句をとなへけるに、

猶袖寒きおくのはまかせ。

と付つ。いかゝあらんか季豊のぬし、あゆみとうする馬にむちして、波よるきしへにひかへて、ふたゝひなと、ねもころに聞へたまひて、たゝう紙に、

ともつなを引とゝめえぬ別かな餘波もなみにいそく舟出は。

名殘さへ浪路へたてて出ふねをおもひのきつな引もとゝめす。

かくなん、かいつけて見せ給ふに返し。

いつまてとむやひし舟のともつなの心ひかれてこき離れうき。

波遠くこきはいつれと友舟に思ひのきつな侚ひかれぬる。

つちだ直躬の云、

人めあれはなみたかくせといか斗もれて袂の濡もこそすれ。

かへし。

情ある人のこと葉の嬉しさもなみたも袖につゝみかねつる。

ふねこき出なんと、ともつなときはなては人々、よき日かな、浪いさゝかもうこかす、こゝろやすらになといふに、

追手ふくしつけき浪のふな出にも別行身のしつ心なき。

菅子、陸子、をさなき心のせちにやあらん、沖ゆくまてまめやかに、めおこしたり。遠さかる

函館は鰐の如く

下北半島奥戸に上陸

所謂奥の牧

ほとに、加夜邊のたけをはしめ秀たるたかねは、なへてましろに雪のふれゝは、渚に在よりまほに見やられて、

おちふとちすみかはそことしら雪のふり捨かたく思こそやれ。

行まゝに、よし岡の山、度宇遍智のきろ山なと遠く見離れては、崎〳〵よこたはりて、出こしかたもいつことはしらすして、烏數氣志のみは、わにのうき出たるかと、うなのうへに、いとちかうたゆたふ。こゝらのしほみちもしゝまなれは、舟の中こぞりて、とししことに松前の島わたりすることいくそたひならんか、かゝることに浪たひらかに、汐いさゝかもおこらさる浮は又あらしかし。あなたのし、のめ、うたへと、ふなはたをうち叩て、さはにはやし、盞とり、はなこゝろになりてかたるまに、南部路ちかうなりて、やま〳〵の木するまてあらはに見る見る行は、をくらく、日は遠方の波にかけおちて月たかうさしのほりたれは、猶此光をしるへにふねおふといふに、

日は西に入とし見れは弓はりのつきぬ惠そあま照します。

奥戸といふ浦に寄て、こよひは小谷といふなる、磯やのあるしかもとに泊る。

八日。近き邊に箭根杜のかんやしろとて、八幡の神おましますにまうて奉らんと、つとめて、磯をつたひ山かけをゆくに、おほくの馬むれありくは牧の近きにやあらん。山くろ、田

つらに柴垣たかくゆひめくらしたる中にたゝすみ、かれ生ふみしたき、高き嶋山の嶺麓たちならし、ありとある小笹、木の根をほりはんて、いな鳴に、平胡遍といふ名を、

あさ風の身にさむからんうちむれてをこへ峯越駒そいはへる。

かゝる牧は十三野ありけるといふ、そのふたつなりとなん。「奥のまき野とりの馬のかたなつけともすれは又あるゝ君かな。」と聞へ給ひたるも、此あたりをやいふらん。尾駮の牧は、七戸の邊に尾貫津（をぶつ）といへるところあり、こゝをいふかといへは、をぶつに牧あらねと、なへて、其あたりに牧あれはいふにや、昔ありしにやといらふ。赤石といふ邑は、磯邊の石ことにあかけれはなり、こゝにいたる。山かけにも馬いと多し。この邊も牧にやとゝへは、いな、さゝ侍らし。うめる野馬みなとりはてて、秋の末より、木戸口おし明捨てけれは、この村さかひをおかしてあさりありき、枯殘る木葉、つゝらなとくらひ、雪ふりては秣つきて、磯による、にきめ、なのりそのたくひを、くひものとせり。海にのそんたる岡に、ちいさき神のほくらあるめくりを、材木石とて、細き柱のことき石をつみかさねてそ、みつ垣とせりける。まつる神は、もゝとせのむかししほかまこゝに在しかは、今そのあたりを神にあかめ奉る。このとしは浦〳〵のこりなふ病したれと、此神のおほん惠にあひて、あか宿はしめ、みなことなかりけりと、牛くらつくらふ翁の、けふりふき〳〵かたるを聞て此社に奉る。

赤石村

鹽竈の神社

材木石の産

左井に出て

矢の根森の八幡宮

しほかまの神の恵はみちのくの奥の浦人猶あふくらし。

山ひとつ越て、さえもくといふ處の宮居あるしたつかたをはしめ、立いはうちわつては、みな柱のやうにそなりける。こをになひ出、舟につみ、あるは、ねりそかつらの綱を付て、みや木なと曳やうにして、それ〳〵につかひけり。しかるゆへに、やかて村の名におへり。小坂の路行ほど寒けれは、

こやさゆる山かけならしひるさへもくさのはつかに殘るあさしも。

原田なといふ處をへて左井にいつ。こなたを小左井といひ、みなとを大佐井といふ。渚に小嶋あり、いかめしきみやつくりの見へたるは辨財天の御坐也。神明のみやしろを拜み奉れは、慈眼山清水寺といふいほそくの寺あり。あるしを自性院といふ、八幡の神にも此うはそくの仕へ奉れり。川ひとつ渡れは矢の根森にのほる。この神垣のうちと、あるは近きさかひのこもり、磯輪に石弩あれは、かゝる杜を、やのねもりとはいひき。あべのいくさほろほし給はんとて、むかはせ給ひしころ、賴義の君、いはし水をこゝにうつし祭り給ひ、むさしの國、鈴か森の八幡の神を本宮とさためられたりけるとか。なかむかしのころは、たへて神かきもなう、おのかしゝ草木茂りあひてしるしも見へされは、鈴森のほふり森田信辰といふ人此ほとりに至りて、うちなけいてよめる。「太麻たへて神のかゝみも朽にけりまつる

矢越、磯矢

義經の口碑

なき松のあらしや。」寶永元年のころ、自性院法印賢敎といへるけんさの夢に見へ奉れは、おとろき、そのをしへのまゝに土をほりてもとめ奉れは、ちいさき鏡のうらに、ほんたのみことを鑄奉りたるをえき。賢敎、なみたをなかしよろこほひて、衣の袖につゝみ奉り家に歸り、ぬかつきいやし奉りて、延寶二年甲寅のふん月に、ふたゝひみやしろを淸らかにつくりかへ奉り、そのときのけんさ大昌院、すゝか森に此ことつけやりしかは、かん司來りて、鈴ひき、ぬさたいまつりてよめりけるとなむ。「たへたるも又引おこすみしめ繩ちよ榮行神のまに〳〵。」大左井に、よこたはりさし出たるを矢越といふ、賴義のきみ、ひきめありたりけるゆへ今も崎の名によふ。其箭、磯なみにたゝよひ寄り來るとて、磯矢といふところあり。西は長後（ちやうご）、福浦、牛瀧なと行に、佛か宇多といふ處ありけるは、石の形卒堵婆に似たり。このわたりのさへもく石ことに長やかにて、五尺、七尺に及ひたり。こは、源九郎判官此磯より松前の島に橋わたし給ひてんと、こゝらのさへもくを牛につけてひかせ給ふるうし、たふれふしたれはとて牛瀧の名あり。その材木もみな石とくゑしたると、うしひくあけまきのかたりぬ。ひろまへにまうて奉れは、蝦夷人の、弓矢に以南平奉りたるは、あらきゑひすのこゝろもなこやかに、神のおほんめくみに、ひかれなひきたるあまりにやあらん。ぬさとりかしこまりて、「みちのおくやのね杜」といふことを沓と冠とにおきて、四のときのこゝろ

をよみてたてまつるうた。

美ね麓わけ來る人にこととはん御垣の花は咲やさかす夜。

智ちの日にみしめ引とものことはりを見せて恵み茂き夏の廼。

能へ近き梢の露の玉垣に夕はいとゝしけき虫の禰。

於とこ山みねの梢も白妙にやたひおくらん榊葉のし毛。

久もりなき御代の光をいはし水うつすは神のかゝみなりけ理。

漂流者善右衞門

おなしすちをかへる。此左井の浦人竹内善右衞門とやらんいふもの、赤人といふ島になかれつきて、いま、そか洲に入ましりて、そのむまこあるか、此さし可武左都加人にいさなはれて來けるなと、行かふ人の物語にしたり。夕近く奥戸に歸り來て夕月のかけあかけれは、松前のかたを見やりていへり。

おもふとちかけてもいまやしのふらん月も夜渡る天のうきはし。

九日。神なり雨ふれは、えいてたゝす。ひるの空はれて海つらくらく、松前のやま〳〵猶くもりて墨かきにひとし。

ときのまにこなたは晴て海越の山にしくるゝ色をこそ見れ。

奥戸を立つ

十日。馬にて、おこへを出たつ。大川目、小河目とてやま河ふたつあるか、みな氷ゐて、いや

中山越え

大間の牧

耳を切つて馬を區別す

田稗作る

かまやの浦

寒けれは、

　のる駒の渡る小河の朝氷ふみ行音の身に冴るなり。

大畑に行に山越といふ路あり、中山こへといふみちあり、大間の濱路あり。われは、なか山越をせり。小奥戸とて、むかしの里ありし處に出たり。なへて柵ゆひめくらしたる牧の中路を行は、七郎臺といふたかねの梺のひろ野に至りて見めくらせは、海へたよりやまのおくまても、ひし〳〵とませひきわたしたるか、虹のことく見へたり。わけ行まゝに、大間の牧のらちに入ぬ。この頃は木戸はなちたれは、へたてなう入ましりあそひ居れと、おこへのうまは右の耳をきり、おほまの馬は左の耳をさきたれは、是をしるしにこそ春はとり入るならめ。ひとつの牧の内にもゝあまりの母駄馬あるに、雄馬ひとつをおいて、みそ、よその子をうめりとなん。そか父馬は冬になれはとりて、近き里に引やりかふとそいふめる。佐賀森とて磯の高岩をいふ、そのあたりのさゝはらふみ分て、行かた霜の眞白に冴へたり。又かた岨のとけたるに、

　あさ日影匂ふ方よりとけそめて霜おく山に露むすふなり。

磯邊に大間の家居見へたり。五倫田のくゞり岩なとくれは山田あり、こは、稲てふものうゝるにはあらす、田稗とて、ひえかりたるくち根のみ殘りぬるに、霜ふかくさむし。かまやの

異國間

下風呂

赤川の里

浦にいつ。まことの名は蛇浦といへと、求食するわさに、へひてふ虫はいむことあれは、なへていはさるとそ。異國間といふは、いにしへ、こまうとのはなたれ來りしよりいふとも人のいへり。此浦に夷人すみて、其末今もありとそ。ほとなう日かけ山といふ處になりて、

くれ安き冬の日かけの山のはにかたふくまゝに袖冴也。

杉ノ尻、桑端、焼山の麓を分るに作馬臺といふあり。枝折崎といふ處のひたんは海、右はしけ山なれは、

わけまよひ山路行身も舟人もこゝをかへさのしをりとや見ん。

長濱とて、はまちはる〳〵と過て、下風呂のいてゆに大湯、新湯とて溫泉二ある里はつれの、いはむらの海岸にのそんたるあやうき路を、岩つらに袖ふれて行に、おかしき瀧のおちくるにいたくぬれたり。

行袖にやがて氷やむすふらん身に冴かゝる瀧のしら糸。

甲崎は其かたち、かふとに露たかふ處なし、赤川といふ里は山河の水あかし。いにしへ賴義のきみ、ちどりのいはやにこもり七里谷の鬼射たまひ、きりふさせ給ひて、したかひ奉りたる兵等か、血をあやなしたる太刀をあらひしより血川といふめる。今は赤川といへと、そのしるし、まそのことく朱なりといへり、水澁の深きなかれなれは也。木野部といふも鬼の府

と書しをと、年たかき翁のおしへたり。七曲とやらんいふ九折をくれ近く行に、柴おふものあり。いさとくしたまへ、日くれはてなんと、さいたちて過ることのねたけれは、

柴人よいさしるへせよくれ行は月をもともに峯のかよひち。

大畑に至る

釣屋濱、由阪(ゆきか)に暮はててくたれは川あり、舟にて渡りおほはたにつき、堺なにかしか家に宿つきたり。

寶國寺深阿

十一日。圓祥山大安寺禪林といふ山寺にまうてんとて、あるしのあないにまかせて行。田つらに立るかまつかの實を、

刈あけし田面淋しき冬かれにかまつかのみそ朽殘りける。

十二日。義光山寶國寺といふ、なもあみたふちとなふみてらにすめる、深阿上人をとふらへは、

あし曳の山より高く音信てけふ聞初る木からしの風。

となん聞へ給ひしかは返し。

たへていま音こそたてねやま高みふきもをよはぬ凩のかせ。

大畑の人々

十三日。雪のおもしろうふるに、池田包幸なるやより、

しら雪のふりにし方をとひ來ませ軒もたはゝに冬枯の宿。

地震有り

かゝるうたの返し。

冬かれの宿の木々ともしら雪のつもるを花といさとひてみん。

又、深阿みたふちのもとよりと聞へて、

まつ人の來ぬもつらしな初雪のふりしく庭をよそに見なして。

とそありける返し。

君やこんわれやとはんとあかすたゝあと付わふるけさのはつ雪。

十四日の夜、月のあかゝりけれは、

ふりそふる雪とし見れは小夜ふかき一重は月のかけにそありける。

十五日。雨夜の圓居に池田道賢。

いか斗積おもひや増るらんふる里しのふ雪のやとりに。

かくなんありける返し。

なくさめと雪も思ひもいか斗身にふりつもるうき旅の空。

十六日。未のときならん、なへふりてより雪いよゝふりまさりたり。ある、琴ひく女にかはりて人のいへり。

松風を友と聞ぬる柴の戸にけふ音つるゝ人そ喜しき。

となん、かいたるうたの返し。

まつ風のしらへを友とつねにきくたのしき宿をけふこそはとへ。

ふたゝひ慶政といふ人。

世をうしとおもひしまゝにとひもこん人めかれにし山本の里。

このかへしをせり。

よをいとふ身にしあらねと月雪のたよりにそとふ山もとのさと。

又、邦政のいへり。

たつきなき山の小笹をふみ分てまれにも人の問そうれしき。

かへし。

こゝの葉の花をしるへに山ふかくけふ此宿を尋來にけり。

十七日。雪猶ふり來りぬ。

身につみて旅のあはれをしら雪のうちけぬへくもおもひこそやれ。

かくなん包幸のかいおくりしかは返し。

いとふかき情ありともしら雪のふる鄕遠き旅の宿りに。

十八日。雪けち行はかり雨ふりぬ。此ほと音つれせさるは、いかになと聞へて、

これやそも吉野の奥に入ぬらんわけこしみちのあとしなければ。
とそ、深阿上人給りけるうたの返し。
　あとたへてきのふもけふもふる雪にへたつ思やみよしのの奥。
十九日。高喜の翁。
　時雨ふる波路を分て旅衣かゝるいふせき里に來にけり。
返し。
　雨に濡れ霜にぬれたる旅衣いさ此里の宿にほさまし。
二十日。寶國寺に在て、　渡舟といふことを人々とともによめる。
　うちとけてぬるまも浪の渡もり呼ふ岸邊の聲のをやまぬ。
　岸遠きほともしられてわたしもり呼ふにこたふる聲仄なる。

故郷の夢

廿一日。あかすむ國に在と見て、あしたになりぬれは、
　霜冴る草の枕もふる里をおもふはかれす夢むすふらし。
父母にまみへ奉るとおもへは夢さめたるに、
　ちゝふ山杵の雪やいかならん身にとし月のつもるおもへは。

田名部へ

廿二日。鵜翦山（うそれ山といひ おそり山といふ）にのほらまくほりして日ころ此里に在れと、やま〳〵雪ふかく

つもり、劔の山なといふめる名たゝるところのいはむら、のほらんことかたからんとひたにいひ、田名部よりまうつるはまほなれは、みちひろう、わけやすからんといふまゝ、けふ其里にとこゝろさして出たつに深阿上人。

たか山の名におそれてや降雪も麓の里はいまた淺きを。

こは、いかゝなと聞へ給ふにこたへて、

雪ふかみ分のほるへき山の名のおそりてこゝに日をふりにけり。

此里のをさ、むら林鬼工といふ人。

雪ふりて山より谷にしろけれはいつれ白河の關やこへなん。

とある返し。

野路山路つもる太雪にたさらなんいさ白河の關はいつこと。

又おなし人、鶯鶯螺といふもの三、ふるさとにもていきねなといひて、その包紙に、

海川をわたせる人のなきときは螺の舟にものりて行らん。

といふ戯うたをかいつけたるに、かへしぬ。

かへるさのつとにするかのそれならて田子の舟をもさしてたのまん。

ふたゝひといひて、いつ。西に、いとちかう見へたる朝日向山、佐土か臺とて、此ふたつの山

朝日向山
佐土か臺

海へたにいやたかうして、松前よりのそむ一めに、しるく見へたるたかねなりけり。さごかたいの麓に日曜大權現とて、たふとき神の祠あり。はた小目名邑といふをへて、冠岩とて大なるおかしき巖あり。又羽色とてまさのあら山のありて、宮木あまた伐いたしぬ。むかしこの山、五萬五千兩こかねいたして、材木にかへたるといふ物語あるにて、山のひろさ、たかさ、おもひはかるへし。そかやまの禁にも、はいろの神とて、三くさの、かんたからをまつりたるみやしろありと聞けと、雪ふかけれは、えまうて奉らす。遠かたにあふきて、

羽色の材木山

かしこしと聞こそ渡れ水鳥のかもの羽色の神おはしとは。

過來し霜風呂の海に札石とて、何ならん書付てける石ありて、汐の引しそきたるをまちて、まれに見ることありと人のいひ、血散濱（いにしへ鬼のかうへきりて、あやなしたる血のちりしよりいふとなん）のいはやのおもしろきも、みちたかひて見侍らさると、人のいふこともねたし。里さくれは、迺胡呂といふところを出てはまちをくれは、正津河といふ邑に小川あり。此みなかみは鵜鶘山の湖より出る流にて、ふるき名は三途川といひて、慈覺大師の作給ふ優婆の像あるを、水にいさなはれてなかれ出ませるを、其まゝ此村に堂たててあかめたり。みなはさかまくたかきしに、木をならへて三尋はかりの橋をわたしたるか、なかははかたふき杜よろほひ、くちたてるを、からきこゝちして、

正津河邑

闞根邑

路に木を並べたり

田名部にて

つみふかきこゝろにたれもみつせ河こゆるは嘸とおもひ渡らん。

ほとなう烏澤といふ小邑の、そはかけに見へたりけるに、みつよつ、とりも鳴たるに、

なれも今ねくらにたとる群からすさはなくかたに宿やとはまし。

川代(かはだい)なといふ村を右に近う見やりて、闞根邑に至りぬ。こは、おそり山の麓にいとちかく、むかしはこゝより分のほりしかと、今は村々しげうたちならひてけれは、そむいて、田名陪の市路を麓にしてまうつるとなん。この行ぬかりたるみちに、遠さ、いくはくもしらす木をしきならへたれば、梯の上をわたるかことくにわつらひなし。こは、こと國に見ぬ路のふるまひ也。行人、くにのかみのおほん恵を、ひたにおもふへし。椛山（かばの木いと多かりしよりいふ名ならん。皮をとり、ついまつとせる木なり）邑を過るに、山ふたつあるを越るしたつかたを靏澤といふ。

霜のつる澤邊にたちて子をしたふ聲や雲井のよそに聞らん。

この澤のへ近う汐みち來りしところなから、今は遠くあせて、鰒つり澤の名のみ殘けると、馬ひくおとこのいへり。女館といふ村あり、いにしへ蝦夷のめのことも、たむろしたりといふもの語あり。栗山といふ村そかひに見へて、田名部の里近からん、入逢のかねとともに夕時雨吹さそひくる山かせに、雨つゝみとうたすひまに、いたく濡たり。ほとなうその里につきしかば、新相(にゐあひ)たれとかいふ旅やかたに宿つけは、やの童集て、ほたさしくへてけるかた

はらに在て、

さすなへに湯はかす小供こゝろせよ時雨にぬれし袖やほさなん。

廿三日。川嶋恒方のやにさふらふ。あるしをはしめ、尙方、中島公世のまとゐに更たり。

廿四日。恒方の云、けふのうら〳〵と長閑さは、いはゆる春なめりとて、聞へたるあるしのうた。

神無月ひかけに山の雪とけて谷の小川の水や增らん。

とよめるを聞つゝ、おなしことに、

いとはやもつもりし山の雪はけふけなん名におふ春の長閑さ。

廿五日。松前の嶋わたりする舟のたよりに、ふみたくふとて、かいやるすゑにこめて、

埋火のもとに集ひてなにくれとかたらひし夜をおもひこそやれ。

廿六日。あるし尙方の、何かしの寺にあそひて作てけるしゐんに、松杉肅寺晚といふ句ありけるを見つゝ、

しけりあひて寺こそ見へね松杉の梢にひゞく入相のかね。

廿七日。きのふけふの雨晴て、はた雪となれは、人々も歌よめるに橋上雪といふことを得き。きのふけふ雪に小橋の埋れてあらぬ方ふむ谷の柴人。

廿八日。夜くたち行まて公世の家にかたらひて、

　歸るさは袖さむからん夜あらしの更るもしらぬ埋火のもと。

庇深き家並

廿九日。雪は日にそひて、けふもいやふりてけれと、此里のならひとて、ひさしひろく作りて軒端のみ行かひすれは、市人やすけにありく。

恐山へ登る

三十日。けふ、山の湯（平曾禮山をやまの湯といへり）にゆきてんとて、あげまきをあないにて巳の剋はかり家を出て、里の西より山路をさし、ゆきかひ分て行みちは、材木をならべてところ〳〵に柱を立て、ものかいてしるべとせり。二股川をへて長阪を行は、おほぶなといひてその木のかれたるもとに、太雪ふみしたきたゝすみて、尻屋の崎、大畑の浦見やるに、蝦夷國の湯山に離れて右の方の遠沖に、しろ〳〵と泡のたゝよふかことき山仄に、見もしらぬたけみゆるを、いかなる山にて、何とかいへる夷の居る島ねならん。あさな夕なかめやりて、しりたることもやと樵夫おほく來るにとへは、こは雪のかゝりたれは見へ侍らん。つねは、あを海原に露見もならはぬ方にこそあなれ、とてさりぬ。

大ぶなの展望

　浪の上にたゝよふ泡のそれならて消み消へすみ見ゆる遠しま。

古は此處も外か濱か

南は釜臥の嶽麓より殘なく、蘆崎、安渡の入江につゝき、野邊地のうら〳〵見やられたり。なへて此あたりをさして那多郡といひ、階上郡ともさたかならねと、いまはもはら北郡田名

金谷、肥泥、宇曾利河邑

矢立の地藏

宇曾利山湖

鬼石

陪の庄といひならはせり。いにしへは、此わたりの海邊みな卒堵かはまにやありなん、ちかき世に、つかろちにのみにこそいふならめ。いまし世は、ところ〲にあかたをさため給へは、ふるき名たゝる處もうつりかはり、おかしきふしは誰もあか國にあらまく、其名に似たる處の露はかゝりもあれは、こは、あしこはまことならぬ、こなたはたゝしとあらかひ、草紙ともにも、こと〲にかいのせたるすちいと多し。阿倍のいくさ起りたるころ、此みちのおくの氣仙郡司金爲時、下毛野興重等奥の兵を集めけるに、安倍の富忠といふものをはしめ、くま〲にさすらへあるものゝふ、銫屋、仁土呂志、宇曾利の輩、その勢はせ集て二千騎になりぬ、とぞ、かい聞へたりける。いま金谷(かなや)村あるは、かんなやならん。仁土呂志は肥泥(ひどろ)邑、宇曾利は宇曾利河邑にやあらん、その村々いまもたちならひたりと人のいへり。かくて、檜のみいやしけりたてる檳のあら山のみちをわけて、矢立の地藏といふなるは、杣山賤の斧うちそめて、そかもてる矢といふものたてたるよりいひ初し名にて、弓箭にたつさはりたることあらしとなん。冷水(ひやみづ)といへる清水のかけひ氷り、湯阪も雪にかくろひてふかく、からくしてふみわけたどる〲、埋殘したる鷄栖のもとを、雪たかけれは左に出る。昔はこゝまて牛馬ひきかい至れと、今は三途川を限けるとぞ。大なる湖の汀に出て遠近を見やれは、いふへうもあらぬおもしろさ。さし出たる雪の岡邊風情ことにあれと、鬼石とやらん、こゝしき巖の

そひへたるあたりよりなかれ出る湯の色は、山藍をこきなかしたるかことく、その匂ひ、えたへしのひもあへねは、しはしたに、たちもとゝまらで、丸木ならへたる小橋を渡らんとせしかは、あないの云、罪深からんものこゝになれは、此橋、糸なとを引かけたるかとおほへ、鬼石は、いける、まほの姿してにらまひ、岸邊の楢も、はたひろのたつとくゑして、おそろしきふるまひをなしてけれは、わたらんことかたう、かゝる三途の橋より、みな歸り侍るとそ。そのためし、紀のたかの山にひとし。見たまへ、あなる畜生地獄の流、あなくささて、袖もて鼻おしふたきてとく過る。湖の高岸のひんかしはたかき岡にて、檜、石楠花の生ひましり、雪淺きかたには、つげ、ゆづる葉、高野つゝじ（松嶋夷山にあり、山茶といふ）、眞辟葛しげう生ひ茂りたり。渚を見れは水鳥むれり。

三途の橋

　冬かれぬ木々の梢のほかに又鴨の青羽の色をこそ見れ。

水海の面に夕日かけろひて、たかねの雲、はなたいろにうすくかゝりて、やをらくれ行に、

　いかてかは峯ともしらん夕まくれ雲と雪との色そわかれぬ。

菩提寺一泊

けいしうつ音ほのかに聞へて、みてらになれは、門のとより音信たるを聞て、まつの火さゝけて、たそならんといふに、しか／＼といらへて入ば腰なゝめなる老ほうし、この雪みちをわけて、能こそのほりおはしたれ。さそ寒くや侍らん。かゝる山寺のもてなしにはとて、柱の

鼬鼯鼠の類

悦山の額

ごときたき木をいくらもつかね、さしくへさせてけれは、たちまち火は高くもへて、冴へ行小夜中ともおほへす。軒端の雪やしたとけぬらん、玉水の音聞へたり。ほうしの、火近く寄てとひたにいへれと、此火のあつさに遠くしそきてものくひ、やをらふしたるころ、もののうめく聲聞へたるを、こは、いかなるものにかと、しのひやかにひとりこちたるを、枕かみに、あるしの老ほうしふしたるか耳とく聞て、いつも冬になれは鼬、鼯鼠のたくひ、とより入來て鼠追めくりとりくふ。それにやあらんと、しはふきましりに寐物語あれは戯歌。

　夜とともにいねみいねすみおりゐたち落るともなき鼯のこゑ。

ほうし、また、とはくらきにおき出てみすきやうありけるに、そのあたりならん、鼯の聲鳴もをやまねは、

　法の師のみのりとなふる窓ちかく曉おつるむさゝひの聲。

霜月朔の日。あさとくおき出て鷄頭山を見やり、軒はに近き湯泉を汲て手あらふ。袖に霜冴へたり。

　いつるゆの末や氷のむすふらん朝戸出寒く霜さやくなり。

さはかりふかき雪なから、みてらのほとりはいと淺く、温泉の涌出るあたりは、たへてつもらす。本堂にまうてゝあふけは、釜臥山、菩提寺といふふたつの額は、もろこしの僧侶悦山

の、めてたうかいなし給ふにこそ。

鳥ならてあとなき雪の山ふかく分れはこゝにみねのふる寺。

山奥より、木を刳て泉をとるここ遙にめぐり來て、軒近くとく〳〵と落くるをくみて、みてらにはこふ。

はる〳〵とめぐる掛樋のたへ〳〵になかはは氷る冬の山寺。

観音堂参詣

あまたの御堂殘なうとさし、あるは簾のすたれもてめくりをかこひて、みほとけもみな冬籠し給ふなれは、いともの淋しう。しかはあれと、湯ふねのわきかへりなかるゝ聲、石のあふらのもへ出る音は、山谷にひゝきわたりぬ。觀音の御堂にまうて、伽羅陀山にたくへし山の棽なる御堂に入は、ほうし蹲りてかねうちならし、しはかれたる聲をうちあけて、そも〳〵此みやまは慈覺圓仁大師のひらき給ひて、本尊の地藏ほさちを作給ひ、一字一石のほくゑ經をかいて、つかにこめ給ひしとて今に在り。はた惠心の佛も、なかころの圓空のつくりたるふち、ほさちもある也。凡越の立山にひとしう、もゝみそち六のおそろしきちこくありたりしかと、つみのかきりはてて、うかひぬれは、今し世は其數もすくなう、佛のおほん惠にあへり。たうときことは、此日の本に二のお山とあふき奉る也。佛法僧の鳥は、卯月の八日の夜をはしめに葉月のもちの夜まで、もゝかあまりを鳴ここ今にたへす、三の御法をさへづ

圓仁、惠心、圓空の作佛

佛法僧の鳥

地獄々々

其外處々

りぬと山のとこをいひて、やかてゝるたへのきぬのみとはりをおしあけてけれは、伽羅陀せんのほさちなりとて、くろくすゝづける、なゝさかのみかたしろに黒き麻衣着給ふか、もすそのやれ行たるを、ひとつのふしきと、ゆひもてをしへたり。右に、くろきほさちの斧作のまゝにおましますおほん前をはしめ、大なるふみものをわらにてつくりて奉れり。いつのころにや、すきやうしや此山にこもり居て、すへものの佛を作りぬ、これ千體佛とてわつかに殘りぬ。硫黄のもゆるをさして、なまこの地獄、箸塚、修羅道、かねほりちこくなと雪の下に埋れたるに、新地こくといふなるは、ほのを高うもへあかる音は、なる神にひとし。左に九陪(くのへ)ちこくといふあり。こは、いにしへ左近とのと聞へたるか、國のかみをおかし奉らんとてこゝにおち入給ふ也、見たまへ長刀のあと、そか馬の蹄のあとあり。これなん宇多邑作兵衞かちこくと、あやしくもいへり。たいないくゞりの崖も雪ふかし、又雪なきときも今は行人なしと、あないかたる。五智佛の堂、大杭(おほつくしない)内、小つくしなひ、屛風山とてをしへたり。湖のへたをめくりてほくゑちこく、こくらくはま、獵師ちこく、塞河原、百性ちこく、血の池、はちまんちこく、さかや、糀や見めくりてける中に、鹽やきちこくといふなるは、石の上に霜のおきたるかとおもふは、こゝら、しほの積たる也。これを人ことになめて口の藥とせり。小つるきの山あり。圓仁の坐禪石、舍利濱、經塚、そめものし、こなべやき、みたま石、しはすみそかの夕、なき人

金物錆びる

にそなふるをみたまめしといへるに似たるとて、しか名にせり柏石など、雪のふかくふれは見へす。しらほねを納るつか、そこは納るつか、冷の湯、ふる瀧の湯、やくしの湯、山かけにゆけは花染の湯とて、うすきくちなし色にわき出、はた、しん瀧といふ湯のねも奥山にありとか。ゆあみ人のかりやあまたたてならへ、かはや、しとするところも細きなかれのうへに造かけたれは、こゝかしこに、やはいと多く、さゝやかなからならひたり。雪ふかく、眞白の山のそかひより雲ののほるかことく、いしのあふらのもへ出るけふり、湯のけふりたちましり、あさ風にふかれたり。

　釜ふしの麓の出湯わきかへり嶺に煙の立のほるなり。

いさかへりてんとて、きのふのすちをたとるに、ちくしやうちこくの匂ひしのひかたく、さくしそく。此山に湯あみに至らん人は、煙草の葉もて、こかね、わきさしのたくひ、かなものはみな包たり。かくせされは、くち葉の色にことく〱くさひのかゝれは、それを辟る料にこそあらめ。水海のそこよりふちく〱と湯は涌出れと、いをもすみ、うすらひもゐたり。鹿、猪、熊、狼なと山おくに在らん、うさき、ましらは、ちかう出ありくならん、さるけものゝふみしたき過たるあと、みちく〱につけたり。劔の山を左に近う行に、

　其秋の霜はものかはきるはかり冴るつるきの山の下路。

ふしたる木の雪拂ひてしはしやすらひ、いと大なる、くち木のたてるにかいつけたり。

わけのほる檊よりまつ山の名のおそれみふしみいやあふく也。

いつのころならん、つのくにのあき人此山にのほりて、たはれうたよみたり。「かまふせてたかねとあつきみのりの湯からだせんじてやまひいゆ也。」といふことの侍りきなと、あないかたる。やがて多那邊になれは、けふは月に三たひの市とて、なにくれの物うる子ら多くつとひ、かれこれとよはひ渡る中に三丈斗の木をおしたてり。これを市神といふ。此末の枝に、はたれのつもりたるを、

田名部の市

あき人の手向とや見ん市姫の神のみかきの雪のしらゆふ。

二日。公世の家に圓居したる夜、歌、ひとつふたつかいつけて、あるしに見せたりけるを見きとて、成章てふ人のもとよりとあり。

田名部滯留

よしあしの浪速しらねと玉かつらかゝる言の葉聞もめつらし。

とよんて、きんつくの館より、あか居る旅館までをくられけるを見て返しせりけるを、きんつくのもとまてかいやる。

おもはすよ人のこと葉の玉かつらかゝるかしこきひかりみんとは。

三日。あしたよりふきしまきして、空はれす暮たり。

四日。夕になりて集ふ。「炭竈煙をよめる。

つとにこり夕にやきていとなみのけふりも細き嶺の炭かま。

遠村雪といふことを、

山本の梢も雪に埋れてけふりのみたつ遠の一むら。

五日。巳の尅はかり、いかつちなりて晴ぬ。夕さりつかた、不退山常念寺淨土なる巖益上人をとふらふに、上絃のかけ、いと高き冬枯の柳の中に鈎なとのやうに見へたり。

月のかけ雪の光に軒近き柳の糸のよるとしもなし。

六日。やまもと保列のもとより、

みちのくの末の松山打こゆるなみ〳〵ならぬ名こそたかけれ。

かくよみて贈られたる返し。

しるへありと越れは人をみちのくのすゑの松山わけしかひとて。

七日。　野寒草。　見増戀。

女郎花尾花葛はな手折にし野原は霜の盛也けり。

磯の波かくともしらし海士のかるみるめ斗に増るおもひを。

八日。吉田懷貞といふくすしのやとをとふらひしかは、あるし、ふてをとりて、

旅人のとふも恥かしおくの海夷か窟に近きすみかを。

となんありけり。こは、「奥の海夷かいはやのけふりたにおもへはなひく風やふくらん。」と聞へたるところも志理彌とて、北海のはてなるへたに今鬼か窟といひて、むかしは蝦夷のこもりたれは、かくはよめる。あるしに返し。

いはやとのけふりはたへてにきはへる里のしるへを尋てそとふ。

九日。木浪といふはまよりとり來りしとて、ちゝの色なるいしなこを人のくれたりけるに、

これも又よむとも盡しさゝれ石よせてきなみのはまにひろはん。

十日。吉祥山圓通寺（菩提寺の本寺なる禪林也けり）にとふらひ、あるしの冠古上人とかたらひてかへる夕くれ、

吉祥山圓通寺

この寺のゆふへは袖の色なから雪に眞白の衣きさ山。

十一日。あさ河わたる八十の老の、しはしたちやすらひて、あか俤のうつれる見たるを人の見せけるに、此かたに、

そのそこにしらぬ翁と水かゝみ老の浪よるおのかすかたを。

十二日。恒方の云、過し夕はしめてとふらひおはしたるとき、かくよみ侍りしかと、ひめおきつるなと聞へて、

夜とともにいさかたらなんまれ人の雪の扉を叩うれしさ。

つまご草鞋

さんごう
どうまん

とありけるに返し。

　けふこゝに雪のとほぞをたゝかすはいかてかしらんふかき情を。

十三日。あか、なにくれと記したる随筆てふふみを見きとて、秋濱武憲といふ人のもとより

　そこふかき心の海と水くきのふてにしたかふ人の言の葉。

とそ聞へたりけるかへし。

　水くきの淺き心をいとふかくあはれをそふる人のことのは。

十四日。この日風ふき雪猶ふるに、爪籠（つまご）わらぐつとて雪みちをわけん料につくりたる、このふみものをうるますらお、門ことにたち〳〵よはふを人の見て、いてかひてむ、こは、さやうの子の遠き村里よりこゝにもて來けるといふを聞つゝ、

　淺からぬ心なるらしつかへますおやのためとてつまこうる身は。

十五日。　寒夜水鳥。

　鳰の海冴る夜ふかくきしなみの氷るか鶩の遠さかる聲。

めくらしふみをもてありくを參語（さんごう）といひ、よねもらひにありくを道万といへり。サンゴウとは、檢斷所より何くれと公の仰ことを、しもさまのかたまてふれありく役にて、ことくにには、ありきといひ、小走なといふめる。はた、かたゐ、ゑとりの長を此郷にてはドウマンと

万人堂

ハットフ
センゾウバウ

いふ也。

十六日。菊池成章のもとよりといふを見れは、過こし七日の夜人々の圓居に、「野寒草「見增戀といへるふたつの題よみたるを聞て、これになすらへて、

見よや人おくの野牧の冬かれに駒もすさめぬ草のあはれを。

なれは猶思ひ增らん涙河見し水くきにこひ渡ぬる。

といふふたくさの歌おくりてける。これにたくへて返し侍る。

霜はいまおくのゝまさのめつらしなかれなて茂る言の葉くさは。

おもひやれなみたかはかぬ旅衣袖の渡に濡てきぬるを。

十七日。そりはしのうへにたゝすみて西の河邊を見やれは、かまふしの麓ちかう杉の一むら茂りたるあり。そか中に海祥山慈眼寺とてふる寺のあとあるを、万人堂とて庵ありといへと、人ありけにも見へさめれは、

世をよそに杉の下いほたれ住て跡なく太雪ふりまさる也。

十八日。蕎麥かひもちゐ、うすゝみやうのものに小豆いれたるをハットフといひ、これを、みそしるにしてくふ。此名を、センゾウバウといふをたうひたり。誰か、いかに付たるにや。

十九日。吉田晴美の家に在りて、岡雪。

かきたへて跡こそ見へね水くきの岡のやかたにつもるしら雪。

舟中雪。

うなの上の浪もひとつに降雪のつもるや浦の小ふねなるらん。

寄雪戀。

しら雪のしらすかほなる人になとつもるおもひのいや增らん。

はちの木の五葉のさゝやかなるに、歌よみてとあるしのいへり。

嫩よりいつ葉の松のいつまてかさかゆく宿のしるしをそしる。

占ひの奇僧

二十日。七十あまりのほうし、しら麻の袋をおひて、聲高う、聞しらぬことをいひ、ほけ〳〵しきさまに何をくるふやと見おれは、ひさこの水を空にうちやり、なにならんとなふ。此山ふしはいつこに生れて、そことさためて居るすみかもなう、いかまほしきところに行、人のいきしには、たなこゝろのやうにさし、家にくれは、せに、よねを人のとらせけれと、多かりけれは返しなとせりける、けうのそみかくだ也けり。名をありまさ〳〵とよへは、

人はいふ此翁こそ世中にありまさしけれこそのうらひに。

松前より綿入を送らる

廿一日。この日松前の舟來ける。そか、ふな人にたくへてある人のもとより、そのくにの寒

さいかならん、此衣着てなと、ねもころにせうそこして、わたあつ〳〵と入たるを贈けれは、此きぬを着て、夜更行まゝにおもひつゝけたり。

いかはかり冴る夜半ともしらぬひのつくしの綿を身に重きて。

おなし島の磯やかたなる花子か、としは十あまりいまひとつ、ふたつにやあらん、その乙女の手して、ふみかい入たる。

雪ふれは次第に寒くなりにけりとこへ行てもおひへなさんな。

となんありける。歌もをさなう賤しけれと、まめなるこゝろさしは、こと人の、えまねつへうもあらされは返しせり。

うなひ子かあはれかくなる水くきのふかき情に袖は濡けり。

女童の雪投

廿二日。めのわらはあまた集ひて、みちさまたけに、いやかたまれる雪をとりて雪なけといふことをして打あひたる中を、ほくゐきやうよむ法師のかしらにさへ、いたく投かけたるさま、うちまきかけられたる遍照寺の僧にひとしかりなん。これに、子老不少のためしをおもひ出て、

たらちねはまた老なくにをとめ子かよそふは雪のかさし也けり。

寒の行事

廿三日。垣のとの柳の南にさしたる枝を、ためらひ折かへるは、此夕、たいしのはし、やゝし

に三もとを奉るとか。なにかしのうはそく、はたかに、けんたいといひて、しりくへ繩のやうなるものを腰斗に引まはし、氷ふみわり水に入てこりし、經よみありき、山かけの八幡にまうてたいまつれり。くるれは、かなつゝみうち、ねんふちをとなへ、つゝみうちては妙法蓮華をとなへありく。これをおしなへて寒念佛といふ、こよひをはしめにせり。

廿四日。此夕の題に、「夜網代」「草庵燈。

もるかたにあしろの氷魚のよるふかくよるや川瀬にみゆるともしひ。

更にけり草の庵に夢もまたむすはぬ床や灯火のかけ。

廿五日。菊池淸茂の、

おろかなる海士たにもかる玉藻あらはかつきてもみんわかのうらなみ。

となんよみて、あかもとに聞へしかは返し。

いさともにたまもやからんしるへしてよる波わけよわかのうら人。

つきり遊ぶ

廿六日。冬こもりのつれ〳〵に爐のめくりに在てかたらひ居れは、わらは、おなしまとゐに灰かいならして、へんつきしてあそふを、こゝにつきりといひ、いさは、えさし、いはゐなとの郡にて間越（まこし）といひて、木のはし、そぎたのやふれを爐の中に立てあそふ。童、はや正月こよ、おもしろうあそひてんと、はかなうかたるに、

市の品々

はしのり すりかい

春來なは猶しもこゝの宿にとへむつきはいとゝたのしかるらん。

廿七日。ことなうくれて、雪はいたくふり來けり。

廿八日。あきはま武憲のよめる。

またしらぬ方にみちひく心をやたとへても見んおくの海山。

この歌のかへし。

いと淺き心をおくの海山とたくへて人のたとらんもうし。

廿九日。寺まうての人々に、太雪ふみしたき、たいらにみちけたれたれと、けふ、いまはたふりそへたり。

斯波數朔の日。雪はあしたよりふるに、鱈よ、安渡たらよとよはひ、菅むしろよ、へりなしよ、つまご、ぞうり、木の皮のくつ、あさり貝、はまくり、あは、ひえ、おほ百合の根、おしかも、たかべ、すゞめかひたまへと、雪おひたる市女、ますらお、聲とよむまてあらかひうりぬ。

二日。あしたなへふり、雪ふりて冴へたり。「冬夜といふことを、

明るやと見へしは雪の光にていまた夜ふかくさゆるねやの戶。

三日。夕附行ころ、齡香山德玄寺門徒のかたはらにある智愚庵のあるし、寶元上人をとふらふとてゆく。橋のうへに童あまた集り、しもとのやうなるものにまたかり、竹うまのことくに

のりて、しみ氷たる雪の中を、つぶてなどの行やうにくたる。これをはしのり、坂のりといふ。松前のわらはのせりけるゝ、すりかいにおなし。

うなひ子か小阪さかのり橋のりてかゝるみゆきに樂しきやつむ。

川面氷りて

四日。橋のうへにたちて遠近を見やれは、河の面はのこれるくまもなう八重氷のゐて、雪のうへにつもりたる川上より、鴨のむれ來る羽音聞へたり。

殘なく氷る川瀬の夕まくれいつこの浪にかもやたつらん。

明和に出土の鏡

五日。德元寺の寂隆上人をとふらふに、ふるきかゝみに、穴みつまてあきたるを、あるし、とうたして、見たまへ、これなん明和のころ、をたきさいふやまちの野良より、土さるとてほりいたしたり。いと大なる人の頭と、錢、つるぎたちなとに、この鏡もましりていてたり。せにはたゝ永樂通寶のみにて、ことせにはなかりけり。いかなる人をか埋みおきたりけんしらす、いそきもとのことに埋て、今はこれひとつ寺にのこし侍る。かうへは、なへての人のともおほへ侍らす、大なりと聞へたり。

十二日。この五六日はかり、ことなければ記さす。あさひらけ行ころなへふりて、ひる冴へたり。

大畑に行く

十三日。ある人にいさなはれて、おほはたの湊邊に行。あしたより空はれて、長閑さ春の思

山働きの女達

那古の林 圓仁石經塚

ひせり。椛山里に來けり。此邑はおしなへて牛飼のみ住て、うしひくをわさに世わたりをる其童にやあらん、うしふたつによねつけて、しやつらしやうなしの牛（べこ）よ、とこに入ならんといきまき、ふときむちしておふ。

あけまきか雪のなか路ゆきなやみうしや世渡るわさにひかれて。

女あまた、いろ〳〵衣を着、あるは木の皮のけらみのといふものをうへに着て、てつかいしとて、うさぎのかは、きつねのかはをたふさよりかひなにさし、木の皮のはゞきに橇をふみ、つゝみふろしきやうのものにかしらをつゝみ、ときをのを腰にさして山路にゆくは、さらに女のけちめやはみゆる。とし高き翁のつま木おひたるか、こなたさまに小阪くたりく。

こりつみしたかき年木に老の坂こゆるやいとゝくるしかるらん。

雪車にものつみたる男、しはし休らひ給へ、みち〳〵かたらひ侍らむ。あしこは那胡の林とて、むかし盗人のみすみて、今もかみさひたり。あなたは圓仁大師の石經つか、こゝにも侍れと、今は雪の下にとかたりもて來るに、時の間に空くらかりて、雪はかきたれてふれり。左は山かけ、右は海つらのみちを行に、いと遠くおほへてたとるに、くる人も行過るも、あなさむ、あなさむとのみ、ひとりこちていふ聲まて寒けに、雪ふりて風さへいたくふけは、おなしこゝちに、

三途河の優婆堂

山おろし雪吹はま風をやみなき寒さはしのへ行すりの袖。

三途河の優婆堂をかみたまへ、たうときみほとけなり。慈覺大師のたましゐをこめて作たまへは、此ひかりにおちて、おいぬ狼をいふ、うちなの、ゆめ此邑に入來す、又きつね、たぬきにをかされたるものなけん。いて、あない申さんとて、村のをさに、かきこひとりて、みちなきかたを雪しと〱とふみしたき、平等庵とて、なゝさかの地藏ちうそんにたてる左のくまに、たけ二尺斗のうはのみかたしろ、いけるかことし。これに、くろき麻の衣をかけて奉れり。あなたに大なる庵あり、それにおましましかと、あはれたれは、近きころこゝの堂にすへ奉るといふ。平等庵の額は洞上大成書とあり。やをら庵の戸に鎖さし、あしすたれ引まはして出く。さはかりひろき川瀬ひしと氷にふたかれは、汀はなれて、井のことく、氷うかちて水くみ、あるはゆきかひをしたり。

あやうさはよみならねともみつせ河うすき氷を渡るかち人。

榛杜仄かに

こゝを海邊に出て行に、いよゝ雪降來て、こしかた行すゑも見へす。なみと衢との聲は聞けと、うなのうへは雪に見もわかねと、むかふかたに、むかし蝦夷のすみたりしといふめる榛杜の梢はかり仄に見やらるゝに、見しかたとはしるへにたとる〱、

むらちとりなれもつはさや重からんはらへと袖に雪のふれれは。

ゆふへ近う來つきて、田中なにかし、直躬かおやなる館にとまる。小夜なかの月おもしろし。

大畑にて

十四日。あしたより雨ふる。此夜「爐火似春といふことを、

　冬こもりたれも花まつ埋火の圓居は春の思也けり。

月前戀といふことを、

　月見れはものやおもふと人のとふつゝめと宿る袖のなみたを。

十五日。ひとりある女のもとに人々酒のみて、かたはらにかたのあるを見て、このかたともにたくへて戀の歌いさよみてん。此女の、近きころは男したれは、夜るはひとりのみもあらさりけれは、なといひて墨すりてけれは、此人々にかはりて、

　おもへとも人とつれなくすみかきのえやはむすはん契也けり。

溺死者寄りし物語

十六日。中臺院寶國寺なといへりに行とて人の路にかたるを聞は、つかろの浦よりこなたの磯に、なためくりする舟の、はやちにふかれ浪にうちかへされて、ちやうご、うしたきといふあら磯に、人、みたり、よたりなかれより、しみかゝまりふし、また、いきたへさなるや、狼の山より出來て、くひもて入たるにやあらん、ひきたるあとは、雪のうへに蘇枋をなかしたるやうに血のなかれたり。このころのことといふ、おもひやるへし。

田名部へ
かいしき
うざれとり
わあゑ
へがら
へりなし

十七日。雨をやみなく、あしたより夕になりて風猶吹たり。
十八日。あさ雨ふる、夕に風ふきぬ。「冬鐘といふことを、

入逢のかねより霜はおく山に歸るゆふへの袖や冴らん。

十九日。雪の空はれんとにはあらねと、月のほのかにてれは、田名陪に歸らんとて、ひるよりいてたつ。ほとなく野畔の濱中になれは、ふゝきいやふきにふいて、遠近の方露見やれす。雪のうへにふみつけたる路もふりうつもれて、たま〳〵わけ來りしあとあれは、時のまに吹かくろひて、さらに人の通しかたもあらさめれは、

行さきに猶ふる雪やふかからんそりたにひかぬおくのはま路。

三途川の邊にくれは、女をきな、かいしき(雪かい分る具なり)を杖にすかり、ちかとなりにや行らんたちとゝまりて、こはいかにそや、いつこにかいかれん、このふきしばれにといふを見れは、過つるころ、みち〳〵たすけともなひ來し、みつわさしたるしらかみの女なり。此もはらの云、うざねとりて(辛勞をいふなり)行てんよりは、きたなけなりとも一夜とまりたまへ、ゆふけには、ひえの飯にてもうさん。なる人ならは、ひえにてかもしたる酒すゝめん、又、そばのもちやあらん。わあゑの(わか家のなり)せはくとも、へがら(ひえのからなり)へりなし(菅むしろなり)しきかさねて、寒くともあかしてといふは、七府には君を宿してわれみふにねんといふ、歌のこゝろはへにひとしかりけれ

は、

よしみふに夢むすふとも宿からんとふの菅こもこよひしきねて。

ひえしとぎ

ものはてて、たき火のほとりに小夜更るまてあれは、これくひねとて、ひえしとぎといふ物を焼て、おしきに盛たり。ものほしげにもあらねは、くはてかたらふを、さそ、きたなうやおほしてん、ふすまもいとうすし、さむさ、しのひてとて、ふさしむ。鷄の鳴いつるに夢さめて、寒さにえふしもつかて、ひましらみ行は、ひとりこちぬ。

ねやの戸のさへてそ明ぬみちのくのとふのすかこもめもあはすして。

雪の濱路を坂のり

二十日。かち人の來らんをまちて、路つきたらは出ゆけといふ。行かひあれは出て、來る村はしのかたそは、尾のやうなるところに、小ともあまた、ちいさき雪車にのりて坂のりのわさしたり。

うなひ子かくたるもはやしのるそりの尾上の雪のいとたかくして。

ひろ野になれは、山かせ、さと吹來て、青うなはらなとに浪のたつとおほへて、ふりつみたる雪をふきもてありく。かい分て遠近に人の來かゝるは、磯なみわくるかと見やられて、

旅人のけふりの波を分るやと見へしは遠のふゝきなりけり。

田名部歸著

くら〱になりて田名部につきぬ。

廿一日。日てれり。市人あまた軒もせに入みちて、なにくれのものうりありくに、

　ふみわくるちまたの雪の高ければ軒のしたみち通ふ市人。

廿二日。すゝとりすとて、うち拂ふ門多し。

節分追儺會

廿三日。せちぶ也。豆はやす男、炭、松の葉、いはし、ひろめなど、いり豆にませて枡に入て、あといふいきに、鬼はそにといひ、うといふ聲に、ふくをよはひ、「なにのめをうつ、鬼の目をうつ。」とよはふは、打擲四方鬼眼睛ならんか。御菩薩(みそろ)の池の邊なる鬼やらふとて、三石三斗の豆をうちしをいふにやあらん。くまくうちめくり、かん棚、あかたなに、しとぎ、いり豆そなへ奉り、家ことにぬかつく。

廿四日。けふは立春なりければ、

　としなみはまた越なくに春のたつ末の松山いかにかすまん。(かすみ初らし(ママ))

夕くれちかく、遠かたのやまくを見やりて、

　春のけふたつとはいへと嶺の雪かすまぬほとやことしなるらん。

廿五日。あきはま武憲のもとに行しかは、かゝるうたありとて、森岡の里なりける小本侚芳といふ人うらく見ありき、おかしきところくになかめたりけるか、いとおほうありけるを、あろし、とうたして見せけるを見つゝ、

三年聟
五年聟
をなめ
あつは
おこりこ

おもひやるまた見ぬ浦の友衛つけしすさひのあとをしるへに。

きりがきのとに行あひて、あな久しともひさし、まつ、ことなしよと男女の聲にてかたるを聞は、三年聟とりてけるはいかに。わか家のさんねんむこは、はや、をなめもちてけり。此ころは、あつはかむねの内は、おこりこのことならん。いつも〳〵せちありけるといふ。その男にむすめをやるべけれと、女の方の家つくへきものゝ、また心をさなけれは、さん年むこ、五ねんむことて、みとせ、いつとせとさためて其家に行て、あるしとなるか、をとなひたるをまちて、契しとしも過れは、むすめをむこのかたにつれ行ならひ也。世にいふ、うしろみをしてかへる也、三年嫁もこれにひとし。妻をあつはといひ、をなめとは妾をいひ、おこりこは炭火をいふとそ。此男女にかはりて、たはれうたをと人もひたにいへれは、ひたんにかいつく。

やのあつはのよめる。

むねの火のおこりことなる我をかくよそにみとせのむこかねのうき。

三年むこのかへし。

末かけし契たかはし妹かうむをなめに心よしかよふとも。

年の市

廿六日。けふはとしの市とて、岡のやうにつもりたる雪のうへに小松さしつかね、たこ、た

ら、そひ、あぶらめ、菅むしろ、手桶、かひげ（杓をいふ）なと、とし越のやうゐの具ともうりかふなかに、八十の翁、さゝやかの松に雪のふりかゝりたるを、ふりかさしありく。

しら雪のかしらにつもる老も出てとしの市とてさはくいとなさ。

棒やり遊び

廿七日。わらはへ、たか杖をかた雪の上に投やりければ、その行ことのとさ、矢なとのやうにはるゝとなり行、これを棒やりとて、ひねもすして、誰まけて、われかちてとあらかひたり。

廿八日。歳暮のこゝろを、

ひきかへすためしもあらて年くれぬあたゝら眞弓春ちかきまて。

地震頻り也

萬歳樂〳〵

うまの貝ふくころ、やもたふるはかり、なへふり出てければ、ありとある人みな、くつもふまて高雪のうへににけのぼり、聲とよむまて「まんさいらく〳〵」のみとなふに、舟なとの浪にたゆたふかことく軒かたふき、ひし〳〵と鳴うこき、雪もうこもちてやみぬ。こゝらの人いきつきもあへす、又なへして、ひねもす、よひと夜ふりたり。いかならんとか。

廿九日。けふもをやみなう、なへ、とき〳〵頻たり。人のこゝろさらにおちゐす、たゝ、にけやうゐのみそしたりける。

國主に三種の貢を奉る

三十日。わたくし大なといふわさもあらて、たゝ、こよみのはかせにまかせたり。此日、三部

の田子(たつこ)村の長蛇沼(じやぬま)惣左衛門、相米(そうまい)彌左衛門の家より粟糠のもち、兎の醬(なちもの)、裏白の雉子とし、きゞすの足のうらましろなるを奉りて、正月の朔のまさなことにめして、市路に人つかはして、にごり酒かひもて、國のかみのあるし給ひてのち、物はしめには此二人の長かかへさに、御傳馬御切手といふものかい給ふか、ふてとれるのはしめ也とか。此長か遠つおや、軍起しころにや、此かみの遠つみおや、いまたのいなきもなういはみし給ひしとき、その三くさのにへ奉りしか、ことのはしめといひつたふる。夕近く、雪の中に杁(えふり)すり、久波、かいしきもて、山なす雪をかいならし門松立るほと、なへふりてくれ行は、みたまに飯奉るころ童とに出て、門々の雪のうへに、椛の皮に火ともし出て、まつとし、又たきぬ。これをさいとりかばといふは柴燈にやあらん、幸(さい)とりにやあらん。

於久能宇良〳〵

廿七冊
南部
南部

寛政五年丑の夏、うつきのはしめ、みちのおく鉏のみなとより牛瀧の浦に渡り、脇野澤越の山路をわけて田鍋のあかたに歸り、去年見し宇曾利山にふたゝひのほり、水無月つこもりの日

かいとめて、

おなしく　奥のうら〳〵と

名つけたり。

四月一日下北牛島左井を出て

さける、さかさる花のやま〳〵に見ゆるは、春たに、いまたいたらぬとおもふへかめるに、けふは宇都支の朔になりぬれと、みちのおくのならひとて、いまはた袖もいや寒く、北の浦風身にたへかたう、衣ぬきかふるとはあらねと、としことにいひならはせるためしなれは、

夏はけさきならし衣かふるとも又花の香や袖にとめなん。

牛瀧の磯を見てん、浦山のさくらも見なんとて、犀のみなとへを西に小舟にのりて、辨財天のおましの島をこきさくるに、大魚島とこ遠く見へたり。

沖津しま霞の衣ぬきかへてなみのしらきぬかゝる涼しさ。

めおの矢越やまの麓をこき行に、わたり嶋の矢越ねも仄に見やるかたは、しほにくもりてくらきに、釣するならん、こゝらの小舟たゝよへり。

夷人のはなつ矢こしの山ちかくわけてなみゐる海士のつりふね。

かんかけのうらとふ、みやしろのしたつかたは、大なるいはやとか。いそやといふやかた

福浦山の櫻

あなる邊をめくりて、あなまといふにあま鳥むれり。長後、長はまをへて福浦山に入道石とて、みね越にさし出たるあたりは、なへてうす紅の櫻盛なるは、むら消ゆる雪に夕日のてれるかことし。

さくら咲山のした風ふく浦のあまのたもとやいかににほはん。

たゝ此山かけに、こき離れんことのうけくて、

いましはし楫とりなをせ舟寄ていそ山さくら盛をや見む。

ふねのときことのねたく、かへり見かちに、なかめ捨かたくて、

なみ遠く濱風のふくうら山にさそはぬ雲やさくらなるらん。

つりする舟近く行に、さかつきとれるふなこら、なによけんとて、あはひ、いけなからくふめる。又、なからといふ黑きいをつりて舟にみち〳〵たり。

あま衣かへてけふより夏なから花の香さそふうら風そふく。

佛が字多

ほとけかうだといふ磯邊の石ともは、たかうなのならひ生たるかことく、工なとのけつり出せるやうに、これらの岩の、けにや佛に似たりけれ。極樂はまといふあり。いさこなとは、しら雪をしきたらんにひさしく、世にたくひなう見ところおほき岸邊なから、やま〳〵の花さけれは、これに心うかれて、そことめもとゝまらす。あらきしほせの灘分れと、ゑひたる

天蓋石

牛瀧上陸

眞如庵の櫻

こゝちもおほへす、うしたきのやかたちかくなりて、てんがい石といふは、衣笠に、むかしは似たりけるを、石くたけて、いまは蛙のかさなりをるかことなれは、かはつ石ともいひてんか。うし穴といふ洞あり、うし石といふか礒にふしたり。舟よりおりて、浦のをさ坂井何かし、とみうとにやあらん、間ひろく、家きよらに作りなしたるにとまる。此やに、左井のみなとへなるくすし三上溫といへる人あれは、うちものかたらひ居るに雨ふりいて、浪風しきりたり。

花の色のあすはうつらん礒の波よるの音きく雨そものうき。

二日。晴たり。たちならふやは高き山の麓なれは、ふりあふきて、あさゆふの窓に花をや見るらんなとおもひやられたるに、おきなひたる男、花あるかたを見やりたゝすむに、

浦人のあふく軒はの山さくらいまはた雪の殘るとや見ん。

近き邊見んとて神明のみやしろにまうて、辨財天の祠にまうて眞如庵といふに入ぬ。元祿のむかしは祥雲院といひしとか、みほとけをはしめ淸らかにたてり。みきりの櫻盛なるか、きり籬の中に見へたり。

明らけくすます心の月見てもさはりやはてん花のしら雲。

此山かけに瀧あり、いそに牛石あれは、ところの名にせりとなん。

陸奥の果て

ひきかへすうしの名におふ瀧つなみかけてにこらぬ世のためしとて。

三日。あしたよりくもる。磯邊に出て、うし穴のあたりを行めくり遠方を見れは、かきりなきうなのうへ、ひのもとの北、みちのくのはて、つかろちの烏鐵よりはひんかし、尻箭の埼よりは西に中りて、そのふたつのなかに扇のことくさし出たる泊にて、人しらす世の中のとなるおもひすれと、ふりことからは、あかたの人にことならす。わきて水きよく、家居は、あかたよりもきよけにすみなし、うまうしをかはされは、やの前しりに、露斗のちりもゐさりけり。むかふ海面は紆數雞都函館をいふの山いと近く見やり、其沖邊につりする舟あれは、

撈舟の行かひ近くみちのくのちしまの蝦夷にことゝひやせん。

猶そのかたを見つゝ、おもひつゝけたり。

見る人も浪の千里の外にすむ夷の嶋邊も花や咲らん。

とと鳥 てふま鳥

軒はの山に聞へたるは、つつ鳥にやあらんとおもふに、みねに鳴は、とゝ鳥、麓に聲したるはてふま鳥と童のいふに、

さらぬたにちれはそいとゝ行やらてふまゝくもおし花のしら雪。

火鳥か

夜くたち行ころ、わらはなとの、はかなう吹すさむ笛のやうに聞へたるは、何ならんとゝへは、火鳥にや侍らんか。ひとりにはことなるやうに侍れと、ほかにまきるゝ鳥もあらしかし

と。

夜とともにさかしき山を吹笛の聲としきけは鳥そ鳴なる。

四日。よきあさなきなれは浦囘見なんと、近き邊まて小舟を岸のみこかせて、汐もなみもこゝろにかなひ長閑やかにて、棹のとくさすもねたく、佛か宇多てふ處を過て極樂はまといふにつけて、しはしとておりぬ。磯の沙は、しらけのよねにたとへつへう、はた、雪霜をふむこゝちして、しら洲の上に、ゆひもて戯うたかいつくる。

極樂濱

こくらくのはまのまさこしふむ人の終に佛かうたかひもなし。

福浦にて

絲海苔の産

やをらこきはなれて福浦につけて、山路も分見まほしく、舟の中にいさなひつる三上温にわかれて磯やかたに休らひ居れは、やの女、これたうひてとて、細くいと長く、ふたさか、みさかの紫菜を、おしきの上にいさゝかのせて出せり。これなん、冬になりていと寒く海のあれ行ころ、腰に長き綱をつけて、今ひとりは高岸にのほり、岩にかゝりたるを、そこゝととらしむ。あらしほのからきめ、いはんかたなしとかたりぬ。この名を絲海苔、又蔓海苺ともいふとなん。万葉集のうたに、「海若の奥に生たる繩乘の名はそものらし戀はしぬとも。」「わたつみのおきつなはのりくるときと妹かまつらん月はへにつゝ。」とよみ聞へしも、此ことにや、いかゝ。繩苔ともいふへきものか。しかはあれと、こと處には、ゆめ、あらさなるも

のにて、こゝにもまれ〳〵に摘てけるなとかたるに、石菅自折もたる童、この宿の門に立て茵花を口にふゝみて、たゝ吹にふき、あるはくらふ。こは、いつこにさとへは、あのやまかけに多く咲たるをと、手さしをしへたり。かつらのりといふことを、うちたはれ折句歌に、
かけたかくつゝし咲てふらん山をのきはに近きりんせんと見ん。
大黄楊の坂なといふ、さかしのみねをおりのほりて行に、櫻こゝかしこに咲たりける梢の、

大黄楊の坂

長濱

長後

筍越石

鍵懸の祈

左井歸著

風はあらてうちそよくあり。いかにやあらんと見るに、まみてふけものゝ、木のうれにのほりたるにこそ。

花のさくつゝらやまみちわけ捨て出こしあとにかゝるしら雲。

遠近に花はさけと雲ふかく埋て、えしらさりけれは、

まかひにしみねは櫻の色なからまことの雲にかくろふそうき。

長濱といふを行なやむに、まりこといふ貝多きを見て休らふ。

うなのそこに誰かあけけむまりこかひ礒邊に高く浪の音して。

長後のやかたに至るに、岩のかけやふれたることき石に、わらくつさし通す斗あゆみこうして、そのところになりぬ。あなまをへて、いそや村を行て、筍越のこなたに雌矢越石、雄筍越石とて、その高さ百尋ならんかたてる巖あり。ちいさきほくらいふたつあるは、ほんたの神、やふねとようけひめを祭るといふ。二の鳥居に、木の枝をかきさしうちかけたるは、けさうするねかひなりといふ。されは神掛(かんかけ)といひ又鍵懸ともかくにや。矢こしの礒やかたの高きかきねことに、あし長き餶魚をほしたるか、藤の咲たるに似たりけれは行く戯歌。

めつらしなたこのふち浪夏かけて咲る矢越のむらさきのいろ。

左井になりて、しなたのやにつく。

法性寺の櫻

五日。雨ひねもすふれは、夕つかたの晴間、松齡山法性寺の櫻見に至て、

咲はちるならひありとも此寺の花にはゆつれ松のよはひを。

夜邊になりてくるに、大なる蛙、小石のあるやうに出て路をふたけは、ふみしたかれて死事数をしらす。うるさく、世にことなるみち也。

發信寺の藤

六日。日はほのかにてれり。龜井山發信寺に珠阿上人の在けるをとふらひ行は、砌の池の邊に藤の咲たり。

万世をふへきかめ井の水清くなひきそ渡る花の藤なみ。

ちかき隣に、大法山淨信寺といふとなんうちあはれたる寺に、妙法とかいたる佛の具なと花そのにくちまろひ、さくら、山なしの盛なるに、李花の風にふかるゝかあはれなれは、

咲匂ふすもゝは雪とふる寺のあれし軒端にやま風そふく。

杣木を流す

きのふの雨に水かさまされは、山河に杣木なかして海の面にちりなかれたゝよふを、小舟あまたのり出て、これをとりて曳てんと浪のまに〳〵もとめありくさま、画なと見しにことならす。

行春のなかれてとまるみなと邊や杣木もなみの花咲にけり。

たこ歌ふ

ひきとゐならひ、うたひ、つゝみうつやあり。此浦の多古とて、くぐつ、うかれめのたくひ

也。かく、よんことにうたふなれは、

うかれたるみほの松風吹すさひたこの浦なみよる〳〵の聲。

と、珠流河のなところにたくへていへは、閒人、おさかひをはなちたり。

七日。夜邊より雨ひねもすふれり。

郭公ふり出てなけまつおもひをやまぬあめの夕くれのそら。

過しころ、ゆくりなう、澁田かもとにありて珠阿上人にふたゝひまみへしむしろに、上人ありつる句に、こよひいひつきたるをのす。

幸にけふおもはす友にあふひかな　　珠阿

待つけてきくやまほとときす　　秀雄

いさなひてゆかはや里の見ゆるまて　　秀

眞帆にいさみをもつかちの音　　阿

島松の梢ほのかに出る月　　秀(マヽ)

あしふく軒にころもうつなり　　秀

八日。長福寺に圓居して珠阿彌陀佛のいはく、

佛の身灌くしつくやのりの海

卯の花山のしらむあけほの　秀雄

名香の薫る臺にまとゐして　秀・

聞鈴むしのこゑも殊勝ぬ　阿

出るより月の照そふ高樓に　阿

薄に殘るむらさめのつゆ　秀

藥師佛詣で

けふは、此浦山におましのある、やくしふちにのほりまうつるとて、手毎に、さゝえに、にこれる酒をもちて、これをみきに奉りぬ。こゝに夕ちかくのほれは、石のほとけ三たてりけるに、つゝし、さくら、やまふき、すみれなとの手向せり。やま〳〵のさくら咲みちたるは雪か雲かと、わか葉の梢におしへたてられたる、猶おかし。

けふこゝにわけすはそれとしら雲のかゝる櫻をよそに見なさん。

鳥の一聲は、それかあらぬかなと人のいへと、

ほとときすまたんおもひも夏山の花のしら雲かゝるたのしさ。

雨のふり出れと、みのあらねは、まうてたる人の布のつゝみをかりもて、あまつゝみにして、やをら晴たれはかへしやる。

雨しのくみのしろ衣ほすひまや袖につゝみてかへす花の香。

をたきてふ山に、さくら、いたく咲たるを見やりつゝくたる。谷かけに鶯の鳴たり。

むら雲のとつるさ見れは谷の戸の櫻にこもる鶯の聲。

九日。風はやゝ吹て、海のうへくもりて寒し。田鍋のあかたなる菊池成章、こたひ、おほやけのことにたつさはりて磯の浦山わけめくりて、けふの夕つかた、此みなとに、きやとれるときゝて、

郭公いつこの山に聞つやと初音よりまつ人をこそまて。

十日。つとめて、なりあきらのもとより文來けるを見れは、とみに、あかたの君にいさなはれて行なと、ことつてにいひて、きのふの返しあり。

時鳥ありとはきけとかたらはんいとまもなつの葉山しけやま。

この夜邊、雨のわりなうふりてけるに、

はつ聲はつれなきものとほとときすまたて日をふる雨の夜そうき。

雨の音もをやみたれは、かゝるはれまなとおもひめくらして、さらにいねもつかて、かけろと鷄の鳴、はた、聲たかう行ものあり。何ならんと聞は、水札てふ鳥の鳴たるつれなさに、

數ならぬ身をもおもはゝほとときすよそのかへさの一聲はなけ。

とて、ふすかとすれは、しのゝめ近う二聲三こゑなのりたるを、ゆくりなきはつ音なれは、そ

れかあらぬかとたどりて、

鳴ぬ夜をまちならひつゝ時鳥心つからやまよふひと聲。

ふしたるやの空さらす、百千返鳴ことのうれしう、あたなることの葉もまことしあれは、あめにも通ふならんと、和歌のかんたちにぬさたいまつる。

十一日。浦のをさ若山かもとより、松のたてるもとに琴たつさへて瀧見たるかたに、歌よみくはへてとて、もて來けるに、

松風の音も涼しくことのをに瀧のしら糸むすひそふらし。

はた寒山拾得の画に、

つもるともはらひな捨そちる花の雪をふみ見る窓の光に。

自性院寶物

淸水寺のうはそく自性院のやにとふらへは、あるし、われふるきものもてりとて、からうつのふたおしあけて、後西院の四の皇子春日忍照宮の御手にて、箱根八幡の額あり。「僞になりとしてこそなりなましおもはゝおもへとにもかくにも。」の色紙かた、兆傳司の、よに出給ふ雪のやま人、一休上人の諸惡莫作修善奉行、菅大臣の御筆に「霞あへす猶ふる雪に空とちて春ものふかきうつみ火のもと。」此くにのかみ源重信の「又も世に似るものやある春夜の花よりくもる月のにほひに。」とかいなし給ふに、智海大とこのゑかける不動尊、いはゆ

る十万躰のうちならんか、八十あまりのとしにてかくとあり。四句梵形のめてたさ、老のほけ〳〵しきすさみともおほへす。これなんもてるやには、ゆめ、火のあやまちあらしかし。さるゆへにや、明應のむかしより、あへてことなけんとよろこひて、みな、もとのことにとりをさめたり。

行末の恵そしるき此寺もさすかに清き水くきのあと。

材木石の利用

十二日。郭公聞はやと、近きあたりのかたそは、山かけをめくるに、このあたり、材木石の礒輪にいと多けれは、とりはこひて花そのゝへたて、やの上にあけてそきたにおき、あるはうちおり、みしかきをつみて寺のづゐひちなと作り、又はおしたて、よき木なとをわりたるかことに、七尺八尺あるをそれ〳〵につかひたるかよく見やられ、柴垣ゆひめくらしたるなかに、女ともあまた、しら布の前たれにこしをまとひ、つゝみにかしらおほひ、はち卷し、ちいさきくわして、つちかいなし豆まきわたし、山かけの小田かいならせり。

田畑の女達

いかに又四手の田長はなつ山のしけきをそふるわさのいとなさ。

十三日。夜邊より雨ふる。午のときはかり、時鳥の、家の邊を近つきあまたたひなけは、

雨にけふ翅やぬれんほとときすしはし軒はに宿りてもなけ。

十四日。申はかり、なへふりぬ。夕くれつかた山賤の、躑躅、蕨折もてかへるを見やりて、

勅點和歌集

左井を立つ

ごんべ島

夏山にましるつゝしの下わらひ折そへて家路かへる柴人。

待郭公といふことを、

はつ聲は人もまつらんいとまあらはこゝにかたらへ山ほとゝきす。

時鳥つれなきものと初聲を人の心に里やわくらん。

十五日。清水寺よりかりて見たる万治（三年四月）寛文（二年四月）の勅點和歌の冊子を、けふなん、そのうはそくに返しやるとて、

かしこしないまもその世を水くきにみかけける玉のこゑをとゝめて。

十六日。ふたゝひ牛瀧の浦をめくり、田鍋に、うら／＼つたひ見つゝ歸てんとて、しほのひるまはかり出たつ。礒邊の小舟をたのみて、ごんべ島に渡り、へんてんを拜み奉る。むかしこのほとりまて入江にて、白鳥のおほくすみて白鳥島といひしとなん。近き世に、かもめの多くむれり。かもめをかこめといひあやまち、かもしをはふき、ごめと、わたり島なとにてもはらいふを、此うら人のなへて、こんべと、はねいふめるもあやしきに、僧侶なとやしたりけん、辨財天の梁に權部（ごんべ）嶋とかいなしたるも又あやし。やかて糠森（田名陪のうら／＼に此ぬかもりの名三所にあり）の邊よりおりて、箭越の大岩のこなたにましませる、かんかけのみやしろの鳥井に櫻をこきて、大朶のかきをうちかけたるに、

松前及津輕を望むに

長後泊り

こゝろせよ花のしらゆふ神かけてよしやうけひくためしありとも。

此細路のさかしきところをおりのほるくるしみ、けにやおらん、牛の跡のおとは、岩のうへにくほみ入たり。みち行友、しはし〳〵と休らひやすらひ行に、うちむかふかたは松前の島、消へ殘る雪のやま〳〵、夷かちしまのたけ〳〵つらなり、夷山、うち浦かたけ、たうへちのまろやまなと、わけ見しところ〳〵はそことしられ、つかろのいはきねの、磯山こしに見やられたるは、清見かたに、やよひの不二のそみたらんにひとしく、あきたらす見つゝ坂のほり、磯やの浦近う見れは、松前のひんかし沖邊のあたりならん、いかめしきやあるは、函なと見たらんかことくおほへ、おきなにや、蜃氣たつにやと見るかうちに、ひかさのかたちにくゑし、やをら、まほのすかたしたるは、その沖の大嶋のくゑするにこそあなれとて、けはしき坂にかゝり瀧のなかるゝ邊にあふけは、しら雲のかゝるたかねに、火のもゆかとおほへて、いはつゝしの咲は、

　つゝしさくたかねの雲のうつろひて照す夕日のいとと色こき。

長後の浦にとまりて、夕さりのかれゐたうへて日はくれたるに、時鳥のなくを、いさ聞てんとといつれは、あまのめならんか老たる聲して、三人斗、「君をおもへと空ほとときす。」とうたふに、月はうすく曇て、たへて、ふたゝひ鳴もやらねは、

於久能宇良〳〵

月しはしつれなき君をおもへとも空子規いつち行らん。

たへまつもて渡る邊を、こしき石とて立岩のあれは、

雲のゐる山路こしきてあすもまたあくへきみねやいくへなるらん。

こゝらの小舟こき出て、するめいかといふものをつるといふ火かけ、波をてらしてたゝよへり。

烏賊釣り船

露したふ草葉の螢ゐるかけと見へて灘に集ふいさりひ。

十七日。あさなきの、うなのおもしろさに、ちかきさかひを見めくり磯におりたちて、

ところ〳〵空行雲のかけおちて浪にあやある浦の朝なき。

福浦まで

時のまに雨のふりこんやうに、遠澳のかたに雲いやたちぬれは、いかゝとおもふにやかてふり出て、山坂のみち、けふはこへてんこともおほつかなし。とゝまりてあれと、あるし、せちにいへれは、それにつきてんとてためらふうちに、はれたれは、いてたちて、鉛の鋪穴なとたつねもとむれは、朱なる水なかれて血をそゝくかことし。入道石のほとりには、出湯わくかたのありなと人のをしへたり。長濱になれは、いはつたひのみちの、あゆみくるしめるにまよはんとて、行へきすちのところ〳〵に、くゐせ、木のえたなとをさしたり。これをたよりにたとる〳〵、おほつけの山さかになれは雨ふりいてて、みのとりいててけるに、太谷の梢

石なきを得

紫石英あり

ゆら〱とうちなひくは何ならんと見つゝをれは、猿の二三つたふなり。

ひとつふたつみやまの梢ふみしたき友よふさるの聲のあはれさ。

この山みちの小坂おりはつれは、福浦の海なり。過にしころやすらひしやに入れは、雨猶ふりて、こゝちもれいならねは、こゝにとゝまりなんとさたむ。海へたに人のあまたつどふは、いかにとおもへは、おほいをつり得たりといふは石なきといひ、夷人のツキマスケとて、つりくふいをの、いつさかはかりなるを鋤もて鱗かいやり、これをつくりて浦人もてわたりぬ。

みつしほにかくろひ見へぬ沖のいしなきてゐろうの栖家なるらし。

やのわらは、紫石映もて來けり。こは、長後の澤邊より出るといふ、それにやあらんとさへは、しかり、枝たる松の邊をよちて、水のなかるゝかたにありきなとかたらふを聞て、しせきえいてふことを折句にせり。

しみつわきさせはやき川のきしかけにえたたる松やいく世へぬらん。

くれ行空おとろ〱しう、軒の蘆原風おちて、そきた吹ちるはかり吹まさり、風おこりたるこゝちいとゝまさりて、つゆもまとろまれす。軒近く潮やあふれなん、たゝ、こゝしき音のみして夜ひとよ海あれ浪のさはかしう、さらにいねもつかれねは、

いかはかり沖つ風ふく浦なみにうちおどろきて夢もむすはす。

十八日。この浦の童、うしたき越へすといふをあないに、くらき山路を軒はよりわけ入、わけのほり行に、猶木々しけうたちおほひたる太谷より、鼠水鶏のひるさへなけは鱠はたきといひ、水鶏の鳴をかねうち鳥とよひ、時鳥の鳴行をあふきて、こなへやきよ、そちやとてた、あちやとてた、誰に小鍋かくされた、と、たはれこといひ、母子鳥は、一日のうちに八千八聲なさか鳴そと、おなしあけまさのともにかたらひ、あなこうしたりと岩群にしりうたけしてけるに、さゝやかのむし、顔の邊にふためきむれてうるさけれは、とく過てんとさいたつに、わらは木葉折もて、此櫻蚊のおほさよとて、はらひ〳〵のほる。

すたくとも拂ひな捨そちり過し花の名におふ山のさくらか。

ゆく〳〵山そひへ谷ふかく、里遠うして、人の至れるはまれなる山路也けり。けにやあらん、おかしありけるものは男女のわいためなう、此邊に流る國ののりなりけるとなん。そのいにしへは、蝦夷もわひしとや、すみうとみたるうら〳〵ならん。飽田の渟代、あるは肉入籠、津輕郡なとかそふれは、問菟のわたり島も近くへたち、過來し左井も、うたかふらくは膽振鉏にや。此いふりさへは、いつことも、えしらされは也。佛かうたなと、名あるところ〳〵をうしろさまに見なし、尾越へみねこへてわけつゝ來れは、牛瀧の屋ともは谷のそこに、

牛瀧越え
鱠はたき、鉦打鳥其他
さくら蚊
流罪の地

さむしろなとしきたらんやうに見くたし、とくもくたりてんとおもへと、三四日風おこりて
こゝちよからねは、たゆけに、やすらひ〳〵、からくして木々かつらにたつさはりてくたり、
坂井のやにいたれは、珠阿上人、澁田政備、くすし三上なとありて、きのふ舟にて至りつるな
と、おもふとちの物語にすこしはこゝちおほゆれと、まほなるおもひさらにもあらて、いま
た、くれはてぬより枕とりてふしぬ。

牛瀧の坂井氏にて

十九日。雨もよの空、いとゝ心もくもらはしく、

二十日。たゝ、ふしてのみあれは、澁田、三上のかへるといへと、枕たに、えもたけす。たゆ
けに、風おもりかにおこりたり。

廿五日。この四五日ものもおほへねと、すこし斗おこたりぬる暁の月ひまもるに、水鷄、火
鳥、時鳥の鳴あはせたるおもしろさに、戯歌。

郭公まふやひとりの笛ふけはたへす鶉のつゝみうつなり。

廿六日。枕上のさうしにかいたるは、桃水和尙の手也。こゝに宿て、松前にわたりおはせし
なと、やのあるしの翁の、いにしへのことかたれり。

桃水の書

廿七日。けふこゝを出たゝんといへは珠阿上人の云、おほまのうまきの邊にて、はしめてま
みへ、奥の戸の浦にかたらひ、鈕のはまやかたに十日もなれてとひむつひ、殘れる花を尋ね

珠阿と別る

てしらぬ夏山にまよひ、みちなき野原の草をたどりて郭公聞はやなど、牛瀧てふあら磯まてはともにさすらひ來つれど、日あらて松前の島渡してんこゝろさしあれは、こゝにわかれにやなりなん。ふたゝひあふへきことは、いつくの空にかなとありて、硯をあるしにこひて、

　人もしれひち笠雨もふらぬ日にたもとをぬらす旅の別路。

　歸るさもたのしからなん家つとにかたるもあまた國つ名どころ。

と、たたうかみにかいてたひけるに、かへし。

　逢ときをまちてかはかん旅衣ひち笠雨はほすまありとも。

　かき贈る言葉の花も折ませてつとにかたらん國つ名どころ。

牛瀧出立

小舟にのり出て、小つなさかり、大つなさかりなどいふ、さかしの磯をこきはなれて、小あら川、大あら河といふあり。

大荒河の山に入る

この大荒河におりて、山ふかく、あらき山河をさかのほりてわけ入は、槇の茂たち、胡鬼子の木の立て奥くらく、たきり落る水のみ渡て行末遠し。

　山河のいくせわたりて旅衣ぬれしを誰か宿にほさなん。

谷水とよみなかるゝに、青葉さす木々におしへたてられて櫻の一本咲たりけるは、めつらしくてとゝまれは、こま鳥、水乞鳥、鶯の聲聞へたり。

　なれもさそ花やめつらんかへるへきふるすわすれて鳥の鳴也。

源藤次郎村

潟貝村

瀧山村

鹿猿多くて

坂のほれは、大島、小嶋、今別、母衣月の浦も見やられて、さゝふの路を分れは、平なる路に野かひの牛放たるに、里や近からんとおもひて、ゆけとゝさらにあらて、柵してみちをふたき、垣ねの上より、はしのことく間遠に木をあみてかけ渡し、人これを通ふは、うしの入こんをさゝめんかためとか。又、山よりくたる河にしたかひ行こと、みちは三里の山路也いくはくならんか。里のなきは、いかなるところにかふみ迷ふならんと、いと細きみちのあるにまかせてゆくに、おほやますみの神おましますに、ぬさとりてはるゝと過れは、家の七八見へたるは、あなうれし、いかなる里かとゝへは、源藤次郎といふ村也。むかし、その人やすみそめたらんか。此あたりは、山子とて杣山賤をわさにて、そきたのみつくり、めは山畑にたかやし、あるは布をりぬ。柴橋を渡るに、けふりたつかたは潟貝此貝小川に在りてふ村のありといふ。ゆくゝおもひつゝけたり。

木々ふかくしけれる山のかたかひになひくけふりや夕けたくらん。

その村に入は、いまた咲のこる桃の花そのあるに、寒さおもひやるへし。瀧山といへる村ひきつゝきたり。山ふゝきのくきをさき、よねぬかふりかけ日にほし、かきねにかけたるを、あめやふりこんと、とりをさむる女翁のいはく、此山里は、しゝ、ましがをろけて、あはほ、ひゑほ、まめ、そはなと、みなこきくらへは、とることのかたく、かゝる草をもかてにつぎて、世

のすきはひとすれと、折こしてはかてつき、うへ侍るとてなけくに、なみたおちぬ。むかしはこゝに、おもしろき瀧ありたりとて其名流つれと、今はわつか斗落るかた岨に、ほとゝきすのなけは、

時鳥こゑもひとつにひゝき來て瀧山かけの宿のたのしさ。

くら／＼になりて脇野澤につきて、里のをさかもとにやとる。

脇野澤に出づ

廿八日。うらふれあれは、けふはとゝまりて正覺寺、悅心院なと見めくり、脇澤庵のあるし大仙とて、さかみの國あしから山の麓より來れりなと、ねもころにかたらひてかへる。此庵の前に川あり、大なる土橋かけわたせり。外山のしけみにほくらあるは、をたきとか。

みつかさは青葉へたてて夏山に神の鳥居の見ゆるかしこさ。

昔蝦夷の地

此みなと邊には、むかしハッヒランといへる蝦夷すみたり。その末今も殘りたりと、ところのものゝかたれり。

廿九日。あしたより風とく吹て、いてたゝはやとおもふに雨いやふりにふれは、えなんいてたゝす。しはし、とにのそみてつれ／＼のまゝ、こゝの名を五のかしらにおきて、

わきやらすきほひ雲たち野も山もさみたれ近くはれすふる雨。

大同の鰐口

坂のほれは神明のいはくらあり。右のかたは觀世音の堂也。御前の鰐口の鈴に大同二年と

木浪の浦

九艘泊にて

あり。まことに、としへぬる森にてやらん、老たる木々にしられたり。

三十日。近きうらわ見てんと、つち橋より鶴首山のいたゝきにのほり、をたきの神にまうて尾越のみちを行は、つるくひ、うしのくびと、立石（雄元にた、くへたり）雌嶋、雄島、新井田（にゐた）の磯邊に見へたり。猿樂石、烏帽子石なといふ名は、叟山といふ磯山のあるよりいふか。

としふれと山は翁の名におはてしけるわか葉にこまかへりぬる。

木浪の浦にゆけは、家はふたつたてり。此磯のまさこの中より、ましろなる舍利石ひろふとて、たま〳〵すきやう者の至れと、毋衣月のことにしれる人まれ也。淸き汀にたゝすみて、

沖つ風ふきにけらしなたもとまて寄てきなみの浦の涼しさ。

鮹田、芋田といふ浦つたひて九艘泊といふあり。こは、ひのもとのはてにして扶桑留ならんと、うへなるものかたりを人のすれと、石腦油（くきうつ）なと涌いつる川あらんか。松前の西の磯、江差のはまやかたに九艘川といふあり。いかにとゝへは、そのむかし、此水上の山より、ふなの材木、九艘に作るへきを伐出したるといへと、その小川にあふらの氣ありといふめる人のあれは、むかしは、臭水油なかれたらんよりいひたることとしられたり。九艘泊も臭水泊にや。此泊を舟にてめくりて、附子泊（ふすとまり）といふをへて牛瀧に至るといふ也。此くさうとまりは、むかし夷のみ栖しかと、いまはたへにきなと、その處のものゝいへり。おなしすちを、ひる

脇野澤に歸る

つかた脇野澤にかへりたり。女あまたあつまりて、かいけてふものして桶に水くみいりて、になひさる、なかれありけるを見つゝありて、

うち集ひくめともさらに盡せなくわきの澤邊の水の流は。

郭公の鳴やとおほへて折句うた。

わか方に聞へこそすれ野邊近くさはなく聲のはつかなからも。

節句の幡を立つ

五月朔の日。つとめて、五日の祝の幡を門々に、けふよりたててけり。此ころのなへふりてより、いよゝ空のくもりかちに、はるゝけちめも見へねと、さつきの空のくせにこそあらめ。いさ、ふらはふりねとて脇野澤の宿をいつ。神明のかんやしろにぬさとりたいまつれは、時鳥の聲頻なり。

わきてけふなきもをやまぬ郭公をのかさつきを空に名のりて。

松か崎石神

松か崎とて、木々おほひ立ておかしきところあり。此浦人の、海參あみに入たるを曳あけたる石を、こゝにすへて石神とて祭しかは、昔よりは、かく高くなりのほれりなといへり。口廣河といふなるなかれの末は海に入る。水上に、としふれる杉の生ひたり。

いくちひろむらたつ杉のかけおちてみとり涼しき山河の水。

この河邊の岸よりはしめ、燕子花多く草の中に在けれは、

殿崎古城址

かきつはた色もやつさす咲にけりふかきみくさに生ひましりても。

小澤といふ村をへて殿崎といふあり。古城の址に木立ふりたるは、いつの頃にや、松前のおほんつかさの遠つみおやの、柵し給ひしところといへり。そのころより祭れる飯形のやしろあり。近き正德のむかし金海といふもの、いとよき手してかいたる額の、半くちなから殘りぬ。寺々のこほれたるあとならん、御佛の具なと、いまも畑たかやせは、うることのありきなとかたる。陌のかたはらに、あや杉のふりたるかあり。これなん松子の君といふかうへ給ひたるとて、杉なから姫小松とよひ、又の名を、ひめこすきといふと、里の翁のをしへたるを聞て、

ひともとにめてしその名はこもりゐてすきしむかしそきゝ渡ぬる。

蠣崎の鷺の湯

蠣崎の里を過なんとすれは行人の云、こゝに鷺の湯といふよき湯あり。むかし火矢にあたりて、はぎのくたかれたる鷺の、湯の泉に入て日をふるまゝ、いゑてとひ去ぬ。さりけれはしか名つけて、身をうちたる人に、わきてめくりよしなといへり。こゝを離れ行、片岨の草にましりて山吹のうつろへるも、いま咲いつるも多かりけるに、撫子の、みちもせにさけは、

誰かいねしあととし問へとくちなしの色のちりしく床夏の花。

宿野邊

めくら河といふ小河わたりて宿野邊（すくのへ）に來けり。こゝを、むかしは夷人の、スクノベツとかい

河内の里にて

ひたる。河渡て廣野を過て、檜河をわたれは村あとあり。世中やはしきとし、人みな、にけしそき松前に島わたりして、むなしく平所（ひらとこ）といふ名のみたてりといふ。葛澤といへる邑のあれはおもひつゝけたり。

澤の名のくすのわか葉に風吹は秋をおほゆる袖の涼しさ。

あさり貝とる濱つたひくれは河内（かはうち）の里也。松の林に立る鳥居あり、こゝにまさしめ給ふ觀世音を、神としまつるうはそくか庵の前に、今盛なる櫻のありけるは、あやしきまてめつらしかりけり。

夏かけてちらぬためしをみしめひく松にやならふ花の一もと。

木の皮沓

船見櫓

里なかにいとひろき河あり。からうつのふたのことき舟さし寄るにのれは、此ふなもりのかたるは、近きとしから、國にはなたれて歸來るおほ船の楫とりにて、そのふね流したるつみはてぬかきりは、おほふねのるわさもえせて、かゝる河長となりて身もたゝす、あけくれのほそき煙をたにたてわひ、老かゝまれる母ひとりをはくゝみかぬるとて、なけいてさほさし、このみなかみにさかのほれは銀杏木（きんなんほく）といふ山里のありて、ふるきみやしろも、金七（かな）五三（しめ）明神といふかおましませりなと、かたらふまに舟はつきたり。桜の木の皮をとり、櫻の皮もてぬひて沓つくりて、あきなふや多きは津刈の郡にひとし。此市中のやよりもたかく、

大同の鰐口

舎利河はさり川か

蘇我馬子鳥

うてなのやうなるものを造あけてけるは、火なとのをりの料にやとおもへは、ふな見やくらといらへて、みなと入、あるは沖行を見やるまうけとなん。こよひはこゝに宿つきたり。

二日。ひるになりて出たつ。里の末に熊野をあかめまつれるみやしろあり。いつのころにか、此社を、ひきゝより高きにうつし奉とて、つちあはきたれは、大同二年と記したる鰐口の鈴ありきとて、今も御前にかけたり。舎利河といふに、つち橋かけ渡せり。玉やいつる、舎利の石なこや涌出てんながれかととふに、ゆめ、さることのなきよしをこたふ。こひちに濁りたるみなそこを見れは、こゝにいふさりこがに、又いふ去蟹てふむしのいと多し。おもふに此あたりの詞として、さもしをしやといひ、さりをしやりといへれは、さりかに川み蟹をはふきて、さり川といふへけんを、れいのあやまれるならんに、舎利川と、ふみなとにも書のせてけるも又あやし。此山おくに行ほと二三里にして、湯の河といひてよき温泉のあれは、そこに、ゆあみすとて行人ありて休らふ。かたはらの水草の中より、小鴨のことき鳥のたつを鋤よこたへる男の、蘇我の馬子鳥といふもあやしき名なれと、ある人の、これなん、すかのむら鳥のあやまりにやといへり。けにやあらん、たかへを田かぶといひ、あしかもをよしかもといひ、あきさをあいさといへは、すかのむら鳥も、うへならんかとおしはかられておかしけれは、

平家たふし

澤水にあさるやふかき夏草にたちましりたる菅のむら鳥。

おくの海に、足を空になして、波を離ては羽うつこともえせぬ鳥の、善知鳥に凡似たるを、わたり島にては平家鳥といひ、又、おやをおろそかに足もてふみたりけるものは、みな、かゝる鳥となりても、やすけに、つちたにふます、あかおもふかたに飛ことあたはす。あら波にたゝよはされ、潮と浪とをちからに、うきめ見ける、おそろしのむくひはあるなり。よくおやにはつかへまつれと、きやうならぬ子に、これ見よとてしめすをおやふみ鳥といへと、此浦にては、もはら平家たをしといふはいかにとなれは、やしまのたゝかひのむかし、この鳥のなくか霧霞の中にかくろひて、人の呼ふやうに聞へしかは、たひらの人々、こは、友ふねのあまた集ひて叫ならん。いてその方に、とくこきてんとて沖へ〳〵とかちふりたてて、あらぬ汐みちにまよひ、あらき波間におほれて、おほくの兵のふねともくつかへりたれは、平氏たをしたる鳥なれはと、かたる海士とともに田野澤といふ小村に出たり。

田野澤村

山かけに、稗まきたる小田のもへわたる、水涼しく見へたり。

生ひしける苗の葉するゑのかくるゝはやま田の澤の水や増らん。

戸澤の角違

山かたつきて行に、分安き路ありと人のいへるにまかせてゆけは、あらぬかたにふみ入て、たとる〳〵かへりて戸澤村に出て、角違といふところにいかふ。むかし斐陀の工等か、魔利

支天の御堂いかめしく造るとて墨繩引あやまちて、もゝたひくゐたるかゆへ村名とはなりたり。その堂はやけて、今はしるへ斗に建るなといへは、

ひたたくみうつ墨繩の長き世をかけてものうき名にやたつらん。

泉澤といひ、又の名をは一里越しともいふ村を左に見つゝ城箇澤になれは、日かけかたふけは宿とふ。いなきや、むかしありたりけん。月照山城澤寺といふ寺あり。此海邊にては、うへなう古きおや寺ともいふへけれと、田鍋の圓通寺の六世大休善遊和尙の、寛文の頃開山とせり。

三日。朝とく出たつ。里のはしに、木ふかき杜に神明のいはくらあり。木下くらく水なかれて、こと草もなく痲のみしけう生ひたちて、あさ清めする人あらねと、をのつからきよけに見奉りて、

このまゝに手向む痲のおほぬさや名越の祓こゝにはらはゝ。

宇曾利河をわたり宇多邑、河森邑をくれは、りうこうのその茂たり。釜臥山をまつる下居のみやあり。安渡の入江を見れは、城ケ澤よりさし出たる蘆崎とて、糸引わたしたるやうに二里はかり海中によこたはり、あら波をさかふれは、さゝら波たちて湖にひとしう、船もやすけにかけて泊もとめ、冬は鱈つり、春は鯡のあひきに里とめり。舟の行かひすれは、

生ひしけるあしてふ崎の名はあれと分ゝ小舟はさはらさりけり。

いかはかり蘆や多く生ふるならんといへは、此碕は、としことにいと長くなり出ること、わらはなとの、はきの生ひのほるに似たれは、足崎といふといらへたり。ほと近く大平の里なり。田家村よりうつしたる願求院のあみたほとけはかりは、その、いにしへのまゝに殘りたり。近きころあらため作りつれと、むかしの梁の札に、「朝日さす夕日かゝやくその氏に、うるし千杯、朱千盃、こかね万兩。」とありしとなん。平泉に聞しとは、すこしはかりことのかはれり、いはれあることにや。野も山も金帶花盛なるは、夏山の、もみちたるやうに、青葉にましりておかし。此入江のへたのみはるゝと行に、いくはくかひろき野邊に金鳳花の咲たるは、目のいたらんかきり、くちなしをなかしたらんかと見やられて、去年見し、わたり島の女郎花の盛なるにおなし。こゝをそむきて行に、林の中に三日月堂とてほくらあるに、雷斧石をはしめ、いとなかき石を立てまつりぬ。行〳〵見れは、女あまたして貝つものとりぬ。

大平の願求院梁札

金鳳花多し

おりたちてしゝみはまくりとる海士の袖やぬらさんしほの入江に。

肥泥邑を左に金谷に出たり。むかし鉇屋、仁土呂志、宇曾利のともからを、いくさにかり集しかは二千騎にたれりとか。こは去年の日記にしたりけれは、かいもらしぬ。海蝦河をわ

田名部に至る

たりて、万人堂の杉むらのみちをくれは田鍋のあかたなり。

四日。雨ふりぬ。公世の館にいたりて、遠の杉村に時鳥の鳴を、あるしとともに聞つゝありて、

軒近く遠にや聞ん時鳥こなたはよそに杉のむらたち。

雨のをやみぬれは、いよゝなきたり。

なれもいま心やはるゝほとゝきす雨の名殘を見せてなくこゑ。

海士の子か菖蒲うりありくを、門ことにかふ。

端午の節句

あま衣ぬれて匂はんあやめくさ曳手にふかき露もこほれて。

五日。笹の粽に百陪(ほと)の根くひて、しほてくさ、やことにものし、此くさのくきもて耳かくわさは、飽田のふりにおなし。けふも旦より雨ふれは、

沼水にひちしたもとに引かへて軒のあやめの雨にぬれなん。

さと風たちて、あやめ、ひとすち吹おとしたり。

あやめくさけふたかやとも軒はふく風さへ袖に匂ふあさ戸出。

男女語る

六日。男女かたらひてたゝすむを聞は、きのふは一日ふれくれて、けふに、きのふのいやしありくといふを男の云、その雨のまきれには、おもふかたに、さそな、ひねもすあそひて、い

か斗たのしきめにや逢ひてん。男のならひとて、われはあしたより雨にぬれて、いやしありきてくれたりといふに、女、いな、わかことの身は野山におきたりとも、鳥、けものすら、口しても袖ひとつ引こともあらし。世にたのしみあらぬ此身、あかとし十とせもわかからはなと、たはれいひて過る。女にかはりて、

いまは身も六日のあやめ引人のあらぬたもとはぬるゝこともなし。

陣場平の稲荷

十日。この四五日はかり風にふして、日記もせてくれたり。ひるつかたより、人々と友に赤坂の野良をへて陣場平（ちんはたい）を行て、飯形のみやを拝み奉らんと、遠方に鳥居を見やられて、

夏山のもみちするかと紅に見へしは神のとりゐなりけり。

河の中に、くゐせさしたるに、木の枝なとくちとゝまれり。

山河のゐくゐにちりのとゝまりてはつせの水も行なやむ也。

十一日。折かけ垣のあるやの邊に、杜若おほく生ひたるかめつらしけれは、見つゝありて、

咲にけりかこふめくりのかきつはた池のこひちの色もへたてて。

十二日。公世の句に暮雲能收後、只有蛙鳴頻といへるに、

山のはに夕ゐる雲もくれはてゝたとる田つらに蛙なく也。

十三日。雨のふれれと、近き小田の早苗とるを見て、

田のふませ

中島德廣を送る

願求院跡

五月雨にぬれてとらすは小田なへて生ふるわかなへふしたちやせん。

十四日。馬いくつもひきて田の中をめくるは、ふませとて、田植る前には、かくそせりける。うまともおふ聲の、くれても籬のとに猶聞へたりけれは、おもひつゝきたり。

つかれこしたゝすみやせんくれふかふませのそともに駒のいななく。

十五日。中島公世の弟なりける、くすし德廣てふ人の、脇の澤といふところにしる人して、そのみちを行ひてんと聞へて、けふなん旅よそひして出たちてけるにをくる。

いく藥とりさかへなん大汝少彥名の神のめくみに。

大なる松にたちましりて咲たりける桐の花の、風にふかれて、庭の面にいたくこほれかゝりたるをひろひて、わらは、笛のやうに吹すさひありく。

松風のしらへもそひてうなひ子か桐の花吹聲の涼しさ。

十六日。人の藥かりすといふにともなひて、青菻の邊まていきてんとて行に、石神とて、梵字石にゑりたるを立てまつる。みちをへたてて清水のあれは、

石神のみたらし河や苔ふかきいゐ井のしみつ淸くなかれて。

他家の村のはやしと妙見の森とのあはひに、うつき生ひ、松むらたてるほとりに六尺あまりの大石のふしたり。これなん、いにしへの願求院のあみたふちの庵のあとにて、秀衡のうし

たてたまひし、そのしるしの石とて、あさ日さす夕日かゝやくそのしたは、こゝならん。此そこに、うるし、こかねは、さたかにうつみあるならんともとむれは、そのまろひたる石を草むらよりおしたてて見れと、さらに文字なとも見へす。ほゐにもあらて、野はらのまゝ田屋のはやしに入は、ちいさき祠三あり。ひとつには、いとふるき石の地藏尊六ををさめたり。そのゆへはしらす。梭河の橋わたるとて子規のなけは、

田やつくる四手のたをさかはやまより行かへりなく聲のしけきは。

田植歌聞ゆ

此村の子ら田うへするならん、うたひとよむこゑの、木々しけき岡邊のあなたに聞へたるをりしも、時鳥のをちかへり鳴は、

うたひつれ門田やうふる乙女子かかたらひなるゝ山郭公。

十七日。雨のなかめおかしとて、公世の館にひねもすあれは、かきのとの田面に、うたひこちてなへとる。

けふいくかおりたつ田子のぬれ衣ほすまやはある五月雨の空。

五月雨といふことを、

さみたれにいさゝ小河や増るらしめくりの垣をくゝるしらなみ。

遠方の山のすかたは雲にきへ軒端をくらき五月雨の空。

五月雨のふるやの庭に落瀧つ日數かけそふ軒の糸水。

しはしのはれま見へたれは、遠かたをのそみて、

さみたれのはれまにみねの松一木のこしてふかく雲のいやたつ。

くれ行ころ雨のふり頻ぬれは、あるし公世の、

五月雨のふるもしつけき入相のかねにくれ行遠の山寺。

となんいへりけるを聞て、

あすも又おなしなかめにまさゐせんふりくらしぬる五月雨のそら。

十八日。雨猶ふりぬ。すこし、をやみたるゆふくれふかう、うはそくのやならん梵貝の音聞へたり。こは月まちのためし也。

月待の梵貝

山伏の夜のをこなひに五月雨のはれまに月の出るとはしれ。

十九日。正一位明神のやしろに、ひねもすつゝみうちぬ。日てるをやいのりけん、晴たり。

夕くれて、田面近きこころを過るとて、女ともの歌うたふを行〳〵きゝて、

いとまなきほともしられてさなへとりくれて田歌の聲そ聞ゆる。

二十日。此あたりは、なへて、よねより、ひえいとおほく、田ことにまきて、いな田より、ひえ田の町はおそく苗とりわたせと、ひえ田もふしたてるかたありとて、いな田とおなしうとり

稗田多し

うふるか、をちこちに見やられたり。

　　おりたちていな田ひえたのわかなへをとり〳〵うたふ聲聞ゆ也。

廿一日。廿二日。廿三日。あへてことなし。

廿四日。あしたより雨ふれり。　河五月雨といふことを、

　　五月雨につなく正木の綱たへて杣木なかるゝ山河の水。

夕つかたはれ行に、　雨後早苗といふことを人のすゝめたり。

　　雨はるゝちまちのさなへうちなひき露吹こほす風の涼しさ。

再び恐山に

廿五日。去年見たる宇曾利山にふたゝひ登てんとて、中島公世とともにかたらひて、あしたの間くもりたれと、雨は、ふりけにもあらねは出たつ。こゝにも石神平（たひ）さてひろ野を行ほとに、雲雀おほくあかるをあふきたゝすみて、

　　もゆるより葉くさになれていとあつき夏野のひはり聲もたゆます。

材木運ぶ牛

矢たて山の路はいと細く、槙のみ茂りあひてくらきに、牛の背に、大なる木の鍵四をゆひかため、これに材木をのせて、あまた、みちもさりあへす曳いつれは、いかんかたもなう、かたそはより生ひさかりたる梢を力によくれは、きのふの雨のなこりにや、木々の雫雨のふるやうにこほれかゝるに、おくふかう日くらしの聲しきりたり。

ふる里をおもひくらしの虫ならて音にこそたてね袖ぬれにけり。

梢のあはひより、はる〳〵と海の見へたるもおかしと見つゝこゝを行〳〵、おほつくし、こつくしといふ、たか山のかけ湖のうへにおちて、岸邊はなへて石楠花の盛なるか、うす紫にこほれかゝるを分れは、左右の袖もかくはしく行て、みてらに至る。川島なにかし、湯あみすとて在けるをとふらへは、その優婆堂のはしらに、

人まちて太山のおくにかりねする窓の戸叩あらしたになし。

と、やよひのころとかいたるは武憲の手也。ともに湯あみしてんとその比契したれと、こと方に病ありて、たかひたるを待けるにやあらんと、そのかたはらに返しをせり。

なかめ捨ていにしもつらしかりねせし人はあらしの音のみはして。

廿六日。菩提寺のおちくほなるところにふして、あけくらの頃、鳥の山ふかくなく〳〵か幽に聞へたるを、佛法僧にやあらんと人々の寐さめていふ。こや慈鎮和尚正治のころ、「わか國は御法の道のひろけれは鳥も唱ふる佛法僧かな。」となかめ給ひ、はた「松の尾のみねしつかなるあけほのに、と、ふるき歌にあれは、夜あけなんころは猶鳴ものにかあらんなと、すしかへして公世の、

夜をのこすはやましけ山かけふかく佛法僧の聲をこそきけ。

宇曾利山湖
菩提寺著
佛法僧鳴く

といへるにわれも、

　山ふかく三のみのりをなく鳥の聲ほのかなる明方の空。

手あらふとて、湯ふね近くたゝすみて遠かたを見やり、

　あさもよひ霧のたつ山かすむ山湯氣よけふりよ空になひきて。

金物鑄る

山に、いつくさの悶石よりなかるゝ湯あり。朴消あり、雄黄あり、石鹽あれは、かなつゝみ、鐘、鰐口、花皿をはしめ、なへての金の具、釜臥山菩提寺とある二の額の、こかね色に書たる南岳禪師の毫のあとも、さひくちたり。鷄頭山と、林碕の明神の岡との間のしたつかたを行に、雪のつもりしかと見まよふ斗、ましろの、たかすなこをふんて湖のへたをつたふ。

　又たくひ波のいつこに島つ鳥すむやうそりの山の水海。

公世、ゆく／＼いへり。

　鳥の名のうそりの山の水うみのなかめ涼しき朝な夕くれ。

五つの溫泉

劔の山の麓に、地獄／＼の引つらなりて涌いつるあはひ／＼に、ふる瀧の湯、ひえの湯、めの湯、花染のゆ、しんたきのゆとて、ゆけた五ところにあるに、やまうと、それ／＼に居集る。

浴湯風景

湯あみするに、女あまた紺の湯まきしてならひ、かしらにたのこひをかけ、大なる、かいけといふものして湯をひたにすくひ、これをかぶるとて、もゝたひ、ちたひ、かしらにうちかけて

圓仁の寫經

田名部の圓通寺末

嶽大明神

けれは、いと長き髪の、かた過てぬれみたれ、あるは、くしけつるに、みな、まなこふたきたるさま、こころもとこころ、十戒のかたなと見たらんやうに、さなからちこくのふるまひをせり。伽羅陀山のほさちのおほんたけは、むさか、ふたつあるのみほとけは、恵心、定長の作り給へりとそ。去年の日記にしるしたれは、こと〳〵にしるさす。いにしへは天台のみてらにや、圓仁大とこのかい給ふ、ほくゑきやうあり。そのおくに、　妙法蓮華經序品第一　天台座主梶井宮盛胤二品親王　奥州南部田名部庄吉祥山圓通寺住持大英和尚　寛文己酉祀五月、としるし給ふて、いまは田鍋の圓通寺の末院なり。この圓通寺は、しもつふさのくに東昌寺の郎庵禪師の法孫、三世の覺翁和尚の弟子、文明のとしすけして宏智聚覺和尚とて、大永二年にひらき、山を吉祥といへり。此大英は七世にあたれりとか。水うみのへなるやま〳〵のあはひより、釜臥山のいたゝきのみ仄にあらわれたるをあふく。此たけの神を正一位嶽大明神とて、明暦三年の棟札に、　本地釋迦佛　七月九日　山主雲外軒の比丘とありきとなん。夕くれ近つくに、しら雲よこたひかゝりて、杌杜のみね、しるへはかりにあらはれたるおかしさに、公世たゝすみていはく、

何くれとおもひつくしのもりの雲見るに心のはるゝたのしさ。

わかなかめたるは、

呼玉の落書　舍利石拾ふ　まな鳥　大ぶな坂　田名部歸著

長き日をなかめつくしのみねのくもかゝる夕の風の涼しさ。

廿七日。けふ歸りなんと、おき出る枕かみの壁に、「可も不可も不二摩訶薩の湯のかけん知枝、と落書ありけるは、蒲野澤の法林寺の僧呼玉とて、此年身まかれりし人の手也。さすかに學生のこと葉としられたり。大師堂の邊にいたり、桝石、舍利石、つとにとてひろふ。舍利は栗の大さして、しろきは、あこや貝の眞珠に似たり。そかなかに、くろき星のありけるは、かへるこのことなるをよしとて、人いみしくめてたり。鷄頭山のしけき梢にかくろひて、人の聲してあやしうもの呼ふやうに鳴を、まをとりといふ。

一聲に猶淋しさそ幽なる谷よりやまを鳥の行らん。

あけ行ころ、水鷄の鳴しをなかめたるあれは、湯ふねのかべにかいつく。

かけくらき眞木のとやまや叩らん明て鶍の聲そ聞ゆる。

湯坂も過て大武奈の坂より、田鍋を、いつこにやとのそめは、たゝ野原のやうにはる〳〵と見へたり。

里近く植にけらしな小田なへてみとり涼しく見ゆる遠方。

廿八日。田鍋の里のしりへより田つらの見やられて、

ふしたゝぬまとてうへにしほと見へて遠のちまち田なへ茂る也。

廿九日。夜邊より雨ふる。けふは早月の餘波とて、かきくれてふるに出ありけは、かゝる雨もいとはてなと人のいへる。

けふといへはふらはふらなん五月雨のあめの名殘はぬるもいとはし。

簑くちぬ斗にそほぬれて、田子のうた唄ふを、

雨に着てみのるためしやうたふらんいな田ひえたのなかにむれゐて。

成章のもとより、けふは雨のまとゐにかたらんなと、せうそこにいひてそのおくに、

うとくとも時にこそよれ時鳥としにふたゝひ逢五月かは。

となんありけるかへし。

杜宇ともにかたらへあすよりはをのかさつきの名やはたつへき。

やかてそのやとにいたれは、咲いつへう卯花を花かめにさして、郭公のふるきうたをかけてける。あるしの情もあさからねは、おもひつゝきたり。

うの花のかけにこもりて子規ふたゝひ宿にはつ音なかまし。

六月の朔。けふの氷室の祝とて、ひと夜酒つくり、氷餅なと、わりこ、かれゐけやうのものにもりて、手ことにもてありく。雨は夜のまゝに、をやみもやらて猶ふる。

五月雨のおもひのみして涼しきはけふのひむろのためしならまし。

巳のときはかり、あめははれたり。

山の温泉に

二日。この日、山のうへ宇曾利山なしかはいへる也の湯あみにいきてんとて、きのふより智愚庵に在て、あるしの實元上人、あきはま何某、ひきご春花ほうしなと、いまた、とはくらきよりものしてんとおき出、さ、いてんとよそひたては、神うちしきり雨いたくふれれは、たひ衣たちなんこともえせて、ためらふうちにはれたれは、

いつこにか音も灰に鳴神のはれて涼しき白雨のそら。

遠のやまもとのしろきは雲かとまよふはかり見やるは、みな卯花なれは、

やまのはの雲とし見れはうの花の咲る方よりしらむ夏夜。

茨の花盛り

うはらのかきねも花さき、卯花もいま盛なるは、こと國と五十斗の日數をくれたれは、たゝ、うつきのはしめにわくるこゝちして、

よそになる雨のなこりに卯花の露分衣ぬれて涼しき。

板道を渡る

笹長根、まろ山、かれぶな、湯さかをすくるに、ふたゝひ神のひゝきたるは、いつこの空ならんと行に、板しきのこさく木をしきならへて、かけはしのやうなる路を、こゝらの人ののり行母馬に小うまの乳をさかし、あまたいさなはれて、あとさきにしたかひたつ音のほと〳〵とふみところかすは、なる神より音たかう過て菩提寺近くなりて、三途河のへたに馬をとと

めて人みなおりぬ。

のる駒のからきめよそにしほならぬ海のみるめも涼しかりけり。

優婆堂に泊る

うは堂といふやに、あまたの人と、間をへたて〳〵て入ましりて、ふしたり。

三日。ひるのま風とくふきて、やかて雨ふれは、

いや高きまきのしけ山かせおちて梢涼しく過る夕たち。

四日。夜半斗くもりあした雨ふれは、鷄頭山にたちならふ遠近の山も見へす。つくしもりも雲ふかくかゝり、かりふす庵の窓のうちになかめたり。

そひへたつ軒はの山も見へぬまて雨にいほへの雲かゝる也。

琴に慰む

五日。はれたる窓に、ひきごをはしめ實元上人琴かいならしけるを、地獄めくるすきやう者なと、立とまり聞つゝ行にましりて、閉郡みやこ島邊より來るとて、くくつやうの女湯あみしてありたるか、おかしとやおもひけん、唯此おもしろさにいさなはれて來るといへは、ひきごにやあらん、さ一手〳〵とせちにいへは、すへなうかいならしたるは興あり。

琴の聲嶺の松風涼しきやいつれのをより秋をしらへて。

誦經の聲繁し

六日。鷄犬の聲もなき山寺なから、三四のからす、つねにすみて鳴にめさめぬれは、湯のやかたも見へす、秋ならぬ霧に雞頭山、伽羅陀山、劔山のみね麓をこめて、夜を殘す燈のひかり

に、けいしうちならして、みすきやう聞へたるに、やかた〳〵にふしたるうはそく、そみかくたのおき出て、かなつゝみうち、さくしやうならしてとり〳〵にきやうよみ、なもあみたふちをとなふ。

霧の中にみてらはそこと灯のかけも仄にぬかのこゑ〳〵。

けにや、ひるになれは空かきくれて雨ふり頻り、やま川のなみ音たかうなかれて、をやみたれと、四方は猶もや霧霞をなへてもやといふなりふかく、近きあたりも露見わくへうもあらて、

軒端より重る山も見へぬまてはれてもかゝる夕たちの雲。

七日。里より人の來てかたるを聞は、去年よりアツケシの磯邊なるネモロといふところに在し、カムサツカのほとりなるヲロシヤの人、こたひ、めしあれはとて松前の福山のみなとに行とて、エトモか崎よりのり出て、霧もやふかけれはふなみちにこきまよひ、此南陪の岩屋の浦によせて、わらはの居るにことゝふに、あなおそろし、たけ高く姿ことなるもの來しとてなき叫ふをいぶかり、浦のをさ、ものかきなと海邊におりてとへは、日の本の詞を、さへぐやうにものいふあり。こは、世にいふ赤蝦夷人なめ、譯辭のいふにやとおどろきて、いそき、あかたの君に申けれは人々集ひ來りてけれと、まほの風吹來て、うしのかはの小舟して、沖なるおほふねに行と見へしかと、霧の中にこきまきれたり。きのふのことゝ、人こと、もはら

もや深し

ヲロシヤ人漂流す

かたる。

八日。田鍋の德玄寺の新發意、寂秀と聞へてけるかもとより、

恐山人欲上　行矣半天中　釜嶽濛然雨　澤邊颯爾風

歩成凌磵道　攀盡望晴空　時掬幽溪水　應知有梵宮。

となん聞へたる。風と宮とをものして、

しほならぬ海を朝夕みやま風ふけは涼しく波たつのみや。

九日。夜邊より、まちかき隣にふしたる、越中の國砺波郡なるすきやう者二人、此旦、劔山こへて、おほはたのはまやかたに行といふにつかはしたり。

つるき山わくるやいかに燒太刀のとなみの關を越るおもひと。

十日。きのふよりの雨ひるまにはれたれは、近き邊にとて、ひとりふたり出ありく。此山は蓮の花ひらのごとく、八のみね〳〵そひゆるを佉羅陀山にたくへて、むかふ左を鷄頭山、右を劔の山、大都具志山、小津久之山、屛風山、釜臥山。湖の水は八の瀧とおちて、正津河に流て海に入る。此水上の嶽を、やたきといへは八瀧山といふ、山をそへて名たゝる。八の山、八のたけとて委たるにかこまれて、水海の岸より岩山むらたてるに雲つねにたへす。あさ日おそくさしのほり夕日はやくかけろひ、こさめそほふる日おほく、つちさくはかりの水無

月すら、朝な夕くれは衣かさねきて、くれぬれは、涼しきかせまたんと水むすひ、はしゐする日まれなり。

みな月の空ともいさやしら雲のかゝる涼しきみねのやま寺。

十一日。鳴神して、雨ひねもすふりて霧はれす。

十五日。この二三日、ことなければはしるさす。食堂に湯あみし宿る人の、浪のかたあるうちはをもち來りて、これにうたひとつかいてといふに、

吹風の秋かとそおもふ河水にあつさも浪のうちわすれては。

十六日。此山に十の景をさためたり。四のとき、くさ〳〵の歌よみてと人のいへれは、つくりてしるす。

恐山十景

大杭山晩霞

雲もまたおほつくしねに消やらぬ色を花とし霞む夕榮。

鷄頭山躑躅

山の名のとりの尾上のいはつゝし咲て春とや告渡るらん。

八瀧山納涼

涼しさよ夏ともさらにしらま弓やたきの水のひゝく山かけ。

小杭山白雨

あつさをはよそにつくしの高からぬ嶺によこたふ夕立の雲。

屏風山秋月

吹風もへたてす峯のうき雲をはらひてすめる秋夜の月。

湖邊楓樹

こや時雨そめていくしほ鹽ならぬ浪よる岸に立るもみち葉。

劔山叫猿

時雨ふる山のつるきのつかのまもをやまぬ聲や子を思ふさる。

釜臥積雪

春はもへ秋はたく火の色に染て雪には埋む釜伏のやま。

佉羅陀山三法鳥

鳥さへも三の御法のことさへくからたの山の夜半のしつけさ。

林崎鈴音

湖の波のしらゆふ神籬にかけていく世をふる鈴のこゑ。

十七日。この六日七日、雨雲四方をおほひふたきてけれと、こよひ晴て、湖のきしへの山よ

り月涼しくさしいつるに、おかしう琴かいならしけるは、ことさらえんになかめたり。

ことの聲波のしらへは風過て水の海てる月の涼しさ。

湖の舟遊び

二十日。はやし崎のしたより小舟にさほさして、きしつたひにこきめくらせは、遠く汐瀬の灘行おもひしてあやうけれ。とくふねつけてんと、わらはさほとりあやまちて、笠よりはしめ水いたくうちあけて、よろつぬれたり。

みちひなき海も涼しくみるめかるあまにひとしく袖ぬれにけり。

山の地藏會

廿三日。あけなは地藏會なりけりとて、きのふよりかり小家たてて、なにくれまうけたるに、午未の頃より村々里々の人あまた來集り、國々のすきやう者、かなつゝみをうち鈴ふりませて、あみた佛をとなへ、卒堵婆つかの前にはいかめしき棚を造り、薄かりしきて、高やかのいたやの木ふたもとを左右にたてて、からほひ、なてしこ、女郎花、紫陽花、連錢、馬形に、なゝのほとけのはたかけて、あかそなへたるに、御堂より柾佛とて、そきたに書たるをひともとゝ、六文の錢にかへて、老たるわかき男女、手ことにもちいたり、この棚におきて水むすひあけ、あなはかな、わか花と見し孫子よ、かくこそなり行しか。わかはらから、つま子よと、あまたのなきたま呼ひになき叫ふ聲、ねんふちの聲、山にこたへ、こたまにひゝきぬ。

亡靈呼びて

おやは子の子はおやのためなきたまをよはふ袂のいかにぬれけん。

ちいさき帒の中より、うちまきいたして水そゝきたる女、あか子か、さいの河原にあらは、今一め見せてとうちなけきて、しほみたるとこなつを、此たなのうへにおきたる。女にかはりて、

をふしたててうへ さらましを撫子をけふの手向に折るとしりせは。

くれ行は、あまたの人々むれありき、おもふ人に物いひ、はくやうにかゝつらひてのゝしり、うは堂、食堂、尊宿寮、小家〳〵まてこゝらの人の入みちてけれは、ふしところなく、とよみありく聲にましりて山鳥の明ん鳴たり。

翌日に續く

廿四日。夜は明なんころほひ、こゝらの人、南無からたせんの延命ほさち、むつのちまたにおましまし給はゝ、あかよみのくるしみをのそき、たのしきをあたへたまへ。十くさのさちをたはひ給ふの、おほんちかひのあなたふとさとて、なみゐて、ねんすおしもみ、ぬかにあててふして、いたゝきの帽の落るもしらて、わか子、むま子のなきたまをかそへ〳〵てなみたおとし、あるは、はしら、板戸によりて夢見たるも、夜あけはてぬれはむれたち、圓通寺の大とこ拂子とりて、からたせんの御前より地こくの邊くま〳〵殘なく、みす經しめくり、此たま棚に至り給ふに、又はせ集りはてたり。

田名部に歸る

人みなしそきぬる午未のころ、田なへより、馬曳てむかひ來れは歸りぬ。

葉を食ふ虫の大群

廿五日。空うちくもる。夕くれ行ころ智愚庵にゆけは、なみのよりくかさおもふ音して、松杉の林に、むしのむれてひし〳〵とくらふか、なりとよみて四方にひゝきたり。此虫は、豆の葉に集くに似てことなり。たま〳〵、しにたるか木のもとに落たるは、からすの多くむれ集りてくひこほしたるなり。はま邊にあさるからすは、みな松杉の森にむらかり來て、日ことにはみつくせともつきす。これにおちて、山路に入て蕨のほた、草の葉をくらふに、細きみちは、此虫のくそまるに埋たるは、ごまなとをしきたるかことし。いかにしてかゝる虫のわき出しそと、ふる人もためしおほへぬこととて、夕くれことには、みや、寺の杜、林のこのもとに人もむれ、このあさる虫の音を聞つゝあきれて、あさみあへり。

三十日。此四日斗、風おこりてしるさす。けふの夕くれは河原に出て手あらひて、みそきのはらひ心にとなへて、

　夕風の袖ふくよりもみそきしてはらふ心や涼しかるらん。

と、世中の、みな月はらひおもひやりぬ。

昭和七年十一月二十五日印刷
昭和七年十一月三十日發行

秋田叢書別集 菅江眞澄集第五

不許複製（非賣品）

編纂兼發行人 秋田叢書刊行會
代表者 深澤多市

印刷者 松井方利
東京市麹町區紀尾井町三番地

印刷所 東京印刷株式會社麹町出張所
東京市麹町區紀尾井町三番地

發行所 秋田縣横手町
秋田叢書刊行會
代表者 深澤多市
振替仙臺八二五二番